所在　○木夜郷

〔倭名抄〕に遠賀郡木夜とあり、木夜は今詳ならず、古也と訓て鞍手郡木屋ノ瀬の邊ともすべけれど〔和名抄〕に木を古の假名に用ひたる例なければいかゞなり、なほしひていはば木の禾の誤にて禾屋（アハヤ）ともすべきか〔和名抄〕の郷名に禾字を用ひたる事ありさて當郡粟屋と云處ありこれをせめていふなり、

粟屋　○鶉濱

〔平家物語八卷〕に垂見山・鶉濱など云峻き嶮難を凌がせ給ひて渺々たる平沙へぞ赴き給ひける、〔宗祇筑紫紀行〕にうつら濱と云にかゝれば鐘のみさき・大島など云も見ゆ云云　松原遠くつらなりて筥崎にもいかてゝとり侍らむなど見ゆるはたゞひなけれど名處ならねばしひて心とまらず、〔名處方角抄〕に鶉濱岡のつゞきなり是も北は海なり此濱をゆけば宗像へ出るなり尾花の波などよめり、〔懐中抄〕に

鶉山所在　狩にとは思はぬ旅をいかなれば鶉濱をば行暮ぞらん

岡松原　〔和爾雅一ノ下卷〕に遠賀郡鶉山・鶉濱など見えたり、鶉濱は則内浦濱を云なり、草

初ノ浦　屋ノ浦より西ノ方内浦濱まて三里の間海邊に松原打續きてめづらしき處なり此松原

唐船來着　を岡ノ松原と云筑前五所ノ松原の一ッなり、〔古本九州軍記六卷〕に天正ノ初夏の比初ノ

吉田越後　浦と云ふ所に唐船一艘流寄る手野ノ富人吉田越後件ノ船見物ノ體にもてなし家ノ子郎從引具し乘移り一人も不ノ殘切殺し積たる財寶荷物悉く奪ひとりて越後は彌富貴

になれりとあり〔海路記〕に岡ノ松原は仲哀天皇山鹿ノ岬を廻り給ひて御舟すゝまざる時一夜ノ内に松千本を植て男神女神を祭給ふ夫より御舟進みしと云傳たり云云君が代によそへてぞ見るつくしなる岡の小松の數のさかえはとあり此歌は何に出たるを引ゲるにやさて岡ノ松原と云は原村より黑山村まて長き一里の松原なり横四五町或二三町ありて其間に岡あり故岡ノ松原と云と云る說は遠へり岡と云名は是より西南ノ方山近き處より起れる名と聞ゆ今の松原は後に沙の吹寄せのつもれるものなるをや又神功皇后此わたりに御船をとゞめ給へる時松を植て垣として北風を防給ふ故に垣崎ノ郷と云と云說あれど此邊はすべて内浦郷ノ内と聞ゆれば此說もうけがたし、

垂水峠名義　○垂水ノ山（タルミ　サマ）

〔平家物語八卷〕に住吉・箱崎・香椎・宗像伏拜み主上只舊都ノ還幸とのみぞ祈られける垂見山・鶉濱など云峻き嶮難を凌がせ給ひて渺々たる平沙へぞ赴れける何ならはしの御事なれば御足より出る血は沙を染め紅の袴は色をまし白袴は裾紅にぞ成にける云云、原田大夫種直は二千餘騎にて京より平家の御供に參る山賀兵藤次秀遠數千騎にて平家の御迎に參りけるが種直・秀遠以の外に不破なりければ種直は惡かりなむとて路より引返す、〔宗像神社正和二年正月ノ文書〕に一山口ノ事右山口山・垂水山・山田山於彼山之口者更非制之限云云、〔宗像神社天正六年置札〕に弘治三年丁巳卯月廿四日子刻自御内陳放火有云云　同刻夜風荒吹餘火之至處限垂水峠雖哀慟天地無其甲斐などあり、垂見又垂水共に多流美と訓ムべし、名義は山ノ下にて水の下垂落る處をいふなり、〔延喜式〕に播津國豐島郡垂水神社あり、また〔万葉集七卷ノ哥〕に石流（ハシル）垂水ノ水乎云云、〔同書八卷ノ哥〕に石激（ハシル）垂見之上乃云云なども見えたり是等も播津國豐島郡なるを云なり、〔和名抄八卷〕に播磨國明石郡垂見ヘ多留美・美作國眞島郡垂水、〔同書九卷〕に讃岐國那珂郡垂水は多留美とあり、さて此垂水

所在　湯川山

と云は遠賀郡内浦村の内にして宗像郡田島ノ方より内浦村に出る山間なり南北に高山あり南を孔大寺といひ北を湯川山と云山間ノ道則古の官道なり是より東鶉濱にづゞくなり此處ノ堺にして聊の峠あり東は遠賀郡西は宗像郡池田村ノ内なり、

太宰大路牧ノ跡　牧大明神社　大黒崎　小黒崎

垂水より北ノ方初ノ浦ノ上に牧ノ趾あり塩有て甚廣し湯川山につゞく是は神代の牧のあとなりと云湯川山にも昔牧ありしと云山西に牧大明神ノ社と云もあり〔里老の語傳〕に昔此牧より名馬牧を多く出せり頼朝公の時に大黒小黒と云し馬も此處より出せりと云此處に今大黒崎・小黒崎など云處もあり、

○垂間野ノ橋

たる玉橋　所在　橋元　田熊　田熊野　垂見橋

〔藻鹽草〕に筑前國たるま野の橋、又〔懐中抄〕に

島傳ひ門渡る船の梶間より落る雫やたるまのゝはし

〔和爾雅一ノ下卷〕に遠賀郡垂間野橋などあり、〔夫木集〕には筑前たる玉のはしとあり、〔貝原翁云〕たるまのゝ橋は遠賀郡莘屋と山鹿との間南北に渡せし橋なり今はなし橋の有し處は今ノ船渡する處より一町許西にあり今もそこを橋元と云、其邊を今は田熊と云莘屋ノ内なり、其南ノ野を田熊野と云今ノ船渡の處廣さ百二十五間あり故に橋もいと長かりし由云傳へたり其橋ノ下を大船なども通りしと云、又云文祿元年秀吉公朝鮮に軍勢を渡し給ふ時莘屋と山鹿との間の港に船を集めて渡海させらる河田備中守長吉其事を司どれり、此邊近世まで入海深くして大船など滯なく通ひしと云云、〔常足按〕るにたるまのゝ橋と云物古き世の物にも近き世の物にもをさ〳〵見えたる事なければ只しばらくの間のみかゝりしなるべし島傳云云の事は洞海より來たる船の趣と聞えて土地のさまにはよくかなへりなほよく考ふべし、

○浪懸ノ岸

〔夫木集〕に太宰大貳高遠

浪懸の浦の寐覺にいとゞしく物思ひそふ雁がねの聲

〔同集〕に祐舉

松の根尓顯にけり年を經ていかで崩ぬ浪懸の岸

〔懐中抄〕に

我袖の濡るゝを何に譬まし浪懸の岸世になかりせば

〔和爾雅一ノ下卷〕に遠賀郡浪屋岸浦今曰ニ柏原浦ニなど見えたり、西北ノ方數百里の大洋に向へれば西北の風あらき時は殊に浪の高く懸る處なれば負せたるべし、

柏原浦名義

〔貝原翁曰〕浪懸ノ岸は遠賀郡山鹿村ノ内にあり民家より乾方五町許柏原浦近き處に浪懸と云處二ツあり一ツは山ノ側ノ岸なり里人是を大浪懸と云又少し西なる礒際に長岩あり是を小浪懸と云

所在　大浪懸　小浪懸

又云山鹿の北柏原ノ西一町許海を隔て小島あり堂山と云其上に蛭子ノ社あり又地藏堂あり其西ノ海邊ひくき處廣き石（イハ）の間に潮の入る處あり堀切たるが如し横二間許有て長し潮滿れば船ならてはたる洞あり洞ノ内高さ三間半横三間半長さ十一間ありいとゝくめづらしき物なり此島は二ツともに柏原浦につけり、又洞山ノ西に板敷と云處あり海中に長く指出たる岩にして其平かなる事あたかも板を敷たるが如し長三十二間半横十二間半あり、

堂山　蛭子社　洞板敷

○若松ノ浦

〔宗祇筑紫紀行〕に移行て筑前ノ國若松ノ浦と云に著ぬ則此處をしる人麻生の何某兄弟ある寺に迎へとゝめぬ、片山かけて植たる木陰あり内外の海を見るに鹽屋の煙

若松合戰

暮渡る入日影にうつろふ程又云ひかたなし、此二人は將軍家に奉公の人に侍ればの物語こまやかにして色々の肴求めて出たるほど小餘綾（コヨロギ）のいそがはしさも思ひやらる盃かさなりさしふくる月の光もたゞならず今宵は十三夜なれば

名やおもふこよひしぐれぬあきの月

とあり、〔前太平記九卷〕に伊藤掾純友は七月十六日より筑前國黑崎に出張して舍弟權帥純素が若松柳ノ浦にて敵を支へ戰ふ間に城を構へたてこもる、若松合戰の事は八卷にも見えたり是は今の若松にはあらじ必トバタノウラなるべし、若松と云名は若き松の多き處なるに依て負せたるべし〔和名抄八卷〕に因幡國八上郡若櫻とあるなども同ことわりなるべし、若松ノ浦は遠賀郡島郷の東、端にして戶畑村に指向へり大船も入る處なれば人家多し、若松と云處此外にもあり、さて〔前太平記八卷〕に此若松浦にて合戰の事あり、おぼつかなきこゝちす、

○白島

丹生社

〔源平盛衰記四十三卷〕に元暦二年二月平家屋島沒落の件云云長門國引島に著く如何有べからむと窘（オホツカ）なし其をも漕出して浦傳島傳に落行けり白島丹生ノ社をも漕過て筑前國箱崎ノ津に著給ひぬとあり、白島の誤なり、引島より箱崎まで、間の海邊に白島といふ處ある事なし丹生ノ社ノ事は次にいふべし、さて此間百余字不詳紀理非則脇田ノ浦申所昨役也〔脇田ノ浦に持傳へたる文書〕に白島ノ網代云云柏原申分非道也併去年柏原馳走之續與云鑑益樣任御書之旨從去年至來年三ヶ年入相可引之由成下知□□右年□過候者至末代脇田浦可爲進退之從柏原浦不可有綺者也仍爲後證各連判如斯弘治四年二月廿八日鎭連判・春勝判・

資波島
雄島
白瀧權現
應瀨明神社

益堅判・鎭龍判・脇田浦脇浦刀禰男とあり、〔古風土記〕に資波島とあるも此島の事なるべし、白島は雌島・雄島とて二ッ相並べり東ノ方なるを雄島とす周圍二十町ばかりあり〔盛衰記〕に見えたるは此島なるべし、此島に白瀧權現ノ社・應瀨明神社とてあり六月十一日に是を祭る是かの丹生ノ社なるべきか、白島二島の間六丁半あり雄島には柴木茂く東南の海邊に石壁あり、横五十間許あり其傍の石に方二間ばかり緣寄のある處あり石中に金有て此緣寄を生ずと云、昔毛利元就筑紫に渡らるゝ時此島より十八丁許沖ノ方壁島と云處に船をかけられしが乘船の碇岩瀨にかゝりてあがらず時に脇田ノ海人外と云者に仰せて是を上しめらる外十七尋の底に入て碇をあぐ此功に依て白島を外に賜ふ其子孫脇田ノ浦に居て今に此島を分ち領ず

石壁
壁島
海人外

○山鹿城

兵藤經正
山鹿秀遠

〔源平盛衰記三十三卷〕壽永二年平家太宰府落の件に兵藤次秀遠に具せられて筑前國山家ノ城へぞ入せ給ふ云云、山家ノ城にもいまだ御案堵無りける處に惟義十万餘騎にて押寄すと聞えければ又取物も取敢す高瀨舟に乘移て豐前國柳と云處へ渡入せ給ひけりとあり、山鹿より若松に至る即洞海なり、〔筑前軍記略〕に有兵藤太夫經正者住遠賀郡山鹿庄不詳其先祖、〔宇治拾遺〕に兵藤太夫つれまさとあり、〔前太平記三十六卷〕に兵藤太夫正經と云人見えたり、其後以山鹿爲氏至壽永之亂山鹿兵藤次秀遠奉守護安德天皇遂爲平家ノ將軍於赤間關沒落畢、しかるを〔豐前長野系圖〕に〔鎭倉公文所記〕

曾昌寛

麻生家政

麻生世系

地頭職事

麻生系圖

曰元暦二年二月豐前ノ國ノ住人豐前守長盛・同弟左馬允光盛・同弟松山藏人信盛等頼ニ筑前國ノ住人山鹿兵藤次季遠ニ降ニ參源氏ニ云云と見え、又〔宗氏家譜〕に平家沒落の後に鬼王丸筑前に來たりて山鹿藤次を頼むよし見えたりされば秀遠は後までも山鹿に居たりしにやなほよくかむかふべし、種直・秀遠等が所領を沒收せらるゝ事〔東鑑四卷〕に見えたり、云云　右大將頼朝卿平家追討之後以ニ山鹿兵藤次秀遠跡ニ賜ニ成勝寺ノ執行一品坊昌寛ニ昌寛者爲ニ源家御祈之師ニ也、其後勸修寺一流麻生左衛門督朝長二男家政爲ニ昌寛養子ニ依レ之昌寛以ニ山鹿庄所々ニ讓ニ與家政ニ畢、是は〔麻生家系圖〕ノ説なり、又〔同説〕に麻生左衛門督朝長勸修寺家の一流なるが流人と成て上総國十文字郷に下り年月を經て一品坊昌寛が親族の婿と成て殿綱・家政二人をうむ一品坊は宇都宮が親族なるよし見えたり、〔麻生系圖〕に宇都ノ宮ノ三郎朝綱ノ子山鹿左衛門尉家政・家政ノ子山鹿左衛門尉時家・次山鹿四郎資政　資政ノ子山鹿四郎三郎資經・資經ノ子山鹿又次郎政長・政長子山鹿彌次郎資貞・資貞ノ子山鹿三郎次郎家光、時家ノ子山鹿又次郎家長・次麻生小次郎資時・次資氏・次資忠、麻生資時ノ子麻生新左衛門政氏・次筑前守昌尊・次麻生彌次郎時經（今号）法名道淨・法名其子麻生家方・家方ノ子麻生家重・時（麻生文卷）經ノ子麻生次郎家貞・家貞ノ子麻生小次郎顯貞、〔文書〕に（袖）列下ス小次郎兵衛尉資時、可レ爲ニ筑前國山鹿庄內麻生庄・野面庄・上津役郷三箇所地頭代職ニ事、右人任ニ親父次郎入道西念今月日讓狀ニ爲ニ彼職ニ可レ令ニ沙汰ニ之狀如レ件建長元年六月廿六日、（是は麻生ノ別家に（麻生資氏）領地を讓與る時の狀なり文永狀も是に同し、）〔文書〕に（袖）列下筑前國麻生庄（山鹿庄ヵ）・野面庄・上津役郷等地頭代職事、右處々亡父資時法師爲ニ末家分ニ令ニ死去ニ畢、（云々）早守ニ亡父知行ニ任ニ先例ニ可レ令ニ領知ニ之狀如レ件以下、文永九年四月廿七日、〔系圖〕に家長子五郎政家・九郎長資・彦次郎經長・六郎爲家・四郎家信法名宗信・長親　家信ノ子又四郎氏家法名宗妙・爲家ノ子次郎三郎爲政法名覺忍・長資ノ子資家・家經・資家子新藤三家持・彌五郎盛時・彌六郎家治、　政家ノ子親家・政親・親家ノ子家久　經長ノ子次郎三郎經政・經政ノ子十郎氏長・次郎氏經・彌四郎家氏・政親ノ子新三郎政信・新五郎家顯・長親ノ子七郎家貞・孫左衛門

麻生山鹿氏

規矩高政

綵田貞義

足利氏と麻生氏

家高・八郎家朝・次高親・七郎次郎長政云云此後ノ系圖いまだ見ず、さて麻生家貞とあるは應永ノ比の人にて〔蓮屋津金蓮寺ノ鐘ノ銘〕に藤原家貞とあり、序にいふ〔金蓮寺の鬼錄〕に麻生次郎ハ永禄二年討死また永正十一年九月云云麻生宮內少輔云云など見えたれどすべて彼寺の鬼錄に實名俗名などをしるさゞれば悉しき事しられず、又〔系圖〕に四郎信家とあるは〔麻生記〕と云ものに麻生近江守家信とある是かされどもそれは家卷ノ子と云（ば別か、又〔系圖〕に時經ノ子家貞と云もあり未レ詳　〔筑前軍記略〕に云云　正慶二年春山鹿筑前守爲ニ探題英時之身方ニ楯ニ籠于英時館ニ之處爲ニ少貳・大友等ニ被ニ攻落ニ遂與ニ宗像大宮司ニ共降參、こゝに山鹿筑前守とあるは麻生氏なり麻生も山鹿を領じて後山鹿を名のる事勿論なりさるを〔宗像記道考〕と云ものに宇都宮朝綱の孫粗朝卿より遠賀鞍手二郡を給はりて山鹿ノ城に居住して山鹿左衛門と名のり是より山鹿を以て氏とせしが享祿・天文の比までも山鹿氏猶存せりし趣記せるは委しからず麻生も宇都宮ノ緣者となりて巴ノ紋の幕を讓られたる事〔系圖〕に見えたり、又享祿天文の比まで山鹿氏を名のるは元より麻生なり早く惣永の下知狀に麻生上総介庶子山鹿遠江守とあるゝや、云云　其夏相模守高時之一族規矩掃部頭高政・綵田左近大夫貞能等蜂起高政楯ニ籠于豐前國香春ノ城ニ貞能楯ニ籠于當國帆柱山ノ城ニ因レ之大友氏自爲ニ大將ニ引ニ率臼杵・戸次・酒殿已下ニ押ニ寄于香春城ニ次少貳氏亦自爲ニ大將ニ引ニ率三原・秋月・原田・山鹿（ヤマ）・松浦・中村等兵若干被レ討而引退雖レ然少貳・三原・秋月・原田相代寄ニ于先陳宗像・山鹿（ヤマ）・松浦・中村一萬五千餘騎ニ取ニ圍帆柱山城ニ城兵手强防戰之間而攻ニ擊之ニ間貞能開レ城自殺高政亦戰敗自殺、正慶二年ノ事は〔古本九州軍記〕の説なり、さて〔太平記大全〕に規矩高政は故探題英時が猶子にして英時亡びて後筑前國山家（ヤマガ）莖屋に隱れて居たり帆柱山落城の時同意ノ輩三十七人山家筑前守政貞・弓削田左兵衛佐清常・宗ノ藤兵衛直盛・佐杉右馬助近忠・原源定公・府著喜介久直・糸田貞義は筑後國堀口と云處に楯籠るとあれば〔太平記十二卷〕に元弘三年ノ春高政・貞義兩人の首を渡さるゝ事見えたれば〔大全ノ説〕附會なる事決せり、すべて〔太平記〕に付て造れる書に妄なる事の多きよしは〔非澤長秀〕もすでに辯ぜり、さて〔九州軍記〕正慶二年夏の事を云（麻生文卷）くだりには山鹿を山家とかけり誤なり、〔文書〕に爲ニ直冬誅伐ニ今月三日己發向之由直氏所ニ注申ニ也忠節之至殊以神妙彌可レ抽ニ戰功ニ之狀如レ件觀應元年四月十九日（尊氏）判　麻生

麻生山陣

麻生系圖

一族中、（是より先〔暦應〕ノ文書）二通あり麻生氏に當る、又至ニ于今一忠節之條所レ被ニ感思食一也雖レ然以ニ御和談之儀一御入洛之事於ニ御方一致ニ忠節一之輩之事所領等云云（文段不明なるに依多く是を省く）殿（尊氏）載御起請文ニ被レ申候事可レ被レ存ニ知此旨一狀如レ件（云々ノ所（不可有子細之上可有御感之旨自然小路ノ十七字ナリ）ニ）觀應三年三月一日（尊氏）書判　麻生人々中、又筑前國青木大膳亮跡田地肆拾町同國賀伊田次郎五郎跡田地參拾町地頭職事、爲ニ勳功之賞一所ニ宛行一也（尊氏）守ニ先例一可レ致ニ沙汰一仍執達如レ件文和四年十一（子）月廿一日　麻生五郎殿沙彌（尊氏）判、又麻生兵庫助宗光（〔系圖〕に資貞ノ子家光とある是か）申軍忠ノ事、右菊池四宮主水正已下鎮西凶徒等豐前國打ニ入規矩郡一之間爲ニ御退治一去十月十三日大將軍自ニ長州一御ニ發一向山鹿山一之間屬ニ于御手一麻生山取レ陣之刻同十四日御敵寄來之間於ニ長谷山一合戰致ニ軍功一同廿二日於ニ中富濱一合戰、同廿六日麻生山陣以ニ數千騎一攻來之間終日合戰自身令ニ大刀打一頸二分捕仕畢、同十一月廿四日山鹿筑前守・同越前守令レ申ニ御心替一引ニ入凶徒一山中御陣依レ及ニ御難儀一御ニ越長州一之間御供仕訖、此等之子細上覽在ニ暗然一早賜ニ御證判一爲レ備ニ實證一恐惶謹言延文元年十一月廿八日進上　御奉行所（永了）書判、〔古本九州軍記一卷〕に康安元年七月上旬菊池云云宗像大宮司宮方を背きしに依て山鹿ノ麻生が（中）て暇多へ打越んとす云云とあり、又（袖）判麻生上總介義助（庶子）山鹿遠江守仲□（中）同北麻生筑前守資家（〔系圖〕に長資ノ子資家とあるべし）小倉上津役以下ノ輩事、不レ隨ニ宗領一所勘一者彼等所領悉義助可ニ知行一之狀如レ件應永二年六月六日、（〔系圖〕に麻生上總介義助法名祖敎於ニ都鄙一忌四十二人有レ之祖敎養子麻生家久舉ニ公京都一祖敎之子四十二人之內家清家清ノ子家正法名回舟爲レ家於ニ

三卷郡

麻生所領

麻生勘過狀

所領

麻生信歲

欧弘中狀

筑前ニ島修多羅一討死家政子家實法名敎貞一生中粉骨無ニ其隱一、（〔山鹿村波多野家記〕に義助ノ子家清・家清ノ子家正・家正ノ子家實・家實ノ子元重・元重ノ子上總介興巻・興巻ノ子興益・二男興重・三男武家とあり、〔宗像記道考三卷〕）に元重ノ祖攝津守家實是庶流なり家實ノ子刑部少輔家輔・家助ノ子元重なりとあり、（宗像道考三卷）に天文弘治年中三卷郡黑崎村花尾ノ城に麻生隆實、上津役ノ城に麻生鎭里、山鹿ノ城に麻生上總介元重云云本城は花尾なり、（袖）此外端城なり、又（袖）判麻生中務大輔入道照泉跡事所レ宛ニ行麻生治部少輔家春一也者早守ニ先例一可レ致ニ沙汰一之狀如レ件、永享五年五月三日、又（袖）判筑前國麻生庄・同國野面庄・山鹿庄・咸田庄・勢田村・二村村・高津村・小倉村・岩瀨村幷麻生中務大輔入道照泉跡等事麻生上總介家春（〔系譜〕に麻生上總介家春法名敎珍初治部大輔後上總介也家春子治部少輔家慶於ニ筑前國宗像郡西郷一興ニ大內敎祐一同討死家慶ノ子又光丸爲ニ麻生家見養子一）當知行云云　領掌不レ可レ有ニ相違一之狀如（向上ノ下ニ仕其處開闢ノ五字脫ス）件、永享六年六月廿五日　又麻生上總介自ニ九（宜ニ百石ノ下ニ百石ノ四字脫ス）疏一知行分米五百石（雜具等有之）運送云云（之）海河（向上ノ下ニ仕其處開闢ノ五字脫ス）ノ上諸國（宜ニ國ノ字ナリ）ノ渡無ニ其煩一任レ例可ニ勘過一山所被ニ仰下一（也）仍下知如レ件文安二年十二月十二日沙彌（尊氏）書判、又（袖）判筑前國麻生庄・同國野面庄・山鹿ノ庄・咸田庄・勢田村・二村（弘）村・高津村・小倉村・岩瀨村幷麻生中務大輔入道照泉同上津役跡等ノ事、任ニ父上總介政家（〔系圖〕に家長ノ子五郎政家）申請之旨一麻生孫次郎弘國領掌不レ可レ有ニ相違一之狀如レ件、康正元年十一月十九日、（〔海東諸國記〕に信歲丙戌年遣レ使來賀ニ觀音現像一書稱ニ筑前州麻生藤原信歲（麻生文書）、丁亥年又遣使來以ニ不緊一不ニ接待一とあり、丁亥は應仁元年なり又就ニ京都志劇（之）之儀一上洛事者皆々如ニ御存知一公方樣可レ罷ニ立御用一所存候之處弓矢之習天下之樣不慮之體成行候不レ及ニ是非一候此（四）等之趣達ニ大御所樣上聞一及ニ數々度一御懇意被ニ成下一御內書頂戴仕候如レ此之處其々（之）

御事我々有御同心（御）為御敵之由兵部大輔家延被申成候言語同斷之次第結句寄事於左右之企（被）御家督競望之儀相談親類并被官等（御賀名弘家 御法名全教）被相背貴方同御子息次郎左工門尉（弘國）殿偏被（御）愛惣領家候哉以外之子細候剩成敵對之儀□文明二年六月十八日於赤馬關令（被）誅（所殺）戮御被官蛯田大藏丞被搆條々野心（ナシ）候事、併對政弘被現不義候之條遺恨無限候此弓矢達本意於家延父子之事者前々（ナシ）申談必可（ナシ）致其沙汰（國書）候御安心可致思食候爲後日進狀候國之儀委細注進到來（ナシ）（九）目出度（ナシ）候恐々文明三年三月十二日政弘（書判）麻生上總入道殿云云とあり、（弘家は麻生殺助の十七男なり大内政弘の取次を以て家督となる麻生家の事はなほ重ても考ふべし、）さて山鹿の城は今の山鹿の町の東南のはしにあり高さ一丁計もあるべし東の方は入海に臨め上に平地あり其中に本丸の跡と見えて一段高く嶮き處あり、山鹿兵藤次其後麻生氏に至りて數代此處にすめりと云（近年石なとらんとて此山の上東のかたはしを崩したるに髑髏多く出たり戰國の比に討死などしたる人のかばねなるべし、）

城址

筑前之十七（遠賀郡下）終

筑前之十八

○鞍手郡

名義

〔延喜民部式〕に筑前國鞍手あり、鞍手は久良傳と訓ぶべし、〔和名抄〕〔拾芥抄〕共に鞍手とのみありて訓注なしらせり、名義は〔師の説〕に〔欽明天皇紀〕に十五年云云餘昌遂見圍繞欲出不得士卒惶駭不知所圖有能射人筑紫國造進彎弓占擬射落新羅騎卒最勇壯者發射之利通所乘鞍前後橋及其被甲領冑也後續發箭如雨彌厲不懈射却圍繞由是餘昌及諸將等得從間道逃歸餘昌讃國造射圍軍尊而名曰鞍橋君鞍橋此云矩羅賦とある鞍橋〔書紀通證〕に此處の鞍手を引り賦と傳と同音なれば即是なるべしされば此人の名より起れる郡名なるべしとあり、〔和名抄十五卷〕に鞍橋〔楊氏漢語抄〕云鞍橋〈久良保爾〉云鞍瓦と見えたり、さて〔續紀十三卷〕に天平十二年云云（豐前國板櫃河合戰件）降服隼人贈吠の君多理志申云逆賊廣嗣謀云從三道往、即廣嗣自率大隅薩广筑前豐後等の國軍合五千人許從鞍手道往、（已上五字一本にあり、鞍手の道と云は鞍手郡より豐前國田河郡香春の驛を通りて規矩郡に出る道なり云なり、）〔東鑑七卷〕に文治三年十一月二十六日筑前國鞍手の預土佐國吾河郡・攝津國山田庄・尾張國日置預被奉寄左女牛若宮一事已上可爲別當季嚴阿闍梨沙汰之由被仰下云云、〔筑前軍記略〕に周防國大内氏領當國之時以家臣松井修理（後號彌前守法名輪花）爲鞍手郡草場城代而令

名義

鞍橋君

鞍手道

鞍手預

大内領

松井修理草場城代

吉川庄
阿刀部安藝守

監郡中事、其子越後守秀郷（法名龍安）續父職、領鞍手郡吉川郷及宗像郡内三百餘町地、且與力士三十五人共守レ城、（已上〔古戦場記〕ノ説なり、さて〔宗像郡河津氏文書〕に筑前國鞍手郡吉川庄三拾町地之事右任舊領之旨所レ被宛行也守先例可レ令領知ノ之狀如レ件、永正八年十一月五日河津民部少輔殿義興判とあり、〔舊記〕には弘治年中鞍手郡中山村劔城主阿刀部安藝守同郷與松尾左馬頭ニ有ニ矛楯之事ニ防戰者數回左馬頭力盡偽乞和平ニ後終毒ニ害安藝守ニ此時安藝守子十七歳携レ母退ニ中間村ニ深頼ニ伊藤氏（勇カ）ニ是阿刀部氏代々稱嶽大宮司爲同服也後右衛門大夫嫁ニ一女ニ爲レ聟終中山・中山爲ニ兩村之社職ニ改レ名亦曰右衛門大夫有レ子曰藏大夫後右衛門大夫歸ニ郷中山以内藏大夫爲中間社職右衛門大夫沒後爲他

嶽大宮司

秋月領

方家云云、此〔舊記〕は遠賀郡中間村にあり、（以下筑前地記略ノ説）大内家滅亡後遂屬ニ秋月種實ニ或時宗像勢伺ニ當城無勢之隙ニ急押寄圍レ城越後守雖レ防レ之多勢難レ敵遂戰死云云、（已上〔古戦場記〕説なり、）天正七年九月十八日立花城主戸次道雪・岩屋城主高橋紹運打ニ出于鞍手郡ニ働ニ于杉之城下粥田庄邊ニ待ニ秋月勢之出張ニ云云、（已上〔古本九州平記七卷〕の説なり）〔文書〕に去十三日粥田庄新入郷至ニ東蓮寺ニ夜討申付候處安永神九郎與申者ヲ討捕粉骨之次第無ニ比類ニ候爲ニ其忠賞ニ境郷寺家分四拾町代官職之事預置候者早任ニ先例旨ニ諸公役等可ニ申付ニ候狀如レ件天正十一年三月二日尾仲新佐殿統連列、又廿二日粥田庄新入郷金崎村夜討相催之處若宮庄至ニ山口尾ニ秋月衆懸合遂ニ一戰ニ其刻別而辛勞殊鑓仕折粉骨之次第誠無ニ比類ニ候彌可レ抽ニ忠節ニ之狀如レ件、天正十一年五月廿四日統連列、（此文書ノ寫シは鞍手郡山部村にあり此兩度合戰ノ事いまだ委々も考へず、）

東蓮寺夜討

金崎夜討

高島井城
毛利鎮實

〔軍記略〕に應鳥居ノ城主毛利兵部少輔鎮實於ニ大友家ニ雖ニ無二之忠ニ近來依レ無ニ大友家之助勢ニ其領地盡爲ニ秋月氏・杉氏等ニ被ニ掠取ニ剩城中兵粮既盡將レ及ニ餓死ニ之由立花道雪聞レ之以ニ兵粮ニ贈ニ于高島井ニ先遣ニ使於宗像家ニ兵粮運輸之人數若宮郷之地無ニ異儀ニ可ニ通賜ニ之旨申レ之氏貞領掌以ニ其旨ニ觸ニ達若宮郷之家人等ニ道雪猶爲用心以ニ薦野三河・小野和泉二人ニ爲ニ奉行ニ指ニ添八百餘人ニ贈ニ兵粮三百俵於高島居城ニ于レ時天正十一年十一月十三日也、（宗像文書）にも十一月十三日ノ合戰云云とあり、（九州治亂記）にも十一月の合戰の趣に見えたり、（古本九州軍記）には天正十年十月十日あまりの事なれば云云とあり、是は十一月を誤れるにや、（遠賀郡高倉古文書）に於去十三日鞍手郡ノ内吉川庄殿城山下ニ立花ニ被ニ懸合ニ遂ニ防戰ニ父次郎左衛門貞辰討死訖連云ノ覺悟ト云ヒ本卷ト云ニ忠義無ニ比類ニ次第誠感悦之儀累年參公不レ類ニ于他ニ之條別而不便無レ極者也守ニ先祖之勤功ニ彌可レ抽ニ馳走ニ何樣不レ可レ有ニ忘却ニ候恐々謹言、十一月廿四日吉田鳥若殿氏貞判とある是も天正十一年の文書なるべし、

龍德城主
杉連並若宮郷ノ戰

於レ是鞍手郡龍德ノ城主杉十郎連並以ニ手勢三百余人ニ遮レ道立花ノ先陣薦野三河・米多比五郎次郎已下三百余人於ニ一戰ノ中ニ追ニ崩杉ガ人數ニ遂達ニ高島居ニ云云、（高島居は應取ともいふこの城ノ事は〔豐陽古城記〕に委くいてたるを後に引出てあげつらへり）若宮ノ郷士ノ内深川右京之進貞國・河野伊豆守・井原次郎左衛門・原九郎貞永・鮎川六郎・古野甚九郎已下都合五十一人相集云今度立花家軍勢通路之事雖レ爲ニ氏貞仰ニ舊日鬱憤猶無レ散報怨不レ可レ過ニ此時ニ之由申レ之先以ニ河津修理進盛長ニ爲ニ奉行ニ堰ニ留若宮川水ニ待ニ立花家軍勢歸來ニ（古本九州軍記八卷）に若宮在宅ノ士川津民部・深川修理・吉田次郎左衛門・吉田少輔六郎を初め三十六人の士ども云合柴田・石松・金子・野上・有吉等を駈催す此企かくれなかりければ氏貞の使として吉田飛驒守も勢を呼起し川津に加はる吉田も承引せざりければ力及ばず飛驒守も駈來たり是も川津と一になり左近太夫貞延遠賀郡吉木より多勢にて駈來たり）十三日午ノ刻立花家勢來ニ于友

若宮ノ戦

稲光城戦

池川ニ見ニ水屋ノ高ニ皆怪レ之一番小野和泉・由布雪荷先渡レ河河津下ニ知士卒ニ討レ之由布以ニ鐵炮ニ打ニ倒河津卒ニ郷士追々來集、立花勢突ニ崩之ニ指ニ原田ニ引退、友池金丸ノ勢尚追レ之立花勢内足立飛驒守已下數人討死、由布美作等已下手負亦多、二番ニ薦野三河・向彌助・米多比五郎次郎三百餘人作ニ鯨波ニ馳向、河津・深川戰敗引退立花勢追レ之多討取（三河ハ討ニ取深川九郎ニ米多比五郎次郎十七歳討ニ取原孫九郎ニ〔古本九州平記〕に討洩らされたる士ども相圖の狼煙を揭げれば山口・宮永・室木・倉久・有木河内に在宅しける宗像ノ士ども馳集ず、其内宮永ノ吉田李之助計出合　云云）登ニ稲光ノ城山ニ休息、近邊城主各聞ニ此事ニ不レ待ニ氏貞命ニ悉出馬ス秋月ノ家臣江利内藏助守ニ穂波郡笠置城ニ之處聞ニ此事ニ引ニ率乘手石見柏井九郎右衛門已下三百餘人ニ押ニ寄金原ニ然處此事有レ注ニ進於嶽山ニ氏貞大驚命ニ吉田次郎左衛門貞辰・右松加賀守秀兼等ニ令レ制レ之吉田少輔六郎貞永・右松新三郎・同十郎等聞ニ此由ニ共飛レ馬到ニ若宮ニ傳ニ氏貞命於諸士ニ雖レ然諸士決而不レ可兩使亦不レ得レ止與ニ諸士成ニ一手ニ都合八百餘人押ニ寄稲光城山ニ於レ是薦野三河以ニ彌助家成・米多比五郎次郎ニ爲ニ左右備ニ以ニ三百餘人ニ當ニ宗像勢ニ云云宗像勢遂敗北、吉田左近負ニ深手ニ引ニ連手勢ニ指レ東引退、吉田貞辰・右松秀兼討死吉田少輔六郎聞ニ兄戰死ニ切ニ入于敵陣ニ亦討死石松十郎亦聞ニ父戰死ニ入ニ于敵陣ニ死、若宮郷士百五六十人不レ殘被レ討於ニ立花家ニ高名士三十餘人被レ討立花勢馳ニ上清水ニ入ニ觀音堂ニ明ニ一夜ニ翌十四日越レ山指ニ薦野ニ引退、〔古本九州平記八卷〕に其日もすでに暮ければ立花の士共は野坂に陣をとり翌朝立花に歸けり此後立花方乘レ勝新延山口粥田ノ庄に働くこと度々なり道雪方

杉氏　大樣　那村　石高　近津宮　鍬　大善寺　高藏寺　鴨生田池　中山伽宮　田部氏

につかはせし氏貞の妹もいくほどなく死去せしとぞ聞へし、氏貞聞ニ此趣ニ彌驚自引ニ率千餘人ニ出ニ赤間城ニ時聞ニ立花勢引退之由ニ自ニ途中ニ引返自レ是宗像・立花再及ニ鉾楯ニなど見えたり、〔筑記〕に鞍手郡龍德ノ城主杉權頭連重が其子彈正ノ忠重忠・其子連重も大内氏の臣として龍德ノ城に移りて高鳥居ノ城を掛持にすある時秋月より高鳥居ノ城を攻取られて連重龍ヶ嶽ノ城を守る大内氏亡びて後連重は秋月に隨へり、）次に郡ノ大樣ノ事は〔和名抄九卷〕に鞍手郡金生（伊無奚）二田（布多）生見（止布知）十市（止布加奈布）新分（爾比岐多）粥田（加都多）〔筑前國天正年中田畠高指出帳〕に鞍手郡田數千九百四拾四町四畝拾壹歩分米貳萬千四百貳拾九石壹升壹合、畠數九百三拾四町四段五歩分大豆四千九百三拾貳石九斗三升七合、合田畠數貳千八百七拾八町四段四畝拾三分並分米大豆□万六千三百六拾壹石九斗四升九合、〔元祿記〕に鞍手郡高五万九千二十五石六斗三升二合八勺、〔村名帳〕に鞍手郡五十九村などあり、さて東方は豐前國田河郡に隣り南は當國嘉摩・穂波二郡にとなり西は糟屋郡にとなり北は宗像遠賀二郡にとなりて東西に大山あり土地肥饒にして平田多し郡中に大河流て新水共に便よろし、鞍手郡下頓野村に近津宮と云古キ社あり一村ノ産沙神なり社は朽損して委くは知れず其外神殿の外山際に十六羅漢など石にて造れるならべ立たり何れもそのさま古めかしきものなり、又古門村ノ内に大菩鍬（ヤブ）と云所あり昔大善寺と云寺有しと云其跡より古瓦を出す大なる物にして色ほうす赤なり網形の付ケる多し、又當郡上新入村ノ内蒲生田と云處ありてそこに馬頭觀音ノ堂あり高倉山高藏寺と云し寺の跡あり觀音は秘佛なり高藏寺昔は高尾山の嶺にありて七堂伽藍の地なりしと云四南に向へり趣なり今は數丁四ノ方なる丘の上にありて四向なり、舊地と今ノ堂との間に鴨生田ノ池と云大池あり今ノ堂は眞言新發の山伏是を守る小堂なり〔中山劔宮社記〕に天正の比田部菩照が子孫田部宮内（クナイ）丞直道大宮司職たり初ノ名は左衛門尉母は宗像ノ家士永留氏の女なり直道が弟新五左衛門と云者麻生遠賀郡底井野村猫城の城主となれり同弟民部少輔眞道大宮司職となる然共早世して男子なし眞

石棺

道が嫡子屬部丞善次智大宮司職をつとむ早世して其弟善四郎と云者罪ありて叔父新五左衛門を頼み猫城に有しが同郡中間村社家の養子となる善次子永留左衛門大夫善行孤獨たりしが成人の後大宮司職となり田部を改て永留と號す善行の子善滝、其嫡子大蔵大夫中山村小牧社の社司とし二男左衛門尉善正を植木村の社司とす元文年中に至て皆本姓に復す、此郡の内にして石棺をほり出せる事是彼あり中山村祇園の社地又新延村飯神社の社地又古門村荒五郎神社の社地等なり其内に武具をさめたれど皆くされて其質わかちがたし木月村の内にも一所ありてほり出せりいづれも四五十年已來の事也、

名義

○前戸神社

〔宗像神社末社記〕に前戸神社とあり、前戸は佐支等と訓ムべし、御名ノ義は〔風土記〕に宗像大神自レ天降居ニ崎門山一云云とある崎門ノ地名によれり、さて〔宗像神社文安元年ノ縁起〕に三處大菩薩最初御影向地事、室貴六嶽仁有ニ御著一門山を云、〔宗像宮古文書〕に可下令ニ早信房法師一爲ニ筑前國宗像社領高向無留木宮武箇所地頭職上事、右人爲ニ彼職一任ニ先例一可レ從ニ社務之狀依レ仰下知如レ件承久三年十二月十一日陸奥守平判、また此間何事候哉抑宗像社領ノ内半留木宮田與里二郎丸名等ノ事度々御辭退候之上西島彌次郎西島彌二郎領波最秋少仁候奈留問答事迫可レ有ニ御計一之由被ニ仰下一候也可ニ申聞一候於保徒加奈久不レ可ニ思召一候穴賢云々、嘉祿三年五月十三日大和入道殿武藏守判とあり、又〔宗像郡室木村第二宮ノ棟書〕中興後光嚴院御宇應安七年八月太政大臣從一位准三宮義滿公建立再興明應六年九月三日棟上宗像朝臣大宮司與氏支配供奉人許斐新左右門・大和四郎左衛門・占部孫三郎・同彌四郎右造營雖レ爲ニ公方御役一今者依レ有ニ別願一池ノ浦法眼以ニ勸進一建立、永祿九年造替、宗像朝臣大宮司氏貞建立願主石松加賀守秀兼當地頭職などあり、さて前戸神社は鞍手郡室木村六嶽ノ西北の麓に在て今は六嶽神社と云三

所在六嶽神社

祭神

祭事

室貴社

禁制

女神を祭る社は北向にして林中にあり神殿渡殿拜殿あり則室木村の産沙神なり、祭禮は九月十九日にあり十八日夕に里神樂を執行す神官あり安藤氏なり、八尋村に居住す、上宮は石殿なり山上にあり此村初は宗像郡につけりしを今は鞍手郡につけり委しくは崎門山の件に云べし、〔宗像神社正平廿三年ノ祭祀次第記〕に室貴社正月朔日神事同日步射神事三月三日神事七月七日神事九月九日神事五月五日神事六月晦日和儺祓神事とあり、

○若宮八幡ノ社

〔古文書〕に神判禁制鞍手郡若宮八幡神領内並社頭御神事以下條々、一社頭修理任ニ役所之配分一各々不レ可レ致ニ不法懈怠一就ニ現在之損色一連々可レ終ニ修功一事、一廿四節御神事云ニ神供雜掌一云ニ出仕社司一而々可レ致ニ丁寧一事、不レ可レ令ニ緩怠一事、一出仕庄官僧俗可レ著ニ用淨衣一事、一庄官以下注ニ不參之著到一爲ニ馬大夫沙汰一可ニ京進一事、一不參庄官出ニ下人一不レ可レ受ニ神供一饗膳配分可レ爲ニ馬大夫沙汰一事、一大犯ニ博奕以下犯科一人隨所カ可犯之輕重一可レ有ニ刑罰之淺深一若於ニ見隱聞隱之輩一者可レ爲ニ同罪一事、一毎月一日十五日晦日於ニ件三箇日一者固止ニ山河之狩獵一宜レ停ニ禽獸之殺生一若違犯輩者可レ出ニ科料錢三貫文一見聞之隱密可レ爲ニ與同一事、一鳩並猿令殺事一切停止事、一以ニ沽酒一致ニ神樂一事堅可ニ停止一之事任ニ平均之御沙汰一禁遏先畢

宜守二其旨一不レ可二違犯一事、右條々専守二制法一一々勿レ令二違犯一仍所二禁制一之狀如レ件弘安八年十一月日、（また供物出仕座之次第犬丸方籠所、武恒方平山横地所此外者白居可有候各々出仕無沙汰不レ可レ有候若無沙汰候者堅固大宮司成敗可レ致候者也弘安八年三月三日村々相撲之次第一番金生倉久二番金生黒丸・三番金生岩崎・四番中郷賀儀丸岩永・五番金丸倉久山崎・六番原田仁恵・七番小河有木・八番森山中郷徳善・九番古物水原片隈・十番竹原平之郷已上大宮司則綱）〔洪鐘銘〕に一口鴻鍾施二入山田宮一、其鄕無邊居三界天獄内證無上極果妙覺位外救一切有情流轉苦、遊歩十方盡、虚空邊際、自他平等、成轉法位、諸行無常、是生滅法、生滅々後、已寂滅已樂、大日本國鎮西筑州鞍手郡山田若宮洪鐘一口、右幸阿爲二當社神主一蒙二靈神擁福（ヤシナフルカ）慶安全子孫繁榮之間爲二神恩報謝一令レ治二鑄洪鐘一口一所レ令レ寄二進當宮神前一也仰願以二此景福一普覃二十方一別金輪聖王天長地久御願圓満、殊庄家豐稔、諸人快樂、願主幸阿、現世當來、諸願成就、乃至有頂、無間平等利益敬白、正平十一丙申年正月十一日願主幸阿敬白大工大江貞房（此鐘は今福岡徳永寺にあり、宝暦誌に此ニテリ幸阿は當社ノ社僧ときこゆ、）〔棟札銘〕に奉二再興一若宮八幡宮御寶殿一宇棟上事、右當社造立意趣者奉二爲天長地久御願圓満四海静謐天下泰平一殊者庄内安穩諸人快樂別而者信心大施主等一緣衆諸大檀那各各本命元辰吉凶星斗而已然者雖令依時剋爲無緣經二年月一之處、幸次郎左衛門尉氏清於レ庄勸二諸方一處不レ論二貴賤老若一各々依レ勵二微力一當大宮司長繩・惣政所内藤美濃守盛貞・大工清原助光並小工七人勸進、主藤原次郎左衛門尉氏清謹欽言、永享拾貳庚申自二正月十一日乙卯時一鉋立有レ之然同二月十一日甲申日於二午時一御棟上

幸阿

云々仍如レ件、〔宗像神社舊記〕又〔若宮八幡宮ノ文書〕に願文鞍手郡若宮庄八幡大菩薩御寶殿一宇建立同社毎年一箇度臨時御供右精誠之旨趣者拂二社敵無道凶徒於他方外一保二子孫樂一社之内一特當宮者弓箭守護之隨一也偏扇二和光之威風一欲レ遂二厚運武勇之本懐一縱一旦雖レ有二祭祀禮典怠慢之儀一渴仰銘レ肝上者被レ免二万事一垂二哀憐之慈悲一給而壽算長遠之懇祈願文如レ件天正九年辛巳十二月十三日執印大宮司宗像朝臣氏貞敬白などあり、若宮は和加美也と訓ムべし、此處文治三年京都左女牛通若宮八幡ノ社ノ領となるに依て其砌より若宮八幡社を勸請したるなるべし、此邊倉久・四郎丸・上有木下有木・芹田・原田・金丸・水原・竹原・高野・平・黒丸・金生・福丸・岩野（長井崎ノ枝村）所田（宮田ノ枝村）・恵比（稲光ノ枝村）古門已上十九村を若宮鄕と號す、若宮八幡社は水原村に在て鄕中ノ大社たり、八月十六日大祭あり神樂流鏑馬相撲あり神官數家あり今齋藤氏を社務とす、神殿は南向なり神殿拜殿廻廊舞臺等あり、〔筑陽記十八卷〕に鞍手郡水原村若宮八幡宮八月十六日放生會有二神樂流鏑馬一所レ祭神惡源太義平之靈也云有二此社一故此邊稱二若宮鄕一住吉神・春日神祭二社地一、〔當社緣起〕云義平者源氏下野守義朝之嫡男也云々　義朝沒落義平竟永暦元年正月廿五日行年二十二伏劍死沒後成レ雷震動天災屢起清盛恐怖不斜爲レ宥二怨靈一建二大社一祭レ神云々　一日託曰爲朝以二先例一欲レ鎮二座當國一也因レ茲長寛二年甲申八月經二營宮居於當處一遷レ之、鎌倉

創建
若宮鄕
所在
祭事
祭神
社領

八幡塚

將軍時神領三百町寄附之宮殿僧舍繁榮之大社而粥田庄七百町之宗廟云云、祭祀嚴重而行幸于同郷竹原村内八幡塚此所自京師遷宮時暫奉居神輿所也云、及末代背政兵亂等不收神領、宮殿廢墟今見田畦村巷往々以社寺祭奠名呼之、

造營

永享年中防州刺史大内政弘再興内藤美濃奉行之其後頽破寛永年中國守忠之公命宰臣黑田美作郡司黑田半左衛門尉造營之、（筑前神社記）に若宮八幡宮は鞍手郡水原村にあり、當宮の神は源氏下野守義朝の嫡男惡源太義平の靈なり、長寛二年八月十六日此地に社を建て是を祭ると云、後宇多院弘安年中府官社を改造して水田を寄附せり後花園院永享年中防州大内政弘社殿を修理せり弘安年中鎌倉右大臣實朝卿の時神領三百町を寄附して鞍手郡粥田庄七百町の宗廟とす、年中二十餘度の祭禮あり、社家數十人僧坊も六區有しと云、今も田畠のほのけに寺社領の名殘れり今より二百六十年餘前に中國の大内家より神殿櫻門鐘櫻門舞臺都て十二軒内藤美作守奉行にて再興せり、今の社は黑田忠之公の命に依て美作前司黑田半左衛門建立せりとあり、

社領僧坊

祭事

○堺郷祇園社

〔文書〕に筑前國粥田庄堺郷鎮守祇園社大宮司職事、彦房所、右件大宮司職者養父彌次郎、大宮司重代相傳所職也爰彌次郎合不慮横死訖可相續彦房彼職之條無異論之處後家押妨非正義縱爲後家處分明改嫁之上者子息彦房可令領知者也何況非分横死也何輩可成妨哉然早爲彼職有限社役等不可致懈怠仍社家宜承知敢勿違失故以下、建武元年四月十六日惣政所判とあり、祇園社は今に至て堺郷産沙神福地社と同殿なり、神殿は西向なり幣殿拜殿門等あり、六月十四日九月十九日大祭を行ふ、彦房末孫今に神官と成て奉仕せり岩熊氏と

岩熊文書

堺村

種す、〔古文書〕は岩熊氏の家に傳へたり、（社地は村の南方少し高處にあり此處を堺と云豐前の國との堺なればなり堺村も今は上堺・下堺とて兩村となれり、祇園社も兩村共にあり本文に記せるは下堺村の祇園社をいふなり、）

○新延八劔神社

〔神輿銘文〕に敬白奉新造劔權現寶輿之事、筑前國鞍手郡植木庄新延郷鎮主御寶殿右志趣者奉爲天長地久御願圓滿天下安穩國土豊饒玉體安全諸人快樂當所安穩諸人繁昌殊者信心大願主息災安穩家門太平子孫繁昌皆令滿足祈願成就吉祥之所也文明八年九月十八日大願主藤原朝臣貞時・源朝臣惟道・藤原朝臣實信・大工藤原忠家、又〔一基銘文〕に云云文明十年八月吉日大願主藤朝臣惟時・大工次郎左衛門尉忠家・小工二人（又木月村劔神社にある〔神輿銘文〕に云々右志趣者奉爲天長地久御願圓滿天下太平万民豊樂殊者庄内安全諸人快樂當所繁昌人民安穩則者信心之大願主諸且施主各々息災安穩無病快樂子孫繁昌心中所願皆令滿足百事如意大吉祥之所也文明七年乙未八月吉日勸進且那大宮司延實・大工次郎左衛門尉藤原忠家・小工三人などあり、）新延村劔神社は村の中央の林中にあり、社は南向なり神殿幣殿拜殿石鳥居等あり又馬場あり、九月廿九日より卅日に大祭を行ふ神樂相撲流鏑馬あり、神官藤井姓なり、

所在

祭事

○福地權現社

〔洪鐘銘文〕に日本國筑前州鞍手郡粥田庄境之郷福智權現御寶前或經曰打鐘聲當願衆生脫三界苦得見菩提右鑄鐘功惠大哉克冀一天昇四海安和萬民快樂殊檀越壽山高聳兒孫繁榮現世安穩後生善處者也時天文三天甲寅二月吉日勸進本願宇佐安

所在
祭事

輔・大宮司藤原連續・鑄物師大工藤原益種とあり、福地權現ノ社〔和名抄〕に甲斐國都留郡福地と云もあり は鞍手郡境郷にあり、保食ノ神を祭る上に擧ゲたる祇園ノ社と同殿にます、中古より上境村にも社を建て此鐘を彼社に移す是に依て神官も又別家となりて是に仕ふ 岩熊氏なり 此社今は近邊三村の產沙神となれり、社は□向にして神殿渡殿拜殿石ノ鳥居あり、祭は六月十四日 九月十九日兩度にあり里神樂を執行す、福地神社の上宮と云ものは國見岳ノ上にあり是筑前豐前兩國の境なり社は堺の南北にわかれて兩所にあり豐前の下宮は田川郡上野村の内にありてそこの產沙神なり、

祭神
祭事

○新入八劔神社

山部文書

〔山部村文書〕〔文書〕に新入郷ノ内万力名之儀當社毎年御祭禮付而對ニ大宮司ニ被レ成ニ御扶助ニ候、打渡申候間御祭之儀無緩可レ有ニ執行ニ事肝要候、仍打渡狀如レ件、永祿六亥二月十二日井上吉次郎緒高判 大宮主掃部大夫殿、又粥田庄新入郷武家分重久維法花寺領内宮尾屋敷一ヶ處之事、對ニ劔大明神ニ令ニ寄進ニ訖向後不レ可レ有ニ相違ニ之狀如レ件、永祿六年九月十九日重久判 新入武家大宮司黑山掃部大夫殿、又坪付宮田シリ五段内合田貳段新入村浮分、馬場そ□屋敷大、同村法花寺分内、已上、右前□社家被立除之候條 其方進退□御神事等無緩可レ有ニ相違ニ之所如レ件、文祿乙未卯月五日有 有吉氏カ 物判 松 松井氏 右判能為判 などあり、此〔文書〕新入村ノ百姓ノ家に持傳へたり但し本書紛失して寫のみあり 新入郷劔神社は尾張熱田宮を祝へり、社は東南に向へり神殿幣殿拜殿石ノ

所在
祭事

鳥居あり、祭は九月十九日にあり、十八日ノ夕に里神樂を發す、神官黑山氏世々仕へまつれり、此御神は上新村ノ西南山の麓にいさゝかはなれて森のある其内にあり、

○伊久志社

〔宗像神社末社記〕に伊久志明神社、又〔祭祀次第記〕に伊久志神社九月九日神事十一月三日神事とあり、名義はいまだ考へず、さて此伊久志ノ社と云ふは鞍手郡山口村の内小原と云所の田中に森あり小社なり、今十一月十一日に神樂あり、石のホコラ神殿拜殿あり、神官山口村尾形岩と號す、山口はいにしへ宗像郡の内なりしにや今も郡のさかひにあり、

○山口ノ御口代ノ社

〔宗像神社末社記〕に御口代神社、〔同緣起〕に山口ノ御口代神社、〔正平年中高宮下ノ府神事次第〕に山口ノ御口代明神十一月五日祭ノ之などあり、山口御口代は也末具知乃美久知志呂と訓むべし山口は村名なり御口代はいまだ考へず、此社ノ事いまだ考へず、

祭事

○山口ノ若宮社

水原八幡所在

〔宗像神社末記〕に山口若宮ノ社、〔同祭祀次第記〕に山口ノ若宮ノ社神事正月朔日神事三月三日神事五月五日神事七月七日神事 九月九日神事などあり、此社は山口村ノ内にあるべきかいまだ考へず、〔師說〕に山口ノ若宮と云は若宮庄水原村八幡社を云といはれしなり此說いかゞあらむ〔水原八幡宮の鐘の銘〕には山田ノ若宮としるせり、

祭事
所在

○宮田ノ若宮ノ社

〔宗像神社末社記〕に宮田ノ若宮ノ社、〔一本〕に宮永ノ若宮とあり、〔同祭祀次第記〕に宮田社正月朔日神事三月三日神事五月五日神事六月晦日和儺祓神事七月七日神事正月歩射神事などあり、宮田ノ若宮、美也陀乃和可美也と訓ムべし、鞍手郡宮田村あり、

鴨山畑加茂明神所在
祭事

○鴨山ノ若宮社

〔宗像神社末社記〕に鴨山若宮社、また〔祭祀次第記〕に鴨山若宮社正月朔日節供神事三月三日節供神事九月九日節供神事毎月朔幣望祭神事一年中廿四度也などあり、鴨山加毛也万と訓むべし、〔師説〕に鞍手郡下村ノ内に鴨山畑と云處有てそこに加茂明神ノ社あり是鴨山ノ若宮なるべしといはれしなり、社は戌ノ方に向へり神殿渡殿拜殿鳥居あり、祭禮九月廿八日なり、下村ノ内に力丸島・小河島とてあり合て家數四十四五軒あり是鴨大明神の氏子なり、神官三木大和守奉仕す、

室木若宮明神
緣起

○室木ノ若宮ノ社

〔宗像神社末社記〕に室木ノ若宮ノ社とあり、室木は牟留支と訓むべし、名義詳ならず、さて〔筑陽記十八卷〕に鞍手郡室木村若宮明神社とあり、

○中山劒神社

〔神輿棟札銘文〕に敬白奉新造劒櫛現寶輿事筑前國鞍手郡植木莊本御鎮主御寶殿右

梅野土佐
中山城
跡部安藝

意趣者天長地久御願圓滿天下泰平國土豐饒庄内安全願御武運長久家門繁榮殊者信心大願主息災延命子孫繁昌富貴增長万人快樂心中諸願皆令滿足如意吉祥者也寛天正二甲戌初秋吉日領主源朝臣鎮眞代官源朝臣鎮直・大宮司田部眞道・大工藤原長久小工二人とあり、〔社記略〕に中山村劒神社初在ニ中山村山上ニ、應仁年中有ニ梅野土佐者ニ移ニ此社於山長隅ニ以ニ山上ニ爲ニ居城ニ、文明年中爲ニ宗像下城ニ野中勘解由者守之ニ、天文年中古所山城主秋月文種押ニ領此城ニ家臣跡部安藝爲ニ代官ニ守レ之、天正元年七月御社炎上跡部於ニ上古社地ニ造ニ立神社ニ其後植木庄惣爲ニ應取城主毛利鎮眞領地ニ此時作ニ當社神輿三基ニ寛文十一年四月廿八日又炎上、寶永二年又造ニ立御社ニ以ニ中宮地ニ爲ニ本社ニ、年中有ニ數度神事ニ就レ中以ニ九月二十九日ニ爲ニ大祭ニ神輿出御之時第一基者別當坊浦坊守レ之第二基者中ノ坊伊豆坊守レ之第三基者北坊辻坊守レ之次大宮司田部氏已下守ニ護神事ニ云云 天正元年炎上已來無ニ此式ニ云云とあり、今ノ神官則田部氏にして中山村に住す跡部氏の子孫も今此村にありて宮柱と號す其外六坊の子孫も有て坊號を姓とせり、社は辰巳ノ方に向ひて神殿拜殿神樂殿石ノ鳥居あり、いにしへは年中の油田一反二畝二月十四日ノ祭料田一反二畝彼岸田二反ありしと云、跡部安藝男子なきに依て篠原善介と云者を養子婿とす是に依其子孫篠原を姓とす本家は今に至て當社の宮柱と稱す、

造營
祭事

宮柱
坊
社領

祭神
社地
祭事
舊社

○天照神社

〔棟札〕に鞍手郡粥田庄鶴田里天照宮御社殿一宇惣政所玄朝德治三年戊申三月神主安部宮内大夫とあり、天照大神宮を祭る、此社地今は礒光村に入れり、祭禮九月十一日流鏑馬神樂あり（礒光・鶴田・龍德・宮田・本城五村の産沙神之）神官長屋氏世々此神に仕奉る、此社は宮田村の内千石の笠木山にありしを後に今の社地に移せりと云、社は南向にして前に馬場あり土地聊高くして林の内にあり此社内にある不動石の銘に正和元年とあり、

社務職

○木月八劔神社

〔文書〕に當郷木月村劔大明神社務職之儀子々孫々無相違其方より相續可相勤也者一筆如件副田若狭助判・野中修理進判元龜元年十一月九日左野勢間大宮司殿とあり當郷とあるは遠賀郡底井野郷を云、（底井野郷の神官佐野氏の家に古文書數通持傳へたる内に底井野郷大宮司佐野宮菊丸殿とあり今こゝに當郷木月村とある文書も彼家に持傳へたり、）木月村今は鞍手郡に入れり、さて此社今も八劔神社と號して木月・上木月兩村の産沙神なり、神殿（三間四方）渡殿拜殿末社三區石鳥居馬場などあり、祭禮九月十四日なり前夜より里神樂を執行す十四日流鏑馬を行ふ、社は西に向へり五町許西に頓宮の地あり其處を浮殿と云、今の神官藤井氏世々鞍手郡新延村に居住す、

佐野文書
所在
祭事
浮殿

○野面八所神社

社領

（本願寺文書）〔文書〕に春胤息孫太郎泰佐野（給地）而庄吉光名内大明神燈油田三段事宗聞公委細蒙仰候條從前々壽福寺被相抱候儀無相違由（申）談候仍御祈念肝要候恐々謹言享祿元年十二月十三日壽福寺侍司下鎌田大炊助（宗恩）とあり、大明神は鞍手郡野面村八所大明神を云と聞ゆ、（壽福寺の件にも聊いふべし）〔古文書〕に今度各之申談之儀向後何樣不可有心疎若相互於違亂者日本國中大小之神儀別而氏神高見三社權現・野夫大明神・久賀大明神・才河大森大明神・藤田賀須加大明神・八幡大菩薩・天滿大自在天神可蒙御法罰者也仍請文如件天正四年十二月二日小田村源内殿武藤大膳進重吉（書判）門司宗三郎重吉・幡生兵部丞實枝（書判）・小田村大介實頼（書判）・門司惣七郎氏保（書判）・廣渡修理進益道（書判）とあり、（此文書は上底井野村小田氏の家にあり、）八所の神社は野面村の山林聊高處にあり野面・木屋・瀬雨村の産沙神なり、祭神詳ならず、（八所御靈を祭るか又八神殿の神にてもあるべし、）神殿渡殿拜殿石鳥居あり社は西南に向へり、祭禮九月廿九日なり里神樂を執行す、神官二家あり千々和氏・末松氏なり（木屋瀬の方より入口の所聊高き所に吉光といふ所あり是古の宮地なり）

小田文書
社地
祭神
祭事
舊地

○山口の今宮殿の社

〔宗像記追考三卷〕に今宮殿御寄附坪付夜須郡貳百町の内田數坪付之事合前田六段坪内貳段下宇良庄屋名四段坪の内壹段今福村慶福寺分以上三段右坪付如件天正十六年十月二日秀賀判・尚宗判・宗全判・賢安判・氏備判とあり、今宮殿の社は鞍手郡山口の

社地

祭神　千代松墓

村にあり、宗像朝臣氏繼ノ子千代松の靈を祭れりと云、〔宗像ノ記〕に云云陶金婆先氏繼と其子千代松とを殺すべしとて氏貞ノ家人寺内治部丞に命じて其趣を宗像に云遣はす氏繼是を聞て彦山に逃入りし其明道尉の使と成て彦山に至り遂に伯父氏繼を殺す千代松が母は氏繼の妾なり其名を弁と云千代松を抱きて鞍手郡沼口に隱れけるが尉手の來たる由を聞て落行くを山口にて遂に殺さる千代松が墓其處にあり後に山田ノ後室の怨靈の祟をやめん爲に氏寺ノ内室の命にて千代松が靈なる神に祝ひて今宮殿と號す今も山口ノ枝村畑と云處の山深き所林ノ中に社あり、

比叡崎

○吉川山王社

〔棟札〕に應安元年云云文明九年云云　大永七年云云天正十三年云云　とあり此時の棟札と云物元祿の比までは傳はれりと聞ゆるを今はうせてひとつもあることなし、〔棟札〕に見えたりし趣は〔筑前續風土記〕に見えたり、さて此社ノ傳を考ふるに吉川山王初の處を比叡崎と云〔應安元年ノ棟札〕あり、文明九年大内家ノ臣宗ノ掃部丞盛秀と云者此邊を守護せし時惣政所藤ノ右京ノ進安秀と云者修覆を加ふ其後頽破せしを大永七年大村又四郎興景と云者建立せり、又天正十三年松井越後守秀郷と云者建立せりとす、其後寛文十一年今の宮處に移せり今ノ社は鞍手郡下村ノ内高處にありて東北に向へり神殿幣殿拜殿玉垣石ノ鳥居あり、大山咋ノ神を祭る祭禮四月中ノ申九月二十一日兩度ありて里神樂を執行す又六月十五日神事を修行す、神官二家あり國井氏・堀氏なり此社は大宰府ノ山王社を祭れるならんと思はるゝよしあり御笠郡の内にいへるをひらき見るべし、

祭神祭事

○頓野八幡宮

所在　祭神祭事

〔洪鐘ノ銘〕に大日本國筑前州頓野郷八幡宮鐘名并序夫以鐘者器物之長而音樂之主也當社再興缺典歲尙矣社司巫人雖嗟嘆使力不覃焉夏野之鋭氏樹盛禿郎一夕有神之告而肅然發赤心之力抛青鐵二万錢舊巨鐘一口挂廟堂之前開月利他之方便門濟渡苦衆生者也厥銘曰天地爐炭、河海熱湯、鋏狗吐焰、金虎飲光、猛火炬赫、銅水汪洋、何所歇治、鑄此器量、先人願力、弃擲堂傍、歲尙以臥不吼樓梁永正第六、信心禿郎、抛價二方、舊置廟堂、時雖季世、鯨吼夜央、殘月之杵、殷々不藏、往來起本、此土西方、檀施堅固、後昆永昌、民戸安穩、皇基鞏康、永正第六戊辰八月十五日大旦那源盛種・願主樹盛謹誌とあり、此社は鞍手郡上頓野村にあり林中に在て南向へり、應神天皇を祭る神殿渡殿拜殿あり祭禮十月五日里神樂を執行す、神官渡邊氏世々是に奉仕す、

○新分長谷寺

〔洪鐘ノ銘〕に謹奉寄進撞鐘一本大日本國西海道筑前國鞍手郡新北村龜甲山長谷寺御寶前大願主粥田庄八尋郷住人藤原朝臣家信・大藏女源榮右奉掛洪鐘ノ意趣者、天長地久、所願成就、庄内安穩、當寺繁昌、上下萬民　富貴自在、殊者信心、大願主癸酉戊刁名、息災延命、壽命長遠、子孫繁昌、從類眷屬、□事無難、一切所求、皆悉成就、故也于時延德三年辛亥林鐘三日大工貞盛小工各々とあり、此鐘今は博多聖福寺の内護聖院にあり、さて

緣起

〔元祿六年龜甲山ノ記〕云蓋聞筑前國鞍手郡新分郷長谷之觀音者和州泊瀨寺ノ末流也夫泊瀨寺者云云仁和元乙巳有僧萬貨者ノ與同寮ノ僧ノ爭初瀨寺之守職ノ而不ノ已云云是は和州の初瀨寺を云 陰負其靈像ノ去遍遶西國ノ既到此處ノ云云郷民立一宇尖堂ノ安置大士之像ノ名萬貨坊ノ云云、〔一説〕に聖武天皇大和國長谷寺を立給ひて後德道上人に詔して諸國に長谷寺を立給へりといふ、延喜四年云云 改作新殿、云云 末流之六坊不ノ期ノ年而並起云云 末之六坊以ノ漸斷絶 至ノ今其舊趾或爲民人家ノ或爲田圃地ノ也徒有其坊名ノ而已、曰谷坊・曰水上坊・曰橋詰坊・曰御園坊・曰池田坊・曰飯屋坊也、且寄進之田亦減而纔立五畝ノ以充香膳ノ至永享間ノ以十一月十三日ノ定大士供養之日ノ毎歳自邑中民人二十五家ノ而輪次祠ノ之謂之流儀祭矣云云、延德ノ間同郡八尋有藤原朝臣家信幷大藏氏善尼源榮ノ飯心薩埵ノ矣志淨邦ノ患寶坊衰滅ノ新鑄成洪鐘ノ云云、至慶長間ノ大守筑前侍從黑田長政公選ヲ邦內神社佛宇冶工之善於範圍ノ者所鑄出ノ之鐘ヲ以備城中之用ノ當山ノ鐘應其選ノ也然以其質小且薄之不ヲ遠而見附之博多津聖福禪寺末山後生院ノ云云、寛文十一年辛亥歳村民胥議曰古來相傳當山開闢之始堀ノ地而瘞大士像ノ爲寶樓長久之謀ノ立觀音堂於其上ノ矣雖ノ然未ノ辨其眞僞ノ各請試發ヲ之云云 堀殿之中央床下凸處ノ果得一匣ノ方八九寸啓ノ之中貯二三寸ノ銅佛像七尊（未知何佛像）木居士二十體寶鏡之徑四寸二圓巧鐫阿梵字ノ木印一枚大錢一文麥飯之如ノ麴者二升許ノ矣與古來所ヲ傳大同小異

洪鐘

發掘佛像

祭祀

萬貨坊

末流六坊

寺地

也云云 とあり、本尊十一面觀音なり、堂林中高處にありて南向なり（堂ノ廣さ三間四面許 初は寺產は今に傳はれり堂の下左ノ方に小菴あり菴僧住て觀音堂をも守護す又堂ノ前右ノ方に小堂あり是に古き大鼓ノ胴を入れたりわたり四尺余あり又近き頃に鑄たる鐘もあり、眞言宗なりしを近來淨土宗ノ寺を再興して植木村眞如寺の末寺となる、

○內山寺

〔宗像宮古文書〕に先度長久下向之時委細進狀候、參著候哉云云 兼又先度承候內山ノ事、何樣ノ子細候哉、所詮不分明ノ事候云云九月廿一日書判、宗像大宮司殿、同書目錄に醍醐三寶院御書內山寺免田正文不審之由有ノ之應永十四年九月廿一日とあり、又〔宗像分限帳〕に貳町內山寺とあり、內山寺ノ趾は鞍手郡倉久村にあり靈松山內山寺と號す、本尊不動明王なり、古は大寺にして高野山發向院の末寺なり仲山寺・下坊・東蓮寺・方願寺・高野山など云末寺有しと云ふを今は皆廢絶せり、（今按ずるに倉久村ノ內方願寺原（バル）次に高野村東蓮寺村などかの末院の有し處などにや東蓮村今は直方村と云、今僅に小堂殘れりその傍山伏住て是を守護す、本尊不動明王は天正の比燒失したりと云又陵長三年に佛師松月に不動ノ像を造らせて安置したりしをも盜人取れりと云末院仲山寺廢絶の時その本尊不動毘沙門觀音をとりて內山寺の趾に安置せり寺中に清水あり是昔阿伽水に用ひし水なりと云、鎭守ノ社山王權現・寶滿明神ありしと云を是も今は絶たり大門の趾と云物あり、

寺趾

小堂

大門ノ趾

○壽福寺

〔文書〕に春胤息孫太郎春佐野（給地）面庄吉光名內大明神燈油田三段事、宗閑公委細蒙ノ仰候條從前々ノ壽福寺被ヲ相抱ノ候儀無相違ノ由談候仍御祈念肝要候恐々謹言享祿元

年十二月十三日壽福寺侍司下、鎌田大炊助春胤とあり、此〔文書〕は木屋ノ瀬永源寺にあり、壽福寺は鞍手郡野面村に在て同村八所大明神の社僧なりしと云、八所神社ノ神官千々和飛驒守正廣屋敷の内にあり南向にして一間四面なり本尊藥師なり四月に聊祭のかたをなす、今一通の〔文書〕に野面庄ノ内壽福寺分田數八段云云とも見えたり、野面村の東北に金剛村あり昔金剛寺として大寺有しを亂世に滅せりと云昔盜人來たりて寺中を侵し又兒を取てつれゆきしを追討にして埋めたる處を兒が原と云、又同處に尼寺及墓所などあり此村及笠田村は昔遠賀郡香月村につけりしを近き比鞍手郡につけり、

永源寺文書

寺地

金剛寺

兒ケ原

○永源寺

〔永源寺文書〕

〔文書〕に野面庄ノ内壽福寺分田數八段同庄北田浮内（後カ）貳段同庄内同喜菴分壹段屋敷共北之浮（後カ）畠地貳□（内）丈浮町（後カ）畠地貳段藥師免地等事號永源寺領ノ對ニ當住慶壽書記ニ云預取進ゑ然上者寺務堅固護持肝要候依ノ仰執達如ノ件天文□□（二十年）十月廿八日永源寺慶壽書記公三河守益守ノ列・但馬守實忠ノ列、又野面庄内吹上畠六丈壹段爲ニ上州樣御茶頭料ニ新寄之由被ノ申候間爲ニ後喜ニ一筆可ノ仕候由候恐々謹言　天文八十月廿一日永源寺參侍者經師　正賴ノ列・幸永ノ列　又當寺門前□孫三郎居屋敷之事永源寺江寄進之儀被仰付候於ニ向後ニ毛御知行肝要候恐々謹言　天文十一二月廿七日永源寺參侍者御中益賴ノ列などあり、永源寺は鞍手郡木屋ノ瀨村にあり今は禪宗にして本尊□佛を安置す、東向にして本堂六間四面計あり庫裡あり、古文書は傳はらず、此寺昔は今の領主ノ御茶屋ノ地に有しと云、

舊地

○同喜菴

〔永源寺天文ノ文書〕に野面庄内壽福寺分田數八段同庄北田浮（後カ）□（貳）（後カ）貳段（同庄）内同喜菴分壹段云云とあり、同喜菴今は地名に殘れり、野面村の内にてドウキアと唱ふるなり、

所在

○藥師堂

〔永源寺天文ノ文書〕に野面庄ノ内云云　浮（後カ）町畠地貳段藥師免地等云云とあり、此藥師と云は鞍手郡笠田村ノ藥師を云か野面村ノ人家より五六町許東南にありて古處なり、

承樂寺

福壽山承樂寺と號す、本尊藥師佛は行基ノ作と云越前ノ國峯ノ藥師・山城國笠カ谷ノ藥師・筑前國笠田ノ藥師三體一木にて刻めりと云、阿彌陀四天王十二神將の像をも安置せり、堂は西南に向ひて聊高處にあり土地のさま古し、重て按ずるに壽福寺の事と聞ゆ

舊地

○永滿寺

〔天文八年大內家寄附狀〕に云云　初鞍手郡永滿寺村に在て大興山往生院永滿寺と號す、元祿十一年同郡直方に移して雙林院と號す領主黑田之勝寺領十石を寄附して

雙林院寺領

祈願寺とし給へり寺は竹林ノ中聊高處にありて南に向へり天台宗ノ僧住して祈禱を事とす、〔筑陽記十八卷〕に直方大興山永滿寺雙林院ハ天台宗叡山之末院也古來在ニ當郡永滿寺村ニ因爲ニ村號ニ元祿十一年戊寅移ニ寺於當地ニ、永滿寺ノ枝村に塚磨と云處あり此處に塚磨山西福寺とて曹洞宗の寺あり豐前國田川郡興國寺ノ末寺なり山中にして閑寂の地なり、

緣起

塚摩西福寺

○圓通寺

所在
緣起
寺領

〔宗像分限帳〕に武町山口ノ圓通寺五段龍澤寺とあり、聖音山圓通寺は鞍手郡山口村にあり、宗像ノ氏繼の子千代松の靈牌を安置せり宗像氏貞ノ妻山田ノ後室の怨靈を宥むるため山口村に圓通寺を建て氏繼・千代松父子の菩提を弔ふ其後國主黑田長□此寺の野山一万坪を寄附し給へり山中には珍らしき梵刹なり（千代松此處にて殺されたる事は今宮殿のくだりに龍澤寺ノ事はいまだ考へず、

清水原戰

○若宮清水寺

〔武家高名記〕（感狀卷）に前之十三於ニ清水原一合戰之刻別而被レ碎ニ御手一深川九郎被ニ討取一御高名之次第珍重候必可レ達ニ上聞一候條御感不レ可レ有ニ餘儀一候殊御被官ノ歷々或分捕或被レ疵被レ盡ニ粉骨一候間是又銘々以レ狀申候爲ニ御存知一候必以ニ時分一顯ニ御志一可レ申候恐々謹言十一月廿四日蔦野三河守殿統虎・道雪とあり、さて清水原と云は清水寺あるに依ての名なりされども今は寺のみ殘りて古く書ける文ども見えねば此文書をしばらく舊證として此寺號をあげつ、（此〔文書〕は天正十一年十一月十三日若宮郷金原合戰の時の感狀なりされども前之十三日とあれば十月ノ合戰とすべきか〔九州軍記〕には十月とあり、〔筑陽記十八卷〕に鞍手郡黑丸村青龍山清水寺者眞言宗仁和寺之末院也、本尊千手觀音立像行基菩薩ノ作秘佛也當國三十三所靈佛二十五番巡禮札所也、當寺者聖武帝天平年中行基菩薩遊ニ踐此處一視ニ地之靈一闢レ山艸創也莊嚴美麗殆甲ニ于郡一基自彫ニ刻圓通大士ノ像一安ニ置之一、有ニ十二僧舍一（十二ノ僧坊、仲ノ坊・奥坊・寶珠坊・向坊・寶和坊・前鬼坊・理性坊・田井坊・奥園坊・密乘坊・道遙坊・檢校坊是なり）

創建
僧坊

小金原戰

緇徒昌蕃ノ巨刹也、降ニ于中世一衰替、至若天正年中立花城卒與ニ宗像大宮司ノ兵士一會ニ戰當郷小金原一立花勢得ニ勝利一梟ニ首於堂前一忽天災焚ニ佛閣僧院及經卷什物等一靈像而已脫ニ烟中一爾來不レ得ニ再興一僅建ニ佛堂一宇僧舍一區一惜哉其勝地也前者若宮吉川兩郷直下田野村巷林藪流水恰如レ向ニ畫圖一也後者群山列峯嘉木蔥鬱四時眺望無レ窮美景也、自ニ洛東清水寺一六十餘年前之經始也自ニ天平年中一至ニ元祿一九百七十餘年也とあり、當寺は東向なり今も佛殿有て誠に絕景ノ地なり、

禁制

○瑞石寺

〔禁制〕鞍手郡瑞石寺一於ニ寺中一殺生之事一薪材木剪取之事付炭灰燒取之事一牛馬之事右之條々於ニ違背之輩一者可レ爲ニ曲事一者也黑田甲斐守長政慶長六年卯月三日とあり、〔豐鐘善鳴錄三卷〕に天眞禪師諱ハ融通肥後州人云云抵ニ筑前鞍手郡丹鳳山一閉レ門長養一日詣ニ彥山神祠一誠ニ祈弘道一下レ山拾ニ一奇石一其形似ニ官人頭上烏帽一乃袖レ之歸及レ至ニ所住一其石遽重落レ地人立、師知ニ是神瑞一因名レ寺曰ニ瑞石一自レ是道俗歸崇遂作ニ一方望刹一とあり、瑞石寺は鞍手郡金生村ノ内楠谷と云處にあり山間奥深き處にあり、門前に聊人家もあり曹洞宗にして豐後國泉福寺の末寺なり高さ三尺許にして烏帽子の如くなる石今も庭上にあり是瑞石なり、寺邊の山林二十万坪

天眞禪師
緣起

所世
瑞石
寺領

末寺

小早川隆景卿より寄附あり長政公の時も先規の如く御寄附あり、此寺ノ末寺七ヶ寺あり、（此寺に無著和尚より傳はる（原書其下闕文））

○法花寺

所在

〔文書〕に粥田庄新入郷武家分重久維（綱）法花寺領内宮尾屋敷一ヶ處之事對ニ劒大明神ニ令ニ寄進ニ訖向後不レ可レ有ニ相違ニ之狀如レ件永祿六年　九月十九日重久判　新入武家大宮司黒山掃部大夫殿、（また同比の〔坪付〕に新入村云云同村法華寺分ノ内云云とあり、此〔文書〕ノ事まで飯神社ノ件に引出て云り、）また〔東寺ノ文書〕に修明門院御處分御所庄々等筑前國植木庄（法華堂領）安貞二年八月五日七條院在御判とあるも此法花寺ノ本寺ノ聞ゆ、さて鞍手郡下新入村ノ内に法花寺谷と云處有てそこに法花寺ノ觀音とて小堂あり堂は東に向へり庵主有て是を守る、〔里人ノ語傳〕に古は甚盛なる寺なりしと云此寺は六嶽の東ノ麓にあり、（今ノ植木村は法花寺より一里東北にあり、）

○眞如寺

眞如比丘舊地御茶屋床所在

〔寄附狀〕に爲寺領鞍手郡植木村之内高拾石之地令ニ寄附ニ畢全可レ令ニ寺納ニ者也慶長十六年二月三日眞如寺長政（判）とあり、眞如寺は淨土宗鎮西派（古は眞言宗なりしと云）にして鞍手郡植木村にあり、昔此處に眞如比丘と云ふ人ありて其人の爲に建たる寺なりといふ、此寺初は同村ノ内御茶屋床と云處に在し乎長政公其地に茶屋を建立給むとて寺領を寄附して今ノ地に移し給へり、（今は植木村ノ上町に在て北におかへり、此寺に天正十五年ノ碑あり當寺開山□上人の碑なり、）

○極樂寺

緣起

〔筑陽記十八卷〕に宮田村光明山極樂寺攝取院ハ淨土鎮西派洛東知恩院之末院也、當寺ハ聖光上人辨阿元天台宗門穗波郡明星寺居住時遊化說戒之精舍而號ニ大藏道場ニ也後聖光從ニ源空上人ニ亶ニ淨土法ニ改宗移ニ居於筑後國善導寺ニ因レ之此寺爲ニ當宗ニ後世及ニ頹破ニ弘治永祿ノ比行明學阿上人修ニ營之ニ元龜年中第七世寶譽上人代權ニ寇火ニ寺院舊記寶物炎滅近代再興寺領二十石末院十二箇寺とあり、又〔鎮西禪師繪詞傳八卷〕に筑前國鞍手郡太藏（タクラ）に承安年中禪師開基の砌あり則たぐらの道場と云、永祿行明覺阿上人近隣宮田ノ里に移して光明山極樂寺と號す末院多し黒田侯奉香の寺なり猶其舊地に一宇あり太藏菴と云とあり舊地と云は倉久村を云なり、極樂寺は南向にして本尊□佛を安置せり

寺領たぐら道場太藏庵

○最明寺

〔最明寺藥師體中ノ銘〕に造作旦文明十二庚子年一初洞公坐元禪願主とあり、最明寺今は絶て其趾のみ鞍手郡四郎丸村にあり其趾に藥師堂あり是そのかみ鎌倉ノ最明寺時頼入道此寺に一宿せられしより寺號とせりと云、

藥師堂名義

○善光寺

〔宗像分限帳〕に三町三段稻光善光寺とあり、此寺は今もあり、淨土宗にして宮田

村極樂寺の末寺となる、本尊は□□佛にして寺は□方に向へり、

○万福寺

〔宗像分限帳〕に壹町貳段稻光万福寺（善德寺加レ之）貳段能引菴とあり、此寺の事今詳ならず、重ねて考ふべし、

○平山寺

平山

〔宗像分限帳〕に貳町黑丸平山寺とあり、此寺の事も今は詳ならずもし清水寺の別號にはあらぬにや、（宗像郡吉留村ノ内に平山と云處ありされども九郎丸にはへだゝれり、）

○金生郷

名義

〔倭名抄〕に鞍手郡金生、加奈布とあり、名義は古に金など出たる負せたるか、（此過小伏）村ノ内に小金原と云處もあり、さて鞍手郡金生村有て今は若宮郷ノ内に入レり、

○二田郷

〔倭名抄〕に鞍手郡二田、布多多とあり、名義詳ならず地理また考へがたし、

○生見郷

生見戰

〔和名抄〕に鞍手郡生見、伊無美とあり、名義いまだ考へず、（伊無美とある訓注は伊久美の誤なるべし、）さて〔宗像記追考一卷〕に就ニ杉豐前守連緒ニ此方喧嘩之儀爲ニ返答ニ到ニ去九月生見村ニ（博口ノ下ニ後遠所國加藤常村山金五郎ノ十二字脫）相働之所於ニ搆口ニ被ニ矢疵ニ左膝（一本脫）一ヶ所　僕從與七郎鑓疵一ヶ所頭粉骨之次第誠無ニ比類ニ候向後彌忠儀肝要之通能々可レ被ニ仰與ニ候恐々謹言十一月十三日河津掃部殿御宿所、氏貞とあり、（此外にも生見村と書る文書宗像にあり、）今も鞍手郡宮田村ノ内に生見（スクミ）村と云處あり、（序に云宮田村の南に日陽（ヒナタ）の畏沙門とて古キ處あり磯光村ノ内なり日陽（ヒナタ）山ノ上にあり人家より上る事三町許あり昔は大伽藍なりしと云今は小堂あり、）

日陽山日陽畏沙門

○十市郷

名義

〔和名抄〕に鞍手郡十市、止布知とあり、（布は伊か乎かを誤れるものなるべし、）名義は十市部の住し處なるべし、（十市部ノ事は〔今本書事本紀〕に見えたり、〔或說〕に鞍手郡沼口村ノ内に十市と云處ありといへり、）此郷地今は詳ならず、

○新分郷

新北村

〔和名抄〕に鞍手郡新分、爾比岐多とあり、名義いまだ考へず今も鞍手郡新北村あり、

○粥田郷

粥田庄

〔和名抄〕に鞍手郡粥田加都多とあり、（都は由を誤れるか）名義いまだ考へず、さて〔宇佐宮記〕に將軍家政所下筑前國粥田庄羽生庄ノ内貞清所領可レ早以ニ時員ニ爲ニ地頭職ニ事右件ノ庄内貞清子息等爲ニ地頭ニ之處對ニ捍造ニ宇佐宮ニ課役ニ依ニ其過怠ニ爲レ徵傍悪停ニ止彼等職ニ以ニ時員ニ所レ補ニ任地頭職ニ也住人宜ニ承知ニ不レ可ニ違失ニ之狀所レ仰如レ件、建久三年十一月十一日安主藤原在判・知家事中原在判・令民部少丞藤原在判・別當前因幡守中原朝臣在判、又〔建武ノ文書〕に筑前國粥田ノ庄堺郷

云云などもあり、〔元祿ノ記〕に鞍手郡龍德村粥田村竹馬村屬レ之とありなほまのわたりの〔古文書〕どもに粥田庄と云事これかれ見えたり、豐前國にも一處有しやうに覽ゆそはこゝの粥田庄内とするが其比のさだまりなり郷名などとは別段の事なりまがふべからず、に居る人の管する所は他の國にありても

○崎門山

〔風土記〕に宗像大神自レ天降居二崎門山一云云とあり、崎門は佐伎登と訓ムべし、名義は前利の意なるか、〔延喜式〕に尾張國中島郡宗像神社葉栗郡前利（サキト）神社などもありこゝなるも〔宗像末社記〕には前戸神社とかけり、さて〔鞍手郡室木村六嶽神社縁起〕に山有二六峯一第一曰二朝日峯一第二曰二天冠峯一第三曰二羽衣峯一（タカス）又曰二兒嶽一第四曰二高祖峯一第五曰二出穗峯一第六曰二崎門峯一とあり、〔宗像ノ舊記〕には宗像郡に六嶽あり室木ノ六嶽・鳶岳・許斐岳・宮地岳・與里岳・大島ノ御岳、是を六岳と云由見えたり、（ムルキ）室貴六嶽仁有二御著一則神（シンヂ）興村仁著給、於二此村一初天被レ輝二神威一ともあり、室木なムルキとよむ事は早くよりの事にて〔宗像神社ノ古文書〕に牟留木とあり、鞍手郡室木村六嶽今は長谷村と兩村にかゝれり其高さ（ハセ）

名義

室木六嶽

宗像六峯

ムルキ所在

郡界變更

蓬より五六町或七八町許あり東に新入村南に龍德・宮田ノ兩村あり西に室木村北に長谷村あり、〔宗像家古文書〕に筑前國宗像郷ノ内宮永拾七町半流木七町分石田五町ノ事爲レ料所々預置也任二先例一可レ致二沙汰一之狀如レ件應永七年十月廿六日宗像大宮司殿貞賴判、また〔永祿九年ノ棟書〕に宗像郡室木村第二ノ宮云云などもありて室木は初宗像郡の内なり、〔天正ノ田島指出帳〕までは宗像郡に入レり今は鞍手郡に付て宗像郡の堺よりは五十丁許東南ノ方にあり、

○木屋ノ瀨

〔宗祇筑紫紀行〕にこやの瀨といふ處にて草の枕をむすぶあかつき近き夢に誰となきをとこ天神となりて扇を予に賜はると見はべりて夢さめぬ則同行にかたればこゝぶきあへり誠に冥助あるにこそとたのもしくなん云云とあり、こゝを木屋瀨といふ事は鎮西禪師穗波郡明星寺を再興する時岡ノ水門より材木を登せて入置たる木屋の跡なりといふ、〔和名抄〕に遠賀郡木夜とあるをこゝの事ならんかともおもへりしかど木を古（コ）の假名に假れる例もなければいかゞなり、さて鞍手郡木屋瀨は今も驛所にして人家多し文明の比より驛路の筋なりしなるべし、天神ノ社もあり、此驛の南の見付々所則追分々なり肥前長崎などに行々人は南をさし當國福岡などにゆく人は西をさすなり

名義

長崎街道

○植木庄

〔東寺ノ文書〕に修明門院（修明門院は贈左大臣範季の女にして後鳥羽院の中宮と成て順德院をうめり、）御處分御所庄々等云云御庄々三十五箇所云云周防國東荷庄・肥後國神倉庄小野鰐庄・筑前國植木庄（法華堂領）安貞二年八月五日七條在御判、また七條院（七條院と云は贈左大臣信隆ノ女にして高倉ノ院の后と或て後鳥羽院の御母なり、）御領十七箇所事云云肥後國上野鰐庄・筑前國植木庄（以二近江國吉身庄三尾新宮肥後國神倉庄一相轉也）右庄々可レ有二御管領一之由春宮ノ令旨所候也以二此旨一可レ令レ洩二啓四辻入道親王一給仍執達如レ件正和三年七月二日粟田口少將殿隆長亮判などあり、其頃より植木村の近邊一二里の間を植木庄と呼びたりし趣にて神社の棟札などに植木庄と書々る物是彼レ ありと今ノ植木村は木屋驛の西に續きて其間に大河あり、此村にも九品念佛の餘流の者ありて寺中と號す植木村ノ横町と云所に觀音堂あり

寺中觀音堂

城地

仰像は石碑なり表にもうちにも梵字をふりつけたり延久二年二月十七日建之とあり、

○高鳥居ノ城（タカドリヰ）

〔豐前古城記〕香月家藏ノ文書に前月晦日高鳥居之者差下於二其許切寄（ヨセ）取掛候所別而御辛勞之段其聞候第一首尾無二比類一候彌其表御心掛可レ爲二祝着一候何樣近日一行無二餘儀一候猶其節可二申談一候恐惶謹言七月二日世良田備後入道殿御宿所、秋月種實判とあり、高鳥居は多可等利爲と訓ムべし、名義は後に云べし、此城は鞍手郡永滿寺村にあり麓より城まで十余町あり西南ノ方は甚險岨ノ地にして諸木茂れり東北ノ方は福地ノ高嶺につゞけり此處往古福地權現の烏居を建たりし所なりといふ、又〔怡土郡文書〕に自明應七年十一月至同八年十一月廿一日於高鳥居被遂在城之次第別而神代紀伊守貞綱注進之旨一段無極者也豐筑兩國大亂之間自最初一向通路停止之處在城中速々勳功尤神妙就被成任官御吹擧事彌可レ被レ抽二忠節一之由被二仰付一候也仍執達如レ件、明應九年八月九日兵部王沙彌坐助岡部彦左衛門殿とあり、是も糟屋郡高鳥居ノ事にはあらずしてなほこゝの城を云なるべし、當郡永滿寺村の内に高取井ノ古城とてあり高山ノ上に下なり長政朝臣入國の時此城を築替て毛利俱馬を城番とし給ふに慶長十一年嘉穗郡大隈城に遷て此城には手塚水雪城番たり台命に依て元和元年に是を崩さる、又同村に雲取山の古城とてあり永祿天正の間麻生經益在城せり大友氏の幕臣を筑前に召されて麓取ノ手塚水雪と云後に長政朝臣彼者を製する者をつれ來たりて肥後國にて是を造らし給ふ是に依て麓取焼と名づく、慶長十九年より同郡内ノ礒と云處にて八藏焼と云其後寛永七年穗波郡合屋ノ中村ノ内白鶴山の北ノ麓に移りて

雲取城

麓取焼
八藏焼

所在

祭神

銅筒

やく、寛文七年より又上座郡皷村にうつりてやく今の陶工は新九郎が末裔なり、

○土方八幡（ヒヂカタ）ノ社

〔沼口村八幡宮經筒ノ銘文〕に鎮西筑前國鞍手郡土方香椎之末宮尊廟大菩薩爲レ報二神恩一奉書寫供養法經一部始役於願主□結緣之麗□□二世之大願□爲決定成就爲法界衆同平等利養願主清原貞之□春代敬白、助成工功尊居、保元二年□□（丁丑）九月廿日畢供養既とあり、土方は比治加多と訓ムべし、（中古に土方姓あり、〔和名抄〕遠江國城飼郡土形（比知加多）とあり、）此地今詳ならず強て考ふるに土方は沼口村ノ邊を云か沼口ノ八幡ノ社は一村の産沙神なり、

○都市八幡神社（伊藤熊雄追加）

鞍手郡山二村大字沼口字都市（スマグチ）鎮坐村社八幡神社、祭神應神天皇・神功皇后及武内大臣を祭れり、（筑前國風土記附錄鞍手郡目錄ノ内沼口村都市とあり里俗當社を都市八幡宮と稱す、〔熊雄按〕に和名抄九卷に鞍手郡郷名の内十市（止布知）とある處なるべし經筒銘文に土方とあるは十市にて市を方と書ひがめしならん識者の參考に供ふ、）天保年間拜殿を改築せしとき社地より經筒貳個堀出たり壹個は無銘壹個は銘文あり管内志に載たり明治十九年（丙戌）十一月廿六日（酉霜月朔日）神殿改築のとき社内地を四尺計堀下しとき素燒ノ瓶壹個出たり其中に經筒ありて銘文は末尾に記す、該神社寶物經筒は唐銅にして參個あり内壹個は高さ壹尺壹寸位貳個は高さ凡壹尺、素燒ノ瓶（瓦質にて赤色をおぶ）の中に唐銅ノ經筒入れり周圍は素灰（スダ）（堅炭粉に似たり）にてつめたり、經文は（白紙に墨書せり何れも奥書なし）卷きて入れたり周圍は厚紙を卷き凡壹寸位切

斷したるもの〈卒沓紙の如き厚紙なり〉數十個にてつめたり此は濕氣を防ん爲なるべし古人の注意至れりと云べし、

〔經筒外部ノ銘文〕に鎭西筑前國、鞍手郡土方、香椎之末宮、尊廟大菩薩、殊爲報神恩、奉□□供養、如法經一部、始□□願主、結緣之□□、二世之大願、爲決定成就、□法界衆生、同平等利益、願主淸原貞之□□□敬白、助成工巧尊□保元二年〈丁丑〉□□九月廿四日

とあり、

筑前之十八（鞍手郡）終

筑前之十九

○嘉摩郡

〔延喜民部式〕に筑前國嘉摩郡あり、〔倭名抄〕に筑前國嘉摩〈加万〉とあり、〔拾芥抄〕同じ、名義いまだ考へず、〔兵部式〕に備前國〈珂磨驛と云もあり〉、さて〔安閑天皇紀〕に二年五月甲寅、置二筑紫鎌屯倉一云云、〔万葉集五卷〕に神龜五年七月廿一日世間難レ住歌一首幷短歌幷序〈巳下ノ七字世本缺ノ後にかけり〉嘉摩郡撰定之、山上憶良哀二世間難一レ住所以因作二一章之歌一以撥二二毛之歎一其歌曰、世間能、周弊奈伎物能波、年月波、奈何流々、其等斯、等利都都伎、意比久留母能波、毛毛久佐爾、勢米余利伎多流、遠等咩良何、遠等咩佐備周等、可羅多麻乎、多毛等爾麻可志、之路多倍乃、袖布利可伴之、久禮奈爲乃、阿可毛須蘇比伎、余知古良等、手多豆佐波利提、阿蘇比家武、等伎能佐迦利乎、等々尾迦禰、周具斯野利都禮、美奈乃和多、迦具漏伎可美爾、伊都乃麻可、斯毛乃布利家武、爾能保奈酒、意母提乃宇倍爾、伊豆久由可、斯和何伎多利斯、都禰奈利之、恵麻比麻欲毘伎、散久伴奈能、宇都呂比爾家里、余乃奈可波、可久乃未奈良之、麻周羅遠乃、遠刀古佐備周等、都流岐多智、許志爾刀利波枳、佐都由美乎、多爾伎利物知提、阿迦胡麻爾、志都久良宇智意伎、波比能利提、阿蘇比阿留伎斯、余乃奈迦野、都禰爾阿利家留、遠等咩良何、佐那周伊多斗乎、意斯比良伎、伊多度利與利提、麻多麻提乃、多麻提佐斯迦閉、佐禰斯欲能、伊久陀母阿羅禰婆、多都可豆恵、許志爾多何禰提、可久由既婆、比等爾伊等波延、可久由既婆、比等爾避久麻延、意余斯遠波、迦久能尾奈良志、多麻枳波流、伊能知遠志家騰、世武周弊母奈斯、

反歌、

等伎波奈周、迦久斯母何母等、意母閉騰母、余能許等奈禮婆、等登尾可禰都母、

この哥詞書の如く大字に書くべきか餘りに

財部宇代

長くてくだ〳〵しければ今私に改めて細字に書つ、〔續紀三十卷〕に寶龜元年秋七月戊寅云云 筑前國嘉摩郡ノ人財部ノ宇代獲ニ白雉一賜ニ爵人二級稻五百束一、〔宗氏家譜〕に文安元年甲子盛國與ニ其弟盛世一同起レ兵攻ニ筑前州一取ニ嘉摩郡一、〔筑前軍記略〕に永祿之比大友宗麟以ニ毛利兵部少輔鎮實一爲ニ嘉摩郡馬見城代一云云、天正七年秋月種實遣ニ使於鎮實一可レ爲ニ秋月ノ一味一之由勸レ之鎮實恐ニ俄禍起一僞許ニ諾之一則以レ女十二歲爲ニ人質一渡ニ秋月手一其後鎮實家人御手洗五郎三郎者爲ニ商人一入ニ秋月城一以ニ鎮實ノ書狀一包ニ魚腹一送ニ女ノ居室一八月廿七日夜自從ニ搦手一忍入盜ニ出人質一而遣ニ豐後國日田此女後國ニ坂本十郎妻一宗麟感ニ賞御手洗之功一云云、已上〔古戰場記〕の說なり、秋月種實父宗全隱居在ニ嘉摩郡益富ノ城一、天正十五年三月秀吉公九州征伐之時云云 軍勢三十万許充ニ滿于嘉摩・穗波兩郡之地一種實家人限江越中守・芥田憑六兵衞等始ニ籠于益富城一之處秋月勢見レ之大恐則種實以ニ福武入道々忍一爲レ使可ニ降參之不レ及ニ戰一指ニ古處山一引退、由雖レ申レ之更無ニ御許容一因レ之種實下ニ城古所山一而至ニ嘉摩郡芥田一剃髮黑衣而相ニ具子息種長・秋月江印一推參ニ大隈之御陳一獻ニ天下第一之茶入楢柴並□切正宗之刀一云云 終被レ助ニ種實之露命一、已上〔古木九州軍記十一卷〕ノ說 四月四日秀吉公以ニ大隈城一被レ預ニ早川主馬助一以ニ淺野彈正少弼・生駒雅樂頭・木村常陸介一爲ニ先手一自ニ大隈一越ニ八丁坂一入ニ夜須郡秋月一給云云 秋月父子亦供奉至ニ芥田一路傍有ニ大盤石一其面廣平恰如ニ金剛座一往昔有ニ山姥一而於ニ此石上一織レ布之山稱レ之石而今有ニ縷之跡一秀吉公可レ御ニ覽此

馬見城代

益富城

大隈之陣

八丁坂

大樣

郷村石高

方位

石一之由被レ仰レ之自ニ御輿一下給則置ニ床几於石上一掛ニ御腰一給彼種長爲ニ俗謠ノ名人一之間被レ命ニ一曲一於レ是種長跪ニ畠畔一謠曰一張之弓勢滅ニ東西南北之敵一秀吉公有ニ御感一則以ニ種長一爲ニ姑所山道之案內者一給、此時肥前國住人畑參河守信時於ニ八丁坂虵□一待ニ受秀吉公一自ニ岩蔭一以ニ種島鋏砲一雖レ射ニ貫御輿一御身無レ恙供奉之軍兵大驚レ之分レ山雖レ尋ニ探之一終不レ得信時元來大力之上無雙之早走而不レ嫌ニ峯谷一飛越逃ニ入于肥前國養父郡之山中一云云、此時秀吉公聞ニ杜鵑之聲一命ニ古田織部一令レ讀ニ和哥一給則詠レ之

一聲波何處奈良万志杜鵑佐良傳毛多杼留旅ノ山道乎

其日午刻入ニ于秋月城一給、以上〔古木九州軍記十一卷〕の說なり、益富ノ城とあるは大隈ノ城ともいふ、郡ノ大樣ノ事は〔和名抄九卷〕に嘉摩郡草壁久佐加倍三緒・大村於保無良綱別部奈和岐馬見牟馬美碓井宇須井〔筑前國天正年中田畠高指出帳〕に嘉摩郡田數千四百六町五段貳畝貳十壹歩分米壹万四千九百八石五斗五升貳夕、畠數三百六拾三町五段貳拾九歩分大豆千九百貳拾九石三斗五合九夕、合田畠數千七百六拾九町五段八畝貳拾歩并分米大豆壹万六千八百三拾七石八斗五升六合壹夕、〔元祿舊記〕に嘉摩郡高四万九百十四石九斗六升一合九夕、村數四十九などあり、又方位は東方豐前國田河郡に連り南は上座郡に連り西は穗波郡に連り北は鞍手郡に連れり、三方に大山あり中に川有り薪材に乏しからず土地肥饒なり、

大隈城　たいわ城　山野村城　片殿城　筒見城　岸殿城　毛利勘解由墓

〔舊記〕に嘉麻郡益富城は下中益村にあり大隈町に近き故世人大隈ノ城と云城の廣さ南北四十八間横九間高さ四十八間あり、又同郡たいわノ城とて上山田村にあり筑前中納言秀秋の時是を築て家臣日野龍右衛門を入置けりと云、又山野村ノ城とて古城あり宇佐大宮司宮成氏到津氏が城趾なりと云、又下山田村に筒見城・岸殿城とて二ノ城趾あり城主詳ならず、又椎木村に片逸ノ城とてあり城主は毛利鎮實が一族毛利勘解由と云者なりしと云傳へたり、山下に毛利勘解由が墓あり又其位牌に天正六年とかけり、

○口ノ原ノ八幡社

大宮司幸眼

〔嘉麻郡口原村八幡社獅子頭銘文〕に嘉暦元年八月日大宮司幸眼とあり、八幡ノ社は東向にして神殿拜殿あり、祭禮は九月十五日に執行す、大宮司幸眼とあるは詳かならずしひ按ずるに古に社僧など有てそれが名なるべし、今の神官は鞍手郡勝野村に居住して勝野因幡守と號す、今は彦穗宮と唱ふるなり、

彦穗宮

○五智如來

〔嘉麻郡筒野村北山ノ石佛ノ銘〕に勸進ノ僧圓朝五智如來像彦山三所權現八葉曼陀羅梵字見世末代□□行者修理養和二年歳次壬寅八月初四日丑日時正中云云　とあり、

○安國寺

緣起

〔筑陽記十八卷〕に嘉麻郡下山田村安國禪寺之舊跡、人王九十七代光明帝暦應二年己卯詔ニ足利將軍源尊氏卿一日本各州草ニ創安國禪寺一也以ニ當地一建ニ伽藍一號ニ白馬山景福安國禪寺一也、佛殿坊舍接レ甍壯嚴美麗而緇徒繁昌之巨刹也、百三代後花園院御宇文安年中因ニ廻祿一寺院忽爲ニ焦土一也、百四代後土御門院御宇文明年中寶公上人再ニ興之一、其後歴レ年至ニ永祿元龜之比一諸國大亂干戈無ニ止時一因レ茲寺田不レ收盜賊犯掠、故衆徒退去院宇荒廢、天正年中比丘鼎琱勤ニ化大檀越秋月種長雖レ修ニ造之一羅ニ兵火一成ニ烏有一今也名跡遺ニ礎石一耳、觀音堂安國寺本尊千手座像也脇士左千歳童子右八歳龍女各定朝作也回祿災雖レ及ニ兩度一不レ壞ニ炎中一也大火不レ能レ燒火坑變成池之誓約掲焉當國三十三所靈佛選二十七番也、山王權現七座九月九日石體貴布禰大明神石體諏大明神上同天神石體已上安國寺鎮守神也六地藏石佛在ニ山門礎前一帝釋天石體藥師石體右神佛在ニ安國寺境内一、また〔先哲ノ說〕に下山田村安國寺の舊跡前路廣く長くして境地よし三方に山有て谷懷廣し云云　其趾は今ノ觀音堂より一町奥ノ方山深き處にあり其地を小園と云さて文安四年の回祿に罹て燒失して本尊のみ殘れるを其後寺主文治二年に觀音堂を今ノ地に建立せり天正ノ比に至て荒廢極りぬ茲に秋月種實住僧鼎琱と相謀て再び佛堂を建立せり其後元和八年に村中より觀音堂を再興す今は只觀音堂のみ殘りて寺院もなし古の名殘とて今上皇帝ノ聖壽ノ牌及當寺十四代とある位牌一ッ殘れり、初佛堂の有し處に坐禪石とて大石あり、此境内に感澤寺・周照寺・養主菴など云る子院の趾殘れり、

小園

子院　立石不動　羅漢　伊勢高野　城趾善寺　修善寺　于手寺陵　于手寺趾　天智天皇陵

序に云〔先哲ノ說〕に嘉麻郡立岩村に不動の佛體と稱する大岩あり石の大さ二間餘高さ二間一尺あり其上に立岩あり故に立岩村と云昔より堂はなし此石ノ上に山籠ノ木像あり、又山野村ノ内に小高き所に石佛一處に多くあり是を五百羅漢と云いつの比よりか多く失て三百四五十ばかりあり是を守るも なし、又其奥の方側に穴二ッあり是を里俗は伊勢高野と云其穴中に石佛あり古此處は宇佐宮の神領なりしとて村中に城趾あり是を村民は宇佐大宮司兩家の城趾なりと云されば此處は兩家より留守職をおかれしなるべし、又此村ノ内に修善寺と云寺ノ趾あり今は圃と成れり、又于手村に昔于手寺と云寺あり故に村ノ號とする本尊于手觀音なり此寺山間に在て閑寂なる處なり其傍に石塔あり里民は天智天皇の陵なりと云天智天

鹿毛ノ牧　神護石　日王殿　飯大明神

皇の御子に嘉摩郡を給はりし事あり其御子天皇ノ崩じ給ひし後是を建給ふと云されども梵字などさだかに見えてさばかり久しき物とは聞えず、又當郡鹿毛（カゲ）ノ馬村に小堤山・古家山とて古に馬牧ありし處あり四方に石垣をつき巡らせり周廻二十丁計りあり此牧より鹿毛の良馬出し事ありて村ノ名とせしにや、また此村の内大谷山のいただき豐前の堺に日王殿と名付ケて其長さ七尺ばかりの石佛あり其傍に寺もありしと聞えて礎のこれり又池も殘れりいかなる寺なりと云事詳ならず、又大隈村の産沙神に飯大明神とてあり飯魚（ナマダ）な神に祭れりと云十一月十三日に祭りあり、

名義　日下部廣　名　草壁牛糞

○草壁郷

〔倭名鈔〕に嘉摩郡草壁ハ久佐加倍とあり、名ノ義は日下部姓の住りし處にて負せたるべし、此郷ノ地今は詳ならず、〔三代實錄四十八卷〕に筑後國前醫師小初位上日下部廣名、また〔九州軍記〕に草壁の六郎牛糞と云人も見えたり、さて筑後國山門郡にも草壁郷あり、

名義

○三緒郷

〔倭名鈔〕に嘉摩郡三緒とあり、三緒は美乎と訓ムべし、近江國高島郡三尾ハ美乎などもあり、名義は三尾姓ノ人の住めりし處などにて負せたるか今も嘉摩郡三緒村あり、

名義

○大村郷

〔倭名鈔〕に嘉摩郡大村於保無良とあり、名義は大村ノ直ノ住めりし處なるべし、此郷地今は詳ならず、大村郷は諸國に多し大村姓ノ事は〔筑前志四卷〕糟屋郡大村郷ノ件に聊いへり、

○綱別郷

〔倭名抄〕に嘉摩郡綱別都奈和岐とあり、名義いまだ考へず、さて〔宇佐大鏡〕に嘉摩郡宮吉名號ニ綱別新庄ニ也田數略之ともあり、今も嘉摩郡綱別村あり、郡東に庄内河内と云一谷ノ内に十三村あり佐與・元吉・大庄内・河内・有井・仁保・多田・有安・綱分・山倉・入水・高倉・赤坂（アカサカ）・筒野是なり是則古の綱分郷と聞ゆ山倉・入水の二村は別に一の小谷なり、

馬見物部

○馬見郷

〔倭名抄〕に嘉摩郡馬見牟馬美とあり、牟馬は宇馬の誤と聞ゆ、名義いまだ考へず、〔舊事本紀〕今本に馬見物部とあるは此處に住ゝりし物部なるべし、〔宇佐郡佐田氏所藏文書〕に去六月八日筑前國千手馬見表動之時宇佐郡一揆内ニ屬隆居手ニ馳走人數促隆居連々被官契約者ヘ注文上田三郎兵衛入道代・池田源右衛門尉代云云以上弘治貳年七月廿三日佐田彈正忠隆居判、などあり、今嘉摩郡馬見村に馬見嶽あり高山なり、其上に馬見權現ノ社あり白馬大明神とも云、〔延喜式〕に近江國蒲生郡馬見岡ノ神社といふものあり、此神郡中ノ惣社なりと云神社に云又葦毛ノ馬を嫌ひ給ふ由にて村中に葦毛ノ馬をかはず、他處より來たるをもとゞめおかず、信濃國望月・攝津國有馬郡湯山なども同じ、

所在　馬見嶽　馬見權現　白馬大明神

○碓井郷

〔倭名鈔〕に嘉摩郡碓井ハ宇須井とあり、名義いまだ考へず、さて今嘉摩郡に上臼井下臼井とて二村あり、白井村永泉寺は秋月氏ノ先祖數代の位牌あり又此處に松岩院と云寺あり永泉寺の末寺なり、

永泉寺　松岩院

○綱別驛

〔延喜兵部省式〕に筑前國綱別驛五疋とあり、さて〔文書〕に筑前國嘉摩郡之内綱分村百町之事遣ニ置之ニ也全可ニ領掌ニ之狀如ノ件永祿十二年八月廿三日輝元書判此〔文書〕は豐前小

倉伊藤氏の家にあり、さて豐前國田河郡香春驛より此驛に到り夫より西ノ方穗波郡長丘驛に到る小路ノ筋にして太宰府に通ふ道なり今は官道の筋にあらず、

太宰小路

○漆川

〔拾遺和歌集〕に

名にはいへど黑くも見えず漆川さすがに渡る人はぬるめり

漆生村所在

又〔八雲御抄〕に漆川筑前、又〔宗祇指南抄〕に漆川は嘉摩郡漆生と世俗に云在所など見えたり、今も嘉摩郡漆生村又漆生川あり、〔一説〕に御笠郡にありとす又〔一説〕に肥後國託麻郡漆島漆川ありとすなほよく考ふべし、

○穗波郡

穗波屯倉

〔延喜民部式〕に筑前穗波郡、〔和名抄〕に筑前國穗波（布奈美）とあり、名義いまだ考へず、稻の穗に由有て頁せたるべし、さて〔安閑天皇紀〕に二年五月甲寅置云云筑紫穗波屯倉・鎌屯倉とあり、次に〔筑前軍記略〕に天正九年十一月豐後大友家ノ軍勢打出于筑後國生葉郡ハ於是秋月種實出張于當國上座郡ニ而對陣ス戸次道雪・高橋紹運聞此由引率兩家軍勢五千餘人爲遮分秋月勢於秋月之領内穗波郡飯塚片島之邊悉燒之雖然因爲種實上座表出陣之節終無出合者ハ同月六日立花・岩屋兩家ノ軍勢

片島

自山間道引退之時臼井・扇山・茶臼山・高野山・馬見等之城兵三四千人一時起而逐之〔隆德太平記六十五卷〕には十一月六日云云高橋・戸次石垣山にて取て返し散々に切立て土師の在所まで追詰三百余人討取て勝時を揚てやがて立花へぞ入けるとあり石垣山と云は石坂の事なるか、道雪・紹運見之立足輕於後陣令放遠矢靜引退至石坂俄返合突崩秋月勢追至土師秋月軍勢不能返合道雪・紹運手所討取之首二百餘級也兩將又靜引退秋月留主居之家老等聞此由以上野四郎右衛門・坂田市之丞爲兩大將與豐前士城井・長野・上原等之勢都合五千余驛下臼井坂自屋山原横合懸此時已前敗軍卒等又來集都合八千八百人急追立花勢立花軍勢罷疲不能返合立花勢漸引退金手郷秋月於八木山村山中所討取之首四百余級切懸其處歸陣云云などあり、かくて郡ノ大樣ノ事は〔和名抄〕に穗波郡三坂（美佐加）・鳥田（古毛多）・土師（波之）・堅磐（加多之萬）・穗波（布奈美）とあり、さて〔筑前國天正年中田畠高指出帳〕に穗波郡田數千四百六拾五町貳段拾三歩分米貳万千六百九石貳斗八升四合四夕畠數三百五拾九町五畝三歩分大豆千九百三石七斗五升貳合六夕合田畠數千八百二拾四町二段五畝拾六歩弁分米大豆貳万三千五百拾三石七合、〔元祿年中ノ記〕に穗波郡高三万二千六百三十五石九斗八升三合、〔村名帳〕に穗波五十四村などあり、かくて嘉摩郡と穗波郡とは地勢ひとつゞきにして嘉摩郡は東にあり穗波郡は西にあり南は嘉摩郡にとなり西は夜須・御笠二郡にとなり北は鞍手郡にとなりて西南に大山多くすべて竹木に富める地な

石垣山
石坂ノ戰
臼井坂戰
屋山原
大樣郷村
石高
方位

合屋　長崎街道名殘　寶光山養正庵　山伏塚　四十塚　一日塚　鬼ヶ城跡　杉尾城　高界城跡　高石城　桑木城　扇山城　修理殿城　茶白山城　木實城　高山城　笠木城　千石城　葛山城　津原城

り、此郡に合屋（アフヤ）と稱する處あり庄内・中村・津島・柳橋この四村なり此處一谿同流の内なり、又黑崎ノ驛より長崎のかたに通ふ官道のすぢありて通商に乏しからず、又高瀨舟の通ふすぢありて魚鹽に乏しからず、土地よろしくして嘉禾の生る所なれば郡名も嘉穗と云郡名も古書に鎌とあれば稻を刈る器にて穗波といふによりかくは負せたる物なるか嘉穗と云郡名も古書のどほかからぬこゝちす、さて此郡の内山嶽に要害の地多ければ古城の跡ことさらに多しれば鞍手の鞍も稻にもこゝは是等によりて強て考ふれば鞍手の事は〔貝原翁の古戰場記〕に悉く見えたるを今大略を云べしさて庄司村と云に寶光山あり水山にて美材多し、此處に寶光寺養正庵など云古の寺跡あり、又同村に山伏塚と云物あり長六間横一間許あり昔彦山ノ山伏宗像大宮司へ祈願の爲に往たりしが其歸ルさ鞍手・穗波兩郡ノ界三ノ谷と云處にて山賊に逢ヒ山伏卅人不レ殘害せらる其屍を埋たる塚なり、又高田村ノ内に四十塚と云物あり年々に崩レて今へ只廿殘れり又一日塚とて周二町余高さ三十餘間の大塚あり其由は知レず、又大野ノ山上にある鬼杉ノ古城、又内住（ナイジウ）村なる掛ノ尾の古城共に城主知レず、又八木山村に城ノ尾と云山あり南の高山龍王岳につゞきて低き山なり村民いふ天正の比立花ノ城城主戸次氏の兵ども此處に取り上りしを秋月及薩摩の加勢迫來たり大に合戰して多くの人討死せり其死體を埋し處に高石ノ城・桑木ノ城と云、又北古賀村ノ内高界の境の山上に城址二ッあり城主詳ならず、又阿惠村に扇山ノ城とて有り是も秋月ノ端城也、又秋月ノ端城なり城主詳ならず、又内野村に修理殿ノ城・茶白山ノ城・桑木ノ城と云所あり城主ノ名詳ならず、又同村に茶白山の古城と有り是も秋月ノ端城なり、又高田村に高山ノ城・木實ノ城・高山ノ古城とてあり本丸二ノ丸三ノ丸の址段段にあり又から堀あり此西ノ麓は大賀畑ノ端城なり、又庄司村に笠木山ノ古城とてあり笠木ノ山遠所よりよく見ゆ始宗像の端城にして占部越前守宗安在城す其後秋月氏の城と成て乘手石見・柏井九郎右衛門・忠利出雲此三人城代たりしと云、又同村に葛山ノ古城とてあり笠木ノ出城なり、又津原村ノ宮山ノ小き城ノ址あり寶滿ノ城主高橋氏ノ家臣岡松八郎左衛門と云者住しと云、

○大分八幡（オホギタ）社

〔諸神根元抄上卷〕に延喜廿一年六月廿一日大菩薩御託宣吾穗波ノ宮柱三惡有レ之欲レ移二住筥崎ノ松原一其故昔天下國土乎鎮護始時戒定惠之筥宿置志松原奈利仍號筥崎一、〔二十二社註式〕〔同卷〕に八幡五所別宮（各式外也）筑前國大分宮・肥前國千栗宮・肥後國藤

鎭座緣起

五所別宮

崎宮・薩摩國新田ノ宮・大隅國正八幡宮、大分者寬平之比依二御託宣一占二穗波郡柘植城基一云云〔神祇紀聞〕に御由來記云云延喜廿一年六月一日筥崎神託自二我加宇佐宮一穗波郡大分宮波我本宮也私曰大分我本宮者欽明天皇御宇御示現之前御靈行之時也、〔神祇拾遺〕に筑前國大分宮・肥前國千栗ノ宮・肥後國藤崎宮・薩摩國新田宮・大隅國正八幡宮件五座在二外國一不レ便二參詣一也仍後柏原院大永年中奉レ移二山城國小山庄（此時移玉へる社は京都西ノ京極の北、田野ノ内にあり、）〔二十二社註式〕に五所ノ別宮筑前國大分宮神體全二于筥崎一寬元年中依二御託宣一坐二豐後國大分郡武内一、〔筑陽記十七卷〕に穗波郡大分八幡宮南向在二邑中一也、祭禮九月九日、中八幡宮左神功皇后右玉依姫已上三座、當社者應神天皇崩後四百十六年人王四十五代聖武天皇神龜三年丙寅依二神託一經二始宮殿一爲二八幡五所別宮一祭レ之朝廷之尊敬超レ他、神領莫大、祠宮社僧數多也云云八月十五日放生會移二神輿於社南四町許貴船森一云云路次ノ行莊嚴重也九月十五日有二神樂流鏑馬一如レ此之大禱者太宰府在廳之官人參候而勤レ之云世及二澆季一自二應仁一至二天正一九國騷亂神田不レ收宮社頽破神職退散祭祀廢絶而今九月九日祭祀形計也宮司圓光坊天台宗比叡山之末院也、〔八幡愚童訓〕に延喜廿一年六月廿一日八幡大神ノ託宣に吾穗波郡大分ノ宮に移居ノ後三惡あり一には竈門ノ宮は我伯母神にておはす然るを年中ノ節會に府官已下國司參來る間愚暗ノ輩或は馬に乘ながら遙二拜み或は

武内八幡祭神

貴船森

圓光坊

託宣ノ三惡

別宮第一
大口嶽
乳呑坂
大野
御腰掛石
宮裡
陀伊夫
鷺塚
宇佐本宮

笠を着ながら御前を渡る是甚恐あり二ッには郡司百姓御膳を備ふるに嶮岨山を越て數日民ノ煩を致す三ッには穗波宮已に放生ノ地にあらず故に吾筥崎ノ松原に移住むと思ふと宣ひし、〔野守ノ鏡〕に〔宇佐宮御託宣〕に穗波ノ宮にとゞまらむと思ふ佛法を勤修して天下國土を祈らむが爲なり云々〔宇佐御託宣〕に昔我天下國土を鎮護せし初戒定惠ノ筥を彼松原に埋置ゝり故に其地を筥崎と號す早く穗波ノ宮を捨て筥崎に移すべし我正に戒定惠の力を鏡として朝野の人を照し神鈴としては隣國の敵をはらはむ云々、など見えたり、又〔傳記略〕に穗波郡大分宮者八幡五所ノ別宮第一也、所祭三座中殿八幡大神左殿神功皇后右殿竈門神社也〔古傳云〕神功皇后三韓御征伐之後云云 携ニ譽田皇子ノ自ニ宇美村ノ越ニ大口嶽ノ神功皇后御産を脱せ給ひし處を大口嶽と云といへり、至ニ穗波郡ノ給其時皇子呑ノ乳給處云ニ呑乳坂ノ内住（ナイジウ）村ノ内なり、其麓有ニ廣平地ノ皇后御ニ覽之ノ曰ニ希見大野也ノ故其處云ニ大野ノ内住村の枝村なり又依ニ御身疲給ノ座ニ石上ノ休息給號ニ其石ノ云ニ御腰掛石、此石大野ノ邊にあり方四尺許なり遂至ニ大分村ノ留ニ行宮ノ給、故後人號ニ其地ノ云ニ宮ノ裡於ニ此處ノ定ニ筑紫ノ政事ノ歸ニ軍士於其國處ノ又縣主村主等等各分ニ遣處々ノ給、故號ニ其地ノ云ニ大分ノ後世唱ニ字音ノ云ニ陀伊夫ノ縣主村主等來集之處云ニ鷺塚、鷺塚ハ大分村にあり小き小山なり其上平なる處に皇后ノ御腰かけ給ひし石といふもあり、其年二月移ニ長門國豐浦宮ノ給云云 神龜三年依ニ神託ノ於ニ大分村ノ初造ニ營八幡宮ノ崇ニ祭大神ノ大神託宣云我宇佐宮與利母穗波大分宮波本宮也、此事〔宇佐宮託宣集〕にも見ゆ云云朝廷尊ニ崇之ノ給事略ノ他社ノ神祭之時者仰ニ太宰府在廳官人ノ令ノ執ニ行其事ノ給此故神田多有ノ之、宮殿結構甚嚴重也、祠官有ニ數十人ノ毎月天下大平異賊降伏之祈聊無ニ懈怠ノ就中八月十五日行ニ放生會ノ奉ニ移ニ神體於頓宮ノ社より南方四町許ノ木船ノ森ノ址あり、又九月九日ノ祭執ニ行神樂流鏑馬等ノ然處自ニ應仁ノ至ニ天正ノ末ノ九州大亂而此邊已成ニ戰爭ノ依ニ之古來神田歳時祭禮悉斷絶只今九月九日祭村民等奉ニ仕之ノ僅存ニ舊儀ノ而已、社前楠木多其大者周圍二丈社僧坊云ニ妙見山長樂寺圓光坊ノ天台宗也、社前ノ坊も昔は大寺にして其子院の名今り畠の字に殘れり八幡宮より七八丁東の方田の中に輪藏ノ跡あり大なる礎多し大石を切て柱をすえたる跡あり、凡大分村は町長く甲廣しつどころ深く靜にして其根色物ふりたり石ノ鳥居ノ額大分宮の三字は花山院前内大臣定誠公の筆なり、豐前より博多に至るもの此社の前を過て篠栗に至る者多し則豐前大道なり、とあり、〔傳記略〕は〔八幡本紀〕〔筑前續風土記〕〔筑前神社志〕等ノ諸說を略書せり元本皆假名書にして悉く引出るにむつかしければ今私に略書せるなり見る人其心し給ふべし、〔常足按〕ずるに〔諸神根元抄〕〔八幡愚童訓〕等に延喜廿一年ノ神託に依て初て筥崎ノ宮を造れるやうに云るは誤なるべし其說は〔延喜式〕に筑前國郡珂郡八幡大菩薩筥崎宮一座とありされば延喜廿一年は延暦の廿一年にてもあるべきかされども〔類聚國史五十二卷〕延暦元年ノ件に筥崎神社ノ事見えたればなほ疑はつかなし、筥崎神社ノ事は三ノ卷に委く云るを考ふべし、さて大分者寛平之比依ニ御託宣ノ占ニ穗波郡柏柏城基ノ とあるに依れば筥崎宮よりは後に祭れる社と聞ゆいづれとも今定めがたくなむ、さて又〔八幡愚童訓〕に御裳にはさませ給ひし白石筑前大分ノ宮の御體とぞ申けるとあり又〔筑前神社志〕と云ものに大分ノ宮は神龜三年託宣有て社を建らる昔の宮處は今の社地より一町許上にあり今も其處を嶽ノ宮と云其時の礎殘れり古は大社にして祭田數百町に及べりとあり、

長樂寺
輪藏ノ跡
大分町
豐前大道
〔函崎遷坐〕
大分宮鎮坐
嶽ノ宮
聖光上人
縁起

○明星寺

〔聖光上人傳〕に明星寺筑前國衆徒觀ニ上人ノ智行兼備道心純熟ノ勸誘而白、當寺昔有ニ三層塔婆ノ破壞年久上人若唱ニ知識ノ衆人皆可ニ信順ノ宜興ニ廢昔ノ總ニ絶今ノ云云 上人受ニ大衆勸ノ召ニ呼巧匠ノ註ニ記損色ノ因緣ニ大營ノ斟酌在ノ心雖ニ急不ノ勸猶提ニ註文ノ爰有便到ニ豐後國禮聖花室ノ聖語云吾死詣ニ閻魔廳ノ王告云子命明期未到早歸ニ人間ノ但令ニ汝看ニ扶桑國佛寺ノ被ニ王加ノ明見ニ六十餘州堂塔ノ次廼蘇生所ノ見境界銘ノ肝不ノ失

所レ聞名字記レ心不レ忘其之以往値二諸國人一尋二所見ノ事一專如一冥途一無二一而違一但吾於二冥途一見二明星寺三重新塔一今彼寺無レ塔此一事相違也云云上人聞レ之令レ見二件記一聖光

聖咸云我所レ見者當二此事一矣願念先顯二冥途一勸進須レ唱二彼寺一我先興レ之即投二淨財一云云、（已下文は大日寺山ノ伴にひくべし、此傳は弘安八年につくれるふみなり、）〔決苔授手印疑問鈔上卷〕に始則依二明星寺一者先師云師望二筑前明星寺一之時衆見二上人遁世貴形一勸云此寺本有二五重塔婆一破壞所在

礎殘二于今一我等年來雖レ歎レ之于今無レ功願上人勸二細素一建二立之一我等同心助二力之一云云（此書は明德三年に作れる書なり、）〔圓光大師行狀翼贊〕に〔聖光上人本傳五卷〕云（建久八年ノ件）筑前國明星寺昔有二三層ノ塔婆一破壞年久衆徒令二上人聖光一唱二知識一九州子來新塔速成欲レ迎二本尊一爲レ之上洛自思惟我昔聞二法印證眞常讃一法然上人一今得二便宜一不レ可レ不レ謁廼詣二東山禪室一時五月上旬也、〔本朝高僧傳十三卷〕に釋辨長號二聖光一筑之前州香月莊人應保二年生七歳入二菩提寺一師二妙法一肄二經業一十四剃度歷二待于白岩寺ノ唯心明星寺常寂一學ヲ習圓敎一義解川增云云建久三年還二鄕之油山寺一在二于學頭職一會二弟之殂一棄修二淨業一明星寺ノ衆請以二住持一居レ之八年久廢繼復同八年入レ洛云云などと見ゑたり、（白岩山ノ唯心法師明星寺ノ常寂法師ノ事は聖光上人傳に見えたるを遠賀郡白岩山勝福寺の件に引出たり、）〔先哲云〕明星寺は穗波郡明星寺村にあり、平壽山妙覺院と號す天台宗なり開基ノ時代分明ならず比叡山末寺にして虛空藏を本尊とす、此寺中頃頹破して修理する人無りしに聖光上人是を歎き

て再興を志し大日寺山に入て柱を切取り終に三層ノ塔を立けるされば大寺にて堂舍數多く嚴重なる伽藍なりしと云今は只虛空藏ノ堂（昔は方九間にして瓦葺ノ堂なりしと云今は横二間竪三間ノ堂なり當村の田ノ字に虛空藏田など云て昔の祭田の名殘れり、）地藏堂（昔は方四間今は横二間縱三間ノ堂あり又方一間半）藥師堂（藥師田とて祭田ノ名殘れり、）のみ殘れり此外阿彌陀堂（方四間ノ堂にて九體の阿彌陀を安置せり）と云又阿彌陀田とて今に祭田ノ名殘れり）觀音堂（方四間ノ堂なりしと云今に觀音田とて祭田ノ名殘れり）鐘樓（方二間ノ樓なりしと云今も鐘櫻田とて田ノ字に殘れり）など皆田圃と成て名のみ殘れり、又湯屋ノ池とて小池ノ形あり今竹林茂りて池ノ形も定かならず其中に小島有て石佛を安置す此池に明星ノ光怪しく映ぜし故に寺號としたる由云傳たり、又昔明星寺に十二坊有しが今は民宅或は圃と成て其の名のみ殘れり十二坊は本坊（是則座主坊あり）妙覺坊・龍藏坊・俊光坊・定春坊・楠田坊・花坊（俗字アルカ）・横谷坊・峯ノ坊・谷坊・十一坊・春海坊是なり此坊各當村ノ田地を以て其產としと云、今此處を見るに處々に古趾殘りて昔の繁榮思ひやらる、虛空藏ノ堂ノ前には櫻ノ大木數株あり凡此寺山上なれば堂ノ前ノ眺望目を悅ばしむ堂を下るに石階百八段あり鐘ノ聲を表せりと云此寺號に因て村ノ名を明星寺と云、此村ノ內に日數ヵ原と云處ありそこに松樹あり是聖光上人豐前國彥山に參詣せし度每に植し松なる故に其處を日數が原と云と云り今は彼岸の原と云よしなり、〔師說〕に明星寺村北谷に座主屋敷と云ものあり又聖光上人のひかれたる琵琶とて持傳へたる者あり金にて梅に鶯の繪をするゑたり依て鶯のびはと云、其上の茂山に虛空藏堂あり入三間横

阿彌陀田
觀音田
鐘櫻田
湯屋池
十二坊
日數原
彼岸の原
虛空藏堂

四間かはらぶきなり虚空蔵ノ像長さ二尺五寸許其脇に毘沙門の像あり古物なり寺ノ林中に湯屋ノ池あり山水少したまれり側の小石に梵字を多く彫たり今上皇帝等の三牌あり南に観音堂あり其南側に古墓あり石に梵字を彫付たり法橋琳辨八十一入滅元亨二年壬戌七月二日とあり、〔里人云〕日數が原に日數の松とて古松あまたあり此原廣く平かにして世にめづらしくうつくしき原なり是昔の大伽藍のあとなる由にて今も此所より古きやき物など掘出す事多しと云、

日數の松

○長丘驛

名義

〔延喜式〕に筑前國長丘ノ驛五疋あり、長丘は奈賀乎と訓ムべし、〔和名抄八卷〕に讃岐國寒川郡長尾奈賀乎などもあり、又丘を乎ともよむ例は〔書紀□卷〕に頓丘此之二毗陀烏ノとある是なり、名義は長キ岡なるに依て負せたるべし、さて〔新拾遺和歌集□卷〕に藤原經衡　經衡筑前ノ守たりし事は〔新撰古今集詞書〕に見えたる篭門神社ノ件に引出たり、

遥にぞ今行末を思ふべき長尾ノ村の長きためしに

〔宗祇筑紫紀行〕木屋ノ瀬より太宰府に至る道筋ノ事を云件、に十六日杉弘相の知ル處長尾と云にゆく都より心ざしの淺からねばこゝにても又おろかならむやは、やがて百韻をはじむ山深きわたりなれば杉氏は鞍手郡龍德の城主なり、

もみぢしてなほみどりそふみやまかな

など見えたり、此長丘は穂波郡長尾村を云なり、古に豐前國香春ノ驛より當國嘉摩郡綱別ノ驛を經て御笠郡芦城ノ驛に至る道筋なり此長尾より芦城ノ驛に至るには米ノ山と云を越てゆくなり米ノ山と云は〔萬葉集〕に悪木山とある是なり、今は官道ノ筋にあらざれども長尾より太宰府にゆく者必此道を通る事なり古に官人の米ノ山を越たりしならむと云事は〔先哲の説〕にもこれかれ見えたり、さて此長尾村今も當郡飯塚驛より南ノ方内野驛に至る官道の筋にあたる所なり、〔筑紫紀行〕に見えたる杉弘相と云は鞍手ノ郡龍德村に居たる杉氏なるべし大内家の代官として此わたりを治めたりしは杉氏なり、〔里人云〕長尾村より西北の隅に城山あり今も長尾の内なり、

米山越

杉弘相

城山

○三坂ノ郷

名義

〔倭名抄〕に穂波郡三坂ハ美佐加とあり、〔和名抄六卷〕に武蔵國横見郡御坂美佐加、名義は坂道ある處にて負せたるべし、此郷ノ地今詳ならず、強て云ば當郡山口村ノ邊か又は八木山村の邊を云なるべし、何レもいみじき山坂あり、八木山村の南竜王瀧の下に舍利倉寺あり近代寺はなし寺跡は今にあり、至る道筋なり、八木山村の入口に石坂村と云處あり、山口は長尾より米ノ山に至る入口なり、石坂は飯塚ノ驛より糟屋郡篠栗ノ驛に出る此所に舍利倉寺あり近代寺はなし寺跡は今にあり、

所在

山口

石坂

舍利蔵寺

○薦田郷

所在

〔倭名抄〕に穂波郡薦田ハ古毛多とあり、名義は薦などの多き處にて負せたるべし、今も穂波郡薦田村あり、

名義

○土師郷

土師連

〔倭名抄〕に穂波郡土師ハ波之とあり、名義は土師姓ノ人の居たりし處なるべし、〔常足按〕ずるに〔持統天皇紀〕に上ツ陽咩ノ郡大伴ノ唱麻呂・土師ノ連・氷ノ連・筑紫ノ君弓削連等と共に齊明天皇ノ御代に唐軍ノ俘と成たりしを唱麻呂が身を賣て衣粮に備て天智天皇ノ御代に彼人々を日本に返したりし事見えたり、〔書紀〕全文は〔筑後志上卷〕上妻郡ノ件に委く引出て論ふべし、さて右の人々は皆筑紫ノ人と聞えたれば土師ノ連はこゝの土師に由有て聞ゆなほ〔筑後志〕山本郡土師郷ノ下に云々を考ふべし、大府宣

土師村

に神判、養父世秀一跡周防國吉敷郡小鯖江庄中村近延名五石足同前下村國近名拾石足筑前國穗波郡土師村六石等事任ニ去天文廿年七月十九日龍福寺殿證判同十六年七月十六日同十八日讓狀之旨一波賀多富壽丸相續領掌不可有相違之狀如件天文廿二年正月十五日、今も穗波郡土師村あり、〔古記〕に土師村に種因寺とてあり本尊藥師佛也是七佛藥師の一ッにして傳教大師の作なり然れども其佛背炎上して今はなし焦灰を筥にして本尊に備へたり昔は寺領多く繁榮なりしと云ふ今は藥師堂のみ有て寺はなし、又此村ノ高き岡に十三塚と云ものあり、

種因寺

十三塚

所在カタシマ

○堅磐（カタシハ）ノ郷

〔倭名鈔〕に穗波郡堅磐、加多之萬とあり、名義は磐に由有て負せたるべし、今も穗波郡片島村あり、〔古事記傳〕に穗波郡堅磐を加多之萬とよみたるは加多之方の誤なるべし方を後に萬に誤り其方を萬に書ヶるなりとあり、されども今も正しくカタシマと唱ふれば古くよりしかよめりしなるべし古言に波と萬とを通はしいふ例多し、

郡家

屯倉

○穗波郷

〔和名抄〕に穗波郡穗波（布奈美）とあり古に郡家を置ヵれし處なるべし、又〔安閑天皇紀〕に穗波ノ屯倉と有ルも此處を云か今は詳ならず、

聖光上人

○大日寺山

〔聖光上人傳〕に云云　于時上人爲レ取ニ塔柱一入ニ大日寺山一集ニ諸人一令レ伐ニ大木一其木皮下心上有ニ文字一曰（此處脱字あるべし）

伊奈波知（チヘヤヅ）和也不留加美乃伊我幾（キトナルゾウレシキ）登奈留曾宇禮之幾（ガミノイガ　ヤトアルベシ）

因幡大夫

二月一日上巳（ノ字落ツベシ）諸人見ニ此和字一莫レ不レ惟矣古老傳云昔日有ニ因幡大夫者一（宗像大宮司之孫也此等門悲ニ冬夜一蓬戸愁ニ春日一或時爲レ祈ニ福祐一七日參ニ詣于明星寺一（自ニ正月一日一至ニ七日一）毎日致ニ三千三百三十三遍禮拜一至ニ八日朝一虛空藏菩薩賜ニ一尺二寸稻穂一懷レ慶出ニ堂其日漸晩巨レ著レ宅到ニ大日寺一羇ニ宿小屋一爰家翁語云我有ニ女子一容皃嬋娟欲ニ汝爲ニ妻一云云大夫承諾成ニ其夫一件穗爲レ種春耕秋收、忽成ニ長者一夫穗種滿ニ一國一保ニ八旬運一二月一日端坐念佛如レ眠往生云云　時人皆云彼文字可ニ斯事一上人是大夫再誕歟云云、〔宗像大宮司系圖〕に清氏より第五世宗時長和癸丑ノ年任職して是を因幡大宮司と云よし見えたり因幡大夫と有るは是か、〔古本九州軍記一卷〕に貞治元年九月廿六日氏經一万八千餘騎にて穗波郡大日寺嶽に取登りて金出ノ郷に手遣す同十月二日菊池太宰府を立て金出ノ郷長者原と云處に陣取して探題と戰ひける云云　探題氏經は大日寺ヵ岳にも不悐して豐後をさして引入けりなどあり、（金出郷は麦柏屋郡に有り）さて大日寺山は穗波郡大日寺村にあり、〔舊記〕に穗波郡大日寺村は昔大日寺と云寺有し故なるべし今は其寺なし、又云大日寺村に金剛禪寺の舊趾あり昔は大寺なりしと云今も其名殘りてちひさき觀音堂あり、

大日寺山城

大日寺

金剛寺

所在

○柘栢城

〔諸神根元抄上卷〕に大分者寛平之比依ニ御託宣一占ニ穗波郡柘柏城基一云云　とあり、柘柏は豆美加閉と訓ヵか、（柘は〔和名抄〕に豆美と訓マせたり、又柏は加閉とも加之波とも訓マせたり、）詳ならず、土地は正しく大分ノ宮ノ地と聞えたり、〔神社志〕にいふ嶽ノ宮ノ地是なるべし、柘柏ノ事はなほよく考

椿新庄
名義
祭事

ふべし、

○椿庄

〔宇佐宮大鏡〕に筑前國穗波郡宮吉名號ニ椿新庄ノ也（田數略）之とあり、椿は都婆岐と訓ムべし、〔和名抄〕に椿を豆波木と訓マせたり、名義は海石榴（ツバキ）の多く生たる處にて負せたるべし、（筑前國より海石榴の油を貢する事〔主計式〕に見えたり、）並て考ふるに〔和名抄八卷〕に長門國阿武郡椿木、郡波木ともあり、さて穗波郡椿村あり、その村ノ内に八幡ノ社あり鄉中十村ノ惣社なり社は村ノ中少シ高處に在て南向なり、九月十五日祭禮あり此村昔宇佐宮の神領たりし故に八幡ノ社を古くより祭れるなるべし、（村の入口に昔より木像四體あり村民は安藝大夫・安藝介夫婦の像なりと云、）

○藥師堂（淵）

〔洪鐘ノ銘〕に筑前國穗波郡合屋庄鷲淵村藥師堂之洪鐘佛願皇帝万歲天下泰平檀門繁榮身宮安泰五穀豐登國家安寧風雨順レ時水旱無レ災、佛日增レ輝法輪常轉一切衆生見レ體聞レ聲發ニ菩提心ニ證無上道、衆病悉除、身心安樂、應永五戊寅閏四月五日願主福泉開山栢庭元祖幹緣大雄住持龍岩知仙・大工小倉沙彌安宗とあり、（此洪鐘今は筑後國高良山極樂寺に在り、）

○合田八幡社

〔棟札〕に奉謹建立八幡三社大菩薩御神體之事右意趣者天長地久御願圓滿皆令滿足

所在
祭神

所在
祭神

殊者佛法繁榮如意吉祥攸筑前國椿庄合田村常樂寺住持比丘隨菴慶順山主老人書之大宮司采女大夫于時天正七年己卯四月初八日沙門敬白とあり、此社は合田村にあり、祭神宇佐に同じ、神官青柳氏是に奉仕す、（〔棟札〕のうらに御回祿事、天正四年丁丑五月午剋宗像赤間庄石松加賀守殿銀子卅目御寄進也當村孫太郎ト中人也とあり、）

○鼓打權現社

〔棟札〕に奉再興鼓打三所大權現上宮于時文安三年丙寅八月七日大檀越日向守藤原朝臣・沙彌盛融・同弘長・□代下總守平長俊・大宮司佐伯左衛門大夫盛貞・大工藤原三郎兵衛尉宗貞小工十余人、又奉謹上鼓打三所大權現御寶殿之事右信心檀那陶前尾張守多々良朝臣興房・當大宮司種次伏願天下泰平國家安全人民快樂諸願成就皆令万足處也仍當庄代官深野平左衛門尉平房重・大工家人藤原家忠于時享祿三天庚寅應鐘晦日當奉行人周賢敬白とあり、鼓打は都豆美宇知と訓ムべし、〔古緣起〕に太玉命・兒屋根命・鈿女神を祭ると云此社今は熊野權現と號す、神官佐伯信濃是に奉仕す、社は東に向てたてり穗波郡中村ノ產沙神なり神殿中殿拜殿石ノ鳥居あり山は杉枾いと榮えてうるはしき山なり、

○潤野寶滿明神

〔棟札表ノ銘文〕に奉再興寶滿明神上檀一宇御意趣者神德益新國家安全時當所繁昌

萬民快樂善願成就而已本願主筑紫氏野田大膳亮藤原朝臣經久當所地頭武藤筑紫備中守藤原經勢文明九丁酉年二月十五日大宮司貞次諸神官貞吉等、〔同裏ノ銘文〕に筑前國穂波郡寶滿明神者振古之名社也文明年中筑紫氏再造之其時所掲之棟札今尚有ㇾ之然年所久文字漫滅將ㇾ失ニ其眞一予蒙ニ君命一巡ㇾ邑之日祀官請ㇾ改ニ書之一以爲ㇾ副遂不ㇾ得ㇾ辭書以與ㇾ之其間雖一二不可解者如曰書後之者勿疑ㇾ之元祿庚午仲秋十四日貝原好古判とあり、此寶滿社と云は穂波郡潤野村にあり、又此社の〔神輿ノ鳳形ノ銘〕に寶滿大菩薩云云　脇屋次郎左衛門願主とあり、文化元年十一月朔日炎上して悉く滅せり、

所在

○津原老松社

〔棟札銘文〕に老松大明神寶殿一宇武運長久國家安全敬白天文六年丁酉本願主大江朝臣毛利若狹守清房・大宮司式部大夫正晴とあり、此老松社は穂波郡津原村にあり、

所在

○寶滿社

〔棟札ノ銘〕に大日本國西海路筑紫國穂波郡高田村棟上奉建立寶滿大菩薩拜殿一宇之事于ㇾ時慶長八癸卯八月吉日大旦那本命元ㇾ願主□□名善左衛門修造・大宮司式部大夫氏子久とあり、此寶滿社は穂波郡高田村にあり、

所在

○土師老松社

〔棟札ノ銘文〕に天滿宮末社土師御庄鎮座老松社御殿造營事右造營之志者爲奉者聖朝外朝御願圓滿幷本寺長吏長者御息災延命御子孫繁昌次者爲願主下司庄下百姓名和順家本新預所嘉曆三戊辰年云云、また奉造立天滿宮末社老松大明神御寶殿伏願伽藍（昌隆如ニ一世隆在世之日一棟梁堅固至業下生之時）次冀（建社壇肥身宮安泰壽算延長家門繁昌施主各名四成如意吉祥者也）捨財大檀越土師云云（消て見えず）安安四丁卯天黃鐘祐皆日大工藤原藤右衛門尉跡正（小工十人）、また奉再興老松大明神御寶殿一宇右伏惟（佛日增輝神德潤盛）次冀大檀越都督藤原朝臣政尙、（果宣ヵ安泰壽山綿延家門鎭靜一切安寧）捨財檀那西鄕近江守小野朝臣貞房（寒文明第八孟夏十有六日大工藤原藤三郎貞正）などあり、此老松社は穂波郡土師村にあり古は土師鄕中ノ惣社なりしと云慶安ノ比までも彌山・畑・內山田・土師四村ノ產沙神たりし山にて石ノ鳥居に銘文あり、社は南向にして、祭禮九月廿九日にあり、神官高森上總是に仕ふ、（此社に肥後國八代菩提院ノ鰐口あり、）

所在

祭事

鰐口

○常樂寺

〔穂波郡合田村八幡社天正七年棟札ノ銘文〕に筑前國椿庄合田村常樂寺住持比丘隨菴慶順山主老人書ノ之とあり、常樂寺ノ事はいまだ考へず、

○大養院

〔寄附狀〕に穂波郡飯塚村大養院從先年甲州樣御宿ニ付而高拾石之通被ニ仰付一候亟

所在

而御書出□可ㇾ進ㇾ之候恐惶謹言慶七（みつのえとら）神無月九日大養寺宗樹玉床下　小河喜助（花押）とあり、大養院今も飯塚ノ驛にあり、

寺領段錢

○大日寺

〔廣寶院文書〕に穗波郡當院存知大日寺領段錢廿貫文之事　鞍手郡赤馬庄段錢　寺納分百貫文被申替度之由言上之通遂披露ㇾ成ニ御心得ㇾ畢仍大日寺領分段錢貳拾貫文事者任御厩奉行從當年享祿貳半濟之間可ㇾ有ニ寺納ㇾ之由候然者右百貫文内貳拾貫文事者任御厩奉行弘中兵部丞正長・沼間備前守敦定兩人裁判可ㇾ令ニ收納ㇾ之由對ニ河津新四郎ㇾ被ㇾ成ニ奉書ㇾ候殘八拾貫文事者當院半濟之間存知勿論可ㇾ被ㇾ得ニ其心ㇾ之由候恐々謹言享祿貳五月廿三日滿盛院・興國判・正賴判・興種判・興重判・興方判とあり、〔聖光上人傳〕に上人寺山ニ云云ともあり、穗波郡大日寺村に昔大日寺とて大寺有し由にて今も寺ノ趾あり大日の尊像爲ㇾ取ニ塔柱ㇾ入ニ大日長二尺餘今も彼村に殘れり、〔鎭西禪師行狀繪詞〕に大日寺は波明星寺の隣村なりいつしか廢場となりて大日ノ尊像御長二尺餘山下の大日寺村に現在し給へり、

○椿八幡宮

〔椿八幡宮棟札〕に卍八幡宮　棟上一宇伏以天長地久御願圓滿郡安穩領主御武運長久氏子子孫繁昌者矣大宮司藤原朝臣宮内大輔・神主宇良將監・大工藤原朝臣敎閑入道・小工二人定文祿三甲午霜月、また國守源朝臣小早川左衞門佐隆景・本願主長門國深川庄瑞雲山大寧寺十五世關翁大和尚・當郡山井七郎左衞門尉・地頭包久内藏允・

宇佐神領秋之長晴

安藝殿社祭事

金丸莊

下穗波惣庄屋本願主熊谷佐渡守・瓜生民部入道平朝臣・大工藤原朝臣敎閑入道文祿三甲午霜月、また〔棟札〕に寛文五年云云神主宇良將監・大宮司青柳平太夫尉長房などあり、〔社家傳說〕に椿八幡ノ社は宇佐宮を勸請せり、又當社ノ神官秋之大夫長晴宇佐大宮司に屬す、此時嘉摩穗波兩郡宇佐宮領たり是に依て秋之大夫長晴を代官として穗波村に居住せしむ其子助之大夫と號す云云秋之大夫・助之大夫兩夫婦の像を木像に造て今に椿村安藝殿ノ社と號て八幡宮ノ鳥居の傍にあり、秋之大夫長晴は秀村・宇良・青柳・吉田四姓の祖神なりとあり、八幡宮ノ祭禮は二月卯日八月十五日に修行す、今の神官を秀村出羽と號す、（此八幡ノ社郡中ノ氏子は椿村・堀池村・高松村・辨分村・樂市村・安恒村・小正村・秋松村・若樂村・堀村已上十村）なり、

○鷗田三島宮

〔棟札銘文〕に奉造立三島明神筑前州穗波郡金丸庄鷗田村寄進施主大宮司平重道云云下井手孫左衞門正歷元庚寅十二月三日、また奉造立筑前國穗波郡金丸庄鷗田村三島大明神大檀那下井手孫左衞門天文十六稔丁未二月廿六日などあり、神官須藤攝津仕奉る、

○長尾老松社

〔長尾村老松社棟札ノ銘文〕に大宮司秀村佐渡守豐盛・大工藤原住藤新兵衞秀家・寛天

彌勒佛

正六年戊八月廿二日とあり、天正の比に神官の受領おぼつかなきこゝちす、

○山口八幡社

〔山口村八幡宮棟札〕に大宮司井上新十郎藤原安吉・願主猪俣滿左衛門敬白・大工伊藤新兵衛入道敎閑文祿三年正月吉日とあり、

彌勒佛所在

○椿彌勒堂

〔椿村彌勒佛體中銘文〕に奉彫刻彌勒尊祈□聖壽□一天嘉云云　信心諸檀願□吉祥圓滿□□永享十二年□□神主宇良幸光丸施主比丘祖誕幷妙了大姉同背の内に□□松尾四郎松三郎□□鎭蜜一橋□□所大宮司道貞四郎五郎三郎二郎□神屋鐘司□三郎大工六郎太郎丸高□今石坐頭□□永隆正俊□應書記今藤妙金中云云　次郎四郎藤丸孫八與太郎大河十郎次郎左衛門左衛門三郎助五郎次郎□秀清藤次郎尊德妙善太郎左衛門・明感寺・寶泉院・妙清大姉・不動寺、とあり此彌勒佛は椿八幡ノ社の右にあり、

筑前之十九（嘉摩郡・穗波郡）終

夜須東西名義羽白熊鷲

秋月氏

秋月備前守

秋月次郎

秋月文種

筑前之二十

○夜須郡

〔延喜式〕に筑前國夜須郡あり、〔和名抄〕には筑前國夜須東西とあり、夜須は也周と訓ムべし、名義は〔神功皇后紀〕に元年春二月辛卯至ニ暦增岐野一即擧ル兵擊ニ羽白熊鷲一而滅ル之謂ニ左右一曰取ニ得熊鷲一我心則安故號ニ其處一曰ル安也とあり、さて〔万葉集四卷〕に神龜五年戊辰贈大貳丹比縣守卿遷ニ任民部卿一歌一首太宰帥大伴卿

爲君醸之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手

〔軍記略〕に大藏春實之裔代々居ニ住夜須郡秋月一而領ニ近邊一故以ニ秋月一爲ル號云云、建武三年二月秋月備前守與ニ足利家一兩將一色太郎入道道猷・仁木四郎次郎義長一合戰、郎軍破遁ニ太宰府一族廿四人於ニ一處一戰死、〔宗像河津氏文書〕に今度雖秋月次企野心籠城用意候老士之以計略其方招亭宅逆徒主從七人生捕之注進候條前代未聞之功名感入候則補木實山之城主者也仍如件曆應元年八月十七日直義墨判、河津伊豆入道殿、云云其後秋月附ニ屬無後大友氏一之處中國毛利氏於ニ天文合戰一依ル得ル志遣ニ使於九州一招ニ國士等一於ル是秋月文種背ニ大友家一竊附ニ屬毛利氏一、大友義鎭聞ル之大怒弘治二年七月七日遣ニ軍將戸次丹後守鑑連・臼杵越中守鑑速・高橋三河守鑑種等一

古所城戰

以二二万餘騎一攻二夜須郡古所城一與二秋月文種一終日合戰、文種戰負籠二秋月城邑一、〔四國太平記二卷〕に秋月が郎等古野四郎右衛門文種之子三人爲二家臣一大橋豊後子一降參自二城主君文種を討て豊後ノ陣に降參す此時種實九才、（宗像文書三二）中一遁出、三子者秋月種實・高橋種冬・長野種信是也、就二今度秋月御成敗一鍋壽方別而可レ有二馳走一之由以二神裁一承候之條則至二御座所一令二注進一候定而直可レ被レ成二御感一候此節文種被レ加二御誅伐一候事鍋壽方永々御案堵之基候之間可レ被レ盡二粉骨一事、無二申迄一候然者近々於二秋月宅所一可二取懸一覺悟候、發向之砌、火之色次第不レ移二時日一被二懸出一可レ被二相動一事專要候、聊不レ可レ有二油斷之儀一候恐々謹言六月五日寺内治部丞殿・藤入道殿・寺内備後守殿、鑑續・長增鑑生、（この文書弘治三年の書なり宗像郡田島の神祠にあり、）

雨生橋山戰

永祿十年七月左兵衛尉種實在二藝州一之間賴二毛利氏一引二率二千餘人一入二本國夜須郡一、因レ之大友氏又命二三將一以二二万餘騎一攻二種實一、於二雨生橋山一合戰、〔隱德太平記六十八卷〕に天正十年大友氏臼杵中務少輔に三萬餘騎をそへ秋月に押寄、種實士卒多く討れ勢盡て討死ときはめ終夜いとまごひのさかもりしてなごりを惜み、さて九十余人を前後に立て花やかに出立てすでに中務が本陣に切入んとする時、芥田六兵衛とて十六歳の若武者、謀ありとて種實をとゞめ兩陣矢どめを乞ひ、自もてる刀劍をすて中務殿に申すべきとありとて敵陣に入り、種實より内證の使なりとて近習を除けさせ馬よりおるべきとなゝむ、中務中年なる者なりと見て馬より下て、いかなる使ぞと問ふ時に芥田元より大力なれは中務を引伏其短刀を取て首をかき山中に遁入る云々、豊後勢大にくづる種實芥田が功に感して感狀を出すとてうれしさのあまりに芥田惡六兵衛とぞかきけるよし、〔戸次軍談〕に八月十四日とあり、

芥田六兵衛

庄山ノ陣

秋月退籠二城邑一、三將又破二秋月城邑一、種實又移二于古處山ノ城一、然處中國勢渡海之由依レ有二風聞一寄手引レ陣、九月三日種實掛二庄山一陣於夜討一大破二豊後勢一討二取利光兵庫助一其外豊後勢多戰死、自レ是種實漸强大至二天正年中一於二筑前筑後豊前三ケ國ノ内一領二夜須・下座・上座・嘉摩・穗波・御井・三原・生葉・企救・田河十一郡一與二島津氏一合レ力濫二妨國中一、至二天正十五年秀吉公九州征伐之時一以二名器猶柴碾茶壺一献二秀吉公一而乞二降參一、秀吉於二日州内一賜二采地一、依レ之種實移二于日州財部一其子孫至レ今などあり、かくて郡ノ大樣は〔神名式〕に夜須郡一座、〔和名抄〕に夜須郡、中屋・馬田・賀美・雲提・川島・栗田（已上六郷なり、）〔寛知集〕に夜須郡四十四村、〔元祿記〕に夜須郡高三万七千四百八十一石四斗八升八夕、〔舊記〕に夜須郡高山、砥上山・古所山、夜須郡古城、山隈山・栗林・小鷹・阿彌陀峯・彌長・皷岳・片山・千手・杉本・豊後國日田郡・當國秋月・博多爲二諸方往還之要路一故隣國近郷之商賈集二會此所一毎月九度万物鬻レ市上旬二日四日七日中旬下旬準レ之、自二博多一八里、西ノ町口有二大河一自二秋月江川一流入二筑後堺之川一云云とあり、此郡南方筑後國にとなり、東南は下座郡にとなり、東北は山を隔て嘉摩穗波二郡につゞき西北は御笠郡にとなりて、境内に山川あり土地肥沃にして米穀多し、夜須郡彌長村に小鷹ノ古城としてあり楢原備後守高利此城を築て住す其子楢原刑部少輔秋月ノ家臣と成て城は秋月の出城とす内田普兵衛と云者城番たり、又深江伯耆守が居城のことも此村にあり、さて下淵村に皷岳ノ城と云もあり是も大友旗下の城なりと云、又片山村にも秋月の端城あり秋月ノ家老福武美濃入道在城せり千手村の古城も此人守れり、

天正秋月領

秋月轄封

大樣

郷村石高

甘木町

甘木市

小鷹城

皷岳城

片山城

○秋月

秋月大守　秋月殿　名義　秋月次郎　兵衛　秋月備前守　古所城　里城　枝城　秋月氏祖　大蔵六家　秋月文種　大友入寇　秋月落城　秋月種實　秀吉四征　秋月没收　杉本城　秋月藩

〔海東諸國記〕に成直己丑年遣レ使來朝書稱二筑前州聽政所秋月一太守源成直一以二宗貞國請一接待大友殿管下稱二秋月殿一有二武才一とあり、秋月は阿岐豆支と訓ムべし、〔和名抄九卷〕に阿波國阿波郡秋月、安木郡木と云もあり、名義いまだ考へず、阿波ノ國ノ秋月より移れる名にてもあらむか、さて〔太平記九卷〕元亨三年五月六波羅自殺ノ人々に秋月次郎兵衛、〔同書十六卷〕建武三年卷除氏卿多々良浜合戦ノ件に秋月備前守、〔筑陽記十一卷〕に秋月古處山ノ古城秋月氏ノ根城也、山高谷幽翠嶺秀二衆山一北而有二八丁坂一西州往還道也凡國中第一之嶮路也、當城則秋月氏本城也里城者謂二荒平山一也枝城當郡千手・彌長・上座郡麻氏良・長尾・針目・三日月・國見・米ノ山・下座郡茄町・嘉摩郡益富穂波郡笠木・豊前國岩石已上十二箇所也秋月氏者大藏姓也家傳云後漢ノ光武帝之末葉阿多倍王日本孝德天皇大化年中來朝云云　第二貴重王始爲二大藏姓一其子孫分爲二六家一原田・秋月・波多江・高橋等也、天文ノ比秋月長門守文種爲二豊後大友義鎮幕下一然及二弘治年中一叛二大友一義鎮以二多勢一攻レ之城卒若干戰死文種力盡呼二家臣大橋豊後守一以二計略一幼息三人可レ助レ命之由遺言而自殺因レ茲大橋求レ緣爲二降人一幼息三人僞爲二己子一彌レ忠養育、天正比秋月種實・高橋種冬・長野種信顯二其名於九州一種實歸住二當城一、秀吉公西國征伐之時頼二要害一不レ從二嚴命一故以二大軍一圍レ城種實及息種長共悔二先非一降參因放二當領一於二日向國一給二三万石之地一、杉本の古城は上秋月村にあり是種實の城是なり、又秋月家臣坂田氏代々居りし城と云ものも上秋月にあり、などあり、又〔武鑑〕に黒田甲斐守某柳間朝散太夫五万石居城筑前

黒田長興入口　祭神縁起　大神明神所在　祭事社領造替

夜須郡秋月江戸より海陸二百八十八里、慶長五年「黒田氏代々領レ之とあり、長政朝臣ノ御次男甲斐守源長興君初て秋月に移り、給へ山林景色うるはしく薪水の便よろしき處なり此處に入口四ッあり北は八丁口四は長谷山口南は湯ノ浦口東は野鳥口なり、西なる山は觀音山と此山にて隠したれば外よりは見えず、

○於保奈牟智ノ神ノ社

〔延喜式〕に夜須郡於保奈牟智神社一座小とあり、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國大巳貴神社在二夜須郡彌永村一祭神一座大巳貴尊即三輪大明神相殿東天照大神西春日明神〔和爾雅〕ノ文亦如レ上なり、所祭之神とあり、さて〔神功皇后紀〕に元年秋九月己卯令二諸國一集二船舶一練二兵甲一時軍卒難レ集皇后曰必神心焉則立二大三輪社一以奉二刀矛一矣軍衆自聚、〔當足按〕ずるに〔扶桑略記〕〔宋書〕安元二年七月十六日ノ大臣宣下に安樂寺鼎方銅鈴十出來事令二諸造勘申一云云とあるも皇后の造らせ給へりし刀矛のうちにてもあるべし、また〔釋紀〕に筑前國風土記云氣長足姫尊欲レ伐二新羅一整二理軍士一發行之間道中逃亡、占二求其由一即有二祟神一名曰二大三輪神一所以樹二此神社一遂平二新羅一とある則是神なり、〔貝原好古〕云夜須郡彌長村大神ノ神社今は大神大明神と號す、御社は村ノ東小高き處に在イ南に向へり、九月二十三日に祭禮あり、領主より神領六石を寄附し給へり、神官松本氏代々祭をつかさどれり、〔筑前神社志〕に皇后より後に嵯峨天皇弘仁二年勅願有て御建立あり其後六百六十一年を經て後土御門院文明三年勅願として御建立あり其間數度造替ありといへども詳ならず傳はれる緣起記錄類は天正年中兵火に

かゝりて盡く燒失す天正十五年より九十六年の間かり殿に居ましける寛文十二年石鳥居建立祭禮神幸の儀式同十三年に再興す本社貞享四年改造す拜殿は元祿五年建立同六年社領少黑田甲斐守寄附し給へり、（神職松本氏先祖より寶永二年まで六十二代相續せり）

○荷持田ノ村（ヒリタ）

〔神功皇后紀〕に元年（仲哀九年）春二月云云　荷持田村（荷持此云二能登利一）有二羽白熊鷲者一其爲レ人强健、亦身有レ翼、能飛以高翔、是以不レ從二皇命一毎略二盜人民一云云とあり、〔八幡本紀二卷〕に夜須郡野鳥村あり其村の上に古處山とてあり又は白髮岳ともいふ嶮難奇絶の高山なり近世秋月氏城をかまへし所なり是則羽白熊鷲が住し所といひ傳へたり、荷持は稻を運ぶ時のさまに因て負せたるべし、吾里人のしわざに稻のうれたる比田所に至て其田の稻の把數いかばかりあるべしと云事を大よそに量るをノドリといふなり此事能荷持（ノトリ）の發にあたれり、さて〔貝原翁云〕今夜須郡野鳥村あり此外にも荷取と云處上秋月村にあり（枝村なり）今ハニドリと唱ふるなりまたホナミ郡大分村にも荷取（ノトリ）と云處上下の村あり、

○松ノ峽ノ宮（マツヤ　ミヤ）

〔神功皇后紀〕に元年（仲哀九年）三月云云皇后欲レ擊二熊鷲一而自二楯日宮一遷二于松峽宮一とあり、松峽は万都乃乎と訓べし、名義は山ノ峽（ヤチ）に松の生たる地にて負せたるべし、〔延喜式〕に山城國葛野郡松尾神社とあるなども山のふもとにあるなり、〔貝原好古云〕松峽宮の趾は夜須郡栗田村に在り其山中に今も松ノ峽と云所あり、又其處に皇后の御陣所と云傳る處あり、此處に皇后ノ社もあり、其間の上の山を目くばり山といふ皇后此山に登て四方を見めぐらし給ひし故に此名ありといふ、

○安野（ヤスノ）

白髮岳名義所在

名義所在松峽皇后社目配山

所在七板原福島小田四三島

名義

名義米多國

〔萬葉集四卷〕に神龜五年戊辰贈二大貳丹比縣守卿一任民部卿一歌一首、太宰帥大伴卿

爲君醸之待酒安野爾獨哉將飲友無二思手（キミガタメカミシマチザケヤスノニヒトリヤノマムトモナシニシテ）

安野は夜須能奴と訓べし、名義は初に云り、さて〔貝原翁云〕夜須郡安野は東小田村・四三島村・鷹場村此三村の間七板原とて廣き野原あり方一里あり是安野なり、（方一里許の間には田畠なし其西北に東小田村の枝村福島と云あり、又福島の西北に東小田村あり是も安野のうちなり此外に田畠なし皆平なる野原なり、四三島の川は彌長より出て筑後のかたにながる、）

○中屋（ナカツヤ）

〔倭名抄〕に夜須郡中屋郷あり、中屋は那珂都也と訓べし、名義いまだ考へず、又按るに〔八幡本紀〕に夜須郡中屋（ナカツヤ）郷に祇上村あり、〔村老の說〕に昔神功皇后諸國の兵を此處に集め給ひし時中屋なりとの給ひしより中屋といふとあり、今も此郡に中屋郷あり、

○馬田（ウマダ）

〔倭名抄〕に夜須郡馬田郷あり、馬田は宇万多と訓べし、名義いまだ考へず、又おもふに〔國造本紀〕に筑紫米多國造とある米多は宋多の誤にてこゝの馬田を云かともおもひたりしかど肥前國三根郡米多といふ郷名もあれど馬田はなほウマタとよみてことなるべし、〔井澤氏云〕宋多國今筑前夜須郡馬田・下座郡馬田あり、郡に馬田村あり、

○賀美

名義　〔倭名抄〕に夜須郡賀美あり、賀美は珂味と訓ムべし、名義いまだ考へず、またおもふに上巻下の上の意にてもあるべし、播磨國多可ノ郡に賀美・郡珂・賀毋など云郡名もあり

所在　さて此郷地今は詳ならず、今も祇上と云村はあれどなほそれにはあらじ、

○雲提（ウナテ）

名義　〔倭名抄〕に夜須郡雲提あり、雲提は宇奈天と訓べし、大和國高市郡雲梯ノ宇奈天などもあり

所在　名義は溝（ウナテ）の意なるべし、溝をウナテといふは海手の意なるべし〔神功皇后紀〕に裂田ノ溝とあるを〔八雲御抄〕にさくたのうなてと見えたり、地理の事は今詳ならざれども必溝のある處なるべし、〔貝原翁云〕夜須郡綱長村の下より上鷹場の村際まで千餘間ある溝あり水の通る處なり昔上より下に水をひきて開田にそゝがんかたにほれりと云といへり、もしこのあたりなどにはあらぬか、

○川島（カハシマ）

刈島名義　〔倭名抄〕に夜須郡川島あり、郡の上田氏は一本刈島とあるよしいへりきされば川島は加波志万と訓べし、名義は川中島などのあるに依れるなるべし、刈島と假字をつけたり、此郡に畑島・四三島など云村名あり、又東小田村のうちに前福島といふ所もあり、此郷地今は詳ならず、

所在　○栗田（クリタ）

所在　〔倭名抄〕に夜須郡栗田あり、栗田は久利多と訓べし、名義いまだ考へず、さて此郡に今も栗田村あり、

○安長寺

所在　〔筑陽記十一巻〕に夜須郡甘木山安長寺在ニ八日町一臨濟宗承天寺之末寺也、遠江守安長開基之由稱レ之其時代不レ詳當處最初之梵室也、又云應長比圓鑑禪師開基境内有ニ地藏堂一靈佛也とあり、かさねて委く考ふべし、

○安養寺

緣起　〔洪鐘銘文〕に大日本筑前州秋月山勅證安養律寺洪鐘一箇云云（文を省く）正平念一年丙午五月日（朝緣比丘禪耀住持比丘堅固誌之）大工藤原國長・大檀越筑前守大藏朝臣種道とあり、此寺は夜須郡秋月に有しなるべし今詳ならず、（此洪鐘は背振山五戒坊にあり、高麗陣の時仁秀法印名護屋より取來たりと云鐘のわたり扇にて二尺二寸ありと云、）

○弘誓寺

緣起　〔栗田村經筒ノ銘文〕に弘誓寺安置如法妙蓮華經一部幷開結經各一卷願主仙高聖人右志爲自他法界、平等利益、頓證菩提、寛治三年己巳月日供養畢勸進僧慶源とあり、夜須郡栗田村の内に弘誓寺（クシヤウジ）と云處ありて家二三軒あり、寺は絶て傳はらず、

○栗田老松神社

所在　〔筑前神社志〕に夜須郡栗田村老松大明神、祭禮九月廿五日、相殿祭ニ紅梅一云云、〔社記略〕に天正六年十月秋月種真與ニ筑紫廣門一牒合攻ニ御笠郡岩屋城一之時放ニ火民家一至ニ城下一、又寄手引ニ退于太宰府一至ニ天滿宮之邊一放ニ火小屋一、於是天滿宮亦一時爲ニ灰燼一、社人勾當大怒曰吾今死爲ニ惡靈一及ニ秋月氏七代一可レ爲ニ祟言畢飛ニ入火中一死云云　種真恐レ之以ニ天神之御神體一奉レ移ニ于栗田村一以ニ同村寺家地五百石一寄ニ

所在　老松社

附之ニ招ニ集神人等ニ天正十九年國主小早川隆景造ニ立太宰府天滿宮ニ之時以ニ御神體ニ奉レ移ニ于太宰府ニ、其先十四年之間鎮ニ座寺家ニ依レ是以ニ假殿之地ニ爲ニ老松大明神ニ とあり、此老松ノ社は栗田村ノ内寺家と云所にあり、今に至りて祭田三畝村中より寄附せり、（すべて老松ノ社と云は菅公を祭れる處多し、さるに〔天滿宮託宣記〕を考ふるに老松と云は菅公のつかはせ給ひし人の名なるべきか、なほよく考ふべし、）

○下座郡

名義

〔延喜式〕に筑前國下座郡あり、〔和名抄〕に筑前國下座（下都安佐久良とあり、上野國那波郡朝倉ハ阿左久良などもあり、）名義詳ならず、或説に東に高山ある處の名にして朝闇の意なりとも云り、さて〔軍記略〕に云云 建武三年春菊池掃部助武俊爲ニ宮方ニ在ニ肥後國ニ之處少貳參ニ將軍方ニ之由聞レ之於ニ中路ニ欲レ討ニ散之ニ率ニ三千餘騎ニ馳ニ向于水城渡ニ小貳太郎不レ知ニ此事ニ取ニ乘小船七八艘ニ自先渡レ河時籠豐前守以下未レ渡之處菊池之兵三千餘騎自ニ三方ニ抑寄將レ追ニ込于河中ニ、時籠之兵百五十騎馳ニ入于敵陣ニ不レ殘戰死、少貳嚼レ臍云云 遂參ニ將軍方ニ とあり、さて郡ノ大樣は〔延喜神名式〕に下座郡美奈宜神社三座、〔和名抄〕に下座郡馬田（無萬多）青木（安乎木）鑿饗（久波多倍）三城（美都木）城邊（木乃倍）立石（多天之）〔寛知集〕に下座郡三十九村、〔古城記〕に下座郡休松・岩切山・茶臼山・小田、〔元祿記〕

大樣　郷村　古城

下座郡高一万八千九百三十三石六斗七升五合などあり、さて方位ノ事は西南ノ方筑後國にとなり東南ノ方は上座郡にとなり北は夜須郡に隣て東西廣く南北狹し、郡中に川流有て水ノ利多く肥饒の地なり、（千年川の流あれば長田村のあたり鵜をかひて魚をとるもの多し、筑前より出る船は上座の上寺山田、下座の長田のみなり長田より出す船ことさらに多し、筑後よりも所々より出て漁す、およそうぶねにて漁するところ上座郡把岐のわたりよりしも肩ノ瀬にいたる、肩の瀬といふは長田よりしもにあり、）

石高　長田鵜船

○美奈宜（ミナヤギ）ノ神ノ社

祭神

〔延喜式〕に下座郡美奈宜神社三座（名神大）〔三才圖八十卷〕に筑前國美奈岐神社在ニ下座郡林田村ノ祭神三座大已貴尊（東素盞嗚尊、西事代主命）〔和爾雅〕同レ是（但所祭之神との文字をいれたり）とあり、美奈宜は未那藝と訓ムべし、（〔和名抄〕に播磨國美奈木といふもあり、）さて此神の御名を美奈宜といふよしは地名によりておふせたてまつりたる物なり、さて地名を美奈宜といふ山は〔宗像神社の縁起〕に神功皇后此處に阿貝子（ミナ）を集メて城として熊鷲を欺キ亡ぼし給ひしに因りて蜷城（ミナキ）と云とあり、（〔東鑑七卷〕に三奈木三郎守直、〔九州軍記〕に三奈木彌平次などもあり、）〔三代實錄二卷〕に貞觀元年正月廿七日甲申奉レ授ニ筑前國從五位下美奈宜神從五位上ニ とあり、〔筑前神社志〕に美奈木村美奈宜神社は住吉大神・天照大神・春日大神を祭る後世に武内大臣を祭る、（〔式〕に三座とあるは住吉大神・天照大神・春日大神此神々を云へるなるべし、住吉は三神春日は四神ますなれども宗形神社を一座として祭れる例式などにも是彼ありされば妨ある事なし、又おもふに春日大神とあるは建布都神をさしていへるにてもあるべし其わけいかにといふに〔神功皇后紀〕に元年春二月云云先ノ日ニ敎ニ天皇ニ者何ノ神也願欲レ知ニ其名ヲ逮ニ于七日七夜ニ乃答曰神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴ノ宮ニ所レ居神ノ名ヘ撞賢木厳之御魂天疎向津媛命焉、亦問レ之除ニ此神ニ有ニ神乎答曰蟾萩穗出吾也於ニ尾田ノ吾田節之淡郡ニ所レ居之有也、問亦有耶答曰於レ天事代於レ虛事代玉籤入彦厳之事代神有レ之也また〔神名式〕に阿波國阿波郡建布都神社事

祭神

名義

位階

祭神

〔三座〕

所在社領　代主神社あり是らを照合せてしるべし、三韓御征伐の時從平神住吉三前ノ神をも穴門山田村又當國那珂郡に祭り給へば此三前の神たちの靈をも必祭給ふべきことなり、又大汝神の靈をも夜須ノ郡に祭り給へば此三前の神たちの靈をも必祭給ふべきことなり、此神初栗尾山に鎮座し給ふ其後美奈木村に移し奉る、古は社領五十餘町社人三十六人ありしと云秋月長門守より神領三十町寄附の狀に美奈宜神社とあり則神職宮原石見所持せり、

末社　嗔那尾大明神祭事　末社三宇大行事市杵島大明神・坂本社是なり、美奈宜社を嗔那尾大明神とも云鳥居ノ額に美奈宜神社とあり、祭禮古より今に至て九月十八日より同廿二日まで執行せり神輿神幸あり、美奈木村神官宮原氏是を勤む、又曰美奈木村に座す嗔那尾三座大明神始は美奈木村ノ内栗尾山に鎮座ましく〳〵しかども風雨烈しきによりて同山續き荷原の内に本宮より二町下て宮を改造ける然るに此處地形狹く御旅所の道も岨ければ又一町計下に新宮を造りて鎮座なし奉る、栗尾山の頂にも其礎今なほ殘れり、

造營

舊社ノ址

○惣天神社

林田神社社地　〔把木神社年中行事〕に林田惣天神社云云とあり、此社ノ事今は詳ならず、強て按ずる下座郡林田神社にても有むか林田ノ社は長田・八重津・德岡・上ノ畑・片延・鷗ノ木・林田八村の產沙神なり、昔は境内方九町有しと云今は田と成て廣からず古の惣門は上ノ畑村に在しと云今も其名殘れり社より三町ばかりに鳥居の立し趾あり、祭日は九月廿一日なり神輿上ノ畑村に渡御あり御休所は田ノ中にあり社より七丁あり、此社

祭事

所在　の事は〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國美奈岐神社在二下座郡林田村一祭神三座大已貴尊、東素盞嗚尊　四事代主命　又〔和爾雅〕の說も是に同じ、又貝原ノ翁も美奈宜ノ社事は林田方とも栗尾の方とも定めがたき由云はれしなり、

寺址　○帝釋寺

禮拜橋　〔舊記〕に花立山帝釋寺は下座郡荷原村にあり其寺亡びて今は地藏堂のみ殘れり、上座郡佐田佛谷に越る道にして彦山に通ふ道すぢなり、山下より嶺まて八丁ありなり、寺は斷ても古き所なれば村名に殘りて今にあり、禮拜なども是に同じ、此郡禮拜村に禮拜橋とて石橋あり是ハ教大師筑紫に下られし時夜須郡古所山に紫雲たなびきければ斜ならず喜悅して此橋ノ上にて一歩三禮して古所山に登りし由云傳へたり、

嶺に茶店あり是帝釋寺の跡なりといふ、筑後國をみおろす所にて風景よろしき處

○馬田

〔馬田郷〕　〔倭名抄〕に下座郡馬田無万多とあり、字万を無万とかくは中古の音便にて誤なり、

名義　郡なる馬田此處に混入したるにはあらぬか、

所在　○青木

〔倭名抄〕に下座郡青木安乎木とあり、名義は檍などの多く立りし處にて負せたるなるべし、檍は〔書紀〕に檍原とあるを〔古事記〕に阿波岐原とも見えて阿波岐の假字なるを又青木ともいふ例は〔續古今集〕に四の海や青木が原の□（シボヲ）よりあらはれ出し住吉の神、此郷地今は詳ならず、蓮田郡ノ内に青木村と云はあれども間に御笠郡を狹めれば是には

あらじ、

○鑿饗　所在

〔倭名抄〕に下座郡鑿饗久波倍とあり、名義地理ともに詳ならず強て按ずるに穗波郡阿恵と云村あり是に由ある事にてもあらむか、

○三城　所在

〔倭名抄〕に下座郡三城美都木とあり、されども今美都木と云ふ處ある事なし長田村の内に三城名義

〔ミツキ〕と云説もあれどふるき物などに見えたる事なければいかゞなり、今按ずるに美都木は美那木の誤ッにて今の美奈木村のあたりをすべていふ名なり、ミノキといふべきをミナギといふは水ノ門をミナトと云類なり、〔太平記〕に水城とあるも是なり、名義は〔宗像神社縁起〕文安元年ノ副本に云云皇后勅宣不レ討二熊襲一者可二煩多一可レ有二如何一勅須武内計天曰安久可レ亡術阿利以二磯良計一蜷十万石遠可二拾貢進一可レ被レ下レ勅也、于時磯良蒙二勅宣一海童神等遠語集天十万石之蜷遠一夜ノ中仁拾上畢其時以レ蜷高十丈之城遠築天其中仁奉レ入二皇后一以二和議詞一招二寄熊襲一曰皇后此内仁御座須速仁可二來臨一山遠申熊襲成レ喜城中仁入畢其時皇后城中遠逃出給天後蜷城類覆天熊襲遠討殺畢筑前州蜷城止申所是也とあり、さて〔東鑑七卷〕に三奈木三郎守直、〔九州軍記〕に三奈木彌平次、〔清原系圖〕に清原頼元大外記少納言備中守廉士貞治六年五月廿八日於二筑前國三奈木庄一卒七十八、〔蛙蠅抄〕志賀氏文書に弘安四年蒙古合戰勳功賞

三奈木三郎　三奈木庄

筑前國三奈木庄地頭預所兩職配分事一人豐後國志賀太郎泰朝法師田地五町下庄木部郷二圃九里・屋敷三ケ所六郎丸名ノ内畠地壹町成吉名ノ内右就孔子配分如レ此有レ限佛神事守二先例一不レ可レ有二懈怠一之狀如レ件正應元年十月三日沙彌判などあり、今も下座郡三奈木村あり國中第一の大村なり、

○城邊　下座條里

〔倭名抄〕に下座郡城邊水乃邊とあり、名義地理ともにいまだ詳ならず、

○立石　名義

〔倭名抄〕に下座郡立石多天之とあり、名義は石を立て物のしるしと爲しなどにて負せたるべし、タテハタ、セの意なり、地理の事今は詳ならず、嘉麻郡に立石（タテイハ）と云村はあれど地理いたく遠へれば是にはあらじ、

○水城ノ渡　所在

〔太平記十六卷〕に建武三年春ノ件菊池掃部助武俊は元來宮方にて肥後國に有けるが少貳が將軍方へ參ル由を聞て道にて討散さむと其勢三千餘騎にて水城ノ渡へ馳向ひける、水城（ミナギ）川は〔豐後風土記〕にも見えたる如く筑後・筑前の内を流れて海にいる川なり全く筑前の内を流るゝ所は御井川といふべし、少貳太郎は夢にも此事を知ずして小船七八艘に込乘て我身は先向ヒの岸に付く時籠豐前守以下は未レ越叩へて船を指戻す間を相待ける處に菊池が兵三千餘騎三方より推寄て河中へ追はめむとす時籠が兵百五十騎とても逃れぬ處なりと一途に思定めて菊池が大

水城川　御井川　水城合戰

勢の中に懸入て一人も殘らず討死す少武太郎は川向より是を見けれども大河を中に隔て舟ならでは渡るべき便もなければ徒に恃切たる一族若黨共を敵に取籠させける心中遣方無くして無念なる遂に船共近邊に見えざりければ忿を推へて將軍へぞ參りけるとあり、水城は三奈木と訓むべし、此河は三奈木郷の地にして當國下座郡と筑後國生葉郡との邊をながれて九州第一の大河なり廣さ六七十間或は八九十間に及べり、或説に水城渡は長田村の内に其跡ありと云へれどいかゞなり、このわたりにして大河とも稱すべきは此三奈木川をおきて外にある事なし、

長田ノ舊跡

○上座郡

〔延喜式〕に筑前國上座郡あり、上座は加美郡阿佐久良と訓ムべし、〔和名抄〕に筑前國下座、下都安佐久良上座淮、上とあり、さて〔元亨釋書一卷〕に齊明皇帝七年夏五月癸卯遷二都于筑紫朝倉一、〔文德實錄十卷〕に齊衡二年十一月癸丑筑前國奏言上座郡、大領外從七位上前田、市成理、郡年久、善政日聞、百姓同聲謂二之不煩一請假二外從五位下一積、効爲、眞從之、〔鎮西要略三卷〕に建武三年四月菊池武俊及秋月貞種相會築二城筑之上座一、仁木佐竹以二肥前筑後兵一伐、之不、克などあり、次に郡ノ大樣の事は〔延喜神名式〕に上座郡一座麻氏良布神社、〔和名抄〕に上座郡把伎波木壬生爾布廣瀨比呂勢祚田・長淵奈加布知何東・三島已上七郷なり〔寛知集〕に上座郡三十一村、〔元祿記〕に上座郡

前田市成

郷村大樣

高二万千二百五石七斗二升四夕、〔古城記〕に上座郡、麻氏良・志波・前隈山・三日月・長尾・鵜木山・米ノ山・烏嶽・高鼻・村上・松尾・塘山・針目・直竹山などあり、次に方位等ノ事は筑前東南ノ隅にして南は筑後國生葉・竹野二郡にとなり其間に千年川をへだつ東は豐後豐前にさかひ北は夜須郡に續き又山を隔て嘉摩郡にとなり西は下座郡に連て膏腴の地なり、深山幽谷有て美材を出し又大川有て川魚多し、

石高古城方位

麻氏良城

前隈城志波城東陣山城原鵜戰場城三日月城長尾城

鵜木城米山城烏嶽城高鼻城村上城松尾城塘山城座主城針目城眞竹城八並長者屋敷別所櫓現湯隈ノ隈大明神

〔古戰場記〕に麻氏良山の古城は山田村にあり麻氏良神社ある所則本丸なり隆景領主と成て仁保右衛門太夫隆庸を置る元和元年台命に依て波村の境内烏山の北五町斗にあり是秋月氏と大友方と合戰せし所なり、又久喜宮村ノ内に原鵜と云所あり是秋月氏の端城なり、又三日月の古城は池田村にあり城ノ形三日月に似たり秋月種實が取立し城にして城番には中願寺左近少監と云者をおけり、又長尾ノ古城は林田村にあり是も秋月種實のはし城にして木村甲斐同源太左衛門と云者を入置く木村氏端午の禮ひまに大友宗麟千五百人を遣はして此城をせむるに木村が妻自甲冑を帶し士卒を下知して大勢と戰ふ、又鵜ノ木山の古城は白木村にあり昔允玄菩木と云者在城せしと云、又烏岳の古城は林田村にあり長尾の出城なりといふ、高鼻の古城は花園山の上にあり城主詳かならず、又村上の古城は黑川村黑川と云所にあり城主詳かならず、又松尾の古城は小石原村にあり城主の住し城なりと云長政入國の後家臣中間六郎右衛門大友氏に攻られて此山に籠る故に座主城と云、又塘山城は古城ノ下にあり郡中の高山なり彦山の座主大友氏に攻られて此山に籠る故に座主城と云、又針目城は穗坂村にあり郡士白木玄菩允と云者在城せしと云、又烏岳の城は佐田村にあり郡士寶珠山遠江守居住せり是秋月氏の一族なり、又直竹城は寶珠山村にあり郡士寶珠山遠江守居住せり後に此城にあり後に郡士寶珠山遠江守居住せり是秋月氏の一族なり、又眞竹城は八並村にあり秋月氏の端城なり、又八並長者が宅の址なり今も其宅ノ趾より出す皆石となれり是は米能石と云神幸の行宮の址もあり十月十三日に祭あり昔此所に溫泉有しと云今は田と成れり其湯の出口といふ物田ノ中にあり其傍に湯ノ隈と云所あり、昔此所に湯隈大明神ノ社あり大巳貴命少彦名命を祭れるなるべし、其傍

湯隈石窟

に地藏佛あり、又湯隈の後の山ノ上に石窟ありてうちのひろさたゝみ十枚なしくべしおくに入る事七間ばかりあり、

名義　○麻氏良布神社

祭神　〔延喜式〕に上座郡一座小麻氏良布神社とあり、麻氏良布は末天羅不と訓べし、御

位階　名は地名に因て負せたるべし里人は左右瓦（マテラ）とかくなり、地名の義は麻は眞にて氏瓦布は照（テル）なのべたるなどにやさだかならず、〔社家の說〕に麻氏瓦布神社は伊弉諾尊を祭り日ノ神・月ノ神・素盞嗚・蛭子を相殿に祭ると云後世のさだめなるべし、さて〔三代實錄三十二卷〕に元慶元年九月廿五日癸亥授二筑前國從五位下眞天良布ノ神一從五位上、〔同卅六卷〕に元慶三年九月廿七日甲寅授二筑前國從五位下眞天良布神從五位上一誤字あるべし、〔同卅七卷〕に元慶四年六月三日乙酉授二筑前國從五位下眞天良布神正五位上一誤字あるべし、又天文四年太宰大貳大內伊豫介より寶幣奉りし時の寄進狀あり、〔九州平記〕に秋月種實上座郡麻氏瓦ノ城に三日逗留せし事見えたり、〔社家の說〕に伊弉

祭神　諾尊・日神・月神・素盞嗚尊・蛭兒を相殿に祭る、〔三才圖八十卷〕に筑前國麻氏良布神

所在　社在二上座郡山田麻氏良山一祭神一座伊弉諾尊相殿日神・月神・蛭兒・素盞嗚、和爾雅如上爾雅ノ文例は、神社を大字にしてその下を小字に書せり、〔神社志〕に一說に伊弉冊尊相殿に伊弉諾尊・齊明天皇・天智天皇・明日香

祭神　皇子、〔同書〕に麻氏良布神社古の社は頽破し雨露神床をおかしけるを當郡の司官鎌

麻氏瓦山　田氏昌生元祿年中神社拜殿鳥居等新に造營あり、〔貝原翁曰〕上座郡麻氏良布神社は山田村の內麻氏良山の上に在て南に向へり、祭神の事社家の說さまゝくなれどすべてうけがたし、只此山主となる神を祭るなるべし、麻氏良山は山田菱野の東志波山の西北にあり、此邊の諸山はいと高くして其形うる

朝倉宮

普門院

はし、社領なし、又曰〔西峯老人〕が筑前國朝倉神社といふは麻氏瓦布神社なる云なるべしといへるにつけて按るに齊明天皇筑紫に下給ひし時行宮を立んとて朝倉ノ社左右（マテ）瓦山上に改造りしにや、朝倉の宮趾より左右瓦山までの間近ければさもありぬべしされど未だ其是非をしらず、社地は古來より今の處なりといひ傳へたり、といはれき、今神官兩家あり一家は小野氏なり今一家は社僧なり普門院と云、

名義　○朝倉社

〔齊明天皇紀〕に七年筑紫行幸の件五月癸卯天皇遷二居朝倉橘廣庭宮一是時斬二除朝倉社木一而作二此宮一之故神忿壞レ殿云云、〔諸神根元抄下卷〕に朝倉神社筑紫日本書紀云天豐財重日足姬天皇六年幸二筑紫一七年五月遷二居朝倉橘廣庭宮一此時斬二除社木一而作二此宮一之故神神忿壞レ殿中見二鬼火一由レ是大舍人及諸近侍病死者衆、〔延喜式〕に土佐國土佐郡朝倉神社あるに因て此朝倉社も土佐ノ國の事にして筑前にあらずと云說もあれどそはひがごとなるよし委く次の齋庭ノ宮の件にわきまふべし、朝倉は阿佐久良と訓べし、地名に因れる御名なり、さて此神社は朝倉山の上に在しならん其跡詳ならず、〔西峯老人〕は朝倉神社は今の麻氏瓦布神社ならんといはれつれどあたれりともきこえず、強て按ずるに上座郡山田村惠蘇八幡宮是其初朝倉ノ社とも唱へしならむか、〔先哲ノ說〕に山田村惠蘇ノ宮は小高き處に在て南に向へり、上座郡中の惣社なり、九月十五日祭禮あり古は長淵村まで神幸の儀あり古毛村ノ內をべたの森と云處に神輿を休めし處とて猶大木二木殘れり又十一月十五日蜷祭とて長淵村蜷出ノ池より河蜷二ッを取て土器に盛て神前に備ふ蜷はひ出て土器のはしをめぐるめぐりやむ時に本殿に奉る、かゝる儀式も今は絕ぬ社僧ノ坊を朝倉山長安寺と云天台宗なり、朝闍寺なるべし、〔社家家ノ說〕に惠蘇宮は應神

惠蘇八幡所在

祭事

べた森

蜷出池

長安寺

齊明御陵　秋の田

天皇に齊明天皇・天智天皇を祭りて三座とせりと云、さて是を朝倉ノ宮ならむと云わけは朝倉關の跡と云も山田村ノ内惠蘇ノ宿にあり、又八幡宮ノ上なる山の傍に石塔有て里人は齊明天皇の御陵なりと云、（まことの御陵大和國高市郡にあり、）又〔里人の說〕に惠蘇ノ宿と志波との間に天智天皇の歌よみ給へりし處なりと云傳るあり是聊由有て聞ゆ、八幡天神など云御名を猥りに負する事後世に多き事なればあやしむべきにあらず、

所在祭事

○須川ノ大行事社

〔彥山三所權現ノ舊記〕に云云山麓有ニ七大行事社一云云とあり、〔筑前神社志〕に上座郡須川村に大行事ノ社あり、祭禮九月十四日なり、是朝倉ノ社なるべきかとあり、舊記地理神官等の事なほかさねてかむかふべし、

○橘廣庭宮（タチバナノヒロニハノミヤ）

齊明四征

〔齊明天皇紀〕に六年十二月庚寅天皇幸ニ于難波宮一、天皇方隨ニ福信所レ乞意一思レ幸ニ筑紫一將レ遣ニ救軍一而初幸レ斯脩ニ諸軍器一是歲欲レ爲ニ百濟一伐ニ新羅一乃勅ニ駿河國一造レ船已訖、挽ニ至績麻郊一之時、其船夜中無レ故、艫舳相返衆知ニ終敗一云云 七年春正月壬寅御船西征始就ニ于海路一甲辰御船到ニ于大伯海一云云庚戌御船泊ニ于伊豫熟田津石湯行宮一三月庚申御船還至ニ于娜大津（ナノオホツ）一居ニ于磐瀨行宮一天皇改レ此名曰ニ長津一（ナノオホツ）（は那珂郡博多の古名なり、磐瀨行宮は那珂郡岩戸河内御所ガ原をいふ、）五月癸卯天皇遷ニ居朝倉橘廣庭宮一、是時斬ニ除朝倉社ノ木一而作ニ此宮一之故神忿壞レ殿（元亨釋書二十一卷）に齊明帝七年夏五月癸卯遷ニ郡于筑紫ノ朝倉一（自注）に七年五月初九都ニ筑紫之朝倉一遷ニ宮于廣庭一（鎭西要畧一卷）に天智天皇初爲ニ大子一而相齊明行在朝倉喪窆祚木丸殿即其遺跡也、亦遷行在三笠郡居關刈豐更戒往來改非常禁議三韓軍事天皇制曰朝倉也木丸殿爾我居者名謂而往誰兒乎、又見レ中由レ是大倉人及諸近侍病死者衆、七月丁巳天皇崩ニ于朝倉ノ宮一、（備中國風土記）に皇極天皇六年大將軍蘇定方率ニ新羅軍一伐ニ百濟一遣レ使乞レ救天皇行ニ幸筑紫一將レ出ニ救兵一時天智天皇爲ニ皇太子一攝レ政、從ニ行路一宿ニ下道郡一見ニ一郷戶邑甚盛一天皇下詔試設ニ此郷ノ軍士一即得ニ勝兵二万人一、天皇大悅名ニ此邑一曰ニ二万ノ郷一後改曰ニ遲磨一其後天皇崩ニ於筑紫行宮一終不レ遣ニ此軍一、八月甲子朔皇太子奉レ徙ニ天皇喪一還至ニ磐瀨ノ宮一、是夕於ニ朝倉山上一有レ鬼着ニ大笠一臨ニ視喪儀一衆皆嗟怪、冬十月己巳天皇之喪歸就ニ于海一於レ是皇太子泊ニ於一所一哀ニ慕天皇一乃口號曰

三笠關

枳瀰我梅能姑哀之枳（キミガメノコヒシキ）胴羅（カラ）你婆底底威底（ヲネバテテウテ）、胴矩野姑悲武謀枳瀰我梅弘報梨（ムモキミガメチホリ）

名義

乙酉天皇之喪還泊ニ于難波一とあり、〔梅城錄〕に辛酉五月天皇遷ニ居于筑紫朝倉宮一、橘ノ廣庭は多知婆奈乃比呂爾波と訓ムべし、名義は橘樹のある處にて負せたるべし、（和名抄）に伊勢國越智郡立花（また温泉郡立花なども見えてくき地名なり、）廣庭は土地のさまに因て負せたるべし、（和名抄）に上座郡廣瀨（比呂勢などもあり、）さて〔新古今集〕に天智天皇（或人云此歌天智天皇の御代の調にあらずこは必宴宴の哥などにて天智天皇を題にてよめるなるべし、）

木丸殿

朝倉や木の丸殿に我居ればの名告をしつゝ行くは誰子ぞ

〔奥儀抄〕に出たるも是に同じ、〔梁塵秘抄〕なるは五ノ句行くやたれとあり（木の丸どのゝ事は〔奥儀抄〕に筑前國朝倉といふ處の山中に黑木の屋形を作りておはしましけるを木のまるどのといふ、丸木にてつくれるゆゑなり、）〔堀川百首〕に俊頼

橘の木の丸殿にかをる香は問ぬに名告物にぞ有ける

于娜大津　所在　宮野村　朝閣寺　所在　杷木郷　遠市里　志波

など此外も古歌に多くよめり、〔堀川百首〕雅經の哥に朝倉や木の丸殿に誰とへば秋をもなのる萩の上かぜ、〔同集〕に知家いたづらに何かなのりそ朝倉や木丸とのにおひぬ物から、〔夫木集〕に親隆、朝倉やとはぬになのるほとゝぎす木の丸どのに名をたてじとや、〔御集〕に後鳥羽院あさくらや水のまるどのにすむ月の光もなのるこゝちこそすれ、土御門院、時しもに鳥ぞなくなる朝倉の木の丸どのをうたふあけぼの〔さらしなの日記〕にあさくらやいまは雲井にきく物をなほきのまろがなのりをやするなども見えたり、さるたきのまろがなのりをするといふ事心得がたしきのまろと云事なり人の名としをもけれけむ、またあさくらやなめのみなとゝある古哥を此國の事なりとする說もあり、さる所この國にきこえず、こはかならず異所にてたづぬべきことなり、

此朝倉ノ宮は筑前の朝倉なる事は上に引る書の外に〔奥儀抄〕〔八雲御抄〕〔十訓抄〕〔藻鹽草〕等にも見えたり、みな筑前とあり、しかるを〔釋紀〕に齊明紀に至三于娜ノ大津とある一句を心得誤りて于娜（ウナ）を地名として伊豫國宇麻ノ郡の事なりと註せるによりて栖廣庭ノ宮を伊豫國越智郡なる立花とし朝倉ノ社を延喜式に土佐國土佐郡朝倉神社とある是なりと云說あれどこたびの行幸はむれと百濟を救ひ新羅をうつべき軍配のためなれば筑紫の朝倉をおいて物遠き土佐國の朝倉にいたり賜ふとせんはいかがなり此事は早く貝原ノ翁もわきまへおかれたり、〔先哲說〕に橘廣庭宮の跡は上座郡須川村の圃ノ中にあり里人も是を齊明天皇の行宮の跡なりと云傳へたり、其南方に廣平なる原あり昔は礎など多く殘れりしを田圃のさはりなればとて取捨たり今もすこしは殘れり、又日須川の隣村に宮野村と云もあり又これより北方近處に朝閣寺とて須川の枝村あり昔は朝閣寺と云寺あり しといふ其寺跡いまもいちしるし、

○把伎

〔延喜式〕に筑前國把伎驛あり、〔倭名抄〕に上座郡把伎（波木）とあり、名義いまだ考へず、さて今此郡池田村の内に把木と云處あり、〔貝原翁云〕上座郡林田・星丸・池田・德坂・久喜宮などのあたりをすべて今も杷木ノ郷といふなり、驛路の事はいまだ委くも考へず、重て按ずるに先哲ノ說に志波（把伎）ノ昔此處を遠市ノ里と云、後代に志波氏の人住りしに依て志波と號くと云、志波に町あり豐後國

普門院　圓滿寺　集雲庵　三原貞吉　香山淵　正金寺　鼈塚　名義　所在

日田郡に通ふ驛路なり本村もあり後に左右良（マヂラ）山あり前に千年川あり偏地には希有なる佳景なり、又志波村に廣大山普門院とて眞言宗ノ寺あり、本尊は十一面觀音にして行基ノ作なりと云傳へたり、此寺佛堂廣からずといへども其營作の精巧なる事國中第一なり、又此村に龍光山圓滿寺とて曹洞寺のあるは黑田長政公の家臣栗山備後利安如水公のために造れる寺なり、如水公長政公の位牌あり、又志波村ノ内烏山と云處に金烏山集雲庵と云禪寺ノ趾あり、開山は無方和尚と云此寺は三原彈正貞吉と云人創立せり此人筑後國三原郡を領じて大友氏の旗下なり、貞吉或時豐後に往むとて志波村の香山淵の邊を通りしに其時は此淵深かりしが折節鴛鴦ノ雌雄其淵に遊び泳ぎしを弓を取雄首を射切て軀ばかりなり、翅ノ内に去比射切たる雄ノ首を挾めり三原氏是を見て是を射るに其雌の坂村の圓山正金寺又筑後國南山是なり、此集雲庵及當郡穗翠觀音は圓滿寺に移し今もあり、筑後の南山と云は竹野郡上森山村にあり今も其蹟を南山といふなり、又云志波村ノ香山と云處の島ノ中に鼈塚と云もあり其處に香山淵ノ邊を通るに大鼈石上に脊をさらし居るを見て鉄砲にて打けるに此晴天俄に曇りて雨車軸を流す三時計にして雨漸く晴ぬ此邊ノ民家悉く崩れ又動目木（ドウメキ）の山上より二圓三圓の大水流れいづ香山淵も埋れて隆となる其夜田地川と成て處多く上座郡中にて三千石に及ぶ、彼鼈は日を經て筑後瀨ノ下に流到る、其後鼈ノ霊祟をなす由にて鼈を塚に納めて千部讀經を執行したりと云、

○隈崎（クマザキ）ノ驛

〔延喜式〕に筑前國隈崎ノ驛あり、隈崎は久万佐伎と訓ムべし、名義は土地のさまに因て負せたるべし、さて上座郡須川村の内に熊崎村あり是なるべし、道筋の事はいまだ委くも考へず（初には隈崎を蓙田郡月隈の事にはあらぬかともいへりしかど、そはなほわろかめり、）

○壬生

名義　〔倭名抄〕に上座郡壬生（爾布とあり、名義は壬生姓ノ人の住めりし處などにて負せたるべし〔肥前千栗ノ宮の蓄記〕に元正天皇之時肥前國養父郡司壬生春成云云と云事なども見へたり、されども今壬生と云地名は聞えず　嘉摩郡ノ内に仁保と云はあれどもなほそれにはあらじ、

仁保

○廣瀬

名義　〔倭名抄〕に上座郡廣瀬（比呂勢とあり、名義は川の瀨に由有て負せたるべし、大和國廣瀨郡廣瀨なども川のほとりなり、此郷地今は詳ならず　塔ノ瀨・市ノ瀨などいふ村は今もあり、

塔ノ瀨
市ノ瀨

○祚田

〔倭名抄〕に上座郡祚田とあり、〔上田百木云〕祚田は作田の誤か、〔常足按〕ずるに佐田の誤にてもあらむか上座郡佐田村あり深山幽谷の内なり、序にいふ佐田村に安部貞任ノ子孫と稱するものあり、〔或書〕に佐田村に安部貞任ノ子孫ありて貞任より後十三代を現人神に祝ひて木像十三あり、第十三を孫太郎冨當と云今の庄屋は其子孫なり、凡村中に安倍氏のもの十四家あり、又安倍氏の產沙神なりて松島大明神を祭る、貞任が子りうせんと云し人の墓と云もあり、安倍氏十二月除日こゝに流され來たりし故正月の用意なし、其子孫其例にならひて今に正月の年縄木を用ひずと云、さてこの佐田と云村は美奈木より三里山奥にあり、佐田の本村より一里おくに田代とて佐田の枝村あり佳景なり、

佐田村
貞任ノ裔
松島明神
田代村

○長淵

名義　〔倭名抄〕に上座郡長淵（奈加布知とあり、名義は字の如し、千年川の北に添ひたる地なればなり、今も上座郡長淵村あり、〔蛙蠅抄〕島津家文書に弘安四年蒙古合戰勳功賞筑前國早良郡七隈郷ノ地頭職配分ノ事云云　長淵ノ庄ノ内右就二孔子一配分如レ此云云正

應元年十月三日沙彌列とあり、

○木丸殿

黑木屋

〔奥儀抄〕に筑前國朝倉といふ處の山中に黑木の屋形を作りておはしましけるを木のまるどのといふ丸木にて作れる故なり、又〔新□□集〕に信實

いたづらに浪にゆらるゝなのりそのの木の丸殿にいかてうるゝまし

などあり廣庭宮を云なり〔十訓抄一卷〕に天智天皇世につゝしみ給ふ事ありて筑前國上座郡朝倉といふ所の山中に黑木の屋を造りておはしけるを木丸殿といふ丸木にて造る故なり今大嘗會の時黑木の屋とて北野の齋場所につくる彼時の例なり、民を煩はさず宮造も儉約なるべきといふ由なり云云、さてかの木の丸殿は用心なし給ひければ入來る人かならずなのりをしけり、朝倉や木の丸殿に我居れば名のりをしつゝゆくはたが子ぞ、是天智天皇の御歌なり是を民どもきゝとゞめてうたひ初めたりけるなり、その國々の風俗どもえらび給ひける時筑前國の風俗の曲にうたひけるを延喜帝神樂の歌どもくはくられけるにうたひそへられけるなり云云とあり、

名義
所在

○何束

〔倭名抄〕に上座郡何束とあり、いまだ詳ならず、何束はもし河東などを誤れるにはあらぬか、されど今此郡に河東といふ所もなければおぼつかなし、なほよくかむかふべし、

○三島（ミシマ）

〔倭名抄〕に上座郡三島とあり、三島は美志万と訓ベし越後國三島郡三島ノ美之萬なども見えたり　名義は御島の意にて島のある處なるべし、さて此郡古毛村の内に三島といふ處あり、

○朝倉山

〔齊明天皇紀〕に七年八月甲子朔皇太子奉レ徙二天皇喪一還至二磐瀨宮一是夕於二朝倉山上一有レ鬼著二大笠一臨二視喪儀一衆皆嗟怪、とあり、又古今六帖に

花ノ香をあらはにめでば柏衣朝倉山を折てかざゝん

〔千五百番歌合〕に西園寺入道公繼

郭公木の丸とのゝ雲井まで朝倉山のおもひでの聲

なほ此外にも多し、〔新□集〕に源中かどさしてあさくら山のまろどのは尋る人もあらじとぞおもふ、〔詠藻〕後成くも間よりよそにきくこそあはれなれあさくら山のうくひすのこゑ、〔名寄〕に能之問れども名のりてすぎぬほとゝぎすあさくら山のあけぼのにとふ人もなきなのりすらしも、〔夫木集〕に爲家さとわかぬなのりなれどもほとゝぎすあさくら山のたそかれのそら、〔山家集〕四行めづらしなあさくら山の雲井よりしたひ出たるあかほしのかげ、〔玉吟〕に家隆まだきより秋こそなのれたそがれにあさくら山のよそのまつかぜ、〔夫木集〕に匡房ほとゝぎすくもゐはるかになのればやあさくら山のよそになくらん、〔後鳥羽院御集〕になのるなりくもゐはるかにほとゝぎすあさくら山のたそがれのそら、などなほあるはほおきつ〔貝原翁云〕

朝倉山は麻氐良山より北惠蘇八幡宮山田村・菱野村・須川村らの上なる山を凡て朝倉山といふなり、

所在

○把木ノ神社

祭事

〔把木神社年中行事〕に正月元日御饌參升盛四本貳升盛十三本、菜八箇之内大魚筋引壹膾壹、齒固壹、柳子五結、參黑鳥壹、七郎殿饌壹升盛七本九郎殿饌壹升盛四本、小宮饌五合五合盛四本、壹升盛八本、二月廿七日祭口明座廿四日惣市座、廿五日神ノ子頭座廿六日檢森座右ノ祭者自二月廿三日至二三月朔一鎮祭也、四至ノ内不レ伐二生木生竹等一、以二漆器一不レ能レ食、饌潔齋最丁寧也、所レ謂四至東堺之谷、南ハ大河、西ハ蛇之谷、北之絲也、尙廿五日夜有二神樂一九番之壹番爲二夕月神一奏レ之貳番爲二布袋神一奏レ之三番爲二穗坂邑阿蘇宮一奏レ之四番爲二本社一奏レ之都合九番神樂奏終而神酒頂戴次有二墓目一廿七日弓鉾返閉行之、矢付社穗坂邮阿蘇宮夕月立、林田邑惣天神、久喜宮村山王宮、野津手八幡宮社内之末社等、上巳禊、端午、夏越祓、七月、名月、十月廿九日、十一月廿七日、餼齋同二月也引餅廿六日夜、御饌四本、御菜魚者煮柳ノ子五結盛日土器瓶子壹雙以上、春秋彼岸古來祭之、正月分參二月分神之子田壹町三段内四段御供料二月廿八日分於穗坂村參段二月廿九日於若市村壹段三月三日分於二六段田二壹段五月五日分於二八段田二壹段六月晦日林之内皆五段七月七日八月十五日分於二八段田二五段十月分十月田宮皆五段十一月分霜月田宮壹町春秋彼岸分於枯木迫參段宮ノ稼座田川崎參段當養田藤田壹段大宮司清行之木壹段中古神領百貳拾□百人秋月長門守大藏種實寄附とある

社領

所在

祭神

把木大明神ノ社は池田村ノ内把木と云處にありて把伎二所大明神と申す則把伎産沙神なり、祭神四座男神二座女神二座其内一神は御母神なりと云神號詳ならず把伎社大友宗麟が爲に燒れたりしを後に漸く興立して其形のみを存す、社は川に近し近年聊なる町なかたてり正月朔日初祭二月廿五日鎮齋古は二月廿三日より廿五日まてす べて音樂哥謠を禁ず今はしからず同月廿七日流鏑馬などあり昔は廿七日ノ祭に社前にして市をなす故に把伎ノ市と云然れども田圃ノ中にて種植ノ妨なればとていつの時にか有けむ久喜宮に移る近代栗山大膳志波ノ町を盛にせひとて久

祭事

把伎市

喜宮ノ市志波に移す依て志波ノ市をも把伎ノ市と云毎年二月廿五日より市立有て晦日に至る（廿七日殊に盛なり商人の仕廻成難ければ三月二日三日に至て市殘れり）又十月廿九日ノ祭十一月廿六日鎮齋（廿七日に至る）などあり（或説に把木神社年中行事と云物今は傳はらず今あるは寫本（ウツシマキ）なり今ノ本を古物なりとする説はひが事なりと云へり、）

所在

○久喜宮（クゲミヤ）ノ山王ノ社

祭事

〔上座郡久喜宮村山王社棟札〕に山王宮再興大檀越中務大輔大藏朝臣種照寛正五年甲申姑洗念八日筆者伊豆備中守照舜とあり、此山王社（初古賀村に在しを後世今ノ地に移せりと云、此社は久喜宮・若市・古賀・寒水四ヶ村の産沙神なり、大祭は九月十九日に行ふ、社は□の方に向ひて建り神官□□氏代々此神に奉仕す、古賀村の上野と云所に山王の舊跡と云物あり、

山王舊跡

○黒川大行事ノ社

所在

〔大行事社永祿六年ノ棟札〕に云云　祠官熊懐輝行・大願主尚山座主大納言有補大先願普天普地于堯舜無爲之功皇基次早固淵有堯之時韭山餘禹之日猥五風十雨黔主怜然而已專祈右保安願主奔命元辰星斗壽如代山華福均滄溟蒐子闌絲同於八千椿耳已願主乙石美濃守信昌とあり、此大行事ノ社は上座郡黒川村にありて彦山七大行事の一なり、社は□に向ひて立り、（先哲の説に江州坂本山王二十一社の内に大行事ノ社あり、是は高野雜尊を祭るよし慈鎮和尚の〔齋鎮奥記〕に出たり、）

○南林寺

〔洪鐘ノ銘〕に奉冶鑄鎮西筑前國上座縣醫王山洪鐘一口南林禪寺伏乞、皇風永扇、帝道遐昌、佛日增輝、法輪常轉、四恩普報、三月編（説之）三有、偏資法界、含情同圓、種智住持、比丘正泉、勸的正眞、信心願主、沙彌直奉加茂光、大工藤原左近衛將沙彌宗久、應永二十八年辛丑七月八日とあり、南林寺は上座郡宮野村ノ内八坂と云處に在て眞言宗なりしを後に曹洞宗となる、此寺は黒田甲斐守忠之公ノ時に至て志摩郡岐志村に移して十石ノ寺産を寄附し給へり、宮野村の方なるは南向にして今も谷ノ奥にあり始は大寺なりしと云、此寺佳景なり、〔位牌ノ銘〕に當山開基大檀主太宰都督少卿從五位下藤原頼尚本通大居士、當山開基大檀主藤左衛門尉後室賀茂御庵宗修大禪尼（うらに南林密寺五世現住豊翠建立、）また〔鰐口ノ銘〕に奉寄進鰐口八坂山南林寺藥師于時慶長九年六月八日播磨住人とあり、〔先哲ノ説〕に上座郡宮野村南林寺云云　八坂の入口に門あり昔の外門なり此門内に今は民家あり其内左右に僧房址多し今に庵ノ名殘れり、門を入て二丁許に橋あり其奥に石階あり是を登れば藥師堂に至る、其上に山王ノ社あり是は藥師堂よりも古しと云（堂のある處も社の境内なり、）藥師佛は傳敎大師の作にて秘佛なり、〔緣起〕に傳敎大師入唐の時難風に逢しかば歸朝の上七佛藥師を造て供養せむと誓ふ云云、其後大師朝廷に申て博多に下る白木山ノ木にて藥師の佛像を造り夢ノ告に任せて長淵に安置す則弘仁元年四月八日開基せり、藥師佛夢に告て曰我は南林にあり、

僧坊址

藥師堂

山王社

所在

緣起

名殘

僧仁能改宗

此故に寺號を南林寺とす、後に此寺の住僧仁能阿闍梨と云者慈本阿闍梨に寺務を讓與へむとするに慈本墮落するに依て仁能が弟の禪僧立翁宗本首座と云者元朝に入て七年居たりしが仁能が兩眼より血泪を流すと夢に見て仁能に對面す云云衆のすゝめに依て宗本首座此寺に住て禪家に改む、此時寺を八坂に引て佛殿を造總る則貞和二年四月八日事なり是より曹洞宗となる、〔緣起〕に武藏寺に藤監代と云者ありて此佛に祈て子をうむ其子鷲に取られて長淵の藥師の側なる大木のうへに來たりし事を云へり今是を略す、南林寺のこと志摩郡のうちにもいへるを考ふべし、

所在

○無量禪寺

〔臺座ノ銘文〕に謹奉造立寶壽山無量禪寺本尊阿彌陀如來檀那有祥住持比丘慶昌自作皆永正十二年乙亥二月九日記ノ旃とあり、此寺上座郡福井村にあり阿彌陀ノ像臺座ともに今に殘れり、

所在

○梅林庵

〔梅林庵觀音體中ノ銘文〕に建仁三年甲子正月廿三日平女太王部中子とあり、梅林庵は上座郡久喜宮村にありて本尊則觀音なり、

○原ノ山王宮

所在造替

〔師說〕に古賀村脇に久喜宮と云村あり、古賀ノ山王は宮だちあしく場所もあし、原ノ庄は古跡なり清淨の地なり殊に原の庄内は大藪なり、本社高尾高野ノ宮・若宮八幡宮・松尾宮などおはしませども原ノ庄のかたは今は人家もなし氏子もなし宮も破壞してかすかなれども崩れたる本社を脇へ直し古賀村より山王宮を移奉て今の如く大社をたてたりといふ是も古きことなるべし、社人ノ先祖は小江ノ社人熊瀧氏の分家なれば二三代以來吉田を氏とすと云り、是は山王宮に付る社人なり　若宮八幡・高尾高野の宮・松尾明神此三社は原ノ庄の御主產沙の御神なり、昔より九月十九日に御祭あり古賀村山王ノ社ノ御祭は二月初ノ申ノ日を用ふ、山王勸請の後は九月十九日に山王を祭る、本社今は氏子無れば參詣人なし、山王ノ氏子は古賀久喜宮なり毎年祭ノ頭と云者を立て神事を營む、さて本社は僅なる折垣の内に座せりしを再興して山王ノ傍に小社を建て是を崇敬し九月十九日山王宮と同く是を祭る、

祭典

所在祭神

○野津手八幡ノ社

〔把木ノ神社年中行事〕に野津手八幡宮云云　とあり野津手は乃都氏と訓ムべし、野津手は地名にして上座郡池田村ノ内にあり、〔先哲ノ說〕に上座郡林田村拜松と云處にあり初は星丸に鎭座有しと云、其境地ひくければ大山・池田・星丸・林田・益末・穗坂の產沙神なり、此邊把木大明神を尊む、此八幡宮も昔は大社なりしを豐後の大友氏

祭事　七度祭

に燒れて神寶重器皆なくなりしと云、其後再興せしかども昔の形計りにて年中七度の大祭も絶たり、七度祭と云は正月元日・二月初卯百手祭・三月三日桃花祭・八月十五日放生會・九月廿九日恒例大祭神幸・十月初卯祭・十一月初卯祭是なり、星丸村の田字に正月田・二月田・御供田等の名あり、昔の神官の跡十六家 池田・林田・益末・大山・皇丸五村に殘れり、七度祭日今も形計の式を行ふ（社前道傍に拜松と云松あり、昔此處より彦山の神を拜みたりと云、）

所在　祭神　名義　寶珠石　拜松　奥院

○岩屋權現社

〔寶珠山村岩屋權現棟札〕に德治年中云云とあり、寶珠山村岩屋三所權現は本村より一里許谷の奥にあり、〔先哲の說〕に岩屋權現は土俗彦山權現の母神なりと云、社の上に甚大なる圓岩あり其下に社あり故岩屋權現と云、宮造は南向なり社の下に拜殿あり横四間竪二間あり拜殿の内に寶珠石あり其周五圍高四尺許あり其上は苔を以て厚く是を掩へり其上よりつもれる尺右の如し、此寶珠石有に依て寶珠山村と云、其社頽破せしを慶長十一年長政公家臣中間六郎右衛門大江統胤建立せり其後寛永廿年忠之公家臣筑紫四郎右衛門藤原興門建立せり、末社七宇あり其内熊野權現の社は岩屋の石高處に在て奥の院と號す是又大石の下窟の中に社を立たり又住吉社あり其上の高處に大日堂・觀音堂・地藏堂所々にたてり何れも大岩の間にあり嶮岨にして登りがたし、昔は僧坊六區有しと云今は一區もなし、山伏此社の事を司る（此岩屋の邊稀に羚羊（ニク）出る事あり又社の下に本一ッにして枝七種の木あり、さて寶珠山村は郡の東南のはしに在て諸村よりいと奥深き處なり、谷の内長き事一里餘田地あり民屋所々にあり、左右の山形異所にかはりてうるはしく尤佳景なり）常足按ずるに三所權現と云は豐前國彦山の三所を祭れるなるべし彦山に近き處なり、

三所權現

○朝倉關

〔小侍從が歌〕に

名乘りして夜深く過ぎぬほとゝぎす我をゆるさぬ朝倉の關

とあり、〔先哲の說〕に上座郡山田村に惠蘇の宿とて小邑あり此處則朝倉の關の有し所なりと云傳ふ、又名乘の關とも云須川の邊に朝倉の宮木の丸殿の皇居ありし時には北に刈萱の關あり、南にも此朝倉の關有て非常を戒めさせ給ひしなるべし、又此邊惠蘇町の邊に隱家の森とてある是は此關にて名のらざりし者をば通さゞりける故此森に隱れたる由云傳へたり、

所在　惠蘇宿　名乘關　隱家森

○黑川

〔海東諸國記〕に俊幸（戊子年遣の使來朝書稱豐前彦山座主黑川院藤原朝臣俊幸以宗貞國請接侍大友殿管下居彦山有武才とあり、黑川は久呂加波と訓ぶべし（名義詳ならず白川・赤川・綠川などの類なるべきか）則上座郡黑川村なり、此村に黑川といふ川あり、此處昔は彦山の領地にして座主も暫く此地に居住せりと云、（座主坊の宅址は今御館といふ）又〔懷中抄〕に

黑川俊幸　名義　所在　御館

長安寺

黒川と人は見るらむ墨染の衣の袖にかゝる涙を
とあるも此黒川を云なるべし、

○朝鞍寺

〔安樂寺御領目錄〕に上座郡朝鞍寺領勝福寺免田雖ㇾ爲ニ當宮根本御領一御家人甲乙輩令ㇾ押ニ領之一とあり、昔こゝの朝倉神社の社僧ノ坊に朝倉山長安寺とて天台宗の寺院此郡の山田村にありしと云、いつの比に亡びたるにやすべてさだかなる事はしりがたし、

筑前之二十（夜須郡・下座郡・上座郡）終

名義
三笠
宗形堅牛
大藏氏系
原田氏系
武藤氏系

筑前之二十一

○御笠郡一

〔延喜式〕に筑前國御笠郡あり、〔倭名抄〕に筑前國御笠、美加佐とあり、名義は〔神功皇后紀〕に元年三月戊子（神功天皇元年）皇后欲ㇾ擊ニ熊鷲一而自ニ橿日宮一遷ニ于松峽宮一時飄風忽起御笠墮ㇾ風故時人號ニ其處一曰ニ御笠一也とあり、（御笠は中比に三笠と書ケりしを寛文四年五月台命に因て舊に從ふ）さて〔續紀四卷〕に和銅二年六月乙己筑前國御笠郡大領正七位下宗形部堅牛賜ニ益城連姓一、（武ヘ紀略カ）〔原田系圖〕に天慶年中大藏春實居ニ住御笠郡原田一改ニ名春種一、其子從五位下太宰貫首長門守大藏泰種・泰種子從五位上太宰大監兼壹岐守大藏種光・種光子大藏種弘・種弘子岩戸權頭大藏種資・種資子太宰大監大藏種雄（〔原田系圖〕に按ニ藩翰譜一以ニ種雄一爲ニ種直子一而秋月ノ祖一、又〔秋月系圖〕有ニ種直兄種堯一以爲ニ秋月祖一皆不ㇾ同也、）種藏種衡（初名種成）種衡子原田權頭大藏種雄・種雄子原田次郎大夫太宰少貳兼筑前守從五位下大藏種直云云、以ニ種直爲ニ平家一味之人一因ニ之鎌倉一云云、武藏國住人武藤小次郎資賴建久六年爲ニ鎮西奉行一來ニ于當國一（〔鎮西要略二卷〕に建久七年武藤小次郎資賴任太宰少貳補鎮西守護職而下向於太宰府且封前太宰少貳原田種直沒領、資賴爲鎮西守護亦奏朝任太宰少貳兼筑後守是所以貧數回勵功一也修太宰府城在府爲今年三十七歳、）其子太宰少貳武藤豐前守資能（法名覺惠）資能子太宰少ニ武藤筑後守經資（法名淨惠、〔鎮西要略三卷〕に正應二年少貳經資（淨惠）卒六十四盛經嗣六弟備中守資時（肥後三船）

三弟山井但馬守經時四弟阪本房除惡住二四王子一坂本五弟城經國六弟加茂貞資庶山田七引地貞賴（筑後）經資子太宰少武武藤筑後守盛經法名宗惠延慶元年正月廿五日小貳盛經卒二于鎌倉一（宗惠）盛經子太宰少二武藤筑後守貞經法名妙惠建武三年春迎二尊氏一將軍一合戰得二勝智山城一自殺・貞經子太宰少二武藤筑後守賴尚建武三年二月廿九日於二有利一賜二錦直垂一應安四年十二月廿四日卒法名梅溪本道又妙雲、賴尚子太宰少武武藤冬資永和元年八月廿六日於二肥前國飯村一戰死歳三十九歳法名天岸存覺、冬資姪太宰少武兼肥前守貞賴應永十一年六月廿日與二大內義弘一合戰討死行年三十歳法名怡雲妙惠、冬資ノ弟賴澄其子貞賴也、貞賴子太宰少武武藤滿貞永享五年八月十九日於二秋月城一自殺、云云於レ是國士多成二大友家之幕下一大友義鑑命二其一族一万田左京大夫親敦二男右馬助一令レ繼二筑後國高橋長種跡一號二之高橋參河守鑑種一弘治五年四月大友以二鑑種一爲二筑前代官一鑑種見二御笠郡寶滿之要害一築レ城移レ之又築二同郡岩屋城一以爲二端城一其後鑑種有レ故恨二大友家一、此事（九州軍記三卷）に見えたり、永祿十年春竊屬二毛利氏一大友聞二其由一大怒遣二三將一相二添數万兵一永祿十年七月七日令レ押二寄于御笠郡一先攻二落岩屋一次攻二寶滿一以爲二堅城一之間數月不レ降毛利又遣二軍兵一救二鑑種一毛利勢以レ爲二旅軍一不レ得レ利、永祿十二年十月毛利援兵退二于中國一於レ是鑑種開レ城降二參於大友家一此時大友以二鑑種一移二於豐前國小倉一又以二吉弘左近大夫鑑理二男彌七郎鎮理一爲二鑑種之嗣子一是號二高橋主膳鎮種一元龜元年賜二御笠一郡一爲二岩屋寶滿兩城之主一後剃髮號二紹運一與二糟屋郡立花城主戸次道雪一同於二大友

高橋鑑種

寶滿城
岩屋城

永祿十年大友入寇毛利援助

島津入寇

高尾山陣

家一爲二無二之忠臣一、天正十四年島津家之軍勢攻二落筑紫上野廣門一之後直押二寄于太宰府一之由風聞有レ之間、高橋紹運、自栖二籠于岩屋一以二二男彌七郎統益并內室一籠二置于寶滿一筑紫家族四郎右衛門・家臣帆足彈正已下悉從レ之、於レ是島津兵庫頭義弘・伊集院左衛門佐・佐野村兵部丞・伊勢長門守等陣二于太宰府高尾山一、於二相從國士一者肥後國宇土伯耆守行興・大津山河內守家門・城十郎太郎・託广長門守行重・赤星周防守・出田宮內少輔及山鹿・川尻・合志・小代・有藤・隈部等又於二筑後士一者問注所治部少輔鑑景・蒲池兵庫頭鎮廣・三池下總守鎮實・草野長門守鎮永・同圖書助親永・星野中務太輔吉實・同民部少輔吉兼・黑木兵庫頭家實・同四郎政實・及田尻・江島等又於二肥前國士一者高木右馬助・本莊伊賀守及熊代・馬堪・太田等也次龍造寺政家・同家治・相良宮內少輔・有馬修理大夫・松浦刑部太輔・并原田下野守・松浦郡草野中務少輔・畑三河守等有二故障一其身雖レ不二出陣一差二越家人一族等一之間太宰府寄二手及四五万人一於レ是秋月種實・同種長爲レ押二大友家後詰之勢一催二促旌下軍勢並筑後國住人江上伊賀守家種・豐前國住人高橋・城井・長野・千手・上原等之軍勢一在二陣于秋月一于レ時立花城主立花左近將監統虎以二家臣十時攝津守一爲レ使實父紹運可レ被レ籠二于寶滿要害一之由雖レ勸レ之、紹運決而不レ許因レ之統虎、家臣吉田右京・中斐勘解由・同新助・後藤五兵衛・西山織部・後藤太兵衛・并手七郎左衛門・星野源三郎・森善兵衛・星野出雲守・日高甚

紹運自殺

紹運塚

郷村

方位

一品親王

崇僧正

八部・青木九助・原田次郎兵衛・若杉藤九郎・泉原右京・本田左馬助・工藤彌兵衛・野村彌助・神志登彌三郎・麻生民部・竹迫五郎兵衛等之勇士三十許人遣レ之爲ニ岩屋之援兵一、七月十五日島津兵庫頭以ニ軍勢一指ニ向于有智山一而押ニ賓滿城一、以ニ總勢一取ニ圍岩屋城一、放ニ火矢一、多燒ニ城中家一、廿六日寄手雖レ攻ニ破岩屋之外郭一、城中兵引ニ籠于二三之丸一、堅固守レ之不レ降、剩前後討ニ取寄手一三千餘人、而城中所レ籠之士六百余人悉戰死、紹運亦自殺于レ時三十九歳也、廿八日島津勢與ニ有智山之寄手一合攻ニ落賓滿一、擒ニ紹運室及彌七郎統益一、放ニ火於陣屋一、餘煙懸ニ賓滿社堂坊舍一、山伏欲レ防レ火數十人爲ニ島津勢一被ニ討殺一云云、〔貝原翁云〕岩屋ノ城中にして討死せし人々の子孫今も筑後國柳川に在て毎年七月の精靈會には岩屋ノ城跡に燈籠をかけてなき跡をとぶらふ事なり紹運の骸を埋めし處とて岩屋の城跡に塚あり、さて郡ノ大樣は〔延喜式十卷〕神名式に御笠郡二座並大、〔和名抄九卷〕に御笠郡御笠・長岡・次田・大野、〔寛知集〕に御笠郡五十七村などあり、此郡東方夜須郡さかひ又山を隔て嘉摩郡にさかひ南ノ方は肥前國基肄郡又筑後國御原郡にさかひ西北は本國那珂郡又席田郡又山を隔て糟屋郡にさかひ土地肥饒にして人物多く薪材に乏しからず、〔青柳翁云〕元弘三年五月廿五日探題北條英時滅びしかば都督一品親王を太宰少貳入道妙恵原山に迎奉て九州ノ軍兵に寺門を守り宿直を勤仕せしめしとかや此都督一品親王は何レノ人なりしにや〔太平記〕〔鎮西要略〕等にも見えずされども此時太宰少貳より尙へたりし〔文書〕今も當國又筑後等にも往々殘れしば虛說にはあらざるべし怡土郡中村氏が所藏又筑後國荒木氏・横溝氏にもてる〔元弘三年六月七月文書〕に都督御下向或一品親王御ノ邸太宰府原山など有て妙恵ノ花押あり若は峰ノ僧正を九國の者等道從のあまりに都督あるひは一品親王など云へりしにや此僧正は後醍醐天皇の御外戚なる故に元弘の亂に北條高時九國に流し奉れり然るに建武三年の春鎌倉六波羅一時に亡びて筑紫の探題討れし後は北條方の者等俄に罪を恐れて前非をくひ此僧正にへつらひて降參し長門ノ探題も即ち謝したる趣〔太平記〕に見えたり、

尊氏原山ノ陣

遮猛神

筑紫君

位階

筑紫祠官

社領

さて建武三年尊氏卿京ノ軍に討まけて當國宗像に下向あり同三月二日多々良濱の合戰に菊池武後に討靜給ひて其夜は箱崎に陣し給ふ明れば三月三日下御所（直義朝臣なり）昨戰て原山まで來たられたり）より少貳が一族武藤豐前ノ次郎御使として將軍に御申有ける云々酉刻許に宰府原山に打登し時降參の人數雖せ集る是は尙粗が執申ス所なり當所に臨る光待奉ると云へども先令啓と申あり箱崎と宰府との間五里とぞ聞えし云々午ノ刻に將軍原山の坊に御着有て爾御所御對面有けり一昨日降參の者等を以御門の守護させられけるこそめでたけれ云々三月三日當山に來たり給ひ四月三日まで御滯留有て同日又都へぞ發進し給ひけるよし〔梅城錄〕に云三月十三日探題一色少輔太郎入道道猷・菊地武後以下蜂起す みゆ同四年九月十三日探題一色少輔太郎入道道猷・菊地武後以下蜂起す と聞て肥後ノ國へ發行せし時も當山に宿せし由聖の□書に見えたり、

○筑紫神社

〔延喜神名式十卷〕に御笠郡筑紫神社名神大とあり、さて〔筑後風土記〕に昔兩國之間山有ニ峻狹阪一云云 此界上有ニ麁猛神一往來之人半生半死、其數極多目曰ニ人命盡神一、于レ時筑紫君・肥君等占レ之今筑紫君等之祖甕依姬爲レ祝祭レ之自レ爾以降行路之人不レ被ニ神害一、〔三代實錄二卷〕に貞觀元年正月廿七日奉レ授ニ筑前國從五位下筑紫神從四位下一、〔同三十六卷〕に元慶三年六月八日授ニ筑前國從四位下筑紫神從四位上一、〔左承抄一卷〕に太政官符太宰府應レ補下任坐ニ筑前國一宗像宮大宮司正六位上宗像朝臣氏能事右得ニ神祇官貞元三年八月五日解一云云 以ニ當國住吉・香椎・筑紫・竈門・箱崎等宮一皆以ニ大宮司一爲ニ其所之貫首一、〔太宰府滿盛院古文書〕に三笠郡筑紫村之內侍島拾貳町事爲ニ天滿宮領一滿盛院被ニ相抱一處先年筑紫能登守爲ニ御味方一參上刻爲ニ名字地一上者可ニ領知一之由頻令ニ懇望一押而知行云云雖レ然能登守息又次郎敵方ニ令ニ歸着一條、彼地之事、如ニ前々一社家江還補畢、者御神役等無ニ懈怠一有ニ其沙汰一不レ可レ有ニ

所在
祭神

社納相違ノ狀如レ件、永正九壬□（年閏四）卯月十五日滿盛院江、平興長判　など見えたり、〔貝原翁ノ說〕に筑紫ノ神社は御笠郡筑紫村にあり（今は原田村ノ内なり原田・筑紫相並へり初は原田村も筑紫村の内なりき、）社は村ノ南の林ノ裡少し高キ所に在て南に向へり、祭神は五十猛ノ神なり、〔師說〕に〔書紀一書〕に初五十猛ノ神天降之時多將二樹種一而下然不下殖二韓地一盡以持歸遂始自二筑紫一凡大八洲國之內莫レ不二播殖而成二青山一焉所以稱二五十猛命一爲二有功之神一とあれば木山の東ノ麓なる筑紫ノ神社は元よりにて西ノ麓なる荒穗ノ神社にも五十猛ノ神を祭るならんと云れしなほ委しき事は〔肥前志一卷〕荒穗神社ノ件にも云ふ考べし、享德二年筑紫能登守經門・同左近將監俊門此社を造る由〔棟札〕に記せり近比に至て甚破壞したるを天和ノ初村民等御社を再興せり、石鳥居の額は元祿十四年貝原翁のもとめに依て花山ノ內府定誠公書給へりしなり、さて此社の神官は筑紫氏にして初は社邊に居たりしを後に兵革を業として天正ノ比武威を振ひし筑紫上野介廣門は此神官の後裔なり、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國筑紫神社在二御笠郡原田村一所レ祭之神一座五十猛命相殿祭二寶滿明神一〔筑前神社志〕に筑紫神社祭禮十一月初卯ノ日也於二其月一有二三卯一則以二中卯一祭レ之なども見えたり、文〔筑後志四卷〕に筑紫上野介藤原廣門入道宗濱は大職冠鎌足公の後胤にして藤太秀郷の末裔なり下野守尙門は少貳ノ一族にして筑前國御笠郡筑紫村を領じ筑紫を家ノ號とす其子秀門・其子正門・其子惟門・其子廣門なり天正年中惟門肥前國二上山の城より筑後國鷹取の城にうつれり、筑紫ノ社ある原田は肥前國田代に通る宿驛なり此驛ノ西九町に肥前筑前筑後三國ノ堺あり大道ノ東小山ノ上に在て三國堺と云ふ、

筑紫氏
緣起
祭事
筑紫廣門
原田驛
三國境
名義

○竈門神社

〔延喜式〕に御笠郡竈門神社（名神大）とあり、竈門は加萬度と訓べし、名義は地名に

求聞持堂
寶塔院
位階

よれるなり、延曆廿二年弘法大師登山して竈門山に雨を祈る此時にや弘法求聞持の法を執行せられし所とて福城の岩屋の上にあり則求聞持堂あり嵯峨天皇弘仁九年四月傳敎大師有智山寺の邊にして寶塔院をたつ是日本六所寶塔院の一ッなり、さて〔續後紀九卷〕に承和七年四月丙寅授二筑前國從五位下竈門神從五位下一（下ノ從は正か）〔文德實錄二卷〕に嘉祥三年冬十月辛亥筑前國竈門神從五位上、（從は上を誤か）〔三代實錄二卷〕に貞觀元年正月廿七日奉（筑前ト云コトヲ落タルベシ並ヲ考フベシ）レ授二正五位下竈門神從四位下一、〔百練抄五卷〕に長治二年六月二日諸卿定申太宰權帥季仲同意于八幡別當行清（光）射竈門社神輿一並殺二害日吉神人一事並竈門宮可レ爲二八幡末社一哉否事、十二月廿九日前太宰權帥季仲除名配二流周防國一緣坐之輩同流罪、云云（百錬抄嘉承元年ノ條考フベシ未詳）嘉承元年十一月三日竈門神授二正一位一、〔中右記〕に嘉承元年十一月三日辛卯竈門宮奉レ贈二正一位一（本位從一位）、〔神祇紀聞〕に堀川院嘉承元年十一月三日勅授竈門社正一位勅使太宰權帥匡房也とあり又有二別宣旨一仍位記請位記（中右記ニ）宣命今度宇佐之神祇官使正六位上伊伎宿禰義成爾被レ付云云、〔百練抄六卷（大山）〕に永曆元年十月十二日延曆寺大衆捧二日吉神輿一參レ洛訴二中太宰府竈門宮並安樂寺燒亡治部權少輔菅原貞衡合戰事一、〔新續古今集〕に筑前守にて國に侍りけるに日いたくてりければ雨の祈に竈門明神に鏡を奉るとてそへたり藤原經衡

竈門宮燒亡

雨ふれと祈るしるしの見えたらば水鏡ともおもふべきかな

九國總鎮守　寶滿大菩薩　伯母神　神威　馬蹄石　末社講堂

〔白河院應德二年官符〕に竈門山大神社九國總鎮守不レ混二諸社一故寄二附神領八十庄一宜レ懇二祈聖朝安寧一、〔八幡愚童訓〕に神功皇后二人の御妹まします一人は寶滿大菩薩一人は河上大明神云云、延喜年中八幡大神の託宣に吾穗波郡大分宮に移居の後三惡あり一には竈門宮は我伯母神にておはす然るに年中節會に府官已下國司參來る間愚暗輩あるは馬上ながらに遙拜しあるは笠を著ながら御前を渡る是恐ある事なり、（此外〔水鏡〕又〔叡山要記〕等に俗殿大師竈門山にて藥師佛を作て安置する事見えたりそは當郡有智山寺の件に引出て云べし、〔筑陽記十卷〕）に寶滿宮、西向也云云、社記云神功皇后爲レ征二三韓一詣二當山一時大神威光赫燿帶二甲冑一提戈御レ馬出二現岩上一云云其岩遺二蹄跡一是謂二馬蹄石一也、弘安四年蒙古二十四万人乘二艦四千艘一而襲來時當山形勢移二于荒津博多海一峩然如レ在二水中一賊船怖レ之不レ得レ着レ岸空漂二洋中一時自二宮中一大光飛散惱二賊兵一起二暴風一令二悉破二賊船一也應德二年五月九日官符云左辨官下二筑前一其略曰竈門山大神九州總鎮守不レ混二諸社一故寄二附社領八十庄一宜レ懇二祈聖朝安寧一矣、嘉承元年十一月三日勅二授竈門宮正一位一勅使太宰帥大江朝臣匡房、下向、云云社記云天永三年奉二官幣一宣命曰竈門大神波八幡大菩薩乃伯母本朝鎮守云云久安二年天變甚多於二當山一令二讀經修法一特寄二宸筆經卷一其上書云九州總鎮守寶滿大神云云諸堂・末社・講堂・神樂所・藥師堂・獅子宿・鐘樓・大田社・小田社・十社王子社・下宮・新宮・荒御神・兒宮・彥山社・熊野三所宮・若宮・

寶滿城　所在御笠山　祭神杨加院

太神宮・月讀宮・三十番神・風宮・宇瀰宮・內戶神・三十末社・戶外神三十末社・火燒明神社・痘守神社・天賦神社（天神也）地賦神社（地祇也）山司神社（ユスハルニアリ）米宮（已上〔社記〕の說なり）〔軍記〕略に寶滿要害燒失之後紹運在二城于岩屋一其後再二興寶滿一今度以二統益一令レ在二城于寶滿一自居二岩屋一納二一通願書於寶滿社一、願文曰奉レ請レ蒙二寶滿大菩薩擁護一而使子孫永坐歡喜殿之願書、夫以這大菩薩者本地十一面觀音菩薩而成二就佛果一出二現世間一焉大張二般若眞證一普照二六趣凡暗一威加二四海一德播二九州一矣往昔蒙古欲レ襲二日本一既至二筑前邦志摩郡一攻擊、戰伐小大、雖レ及二九度一因二大菩薩之神威一鬱敵忽退二散海外一矣是以聖天子叡二感神功所一高遠驚二天使一數賜二綸旨一以爲二筑前闔國之總社一也臣苟繼二箕裘業一崇敬奉レ事、蓋有レ年二于此一矣然去歲秋九月臣有レ事二於筑之後州一于レ時逆徒窺レ虛到二當山一使二神廟佛閣滅一于祝融之變一嗚呼天乎、是萬民所レ悲也臣從來不レ作二不善一不レ行二非道一唯救二民於塗炭一安二國於泰山一常爲二天下一臨レ危致レ命知二幾回一乎今所レ奉レ供願書本意者欲レ使信心氏子心地無二一枝之荊棘一壽山有二万歲之松椿一且武運長久子孫繁榮者也再拜再拜、敬白、天正十四年秋七月十日時之別當奉レ納レ焉源朝臣紹運、已上〔隆德太平記七十一卷〕の說なり、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國寶滿明神在二御笠郡竈門山上一（又名二寶滿山一又名二御笠山一）祭神一座玉依姬相殿（左神功皇后右應神天皇）別當山伏楞加院醍醐天皇延喜廿二年六月二十八日依二託宣一建、方二當國中央一以爲二鎮守一、〔筑

創建寶仲寺坊

前神社志」に竈門山に寺院を建初し時代は天武天皇ノ御代心蓮上人なり、建立の寺は竈門山寶仲寺と號して法相宗なり是則宮司ノ坊なり寶仲寺ノ坊舍廿五坊は山上に住す其坊號は平石坊・南ノ坊・東院坊・福壽坊・大聖坊・修藏坊・中谷坊・福泉坊・淨行坊・松林坊・淨善坊・井ノ本坊・道場坊・鳥居坊・新坊・尾崎坊・財德坊・伊多坊・龜石坊・奥ノ坊・西井坊・大谷坊・福藏坊・經藏坊・以上廿五坊なり、成道院は當山の無常院なり、〔貝原翁云〕

成道院

竈門神社は玉依姫を祭る、御社は山上なる大磐ノ上に乾ノ方に向てたてり、十月初午ノ日に大祭あり（内山村の東南の間ノ村ノ中に竈門神社の下宮あり昔は十一月十日に祭れりしを今は九月廿一日に祭あり）、文正元年十二月天下大に地震ふるに依て一國一所の祈禱を行はる筑前ノ國竈門にして行はる五色ノ綾五十端金五十兩を下ノ給ふ、弘長三年に至て大友宗麟社領を沒收し僧坊に課役をかくるに依て社僧大かた絶て僅廿五坊となる、（此坊は今も山上に住り）天正十五年國主毛利隆景此山ノ講堂にして權宮司重圓法印に謁して（重圓時八十余）米百石ヶ寄らる又神殿・拜殿・講堂・神樂堂・鐘樓・末社・右ノ鳥居等を造らる慶長二年に至て其功終る、元和四年國主長政朝臣二十五石ノ社領を寄附し給へり其後寛永十八年二月諸堂末社殘らず燒ヶ失せて古くより傳はれる寶器文書等皆なく成ぬ是に依て慶安年中に國主忠之朝臣造り給へり、神殿（二間半、拜殿（二間三間、其外諸堂備はる、其後元祿九年に至て國主綱政朝臣神領廿五石を寄附し給へり合せて五十石の神領は今に傳はれり、

寛永火災

祭神祭祀造營

社領

菅家傳記

○安樂寺天滿宮上

〔群書類從廿卷菅家御傳記〕に延喜元年正月廿五日任ニ太宰權ノ帥一罷ニ右大臣右近衛大將一依ニ左大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣時平公讒一也、二月二日如ニ筑紫ノ國一長男從五位上行右小辨高視・次從五位下行式部大丞景行・次藏人正六位上兼茂・次正六位下文章得業生淳茂等悉左ニ遷諸國一（菅公は天ノ穩日命ノ御子天ノ夷鳥ノ命十二世ノ孫出雲ノ國ノ造鵜濡渟ノ命の弟甘美乾（カマシカワ）飯根ノ命ノ子を野見ノ宿禰と云垂仁天皇ノ時本姓を改て土部（ハジ）臣と云野見宿禰三世ノ孫身臣の時土部ノ連ノ姓を賜へる是なり天武天皇ノ時に至て土部宿禰と云光仁天皇ノ時土部を改て菅原姓とす桓武天皇の時菅原ノ宿禰を改て朝臣と云菅公は參議從三位行刑部卿是善卿ノ三男にして母へ大伴氏なり清和陽成光孝宇多醍醐の五帝に仕へて右大臣に至り給へりなほ委しき事は〔御傳記〕をひらき見るべし、さて〔梅城錄〕に參議是善云々〔文集〕云會昌晨景淑獨遇〔南軒〕遊目俄有ニ兒娶ノ兒一弄ニ花于庭一肌肉玉雪、繡綉芳蕊、年幾五六歲、相公歎異問曰君家何許姓氏爲ニ〔盡〕兒曰小字無レ姓無レ家欲レ父ニ事相公一相公大喜抱入撫ニ育之一天才曉逸異ニ常童一見世ニ所レ傳〔聖廟記〕及〔菅家稿本〕無ニ作者ノ名一並云菅原院南庭有レ兒年幾五六歲許又云承和四年生又云貞觀八年年廿一ニ徒欲レ仲ニ其事一有ニ自語相違之雖一とあり、又〔十訓抄六卷〕に菅家昌泰三年九月十日の實に正三位の右大將にて內に侯はせけるに君へ宮ニ春秋二臣ハ潮老、恩無ニ遲岸一報猶遲とつくらせければ叡慮の餘りに御衣をぬぎてかづけさせ給ひしを□四年正月に本院のおとどの奏事不實に依て俄に太宰ノ權ノ帥にうつされ給ひしかばいかばかり世もうらめしく御歎も深かりけめども猶君臣の禮はわすれがたく魚水の契りも忍えずやおぼえさせ給ひけん都のかたみとて彼御衣を御身にそへられたりけりさて夫の年同日かくぞ詠ぜさせ給ひける去年今夜侍ニ清涼一秋思詩篇獨斷腸、恩賜ノ御衣今在レ此、捧持毎日拜ニ餘香一とあり、又〔日本〔未詳〕〕〔古今著聞集四卷〕また〔十九卷〕にも見えたれどこゝの趣に聊もかはる事なければ引いてずなん、〔日本記略一卷〕に醍醐天皇延喜元年正月廿五日諸陣警固帝御ニ南殿一以ニ右大臣從二位菅原朝臣一任ニ太宰權帥一云云　權帥子息等各左降、二月一日今日權帥向レ任、三年二月二十五日從二位太宰權帥菅原朝臣薨ニ於西府一、（年五十九）又〔二十三卷〕に昌泰四年辛酉正月廿五日右大臣菅原朝臣任ニ太宰權帥一坐レ事五十八、右近衛中將源善朝臣任ニ出（長案略記）

菅公祖

菅公幼時

左降

雲權守ニ左遷、依ニ件事一、同日宇多法皇馳ニ參内裡一、然左右諸陣警固不レ通、仍法皇敷ニ草座於陣頭侍從所西門一、向レ西終レ日御レ庭、左大辨紀朝臣長谷雄侍ニ門前陣一、火長以上不レ下ニ榻座一、晩景法皇還ニ御本院一、左降勅使左衛門佐藤原眞興左近走レ馬、近衛十人追送迄ニ攝津國一、於レ是眞興下ニ馬權帥之前一、零レ涙、已上 七月云云 又云候ニ帥菅原朝臣氣色及府使等一、大貳葛絃野（菅ノ息道風ノ父也）如ニ京下傳言一、其事甚不便也、令レ候ニ其氣色一、殊無爲帥又諸人云如レ此一、帥見ニ氣色一、殊示ニ弱體一、前日言意既似ニ理伏一、又仁和寺御言數有レ奉ニ承和故事一耳云云、已上〔御記〕延喜三年二月廿五日權帥菅原朝臣於ニ太宰府一薨、六十四、廿日前右大臣菅原朝臣詔賜ニ本職一、兼增ニ一階一云云、〔大鏡二卷〕に昌泰四年正月廿九日太宰ノ帥に云々おまへの梅ノ花を御覽じて、こちふかばとも君しがらみと成てとゞめよ、君がすむ宿の枊をゆく〳〵もかくるゝまでに歸り見しはや、所々に櫃のたつな見給ひて、夕されば野にも山にも立こめてふりなげきよりこそもえまさりけれ、又雲のたゞよふを御覽じて、山わかれとびゆく雲のかへり來るかげみる時ぞなほたのまるゝ、月のあかき夜、海ならずたゞよふ水の底までも澄き心は月ぞてらさむ、雨のふる日打ながめて、天（宋時）の下かわけるほどのなければやきてし濡衣ひる由もなき、三年二月廿五日薨ニ太宰府一、春秋五十九、道眞公所レ詠歌集曰ニ菅家御集一、有ニ一卷一、昌泰三年以至ニ神退一、所述詩文曰ニ菅家後集一、有ニ一卷一、〔菅家御傳記〕に安樂寺ノ學頭安修奏狀云太宰府安樂寺者贈大相國菅原道眞公喪葬之地十一面觀世音大菩薩靈應之處也、延喜五年八月十九日味酒安行依ニ神託一、立ニ神殿一、稱曰天滿大自在天神云云、〔扶桑略記□卷〕に延長三年四月廿日前右大臣菅原朝臣詔賜ニ本職一、兼增ニ一階一、昌泰四年正月廿五日宣命令レ燒ニ却

安樂寺草創

之一號ニ火雷天神一、火雷一本に大宮とあり、一云延長元年閏四月十一日贈ニ本左大臣一云云、〔元亨釋書十卷〕僧尊意傳に延長八年六月戸部尚書藤ノ清貫・尚書右中弁平ノ希世、二人於ニ清涼殿一、逢レ雷震死、皇帝恐怖、玉體不豫、乃移ニ常寧殿一、召レ意宿ニ禁中一、持念、初意在ニ叡山一、一日菅丞相化來語曰我已得ニ梵釋許與一、欲レ償ニ夙懇一、願師道力勿レ拒レ我也意曰然、然率土者皆王民也、我若承ニ皇詔一、何所レ避乎、菅作レ色、適薦ニ拓榴一、菅吐レ甫而起、化作レ焰坊戸煙騰、意結ニ瀉水印一、擬レ之、其火即滅、痕尙在焉、已而雷雨浹旬、鳴河大漲、人馬不レ通、於レ是乎詔レ意赴レ宮、意車到ニ河濱一、激浪止レ流、水不レ濕レ輪、意入レ宮持誦云云、〔梅城錄〕に〔元亨釋書〕神仙傳曰北野ノ天滿大自在天神者菅丞相之靈也、昌泰四年因ニ左僕射藤時平之讒一、左遷太宰府都督一而薨、未レ聲之先自裁レ疏訴ニ天帝一、故其靈奮激爲ニ威德天神一也、天慶四年八月有ニ沙門道賢一、借冥ニ見金峰山金剛藏王菩薩一、因問ニ天政威德天一、天將レ賢見ニ威德城一、其嚴麗不レ可レ言也、賢曰我是上人ノ本國菅丞相也、初利天帝釋レ我呼ニ日本太政威德天一、我主ニ國土一切疾病災難事一、今立ニ一誓一、遣ニ本邦一上人作ニ我形一、稱ニ我名一、殷懃尊重、我心擁護、また〔四季物語〕と云物に二月廿五日聖廟ノ御事やごとなき事なるべし、氏の公卿にかゝりて唐衣おりて北野ノ神ぞとは袖に持たる梅にてもしれ、心だにまことの道に叶ひなば祈ちずとても神や守らん云々と大かたうけがたき事なり今へ見ひなたに廣メんために學つゝ、また〔十訓抄七卷〕に延喜八年八月廿六日雷鳴おそろしかりける時清涼殿の坤の柱ノ上に神火出來てもえけるに大納言清貫卿上衣に火付て臥まろびおめきさけべども消ずや右中弁希世朝臣貞信公語り給ひけるに此天災にあたるよし貞信公は炎にむせびて悶絶す是茂朝臣弓を取て向ひれふすに此二人はよの常に佛法を輕じ故に天災に亡し紀ノ陸連は火にやけて死ぬ奴忠兼は故なく天の限りある天災なりけれど立所に法を信じころされぬ人は事故なかりけり貞信公は時平の弟に同意し給はず天神の御事を欺き給ひけり北方は當座に侍ひ給ひけれど云々兄に同意し給はず天神の御事を欺き給ひけり北方は當座に侍ひ給ひけれどいさゝかのわずらひおければ三年二月四日御託宣の記の中には我四行の時故貞信公の右大弁にて深く我せざりけりかゝれば正暦三年二月四日御託宣の記の中には我四行の時故貞信公の右大弁にて深く我遠行を歎きて更に兄の謀計に同ぜざりきたがひに消息の狀を通はし終懇を結き彼家の子孫は攝政たえずく朝家にみて吾たゝめ心ざしある躍を何ぞ守護せらんやとのせられたり實に時平公已下同意の公卿、定國卿根朝臣其末絶てきこえず時平公は延喜九年四月九日世九にして薨、御娘の女御其御孫東宮もうせ給ふ一男四日四十六にてうせ給ひき三男本院中納言敦忠卿天慶六年三月七日

靈異

北野天神草創婢文子託宣

太郎丸託宣

十八にてかくれ給ふ二男宮小路右大臣顯忠卿のみぞ深く天神に恐れて毎夜庭に出て天神を拜奉て事に於て儉を用ひけり大臣にて六年おはしけれど前駈をも召具し給はずかたの如く後車ばかりぞありける御料まゐるもをしきに取すべて物し給ひける日隙レ間に小桶に杓を具して水を入置て御手をすましけり其故にやあり けん右大臣左大將從二位かへて康保二年四月廿四日にぞ六十八にて失給ひにける正二位をば後に贈られけり但彼家の人なれども佛道にいる公遂は事なかりけり、又〔太平記十二卷〕に云々天德より天元まで三度禁裏に火災ありけるに又營作し給ふ時其柱に一首の蝕の哥あり、作るとも又もやけなむ菅原や棟の板間のおはん限りはとあるに又驚き給ひて一條ノ院より、〔群書類從廿卷菅家御傳記〕に天慶五年七月十二日正一位太政大臣を贈給ふ云々などあり、（西條者）

隆神右京七條坊婢文子託曰我嘗丞相之靈也欲レ居二右近馬場一可レ造二神殿一也其女賤而不レ能二營作一奉レ齋二家邊一、天暦九年三月十一日亦著二近江國比良神人種子年七歳一託曰我昔任二右大臣一先夢下松生二我身一而便折上是以我昇二三公官一又逢二左遷一既爾以（我）故欲レ居之地必當レ生レ松也一夜中松數千本生二北野一於是朝日寺最珍與二婢文子一戮レ力一レ心造二立神殿一、六月九日奉レ遷二神殿一、〔太平記十二卷〕に天慶九年近江國比良ノ社ノ爾宣神（ネギミヲ）ノ其種に託して云云大内の北野に千本の松一夜に生たりしかば〻〻に社壇をたて天滿大自在天神と齋奉て云云とも見えたり、〔扶桑略記六卷〕に天暦九年三月十二日酉時天滿天神託宣記云近江國比良ノ宮仁天禰宜神ノ良種加男太郎丸年七歳奈留童爾託天宣久、我可レ云事有リ良種等問介、我加像作女留乎、笏ハ我加昔持利之有、其乎令レ取與止仰給不、良種等申久、何處爾加候良牟、止答給久、我物ノ具止毛波此仁來住世之始皆納置利、佛舍利、玉帶銀造ノ太刀、尺鏡奈止毛有利、我從者爾、老松富部止云布者二人有利、笏ハ老松爾持世、佛舍利者、富部爾令レ持多利、是皆筑紫與利、我加共爾來禮留者止毛奈利、若宮之前爾、少之高支所爾、地下三尺入天有、此二人乃也門止毛波、甚不調乃者止毛曾、心門加比世與、我居多留左右爾置多禮波、不レ言止思止毛、笏二依天云布、此年來者、像毛無久有川禮者、不レ告之天有川留爾、老松波、久我爾隨天成奴留者也、是奈牟至所已止爾、松乃種波蒔介留、昔我大臣止在之時爾、夢爾松身爾生天、即折奴止奈牟見之者、流左留閉幾相奈利介利、松ハ我像乃物也、我瞋恚乃身止成多利、其瞋恚乃焔天爾滿太利、諸乃雷神鬼波皆我加從類止成天、物十万五千爾成太利、只我所行乃事波世界乃災難乃事也帝釋毛一向爾任給太利、其故波、不信者世爾多久成太利、疫病之事袁毛行閉止宣波、此我類袁奈牟、所々爾使爾天、令レ行留、今波只不信爾有牟人袁波、雷公電公等爾仰天、令二蹈殺一牟、惡瘡不レ吉物波有介留、汝等毛我爲爾不信奈良波子孫奈加良絶奈牟、止須留曾、阿波禮加久云計曾也、世界爾佗呂比悲不衆生袁見者、如何天文救牟止耳曾我思不、筑紫爾有之程仁、常爾佛天乎仰天、願志樣者、命終奈波、當世爾如レ我久慮外乃災爾遇牟人、總天佗悲牟者袁波、助救比、人乎沉損世牟者袁ハ糺身止生止願志袁、如レ思成多利、我敵波漸無成多利、今少有留、其波我乎切爾歸依須禮波、暫免太留奈利、我宮袁今年造留曾喜幾、甚面白所也止天、賀茂八幡比叡奈止毛常爾坐給留曾無レ便川留爾、伊止善、自餘乃神達毛、常來座奈利、加久禮天毛猶狹之、我宮乃體波、青松垣白砂乎地爾敷利、背爾波高山有、前爾波大濱、背ノ山波雷青山靈地止可レ云也、花ノ散春乃朝、葉ノ落秋乃夕、月

乃明久、風凉支時、憐風情之地也南大納言乃尙齒會波此月曾爲、加之此爾天、槐林乃枝乎攀天、韻袁作奈佐波也、我會爾波、音樂止論議止袁令ㇾ爲與、我近邊爾波、更宍鳥殺事奈世之女曾、嗔恚彌增天、灾乎與止思心起留、皆人ハ、賀茂八幡止耳云天、我等乎ハ不ㇾ屑左女利、我ハ憑人乎ハ守牟止思心深之津良幾一人曾有、筑紫爾天、我居所爾人乎遣天、祈願之人乃思叶奴止云毛近有止毛不向女利、又賀茂八幡止能美曾祈女留、何ノ神毛我乎波、衣押伏給ハ之、燒爾燒拂天牟小童部毛立出女利也去志月此若宮事世牟止天出留人爾被ㇾ障天還來留仍天可ㇾ申事有乎ハ端乃角乃邊爾未禮、若波坊城乃邊爾末禮、立依天申ㇾ未之止宜不、右近乃馬場許曾與宴乃地奈禮、我彼馬場乃邊仁移居多利、但至良牟所仁波可ㇾ生ㇾ松良種申久、已我身乃上爾可ㇾ有事、又天下仁可ㇾ有事仰給閉止申、我何事乎加波云牟、事可ㇾ有世間奈女利、汝等ハ何事加ハ有牟、天下乃事乎古曾事止ハ云閉、我世界爾有志間仁公事止毛勤天、佛ノ物乎奈牟多申止、多留、其中仁、天台乃堂寺燈分乎奈牟止ㇾ多利志、其罪總天深志天、自在乃身止成豆毛、苦事多加留乎、彼世仁此邊仁、法華三昧堂乎立天、大法螺乎毎時吹世奴、佐良波何ノ喜志加良牟、一大事乃因緣ハ、不可思議也我家仁波後集乃二句乎誦世志女與、離ノ家三四月止云句止、雁足將ㇾ黏疑ㇾ掛ㇾ帛止云句止乎誦世與、初後乃句乎振立天誦世牟波、何爾與有牟正宣、童覺奴、仍見聞ノ人相共爾記ㇾ之、〔梅城錄〕に〔村上天皇紀〕曰天

北野准太宰府事

德五年改元應和一以天德是火神號一也世傳云新造內裡之柱虫食卅一字一其歌曰、作倫又母昆計南莞原舍棟之板間ノ不ㇾ合限者、〔群書類從二十卷最鎭記文〕に官符太政官山城ノ國司應下准太宰府安樂寺例一以氏人令ㇾ領知北野寺事、右得正四位下行式部權大輔兼文章博士菅原ノ朝臣文時等去六月十日奏狀一你、謹案事情、安樂寺咏酒安行去延喜年中始所建立也安行死去之後、始自天德三年一以氏人解一言上於官補任寺司一年序漸久令仲北野寺者初則僧最珍狩朮宗造立、次復僧滿增修治朮宗滿增死去之後天延元年彼寺燒亡、檢校僧最珍重以造立矣合年忽有稱僧增日者、出來從滿僧ガ異父兄星川秋永之手一傳得寺印一自稱寺司一爰最珍者稱造立之功一增日者陳持印之由一分成二二類一諍論尤盛、望請殊蒙天裁一被ㇾ下宣旨一准安樂寺例一領知件寺一制止彼諍論一奉ㇾ令誓護國家一者大納言正三位源朝臣雅宣奉勅依請者國宣承知一依宣行符到奉行、從五位下守左少辨平朝臣正六位上行左少史御船宿貞元元年十一月七日〔古今著聞集一卷〕に小野宰相殿は天神四世の苗裔なり回融院の御侍讀として道の名譽ゆゝしくおはしましけり天元四年に太宰ノ大貳に任じて同五年九月に府に付て安樂寺を順禮し給ひけるに堂舍はありといへども塔婆いまだ見えず建立の願もとよりありける造營を始られけり聖廟よろこび思し召ける故に永觀二年六月日九日の御託云大貳ノ朝臣兼式部大輔事に希有爲二家ノ面目一大貳朝臣內外共末孫又存二信心一依ㇾ致二造塔寫ㇾ經之大願一我深ク信ジ回ノ謀合ノ當任一智位一他事一早ク遂二此願一致二合力一之人人現世後世ノ大願皆成就生々世々因果合ㇾ樂云云寺家別當松器自是を記す都督いよいよ信心を發して三年が內に多寶塔一基をたてゝ胎藏界の五佛を安し法華千部を納め奉る是を東の御堂となづく禪侶を置て不退の勤を致さる彼卿宰相ノ間寺家ノ佛事神事ノ儀式寺務の有ルべき次第など委く記し置れて三卷ノ書と名づけて寶藏にをさめて今に傳はれり秩滿の後都に歸り給ひて長德二年に參議に任じ寬弘六年十二月に八十五にて失給ひ其後神とあらはれて靈祠を廟堂の傍にひらけり万壽三年三月に贈正一位の加階にあづかり給へり、〔群書類從廿卷天滿宮託宣記〕に永觀二年六月廿九日戊申辰時以ニ爾

小野宰相修理

東ノ御座

永觀二年託宣

宜藤原長子ニ託宣曰我此砌下月來之間兩三僧侶種々修レ善、遞以出入黄昏錫杖之音日夜懺法之響念レ佛讀レ經天動地感、何況我及眷屬尤有ニ其益一、須以ニ件僧等一令レ述ニ陳之一而三摩耶形是皆釋衆若用此人可レ無ニ法滅一仍以ニ愚味女一輕々令レ言、何可レ求レ賢、不レ用ニ本心一之故也寺家別當取レ筆注レ之、我欲レ示ニ一事一云云我家子孫、遠近有レ員、内外無レ隔、漸經ニ數代一遞難ニ相知一歟、昔日依ニ讒言一放レ我之日大臣時平公・光卿・納言定國卿・菅根朝臣僞稱ニ勅宣一召ニ陰陽寮官人一宛ニ給種々珍寶一令ニ咒咀一我并子孫永絶不レ可ニ相續一之由神祭多送ニ日月一皇城八方占ニ山野一厭術埋ニ置雜寶一然而我不レ可レ絶之術隨分相構被レ指ニ姓名一之人皆以短命、又次々孫々、不レ高ニ官位一、家貧才乏、是依ニ厭術一也朝家政豈可レ然乎故高視・淳茂朝臣等、切々祈念云、子々孫々、家業不レ斷云々我爲レ思レ家、文殿書等、被空廢レ事、令レ遂ニ淳茂登省一及第次々在躬輔正令ニ相續一事、一向我加護力、每度成レ妨乎大貳朝臣兼式部大輔事又希有レ爲レ家有ニ面目一爲レ公無ニ法憲一、大貳朝臣内外共末孫又存、信心依レ發ニ造レ塔寫レ經之大願一、我深廻謀令レ赴ニ當任一、暫停ニ他事一早遂ニ此願一致ニ合力之人々現世後世之大願皆成一、生々世々之因果全熟我一時之間於ニ三界常住所一者濟度衆生界也此界普賢・文殊・觀音・地藏・四體菩薩遞來化度、我每日往詣ニ帝尺宮・閻羅王宮・自在天宮・五天竺國・大唐長安城并西明寺・青龍寺・新羅國祥武城・當州皇城并當府及諸國所々歸依 占別宮等也

我隨身伴黨十六萬八千八百餘人、總含レ恨背レ世、貴賤靈界、皆悉集來、但無レ理含恨之輩不ニ相共一、昔自ニ少年時一有ニ入レ唐之心一出身之後被レ任ニ大使一依レ有ニ本意一早欲レ渡レ海而副使長谷雄朝臣聊有ニ相語一、遲怠之間昇ニ大臣官一已以不レ遂、依ニ彼本執常在ニ唐家一、抑我是蒙ニ攝政之詔一成レ功之身、朝家レ定憲、何無ニ其賞一、只贈ニ一階一、大山之上、如レ加ニ一座一、我已負ニ無實事一之後、帝釋宮、召ニ鎮國明神一、被レ勸ニ糺之一、隨即種々災變、面々出來、公家不レ堪ニ其譴一、改レ元爲ニ延長一之日授ニ右大臣官一、彼左遷時文書皆燒失不レ可レ傳ニ後代一之詔明日□是依ニ無ニ罪所□一也彼詔作人、事旨不レ快、仍又天罰畢、愚人之甚、不レ得ニ其心一、被レ贈ニ太政大臣正一位一、今爲レ我無益而南山隱者等、皆大怪咎云定ニ無レ罪之由一可レ無ニ例賞一云云依レ有ニ先蹤一也曰無ニ事之益一云云仍所レ示也、我每レ向ニ皇城一燒亡度々、我更不レ屑而伴類中所成爲公常以嘲哢、令レ致ニ大費一、後々又不レ斷歟、上者崇道天皇、下者菅家小臣不レ去ニ帝尺宮一、愁緒難レ斷、昌泰二年正月三日、行ニ幸朱雀院一、太上天皇與ニ今上一合レ額言談、召レ我甚急、密々被レ仰ニ天下之政一、汝獨可ニ奏下一、改ニ先詔一如何、左大臣見ニ氣色一、出ニ陣外一、我返奏曰、上在ニ左大臣一先詔下畢、是極不便、有ニ大怨一歟云云、議定云、有レ召無ニ別事一、人成ニ奇怪一歟、可レ上レ詩、題以ニ春生柳眼中一、即被レ下畢、俄獻レ詩、此日例祿之上、兩帝皇、并皇宮各給ニ御衣一、衆人驚怪、榮耀無レ比、左大臣氣色頻異、當帝初產生給時、一時不レ去、男女

之役、獨成二其勤一、成人之後奉レ授二諱名敦仁兩字一、爲二皇太子一之日、依レ有二次第一、任二權大夫一、然而有二別勅一、官雜事獨進退、讓位之後、一向又同、延喜御後、皇胤不レ變、是只依二法皇深御契一、所二守護一也、但我心不レ安、仍安和帝王生而無レ益、今上乍レ居二其位一、已無二皇威一、只臣下之最也、度々去レ城、交二入人間一、不二是皇道一、我家末孫、立二朝廷一者、數少又無レ力也、大貳朝臣者、志至誠深、右中辨資忠朝臣者、其志雖レ淺頗存二精信一、能々可レ尋二家情一、爲紀朝臣者、似レ無二其信一、乍レ傳二家風一、不レ知二家志一、齡未レ長之前、努力努力、舊人皆有レ誠、今人更無レ信、彼舊人已不幸、今人何爲、幸與二不幸一、信與二不信一也、文時朝臣者、來訴已得レ理、我等申二請三箇條一事、爲レ我至要、府解言上、未聞二裁下一、資忠朝臣者不信也、重可二言上一、已無二公損一、何卿可レ妨、何辨可レ抑、又々可二相催一、我家末孫、出家入道者、一向可レ來二住我寺一、若不レ然者、過障難歟、遍空法師者、名利遙下、專爲レ我無レ信、不二來見一レ歸、途中愼畢、爲レ家之耻也、抑當土大災、是兵亂也、此事只忠信朝臣之所爲仰出敵人常爲二彼人一致二忿怒詞一、又發國中兵士、多令レ成二公損一、每レ聞二此由一、隣國又々不レ靜、依二一國亂一、成二他境謗一、各所二謀計一、已似二謀反一、府官可二諷諫一也、若不レ隨二制止一、早可二言上一也、忠信朝臣館中、所レ集之凶黨惡群、不レ可二勝計一、件不善輩云云　甚可二恐怖一□物府何不二糺行一乎遂人名美、是已犯人也、得二住國之身一、作二成長之便一、早可二糺行一、見大府不レ可二緩怠一、吉祥事、誰堪二力

正暦三年託宣

得二改作一、平氏中可レ有レ定、十月十七日悔過于レ今不レ怠、子孫不レ絶、只依二此誠一也、此寺傳彼風年來法華十講會、先祖代々思所皆隨、三寶觀悅、昧酒安行、大功人也、彼後胤、尤可レ賞之由可レ告、大貳一昨夕大怪、國司可レ愼、太府何無二用心一、不レ到二愼門一、只信以爲レ本者也、至二于公事一、告而無レ益、不レ可二披露一、此勤修諸僧可レ令二我歡喜一之由云云　本延久六年二月一日以二安樂寺別當圓梨本一寫畢、家本燒失之故也坊門大甫殿御自筆本也、茂才公補本也、又々仰云、不二他筆一、自書可レ告二大貳館一云云

正暦三年十二月四日御託宣禰宜藤原長子、今月早旦爾申云、依レ例天昨夜、御前爾候宿須、今曉寅時計乃夢中爾、廟君乃仰仁云、以レ汝傳仰倍木事有、不二罷去一、天可レ候志、但我一兩□他行奈利、其間御殿不レ開、天可候者、仍宮師淨洞法師爾仰爾天、如レ件爾御殿袁不明之天、例御供御燈等、戸外御簾乃前爾、令二奉供一、同三日乃夜半許爾、雷公大鳴天、降雨如レ泛志、其間電光如レ日爾志天、雷乃響振レ地布、奇怪怖畏不レ可二勝計一、然間爾御殿乃戸開奴、宮師等驚奇布、其後寅時計爾、禰宜長子託宣云寺司等可レ召者、即大宮司安倍近忠袁以御託宣乃旨袁令レ記牟、其仰爾、我家之末孫、輔正朝臣乃大貳仁任世利志時爾、公家爲レ令レ申爾、種々乃古事袁、仰示志支、是吾心非一、山々乃隱者賢人等乃所レ申之事、并爾封戸年分、可レ被レ加木事等也、而左右爾思慮志天、遂爾不二奏聞一、是彼朝臣乃已不レ信留奈利、然而爲二大貳一志時爾、我寺爾一基乃多寶塔袁造立天、千部乃法華經袁書寫志天、安置供養世留、其善無量也、國土袁鎮

護志、砂界袁利益須、此仁依天、彼朝臣乃不信不勘也、右大辨惟仲朝臣者我家乃門生也、肥後國司止有志間爾爲寺爾、頗有用意、玉名合志乃庄等事止毛、其志有者、又歸京乃時爾毛、奉幣志、東舞等袁奉供世、尤有信心木、其後毛猶有其志、仍天有加護、此人乃作詩乃中爾、輔正朝臣乃寺別當松壽爾寄多利志八韻乃詩和在厨子中、可求進志者、仍天忽爾分手天搜、求出天、御前爾進留、即令讀聞食天、父子相分隔遙界多留詞尤可憐志、何況肯乃事袁、有心牟人者、可相像志、我常爾昔袁思爾、其心不安、抑先年爾、所示乃隱者等乃所申、彼昌泰三年乃事乃元首波、朱雀院乃行幸日乃事等奈利、左右兩大臣袁以、共爾時乃政事袁令知太利、世人乃云、定天有妨牟加、院與主上、密議給天、一人袁欲止給志介利、爰對面良久天、忽余袁召依召天座袁立波、左大臣共爾立天、出氣色袁見太留爾似太利、余波御前爾參世利其事等被仰留、即奏云、極天不便奈留事奈利、不可然爾其旨詳爾奏爾、猶上藏可被用止奏畢、種々云云、仍即詩題袁可進者、群臣爾被下天作文袁令進牟、召乃旨爾依如是奈利、止臣下仁令知畢、仍左大臣還參須、然而彼事隔聞太利、依是天年內爾成謀天、明年爾遂左遷乃事有、天下騷動須、左遷乃後爾、彼朝臣波、獨身世乃政袁行天、官外記乃雜事詔書宣命官符宣旨毀舊天改正皆畢、其事爾同心乃人々等、幾乃程袁不經志天、皆悉死亡志、子孫各絶太利、適生波無益毛誰不知袁、我入滅乃後爾、清涼殿爾參志天、帝皇爾對面志天、具爾古事袁奏須留爾、合掌天、涙袁流給天、彼時乃事袁被宣留、然而臣下爾不令知、依無皇威奈利、彼隱者等申、當國乃風袁誰不知袁、官職乃生前爾不任、沒後爾贈之、延長元年乃詔云、左遷乃號袁停而爲本左大臣爾、彼時乃文書等、皆悉爾可燒失志、若殘留加牟人者、違勅乃罪爾可處木由等、其定明奈利、已爲本大臣、何無贈位乎我西行乃時爾、故貞信公波、右大辨爾天、深久我遠行袁歎天、更爾兄乃大臣乃謀計爾不同木、遙爾消息狀袁通天、專無隔心木、彼卿止我止、遂殷懃袁結比木、彼家乃子孫波、攝政不斷天、多久朝家爾滿多利、故入道攝政乃北野宮社爾被過多利志、甚所悅奈利、爲我有志留豈袁、何不守護哉、我朝袁保護給事波、是八幡大菩薩乃助給奈利、天下和平、神威繁多志、末世乃事、皆能可愼、我每日三度、帝釋天爾參詣天、愁訴乃後、頗自在乃身袁得多利、我心爾所思袁帝釋天、暗爾知給布、我若名袁損世志時爾、心中爾五言絶句袁思木

離家三四月、落涙百千行、万事皆如夢、時々仰彼蒼、

此句口外爾未出爾、帝釋天知之忽以感歎志、後集乃中爾載天有、頗可憐木詩奈利、大唐乃人皆暗爾、誦留事有、今懷一絶句大寺僧等爾示須、

家門一閉幾風煙、筆硯抛來九十年、我仰蒼天懷古事、朝々暮々涙連々、

正暦四年託宣

寺僧等舉レ之、有二感拭レ涙、又一切經論、欲レ令二書寫一爾、道心乃人爾難レ會志、我家末葉乃此願袁可レ遂木人忽以難レ有志、向後爾必出來歟、我致二助成一之某朝臣、下向世利志時爾波、他乃善事袁光(光)營志間爾、任秩已碁不成爾木、而彼朝臣大貳乃有レ闕申請一乃條々乃雜事、言上府(スルノ)解文等、入道攝政乃時爾、在國朝臣爾付多利、而其心爾不レ入志天、已捨失利、大不レ足レ言奈利、自爾天譴爾毛當留、是不信乃所(致)奈利又管國乃司等乃所二愁歎一波每年爾絹米等可二加進一木事奈利、各所レ訴奈利、府國乃煩只此事爾、可有志者、御託宣乃旨如レ此仍註記、大宮司安部近忠・宮師法師淨洞・都維那法師・寺主大法師聖運・上座大法師王廉・檢校大法師昇朝・別當大法師住算・座主大法師松壽殿御自筆也此一通又大市　同四年御託宣正暦四年八月十五日、宮師淨洞夢二夜候一御在所一之間、子時許夢御前召二故檢校鎮延大法師一、仍參上、即被レ仰云、依二贈官事一、勅使下向者、是非本意依レ非二舊例一、更不レ可二承引一、件使來者、令レ知二我他行之由一、在右不レ可二相定一依レ無二面目一也、種々雜事、非二可レ仰者一、同十六日夜座主松壽大法師夢子丑時計、夢見二不レ知之人一來告云、可レ參二廟院一者、蒼云誰人仰レ事乎、一家主達被二集會一所被レ聞也、云云　仍著二袈裟一參進、廊內外有二十人一、自二西戸一參入、中門著座四位五位數多也、其中知レ面之人、三位文時卿・左近中將英明朝臣・勘解由長官在躬朝臣・山城守

雅規朝臣等也、告示云、公使下向、其事非二御本意一、司等不レ可二承引一云云　然間覺畢、御位記勅幷答二勅使一、御作詩二首、正二位右可レ贈二正一位、中務性比柳下位登槐端開廊之華累儒雅之葉乎、人文振芳雖レ無レ埋二英聲於龍門之土一、天爵標秀宜追賞殊禮於鶴遂之座、可レ依二前件一、主者施行、正暦四年五月七日、詔裒賢之義無レ渝乎、始終尙レ德之規、已貫二于存沒一、故右大臣贈正一位菅原朝臣才高冊府効著二廟堂一、挹二九流一以涉儒津登三旌、以助二帝道一、於戲象岳之蹤隔二清塵一而雖レ追二牛山之淚一、想二往事一而猶新朕嗣寶曆祗奉瞻圖欲下施二錄レ舊之仁一、以厚(篤)追遠(遠)之典上、可レ贈二從一位左大臣一、庶分二恩澤於北闕之宸一、彼(被)將レ照二寵光於西鎭之幽墓一、希造(造)遐邇一、俾レ知二朕意一、主者施行、正暦四年五月、天皇我勅命乎聞食止宣追レ往尊レ賢比、憐レ舊褒レ德波、食國令典奈利、故是以追天、增(贈カ)二一位階一、左大臣官乎、贈賜比崇賜布勅命乎差使天申賜波久止宣、同年同月廿日示二勅使一、被レ返二左大臣宣命一同四年

忽驚朝使排二荊棘一、官品高加拜感成、雖レ悅二仁恩一覃逐篋、但羞存沒左遷名、此御作勅使轉正朝臣、讀二宣命一之間、自二珠簾內一有二青紙書一、隨レ風出矣、即一絕其詞云、伴ノ正文詩令在二外記局一、非二彼御手跡一、似二道風一乎(手)云々或本有二此詞等一、書寫本無レ之、太宰府解中、言二上奇異一事、安樂寺菅丞相廣前案上ノ詩一枚、暗出來狀、右謹檢二案內一、贈二官位一勅使、散位從五位下菅原朝臣轉正今月十九日到レ府、同廿日未時、勅使幷府行事權少監正六位上源朝臣兼政・少典正

六位上伴宿禰如武等、相共參詣彼寺、勅使持位記函、置案上、再拜讀宣命畢、爰彼廳院大宮司安倍近忠、以件位記一歩進廳前之間、案上函外有青色紙書、近忠申云、此書在函外、是若漏落歟、者勅使對云、本自無青紙書者、似神作詩、不知其所出、謹須如此神異之文、任格密封言上者也、而寺司乃勅使祗候、宮人等衆人共所見也、仍記在收言上如件、謹解、正暦四年八月廿八日、正六位上行大典刑部宿禰・中務卿兼輔四品親王（在京）、正三位行皇后宮權大夫兼大貳藤原朝臣佐理・從五位上行少貳兼筑前守藤原朝臣云云（少貳已下府官等皆連署文不載之）、正暦四年十一月十六日卯時廳院宮師淨洞來向、告座主別當云、禰宣藤原長子白、去十九日、供御前、彼日申云、今曉示現始自今日、專不他行、閑可候者、仍所候也、而今朝託宣云、座主別當、相共可參、其時驚怪、召所司等、參向廳前、被仰云先日勅使、依有所思、我已不快、但爲令知其由、示絶句也至于此度、勅使者南山隱者等、所告頗以相應定者所聞哉、彼書寫一切經之願、我玄孫等、早申公家、可遂本願、抑今日勅使可讀宣命、唯以此請可答勅使、被贈太政大臣之後託宣（同五年十二月、）

昨爲北闕被悲士、今作西都雪耻尸、生恨死歎其我奈、今須望足護皇基、（此詩は〔小右記〕にも託宣の詩として出せり正暦五年六月四日とあり、）

古老傳云此詩、北野天神爲令詠之人、毎日七度令守護誓給云云、正暦四年八月廿日未時、勅使參向安樂寺、即大府□（殿）并官人等、相共臨廳南之流奉仕御祓、其後御位記之函、令持於權少監源直政、參進御前、勅使傳請、奉置案上、再拜即讀宣命、歸去、次廳院大宮使安倍近忠、件御位記爲納御殿、持案參上之間、御函之下、有青色紙書、近忠申云、此書從御函之内落歟、者勅使宣件御函内、本自無青色紙書者、爰勅使開見、又以再拜罷出之後、彼是尋問案内、不知其所出、已是奇怪也、仍記之、權府掌任（ヲイ）（任イ）、未・史生早部權陽（出イ）永（ホイ）泰（ヤイ）・少典伴權少典源云云、正暦四年十二月朝家差使散位菅原朝臣爲理、被奉安樂寺是贈靈廟於太政大臣也、宣命之後有託宣矣、先是同月十二日、召入禰宣藤原長子於廳内殿中、曾不令出戸外、令仰云、官位之使、十六日可到來之山、南山隱者、有被告之、其間依有可仰云、所令候也、告于時及十六日、勅使參到、讀宣命之間、以別當僧松壽所令書詞也、云云、〔百練抄四卷〕に正暦三年十二月四日安樂寺託宣、貞信公流可爲執政事、四年五月廿五日菅丞相贈左大臣正一位、閏十月廿日菅丞相贈太政大臣依内大臣夢也、〔貝原先生曰〕僧万里か〔帳中香第十二〕に本邦日條云菅筑紫ノ宰府菅丞相祠堂の額に冒して菅丞相寢廟の五字を書たりしに神夢中に託して曰吾は是謫官にして此地に寓す字廣なり自今已後我ために廣ノ字は戸ノ下に朝廷の朝ノ字あり我祠堂に於て宜しとせず幸に是廟の古額異によりて丞相等の號み賜はる廟ノ字を用ひて廟ノ字を用ふべからずと云々是文選六十卷讀讀成就の時先翌傳授の一件なり、〔小右記〕に正暦五年六月四日安樂寺ノ勅使歸云、有託宣ノ詩、曰昔、爲北闕被悲士、云云（〔梅城錄〕に〔聖廣記〕曰正暦五年天皇遣勅使於筑紫ノ安樂寺、特賜正一位太政大臣大相國勅使謁廟讀詔書、訖、瑞石忽現如玉板、有文粲然、蓋神君謝恩詩也、六日謁

正暦三年託宣
同四年託宣廟と廣
正暦五年託宣

安樂寺闘亂

安樂寺燒亡

內府ニ之次被レ命云、一昨日夢ニ菅丞相ニ有レ可レ贈ニ太政大臣ニ之夢ト、仍今旦申ニ關白ニ、余思慮時平大臣贈ニ太政大臣ニ今欲レ同レ彼令ニ內府深有ニ感氣ニ、〔百練抄四卷〕に長曆元年五月十五日遣ニ推問使左衛門權佐太宰府ニ是去年三月曲水宴安樂寺與ニ帥實成卿ニ闘亂、依ニ彼寺ニ也、〔梅城錄〕に〔聖廟記〕曰大江匡衡齋居欲レ登其文曰右天滿大自在天神或號ニ梅天下ニ夜勤勞ニ者也、其夜匡衡夢中ニ見ル天神排ニ寶圖ニ宣曰汝文高妙能感ニ我心ニ仰日月於天上之句非ル神巨ル測則汝固通ル神矣我是本地觀音也　永承五年三月太宰言上安樂寺燒亡、

筑前之二十一（御笠郡一）終

陪安樂寺聖廟詩寺地

參安樂寺詩

筑前之二十二

○御笠郡二

○安樂寺 下

〔本朝續文粹八卷〕に七言早春內宴陪ニ安樂寺聖廟ニ同賦ニ春來悅者多詩一首、以レ心爲レ韻并序

從二位行權中納言兼都督大江朝臣匡房、夫安樂寺者大相國之聖廟也形勝冠ニ絕於四海ニ靈驗被ニ動於一天ニ於レ是芳年花月上陽下旬張樂而奏ニ歌舞ニ爲ニ詩席ニ而供ニ文章ニ王倌吹レ月滿レ座者即是李山微之後身瓊篇嘲風連レ袂者莫レ非ニ楊雄之再誕ニ□之內宴弗ニ敢失墜ニ觀ニ夫春色ニ初改悅者最多盃比屋酒析之露未レ晞笙歌連甍琴臺之雲自駐朝野靜謐上下歡娛杏花欲レ定暗待ニ九穗於秋天ニ桑葉新萌先期ニ八蠶於夏月ニ者歟既而或宴既闌令レ遊欲レ罷於戲水石草樹之倍美也其奈ニ蓬萊洞之万里ニ何、柳樹苔閣之大幽也安用ニ華夢樓之百見ニ爲ニ彼、華陽月沉、洞裡之青松老、維嶺雲斷、山下之碧桃空開、未名我聖廟、風月本主、社稷昔臣、儇才被レ俗早極將相之班靈粹及レ眞長配祖宗之廟道入希夷辭離言語匡房累葉廊下之末弟也昇ニ黃門ニ而宰ニ西府ニ祿在ニ其中ニ陪ニ廟庭ニ而備威儀禮治其外樹頟於松壖之風蒲伏於苔砌之露仰望神眷願動卿心云爾、〔同書一卷〕に古調ノ詩、參ニ安樂寺ニ江都督以ニ身年一寫レ之

所在三池

虹橋

崔嵬山

潺湲水

庭前佳樹

康和二年秋、清涼八月時、我詣安樂寺、寺在東北陲、出府七八里、先望彼楣、題額鐫金字、下乘當路岐、地隆尤顯傲、道遠方委蛇、門外及廣前、往々有三池、其水潔如珠、看々高自涯、似展青翡翠、如敷碧瑠璃、波心風壘雛、潭面月生規、菰蒲早秀、蔺舊晩蘂遺、分浦鷺鷥、近岸鷸鷸鷸、鶴子毛淋漬、鳧雛衣褫褫、鴻雁鶺鴒鷹、相遞引雄雌、常樂我淨聲、曉夕常在茲、鴛舟維古岸、虹橋照漣漪、一陷銀沙浦、再休白玉陂、北有崔嵬山、烟嵐暗懸碕、嶺高術銀兎、谷深藏黃鸝、西有潺湲水、霧雨添縈崎、或激爲飛灘、或鋪爲清湄、危石累八九、冷滑刓且欹、蒋苔似花牋、周道平如砥、軒騎若喧譁、率然忽致遣、庭前多佳樹、森々幾叢枝、梅含雞舌香、上陽鰡垂、近在瑤階下、芬馥似瓊靡、暮雨變楓桂、曉風吹棠梨、左右色漢漢、次第影熙々、啼鳥時一聲、聞之以涼颸、橘迷懸金鈴、柿於列鳥枰、山菓百千種、夾道正離々、甘酸味非一、殆近子荔支、栟榈葉飜扇、楊柳枝變絲、涼氣飄仙桂、夾籟誠高倚、秋來木葉下、散漫塞古道、纖纈敗爛然、錦繡寒凄其、或有賢貞樹、巖窮多厥麗、或有凋零梢、林頂自疲衰、地幽洞未素、天喧蹇難萎、階除尋芳艸、十步方蕊蕤、結跌含露蘭、衛足向陽葵、苦庭養蕙蓀、沙場植茫蘿、夏榮衰北堂、時菊綻東籬、厥生改人拳、若老失鷹背、黃綺死已久、誰人採紫芝、修竹亂无行、四時常猗々、日月光不透、清陰足相追、廣柱有蔦蘿、滋蔓輕青滋、根一條且千、滿室自支持、下降藏礎石、上昇掩花榱、宛轉類爪爬、屈蟠訝龍螭、綠蕚綺羅舒、黃葉珪璋施、擔宇旁索紆、梁棟併離繩、造物者何意、強貽此幽奇、華堂連柳樹、輪奐自參差、節扉排瓊戶、雕刻幾纏繩、懸鐘交壁飭、縹瓷門塾安、木梗挾前共哆嗒、膽視偏如生、跋扈勢嶷々、廣壁圖華客、操筆皆候伺、鬢髮誠如畫、儼雅容孜々、有堂號法華、草創託巢維、九品安西方、十願坐中達、護持佛法天、當左亦相比、傳聞我聖靈、每日念編貧、葷膻敢不入、窈窕豈得窮、本願好儉素、雖志在茅茨、後代加華飾、莫物非瓊琪、神以甚揭焉、靈驗不可訾、如在同平生、夢想叶思惟、感應在須臾、遍自駟馬馳、冥力震蠻狛、潛化及童兒、枌楡惟紙錢、松杉飽琛璃、金埒當門前、逐重競晉驪、嘶來古柏暗、連錢醉難騎、聚珍捶青蛟、潔幣奉東絕、豈唯州郡人、梯航貢土宜、稽首傾貂蟬、低頭衝鵷鸞、殺生深所禁、豈敢求三犧、罰酒嫌淮泗、斷肉誡川坻、施潛衛以降、吾土固大治、一境爲泰平、九州因淸夷、緣底愁病蛩、誰敢食蹲踞、黔首富秋稼、蒼生休調飢、宜驗夫子言、善政不須期、戎罷家棄弓、戈止人藏鈍、有慶兆民賴、莫不蒙疣禰、延算均北辰、頒澤等南箕、神力籠宇宙、山谷獨可移、尊重三密法、還爲扶桑資、張子忘四愁、梁鴻息五噫、農土保利益、商賈全質劑、昔是三臺位、兼又三朝師、殷夢通岩穴、周獲非

寺援

神德

菅相公

熊羆、舟檝鹽梅材、秉レ政褊二皐伊、輸レ忠輔二皇漢、盡節佐二帝嬀、諫諍曜二軒日、啓沃昭二堯曦、淳化同二姬旦、聖道亞二仲尼、羽林爲二上將、象岳作二台司、風月應二本主、經籍即專戶、抑亦長二衆藝、百中嘲二南皮、博覽先世傳、佳句百代知、春蛙无二氣序、如二海岸出レ節、秋雁敎行伍、似二永雪在レ航、閑居催二粧製、深レ自二騷人辭、烟霞桃李句、絕二於曹娥碑、文章十二卷、併爲二興璠貲、後集動二三才、讀者淚迸洄、異日化仙訣、斯處留二龍輻、雲臺奏レ宣レ年、民蒙二考妣慈、玄局寵寥日、人作二兒子悲、愛占二九泉地、長立二万代祠、三廻加二金丹、百行記二鼎彝、朝使傳二鳳銜、玉藻飛二前墀、如二无レ脛而來、不レ待二微風吹、晉台色紙上、妙迹兩韻詩、傳在門下局、後人猶得レ窺、風人獻二龍章、日夜顯二尊儀、吟詠閑引步、聽者亟二練麼、又聞紅燭燃、治欲レ及二龍帷、有レ聲暗喚レ人、既免二炎上老、昔有二南峯僧、入レ定見二金姿、大聖威德天、昭臨伴二二麗、率二百万猛靈、王億千靈祇、皇居頻有レ火、制造課二斑倕、虫成二卅一字、板上着二其詞、夜々管絃聲、寥亮座下珍、時々闌麝香、芬芳室中貽、恠同二宋宮戶、讀齊宣室螭、綿山徒制レ屐、羅水未レ歇レ醪、藥欄石徒煎、仙龕玉空炊、國內有二疑獄、眞僞迷多疑、書理押二寺門、一旦辨二妍蚩、解紛超二神軍、數蒙過二元龜、囚徒寬二五刑、訟人免二百羅、凶邪无レ得レ所、自兼二三不欺、若人有二詐僞、誅罰出有レ私、若人有二陰伏、蔇揚更无□、懲咎立可レ見、福禍坐應稚、鷙鳥駈二鳥雀、仁獸逐二狐狸、霜科決

錙銖、露贓弁二毫釐、寒朝參詣蜚、駕肩牛成レ眠、暑月精進人、繼踵足忌レ疵、宴遊爲幾廻、箭翰各手隨、早春和二菜羹、初冬殘花壇、三日曲江宴、七夕漢水嬉、二季勸學會、結緣極素錙、九秋念佛筵、利生待二僧祇、聖忌是何日、與レ花有二春期、仲陽二十五、齋會長无レ虧、樂縣四時張、琴瑟和二塤篪、酒部七郎立、流醴泛二瓊巵、笋柱吹霞悠、歌塵動雲栖、簫管吹不レ盡、曲長紅神羸、舞衣繽紛飜、宴罷伏二燕姬、堂塔皆栁比、三昧傳二月氏、常擊二大法鼓、久挑二傳灯脂、无明蕩二妄想、夢後驚二乾維、佛表二万德容、僧垂二八字肩、論議常往復、講說自嚼咨、龍象滿二其中、師跡傳二陳隨、證人彌位深、廻向忠名塲、都邑成二其下、低屋運二研桃、城狐社鼠喻、有羅免二鞭苦、震居西北野、遊レ神佐二廣基、右近馬場邊、風景任二天爲、万乘廻二鑾輿、六軍靡二竜旗、羽客曜鶴緩、宮女曳二鳳綦、紫衫各行事、衰服方柱頤、林巒先光輝、禱レ晴日皎々、乞レ澤雨祁々、又有二吉祥院、百王鴻業丕、公家有二神事、奉レ幣先祈レ祺、在二子午城離、孟冬十七日、八講法華披、杏壇柳市生、集會何堂之、薦舉逐无レ謬、禁制敢不麥、五畿及七道、每レ國祭祀祓、都盧四海內、爭不レ仰二指僞、天滿自在名、布護被二尊卑、神思所二擁護、枯楊忽生レ蒙、神德所二眷願、洞池自成レ澌、大得飽二莽蔘、燕豈飡二蒺藜、普天悉有レ載、率土誠不羈、俾二六十餘州、返二於彼八廛、國富鳥食レ粃、民安孫含レ飴、冥化少二傾缺、神德多レ所レ裨、榮色滿二上腴、花祠□東菑、餘裔爲著レ姓、

江都督在府中事

青紫事ニ農畝ニ、棘路風夜怠、蘭省簪帶疲、射レ策及ニ十葉ニ、分レ符豈一麾、廊下鑒ニ往事ニ、舊貫尤可レ思、仰レ天特ニ有道ニ、與レ善冥憐レ台、仕レ神更无レ倦、福謙亦在レ誰、乘レ昧身多レ患、抱レ節年已耆、沈病負ニ歡娛ニ、臨レ政多ニ忸怩ニ、行年盈ニ六十ニ、釐務事々癡、披レ簾ト ニ露命ニ、對レ鏡抽ニ霜髭ニ、計レ命准ニ三樂ニ、省レ身是四維、膓質同ニ蒲柳ニ、落景及ニ崦嵫ニ、適題ニ三千字ニ、恐招ニ梧臺嘲ニ、

浮妙寺

〔古今著聞集四卷〕に江中納言匡房承德二年都督に任じて下りけるに同康和三年に都督夢相の事ありて安樂寺の祭を初イ八月廿一日翠花を淨妙寺に廻らす、此寺は天神の御事を留めし地なり治安都督惟憲卿彼跡を悲みて一伽藍を其處に修覆して法華三昧を修す同廿三日宰府に還御し僚官社司皆馬に乘て供奉す、廟院の南に頓宮あり神輿をそこに休めて神事を其前に行ふ翌日宴を張て夜に入て才子を引て宴序をのぶ是を祭の竟宴と云なり、〔貝原翁日記〕安樂寺八月の祭の事いまは其作法廿三日のあかつきに神又浮殿にうつし奉る廿四日の夕は樂を奏しまた別當等八人竹イまひなまふ竹イ舞といふは古の田樂の餘風なるよしなりさて亂世已來四度の宴もたえて行はれず今はたゞ七夕の哥の會のみぞ殘りけると云はれし、さて〔極本朝文粹八卷〕に三月三日陪ニ安樂寺聖廟ニ同賦棄流叶勝遊詩以ニ多字ニ韻并序江大府卿山水之時發遣矣裁赴（題）自姬旦之東洛及我朝之西汚本源早明（題）二千年之卷風餘波長傳百（百歲）里之曉月方今錦車聯門鑾祠之儀如舊麗幕張砌花水之觀惟新今日之宴誰敢問然原夫棄流云成勝遊自叶羽觴頹稽氏之玉宮懸揮閑（閑）之絲背山梡（山桃）之味砌岸色桃顏方紅南（山）操之曲混灘聲竹內更靜玉波風骨含毫暗起節潮江陵（陵）海玄之又玄也暗引巴字之水洛妃淚女夢而非夢（也）自動魏年之塵者也於是柳谷景斜花塘燈爆鑾之業可ニ以盍ニ乘稷惟鑾豈其堯女廣莊春作（竹）染一掬之淚徐君墓右（古）秋楓聽三尺之琴雖異代之名皆非ニ同日之論ニ既而右軍既酣闌亭之席稍卷尤嗟頻願桃浦之篤欲歸官醉之成泥荒調（思）之紋鈴石云爾なども見えたり、また〔古今著聞集ノ四卷〕に安樂寺作文ノ序を相規がかけるに王子晉之昇仙ノ後人立ニ祠於鉄嶺之月ニ〔□（羊）大轉也（之）早〕世行客墜ニ淚於峴山之雲ニ此句ことに勝れたりけるを後に月のあかゝりけるに安樂寺にて直衣の人詠じたるは天神御感のあまりあらはれ給ひけるにやとあり、此相規と云人は何人にかありけん今思ひ出す、さて〔四季物語〕と云物二の卷に二月ノ件に廿五日聖廟の御事やごとなき事なるべし氏の公卿各つどひ唐衣おりて北野の神ぞとは袖に持たる梅にてもしれ、心だにまことのみちにかなひなば祈らずとても神や守らむの二種の御歌を句のかみにおきあるはその翌字をとりてからうたにのべつられて又對策けんさく秀才なるべしなどいふも皆此日おこなはるゝなるべし是則菅丞相道眞公延喜三年けふになんつくしにておはらせ給ふ日なればあさましきまでの法會にて神道のまことを云々とあれど此〔四季物語〕と云は昔のにはあらざるべし哥のふりなども延喜の比のにはあらず〔菅家ノ歌集〕には見えずこはかならず後の世の人のしわざなるべし、神德契ニ遐年ニと云題を初て講ぜられける序を都督かゝれけるに桑田縱變日祭月祀之儀長傳、芥城縱空配レ天掃レ地之倍無レ絕、況亦混ニ淪万歲三寶之桃ニ矣便充ニ枌楡之珍羞ニ、崆峒一却一熟之瓜焉更代ニ蘋蘩之綺饌ニとかゝれ侍る故にや此祭禮年を經て絕〻事なくいよ〳〵脂粉を添られ侍る、同序云社稷之臣政化雖レ高朝闕万機未ニ必充ニ姬鶴風月之主、才名雖レ富夜臺ニ掩未ニ必類ニ祖宗ニ彼蕭々暮雨花靄巫女之嬋々秋風人下伍子之廟古今相隔、幽奇推同匡房五稔之秩已滿待レ春漸艤ニ今江湖舟併覩之期難レ知、何日復列ニ唐門之藉ニとかゝれたりける詩曰蒼茫雲雨知レ吾不其奈那歸ニ於帝京ニとなん作られたる此序を講しける時此中の句を御殿のかたに人の詠ずる聲の聞えけるは疑なく神感の餘りに天神の詠吟ありけるにこそと人々まうしける今年都督秩滿の年にあたれり明春歸洛せんずる事を神も名殘多く覺しめしてかく喝吟ありけるにや、同四年都督已に花洛におもむくとて曲水ノ宴に因て序を書れけるに柳中は秋の事なり（柳中ノ上ニハ古今著聞集ニ春ノ字ニ入ル此後作ノ序ヲ沈思有ケルニ柳中之長句ニ云々ノ句アリケリトアリ）春ノ時にあらずと覺悟して則なほされにけり、同序に潘江陸海玄之又玄也暗引ニ巴

頓宮

祭ノ竟宴

八月祭竹ノ舞

相規

二月ノ式

四季物語

神德契遐年ノ詩

字之水ニ洛妃漢女如レ夢而非レ夢也自動魏年之塵（此處ニ脱句アリ）堯女廟荒春竹染ニ一掬之涙ニ徐君墓古秋楓懸ニ三尺之霜ニ右軍既醉蘭臺之席稍卷左驥頻顧ニ桃浦之駕ニ欲レ歸、かやうの秀句どもを書出されけるに殿廟ふかくめてさせ給ひにけるにこそ講ぜらるゝ時御殿の戸鳴たりけるを滿座の府官僚官一人も殘らず皆是をきゝけり其聲雷の如くになんいけるこの此卿喜承二年又都督になりたりける是も神のはからひにこそかたじけなきことなり、（正月七日の夜まづ酉時にうそがへといふ事あり、次に法事をなして後難を行ふ是を鬼とりといふ是は貧人なからめて鬼と名づけ堂の邊を引廻り杖にて打たゝき松の青葉にてふすべて鬼とりたりといふ事今にたえず古は觀世音寺・武藏寺にも此事ありしといふ）

元依レ爲ニ安恒之領ニ賜ニ安恒大娘ニ云云　不慮之外以ニ去康和年中ニ安樂寺擬令押ニ領件所ニ之由國司怙送之間彼所於レ山者當宮立ニ宮柱ニ之降三十三ヶ年一度御遷宮六ヶ年一度御裝束御輿料柚山也至ニ于田畠ニ者安恒負物之代所點定也仍蒙ニ府裁ニ停ニ止安樂寺之妨ニ畢爰以ニ嘉承二年十一月ニ云云とあり、〔百練抄六卷〕に保延六年六月廿日諸卿定ニ申太宰帥顯頼訴申去五月五日九國所々大衆神人燒ニ拂宰府已下屋舍數十家ニ事、（此中大山・香椎・竹崎爲ニ張本ニ）〔同七卷〕に永暦元年十月十二日延暦寺大衆捧ニ日吉ノ神輿ニ參洛訴下申太宰府贄門宮并大山安樂寺燒亡治部權少輔菅原貞衡合戰事ヽ〔同卷〕に應保二年十一月廿七日以ニ安樂寺ニ可レ爲ニ延暦寺末寺ニ之由、天台衆徒訴申欲レ下レ洛召ニ諸卿於殿上ニ有ニ群議ニ不レ可レ有ニ裁許ニ之由定ニ申之ヽ〔平家物語八卷〕に明る十七日平家

無啓道饌祭

安樂寺妨

安樂寺德

延暦寺ノ末寺哉、

は筑前國三笠郡太宰府にてそつき給へり菊地ノ次郎高直は都より平家の御供に候けるが大津山の關開て參らせんとて肥後國に打越已が城に引籠りてめせども參らず其外九州二島のものども皆參るべき由の御領掌をば申ながら一人もまいらず當時は岩戸ノ諸卿大藏種直計ぞ候ける同十八日平家安樂寺に參り終夜歌讃連歌して宮仕給ひしに中にも本三位ノ中將重衡卿

住なれし古き都のこひしさは神も昔におもひしるらむ

人々實に哀に覺えて皆袖をぞぬらされける、〔源平盛衰記〕に八月十七日平家は筑前國御笠郡太宰府につき給へり菊地吹郎高直・完戸諸廻種直・白杵・戸槻・松浦黨を始として奉レ守護主上ヲ如レ形被レ造ニ皇居ニ彼大内は山中なりければ木丸殿とも云つべし人々の家々は野中田野なりければ草深して露繁し所のさ衣うたれども十市ノ里とも云つべし稻葉をわたる風の音一人丸殿の床の上片敷袖そしぼられけるさてこそ平家の人々は大臣殿を奉レ始安樂寺に詣給ひ詩を作り歌をよみなどして手向給ひける中に皇后宮ノ亮經正角ぞ詠じ給ひける住馴し古き都の戀しさに神も昔を忘れ給はじ、〔台記〕玉葉ノ安元元年十月ノ件ニ爲被謝中安樂寺鉾事可レ有ニ諸社奉幣ニ付件使可レ被ニ奉遣ニ云云　賴業勘申臨時奉幣之使被献神寶之例云云　五日壬午來八日可レ被ニ進發ニ之七社奉幣定、（依安樂寺鉾事被發遣之）〔扶桑略記（未詳）〕安元二年七月十六日大臣宣下に安樂寺巽方銅鉾十出來事令ニ諸道勘申ニ云云、〔東鑑六卷〕に文治二年六月十五日安樂寺ノ別當安能僧都依レ有下同ニ意平家ニ之聞上欲レ被ニ改替ニ二品所下令ニ憤申ニ給上也珍全望ニ申之於京都ニ當時有ニ其沙汰ニ而安能潛進ノ使屬ニ藤判官代邦通ニ陳ニ申子細ニ寺務之間興隆事并當寺務事付ニ權門ニ不レ可ニ濫望ニ之由稱レ有ニ證文ニ進ニ永久起請保延宣旨狀等ニ云云

平家安樂寺若座

平氏安樂寺歌會

安樂寺鉾

安能僧都寺務興隆條々

別當背氏舉

今日參二著關東一也、安能寺務後始置二佛神一事、一建二立瓦葺二階一間四面經藏一宇、一每日調二味御供事、一建二立六間四面御供所屋一宇（次々屋并六宇）一於二寶前一勤二修長日尊勝護摩一事、一同於二寶前一屈二請十口僧侶一每月一萬卷觀音經轉讀事、同像一萬體摺供養事、每日充二一千體一以二每月十八日一供二養之一（一同於寶前以寺僧三口長日令轉二讀大般若經一事、已上三箇事奉レ祈二上皇御願一、一同於二寶前一每月廿五日天神御月忌屈二積學八口一勤二修八講一件御月忌元者轉二讀阿彌陀經一許也、一每レ屈二十口僧侶一字三禮令レ背二寫如法經一納二銅筒一奉レ籠二寶殿一事、一寺內諸社御燈奉レ供事、一北野宮寺社等供二夜燈一事、已上拜任之後以二新信心一所二勤行一也自二往古一被二始置一恆例、臨時大小佛神事法會祭禮連月連日之勤日夜燈油佛聖供神供人供衣食供料田一々無二退轉一不レ及レ注二進之一此三箇年爲二武士等一被二打止一天一々斷絕寺僧神人上下數百人悲拭二悲淚一迷二山野一云云安樂寺別當濫望人儀絕狀、爲二安樂寺別當濫望一背二氏舉一依二大衆一義絕事、右背二父命一者非二子道一背二氏舉一者非二氏人一然者在殷（在良子）不レ可レ爲二子也嚴實（是綱子）不レ可レ爲二氏人一天神御起請有レ限任二氏舉一次第所二補任一也今背二氏舉一起二大衆一之悲公家可レ禁別氏人可二儀絕一之狀如レ件、永久六年正月十二日氏長者式部太輔菅原在良、右辨官下二太宰府一應下任二起請文一也停中止背二氏人進止一假二事於權勢一濫二望安樂寺別當一悲上事、右得二彼寺在京氏人等去二月十九日

僧定祐

解狀一偏、去大治年中進二納北野聖廟一起請文偏可レ停下止稱二氏僧一背二氏人一以二貴所威一監二望安樂寺別當職一事、右件寺者天滿天神御終焉之地也桑梓松柏尚可二以崇二氏舉一寺官誰以相妨至二于別當職一氏僧中推二其器量一擇二其性一以二六年一爲二一任一次第舉補其來尚矣而世及二澆末一人多貪欲在々禪侶而々濫望貪望者性情惡逆行能共闕之悲也以レ卑自衒之故焉直號待者法器相二備年臈老大一之人也、寺次不營之故耳謂彼云レ此如レ舊如レ前偏隨二氏之舉奏一者宜レ叶二神之素意一也何管貪二一旦之名利一忝可レ顯二累祖之廟謀一哉所レ謂獅子中蟲如レ食二師子一歟、就レ中去大治年中僧定祐恣巧二謀計一橫致二濫望一雖レ背二權貴之命一懇薦舉之狀不レ能二固辭一偏仰二廟榮一之處、二離未レ墜、吾氏無レ絕、定祐忽以入滅、信永猶在二寺務一當二于彼時一也登觸レ事觸レ境、多レ凶多レ恠、是則緯雖レ出二意表一徵獨蒙二身上一歟、亭屋忽爲二灰燼一身體久沉二病痾一倩思二此事一偏感二彼咎一伏願靈廟明垂二冥察一自レ今以後有レ蔑二爾氏人之許否一暗以二豪貴之權威一不レ測二涯分一若致二濫望一之悲者高振二靈威一立與二冥罰一內則天神必加二呵責之誡一外亦氏人永斷二親族之義一然則遂二大業一之人宜レ守二此狀一企二濫望一之悲、莫レ致二其舉一縱雖レ受二末族一縱登二崇班一自レ非二儒者一不レ可レ知二家事一明誡炳焉于レ今不レ朽請以二一言之呈信一將レ爲二万代之炳誡一仍起請如レ件、者望請天裁任二件起請文一早被下二宣旨一將下仰二敬神之政令一停上斷二非據之濫望一者權中納言藤原朝臣成道宣奉勅依

安能處圖寺領

請者府宣ニ承知一依レ宣行レ之、保延七年六月廿日大史小槻宿彌在判右中辨源朝臣在判〔同卷〕に文治二年八月十八日鎮西安樂寺別當安能依レ有ニ罪科一二品頻令ニ憤申一給之處去六月廿六日入滅之間以ニ大法師全珍一可レ被レ補ニ彼替一之山被レ執ニ申之一云云、〔東鑑十八卷〕に元久二年五月廿四日安樂寺領筑後國岩田・田島兩莊ノ事就ニ社僧等愁訴一有ニ沙汰一今日被レ付ニ地頭職於社家一云云、〔同廿二卷〕に建保三年十一月廿四日安樂寺領筑後國岩田莊之事、此國聊雖レ有ニ豫儀一今日遂所レ賜ニ于左近大夫菅原時賢之子有成一也云云、〔皇帝紀抄〕に建保元年六月十三日有ニ仗議一是太宰府言上安樂寺御輿以下燒失事也云云、四年五月九日有ニ流人宣下事一僧盛圓遣ニ常陸國一長源同國・址盛伊豆國・仙秀佐渡國・覺秀出羽國・仙幸越後國・延應隱岐國・彈定上總國・安意安房國・勝圓下野國・觀賢能登國・增秀越前國・幸秀遠江國・實幸下總國・義圓信濃國是安樂寺惡徒十七人ノ內也、〔十訓抄十一卷〕に建保の比菅ノ長貞守佐の勅使として下向の時安樂寺に詣て作文の進なのべける自序を書たりける寄雲入レ手遙持ニ使節於百萬里之四一玄風染レ心於拜ニ祖廟一於十一代之後一此句ハ詠吟の間文人につらなれる祠官袖涙を落しけり神も定て御納受ありけんかし、〔百練抄十二卷〕に承久元年安樂寺中去八月御祭之間於ニ榎木宮一神輿振動事、〔同十三卷〕に安貞二年七月六日安樂寺言ニ上去嘉祿元年五月比豐後國津江山住人等於ニ彼峯一作ニ畠之間堀ニ出金銅鉾二枚一事ヽ〔關東評定傳〕に文永六年九月蒙古高麗重牒狀到來牒使金有成高柔二人也還ニ對馬島人答二郎彌二郎一高柔依ニ靈夢一獻ニ所持ノ毛冠於安樂寺一即叙ニ其山呈詩一、また〔菅

安樂寺惡徒

賞毛冠於安樂寺

神輿振動

聖一國師夢想之事

渡唐天神

社寺地

梅園

相公傳衣記〕といふものに仁治二年之夏聖一國師四國巡錫ニ徑山佛鑑禪師一而皈再著ニ筑前博多一其年十二月十八日昧爽菅神挿ニ梅花一枝於袖裡一來見ニ國師一而求ニ法衣一乃呈ニ和歌一曰唐衣登來底幾多野能神曾士波袖仁持多留梅仁底毛志禮、〔國師問云若恁麼則宜ヲ往レ宋參ニ我師佛鑑一神領ニ其意一其夜直入ニ徑山ノ室一手執ニ梅花一謂曰我是日本菅神承ニ國師教一來禮ニ和尚一願示ニ法要一鑑授ニ一偈一曰天下梅花ノ千扶桑文字、祖若問ニ正法眼一雲門答曰韓并付以ニ法衣一蓋應ニ祖德一也神拜受而皈再見ニ國師一云我蒙ニ師指示一親得ニ徑山衣偈一乃指ニ腋下ノ衣袋一爲レ證、更曰偈曰手裏梅花腋下裝不レ離ニ安樂一到ニ南方一徑山衣法親傳授、何用時々仰ニ彼若一既而佛鑑命ニ常牧溪一畫ニ室中所レ見神人像一云云とあり、此靈ハ祭りて渡唐ノ天神の事は藤原長親の〔兩聖記〕にも見えたり、唐衣云々の歌は〔四季物語二卷〕にも見えたり、〔宗祇筑紫紀行〕に御社近く塔婆など見ゆるより下て神前を拜して宿坊滿威院に至ぬるほど暮果ぬ今宵は當社の緣起など讀マせ奉るほどに深野筑前守と云人來たり此郡の郡司なり扇を携へて心ざす當社にて此扇を得る事夢の告思ひ合せていとゞ神慮ありがたくなん、〔恋の事は中卷遠賀郡木夜郷の件に引出たり考ふべし〕つとめて社僧一人を伴ひ神前にまうづおもてのとりゐさしいるより地廣く松杉數そひてさらぬ常盤木やゝしげし反橋高うして二ッあり又打橋ふたつ其中にあり池の廻りには千萬株の梅林をなせりおぼえず西湖の堺に來たるやとおぼゆ樓門にいるほど加う〳〵しくて左右の廻廊いさぎよし名に負ふ飛梅〔飛梅の事は俗中樂の老松の論にもつくれり〕苦むして老松の齡にもあらそへり、抑當社は延喜五年乙丑に草創あるになん則拜し奉るに古の御うれへまで思ひやられて看經おぼえず聲止ミて唯袖のうるほふより外の事なし西行がしてに涙のと云はんもかゝるをりにや、

なほざりの言の葉いかゞにおもひ侍れど只敬信の心一すぢに

寺の癒願
人丸木像
天神託宣

雲りなき跡をしたひて我見るや只是西の秋の夜のつき
浦風の吹上の秋の面影も波に立そふ池のしらぎく
神やしる又生れてもうる事のあらばとおもふ敷島のみち

天原山廣
火災

經藏寶塔諸堂末社皆星霜ふりたる中に安樂寺いたう廢して瓦落（新）やぶれてしのぶ草もたよりなきにやと見えて亂レ爭ふ嵐にも俊頼朝臣のちる紅葉にとよめるもいとゞあはれなり次に人丸の木像おはしますを拜す云云、〔扶桑略記〕又〔群書類從〕に擧たる〔天滿宮託宣記〕に我從者爾老松富部止云者二人有笏者老松爾持世佛舍利者富部爾令持多利是皆筑紫與利我共爾來禮留者止毛奈利、〔仙巢稿〕に以二長政爲一其大守一也紫府ノ天滿宮及觀世音寺最先修レ之など見えたり、又〔寶永七年閏八月天滿宮司務職留主別當大鳥居法眼信仙より巡見使へ出す詞書〕に筑前國御笠郡太宰府安樂寺天滿宮天原山ノ廣院者醍醐天皇延歷五年奉レ勅味酒ノ安行造立延喜十九年藤仲原爲レ勅再建、〔貝原翁云〕此社造立の後兵火にかゝる事たび〳〵なりと云後冷泉院永承五年三月後土御門院明應七年十一月廿二日又永祿五年天文十九年などあり又天正六年十月中旬秋月種實・筑紫廣門大軍をゐて岩屋の城に押よせ處々に火をかけて城下までをやきけるに岩屋よりも兵を出すによりて爾家の軍勢府まで引退くさるを此社には社人等多くいりゐたるに其よしによりて近邊の民どもたちこもりて社内せばきほどにぞ見えける秋月種實法度つよくするにより社ノ方には手さすものもなかりしが其手にりて社内せばきほどにぞ見えける北島玄蕃といふもの天正十五年六月十三日そのあたりの小屋に火をかけたるに社（ホド）なりに飛入て死にけり此時社人等神體を夜須郡栗田村に移し奉てその處にすむ北島氏は其跡に因て自殺せり、〔九州記八卷〕に種實社頭焼失の事を無興して小屋に火をかけたるものせんぎして火あぶりにし又夜須郡栗田村に天滿宮を勸請して宮居を清め社人をうつし日々の神拜祭祀まで解怠なくつとめさせけり、宗門者顯密禪三宗兼學之地也、官位之儀者菅家之長者以二執奏一于レ今昇進仕來侍事、一往古ノ堂社數七十五ヶ所ノ內四十八ヶ所唯今現存之分、聖廟ノ寶殿天正十五年の災よりしばらくかりどのにましませしを小早川隆景筑前の國主となりて此神のかりどのにまします事を歎きて天正十九年今の神殿を造る横七間長九間、樓門隆景の後石田治部少輔當國の代官となりて樓門をつくる長さ四間四尺横二間四尺老松大明神・廻廊・福部大明神・御靈大明神・大神宮・東法華堂・西法華堂・大講堂・安養院・觀音寺・志賀大明神・宰相殿社・幹正社・楓社・人丸社・藤大夫社・寶滿宮・高良宮・櫛田大明神・山王權現社・貴布禰社・若宮・玉宮・尼宮・柳宮・新羅大明神・法性坊堂・荒神社・辨財天社・渡唐天神社・無隼堂・今尾ノ社・太郎左近ノ社・小太郎釋社・四天王堂・浮殿・文庫・寶藏・仁王門・鐘樓・御供所・理趣院・榎寺・天拜ノ社・神厩、寶物之部者略之、慶長の比長政朝臣此國の主となり給ひて中門廻廊諸堂次々に建立し給へり又延寶年中に檢校坊快鎭と云人文學に志あらん人のためにとて文庫一宇をつくる是に因て四方の國々より經史其外諸のふみどもをこゝにをさむ水戸ノ宰相光圀卿自集め給へる扶桑拾葉全部三十卷を寄附したまへり、一當時神領二千石黑田筑前守長政寄進從二慶長十八年一於二于今一附來、一社家數往昔者數多雖レ有レ之相續來レ分、司務職留主別當大鳥居廣院の御祭初は太宰ノ帥と昇といひし人勅を請て西府に下りて社職をつとむ後堀河院の御時菅公九世の裔菅原ノ善鳥居らの家わかれて社務職たり大鳥居の小鳥居もそのかみ相並て神事を執行ひかはる〳〵向ひに宅あるを以て大鳥居とは云なり　別當小鳥居別當留主職をつとめしといふ小鳥居の方に宅あるを小鳥居といふなり　別當御供屋・同執行坊・同浦之坊已上の五家はともに菅姓にて別當職といふ今もその巨擘たり　宮司職宮師滿盛院・宮司檢校坊・同勾當坊、滿盛院・檢校坊・勾當坊この三家神前の宿直をつとむ上句中句下句とわけてつとむるなりさて此三家はともに味酒ノ安行の苗裔なり、　三綱上座坊・同寺主坊・同都維那坊、文人小野伊豫・同小野石見・同小野志麿、已上皆社職なり　禪宗

堂宇
天正造營
末社

慶長造營
文庫
神領
社家
別當職
菅原善昇
菅家五家
官司職
安行齋
三綱
文人
寺坊

上官
下官

光明寺・同本願寺・藥師堂・承安悉院・會所・預・連歌屋・衆徒花臺坊・同六度寺・同安祥寺・同常修寺・同石築（石切ヲツヾシ）石坊・同明星坊・同眞寂坊・同寂門坊・同十境坊、（是までは上官なり下は皆下官なり、）正堂・櫃堂・正知事・寶藏・千德不老・大夫・惣之市・式司・掃除所・大宮司四人・神人八人・護燈三人（字トヲリ）・

水田天神

時禱三人・鐘樓・正大工・惣鍛冶、一筑後國下妻郡水田庄天神ノ寶殿（後堀河院御代嘉祿二年長者家大藏卿菅原爲長奉レ勅建立、云云（こゝの文委くは〔筑後志〕下妻郡のくだりに引出べし、）右水田天滿宮者依二當社之末社一諸事從二宰府一支配仕來候已上とあり、〔筑陽記十卷〕に天滿宮云云

遣替

此處安樂寺ノ舊跡也云云、天正十九年國主大江中納言隆景經ニ營今之本社一今ノ樓門者石田治郎少輔三成建レ之云云、慶長年中太守長政朝臣再ニ興廻廊末社諸堂四十區一從二其的孫一相繼經修輪奐殆甲二于國一矣云云、隆景代於二當郡一寄二二百町一也世降政苛、神領減少、及二衰微一慶長已來自二公方家一於二筑後國下妻郡水田莊一千石自二同國柳川領主一五十石總三千二百五十石寄附也、

社領

祭式（鬼捕正月七日）連歌會（毎月廿五日）二月祭（廿五日百僧供養ノ法事）幸祭（卯月廿日ノ夜）七夕ノ宴（和歌會）此外內宴（正月一日）曲水宴（三月三日）殘菊宴（十月五日）今絶

祭事

八月廿三日御幸ノ規式宮司滿盛院連日潔齋而廿二日夜半子時入二內陣一奉レ守二神體一此間內外消二燈火一奏二越天樂一奉レ移二神輿一云云伶人奏二音樂一神人携二神器一牽二神馬一僚官社司前後供奉、別當社僧、或牛車或乘輿而後從云云宮司先達奉レ迎二神輿於榎木寺一廿三日未時奉二還幸一奉レ休二唐院西浮殿一廿四日戌時奉レ遷二本社一此時舞樂有二竹之舞一當地猿樂勉レ之、〔元祿記〕に太宰府天滿宮千九百七十一石四斗五升二合三勺三才內六百三石六斗は造宮料也此外久留米・柳川より寄附あり、〔貝原翁云〕安樂寺唐院は南に向て立り社前に御池有て反橋二所にあり其間に中島あり（直橋あり）御池の廻り百八間あり凡唐院の地東西五十三間南北百七十間あり寵門山東に聳え天拜山西に向ひ染川前に流れ石踏（イフミ）河北にながる又四王寺大城山北に峙ち南に芦城驛右に觀世音寺ありまた都府樓又太宰府官舍等の跡其西につらなり山川村里のさまなど世に勝れてめでたき處なり、（東鑑二十三卷）に天台ノ末寺大山寺云云と云事あり考ふべし是は四王寺を云か、

社地

大山寺

祭事

○山王社

〔觀世音寺年中行事〕に正月朔日元節供鎭主日吉山王廿一社御供有レ之同廿三膳原山衆僧廿一人出仕法事有レ之云云四月中ノ申鎭主日吉山王宮御神事有レ之四ヶ法用同勅使座管絃衆會有レ之公物七石五斗烏目卅五貫文吉川庄運送之云云九月九日日吉山王御祭禮法事有レ之原山・有智山衆僧出仕有レ之云云、〔觀世音寺假面ノ裡書〕に日吉ノ御神寶龍王ノ面四ノ內應永十年癸未三月廿七日觀音寺兼修理勾當一番長圓とあり、さて吉川庄とあるは鞍手郡吉川庄を云なり彼庄に今山王ノ社を祭て庄內の本居神とす、（吉川山王の事は鞍手郡の內に委しくいへるを考ふべし、）〔年中行事月々入目之覺書〕に四月中米七石五斗

吉川庄祭事

観世音寺鎮守龍王假面

戒壇法事山王神事鳥目卅五貫衆僧布施物酒飯之入目有レ之、又〔天文十三年八月七日〕大府宣〕に三笠郡觀世音寺ノ執行領云云　日吉田肆町壹段とあり、〔長野氏云〕山王神社ハ産神なり日吉廿一社を祭る、此社は元觀世音寺の鎮守なり故に今も觀世音寺より奉祀す九月九日に祭あり、神寶に龍王の假面三ッあり、其内一ッは甚大なり長一尺二寸中七寸五分金色にして頂に龍形あり其狀貌奇異なり〔裡書〕に云云一ッは赤色一ッは青色此二ッは龍形なし二面共に其形狀はひとし〔裡書〕に云云四ノ内とあれど今は三ッあり、

○平野社

〔大府宣〕太宰府廳官人等應レ任二早廳ノ宣一管筑前國三笠郡觀世音寺執行領寺内泉八段・祇園ノ前高橋口二段　日吉田肆町壹段・末院西林寺貳町六段付屋敷ハ限二塔ノ尾一　平野社敷地廿五町西坊敷地分等事、右謹而勘案内云件田畠屋敷等瞻閻法眼代々相傳云云　早令知行應奉祈寶祚延長國家安全者在廳官人等宜二承知一依レ宣行レ之以宣天文十三年八月七日大貳多々良朝臣花押とあり、かさねて委く考ふべし、泉吉田などいへるも御笠郡の内なるべし、

○若宮八幡社

〔觀世音寺年中行事〕に正月云云祇園若宮八幡諸堂諸院十八日列講法事有レ之御供佛

祭事

鞍手若宮八幡宮

祭事

餉米四拾五石筑後國大石庄運送之一八月三石三斗准絹一疋同若宮八幡御祭禮諸堂諸院法花三味僧布施物貳十五貫文同御供佛餉米七石三斗、合拾石六斗五合吉川庄運送之一十月十五日八幡宮若宮冬ノ壬子御祭禮有レ之一石六斗同御供料四斗云云「定使例食一石云云公物」青木庄運送之一とあり、青木は志摩郡にあり、鞍手郡吉川庄に近く若宮八幡社あり是もこゝの若宮八幡社を本にて祭れるにやなほよく考ふべし、

○祇園社

〔觀世音寺年中行事〕に正月云云　鬼取寺役幷祇園若宮八幡諸堂諸院　十八日例講法事有レ之六月十五日祇園會三笠郡町人六座役有レ之後土御門院文正元年能始ル、寺役社司共有レ之同十八日於二大講堂一例講酒肴公物志摩郡御床供米拾石七斗志摩郡舟越庄運送之、又〔天文十三年八月七日ノ大府宣〕に三笠郡觀世音寺執行領、寺内泉八段・祇園ノ前高橋口貳段・日吉田肆町壹段云云などあり、なほかさねて考ふべし、吉田とあるは志摩郡の吉田をいふか、

○宰相殿社

小野宰相位階

〔古今著聞集一卷〕に小野ノ宰相殿は天神四世の苗裔なり、寛弘六年十二月八十五にて失給ひ其後神と顯れて叢祠を唐壇ノ傍にひらけり萬壽三年三月に贈正一位の加階に預給ひけりとあり、此事委しく二十一卷ノ細注に出せり合せ見るべし、

御靈岩

○御靈社

〔安樂寺御領目錄〕に云云　當御代御寄進所、門上村、御靈社に寄進之に凶徒押に領之に とあり、〔安樂寺草創日記〕に御靈大門供奉良勢、後冷泉院康平元年大貳、從二位高階朝臣成章奉レ祭レ之とあるとは別かなほよく考ふべし、又〔授衣記〕曰靈岩、俗云岩崎即チ尊神第一ノ眷屬御靈大明神之廟所也鐵牛圓心和尚誕生之靈地也ともあり、

安行堤

○味酒安行社

味坂安行三宮司祖

〔群書類從廿卷最鎮記文〕曰官符太政官云云　案に事情に安樂寺、味酒安行去延喜年中始所に建立也安行死之後始、自に天德三年に以に氏人解に言に上於官に補に任寺司に年序漸久云云　とあり、〔師說〕に味酒安行ノ社は山上町に在リ社ノ後に野石塔あり安行ノ墳ならんと云、〔同說〕に安行は武內大臣ノ裔平群ノ木兎宿禰ノ後なり世々儒家にして菅家ノ御門徒なり安行ノ父は直講淨成（朝カ）臣也延曆弘法大師此人に就て〔尙書〕及〔毛詩〕〔左氏傳〕を受ケられし由、大師ノ〔行化記〕に見えたり安行臣は即淨成ノ子なり菅神筑紫に赴き給ふ時に從奉リ蒙給ひし後祠堂を構へて祀らるさて後康保元年九月十七日卒せらる年は百余歲なり、此人ノ子三人あり安秀・行成・善重と云是三宮司の祖なり、

大浦

○遍知院（安樂寺草創日記）

〔同書〕に遍知院本尊釋迦如來一條院長保三年辛丑寄に進博多庄大浦寺庄 とあり、是も重て考ふべし、大浦といふは志加島などの事にはあらぬにや〔万葉集〕志加島の歌に大浦田ぬといふ事見えたり、

○西堂

所在

〔同書〕に西堂四寺ノ未申ノ隅本尊阿彌陀、今十一面觀音とあり、是も重て考ふべし、是も四堂のひとつなり、西堂は本社の坤ノ隅にあり長和四年阿志岐ノ御封寄進、

東院創立院領

○菩薩院

〔同書〕に菩薩院號に東院、本尊阿彌陀如來、後一條院治安二年壬戌修に造之に寄に進紫田五十町に堂僧六人行事知院三味各給田在に朝安寺に上座郡內號に四丁に園東院之末寺也とあり、是も重て考ふべし、園東院の事もなほ考へおかまほし、

建立院領

○往生院

〔同書〕に往生院、本尊阿彌陀如來、後一條院治安三年癸亥建立　惟憲大貳都督万壽元年甲子寄に進土師庄百十七町二百三十步三味六口供田十云云　とあり、是も重て考ふべし、土師とあるは穗波郡のなるべし、

牛堂創立堂料

○西法華堂

〔同書〕に西法華堂號に牛堂、後一條院御願本尊大威德、万壽四年丁卯大貳惟憲建立、寄に進玉名ノ庄百十町三味六口燈油三斗六升代米七石二斗肥後國ノ玉名庄正富名役當郡原村供養料所ノとあり、是も重て考ふべし、玉名とあるは肥後國玉名郡なるべし、

○喜多院

〔同書〕に喜多院、四寺戌亥隅尺迦多寶普賢文殊今彌勒菩薩、後一條院御願長元五

建立院領　年壬申建立寄ニ進小仲庄・大肥庄等ニ當僧六人三昧六人とあり、是も重て考ふべし、小仲とあるは粕屋郡尾中村なるべし、

新堂堂領　○金堂

〔同書〕に金堂號ニ新堂ニ、本尊金剛胎藏、後冷泉院永承二年丁亥寄ニ進下妻庄五十三町一段一丈・副田庄七十町ニ堂僧六人三味六口預二人とあり、是も重て考ふべし、下妻は筑後國下妻郡なり、副田は豐前國田河郡副田なるべし、

○局堂

新三味堂堂領　〔同書〕に新三味堂號ニ局堂ニ、本尊阿彌陀如來五體并二天、後冷泉院永承二年丁亥寄ニ進神邊庄五十町ニ三味六口行事勾當在後冷泉院康平元年戊戌寄ニ進吉田庄四十町并散在田畠十八町ニとあり、是も重て考ふべし、在田は豐後國日田郡在田を云歟神邊・吉田はいまだ考へず、

○理趣院

建立　〔同書〕に理趣院本尊十一面觀音永承三年戊子建立修正料寺邊ニアリとあり、是も重て考ふべし、

○西御塔

御願塔院　〔同書〕に御願塔院號ニ西御塔ニ、白川院御願本尊尺迦多寶普賢文殊二天、永保二年壬戌帥權中納言藤原資仲承ヲ建立寄ニ進佐嘉庄四十三町三十歩(元本ニハ四ト アリ)・蠣久庄八十町・長尾三十町九禪師在三味六口在預三人承仕三人蠣久長尾修正募米餅二百枚米二斛四斗とあり、是も重て考ふべし、長尾は御笠郡なるか、佐嘉庄・蠣久庄はいまだおもひえず、〔糸山貞幹曰〕肥前國佐嘉郡に蠣久村ありそこに天滿宮の大社あり社僧を滿盛院といふかたがた由ありと覺ゆ、

佐嘉郡天滿宮

○淨土寺

〔同書〕に淨土寺東堂四寺辰巳隅阿彌陀如來三尊白川院永保三年寄ニ進幸津庄兩庄百五十町二百六十歩ニ三味六口在(東堂を淨土院と云歟ノ隅にあり四堂のひとつなり、)とあり、是も重て考ふべし、幸津はいかによむにやいまだ考へ得ず、〔糸山貞幹曰〕肥前國養父郡に幸津村あり幸津サイツと訓、

淨土院　肥前幸津

○滿願院

〔同書〕に滿願院本尊地藏不動(菩薩)毘沙門在、堀川院康和三年大江匡房建立、寄ニ進桑原庄三十町二三味六口預一人大祖社香園田島庄本木別府とあり、是も重て考ふべし、田島・本木は宗像郡にあり、桑原は志摩郡にあり是か大祖社は糟屋郡若杉を云か、香園いまだ思ひ得ず、

建立院領　桑原大祖

○滿善院

〔同書〕に滿善院號ニ新藥師堂ニ、藥師如來二天(アリ)、崇德院長承三年甲寅十二月日左京大夫兼筑前守公章朝臣建ニ立之ニとあり、是も重て考ふべし、

新藥師堂建立

○法華堂

建立堂領

〔同書〕に法華堂本尊尺迦多寶、安德天皇壽永二年壬卯七月棟上後鳥羽院元暦元年甲辰惟憲承寄ニ進博多庄五十五町ニ□□三昧六口預一人廣院不斷大般若料口別十二斛見ニ意趣牒狀ニとあり、是も重て考ふべし、

○新三重塔

建立

〔同書〕に新三重塔本尊尺迦多寶普賢文殊七條院ノ御願土御門院建永元年五月寄ニ進青木庄荒野三笠西郷兵馬田幷寺邊基肆中山ニとあり、是も重て考ふべし、青木は那珂郡のなるべし、三笠西郷是も筑前のなるべし、

○護福院

末院第一

太宰宣太宰府廳官人等可ニ任ニ早廳ノ宣ニ管筑前國太宰府觀世音寺執行聟閤法眼申護福院事、右末院四十九ヶ所ノ内彼一院爲ニ第一ニ爲ニ王法繁昌五穀成就ニ最勝講料云然近年不ニ知ニ行之ニ由、捧ニ先證ニ聟閤法眼訴申之間所令還補也者在廳官人等宜ニ承知ニ依ニ宣行ニ之以宣天文十四年二月廿二日　大貳多々良朝臣判とあり、（此書今はなし　寫本によれり）土地等の事はかさねて委しく考ふべし、

○花藏院

院領

〔文書〕に三笠郡之内華藏院領三町地之事近稔號ニ武領ニ半成候然處以ニ前々之續ニ御愁訴之段申聞候之間御安堵之趣被ニ申出ニ候千秋万歳候直書之事重而取成可ニ申候先從ニ私可ニ申旨候恐々謹言　天文十八年五月七日　花藏院西永坊御返報惟門判とあり、（花藏寺は觀世音寺四十九院の一なり、重て委く考ふべし、此比に筑紫氏此郡天山ノ城に住せり、〔長野氏云〕太宰少貳藤原資頼華藏院等ノ四刹を建立ありて其要をば華藏院に弾ずるよし〔鎮西要略〕に見えたり、）

○西林寺

〔天文十三年八月七日ノ大府宣〕に三笠郡觀世音寺執行領云云　末院西林寺貳町六段云云とあり、（西林寺も四十九院の一なり、土地等の事は重て考ふべし、）

○御靈院（御靈社と同物なり）

〔安樂寺草創日記〕に御靈大内供奉良勢、後冷泉院康平元年大貳從二位高階朝臣成章奉ニ崇ニ之、又〔觀世音寺年中行事〕に三月三日桃花會幷傳敎弘法兩大師供於ニ御靈院ニ寺役有ニ之同觀音ノ節供餅三十二折同沓形同草餅同野老十七合公物三石五斗幷酒肴有ニ之吉川庄運ニ送之ニとあるは御靈御靈院同物なるべし、吉川庄は鞍手郡にあり、

○藥師堂

二王堂

追儺鬼スベ堂

〔同書〕に二王堂、惟憲承ヲ建立ヲ長保四年壬寅三月九日遍知院ノ王ヲ藥師堂ノ前ニ移ヲとあり、王字の前後に落字あるべし、なほ重て考ふべし、（王ノ上に二ノ字をおとせるにや、〔長野氏云〕）藥師堂は俗に鬼フスベ堂と云是安樂寺の大講堂なり、藥師佛十二神將を安置す

正月七日儺鬼をすぶ是は寛和二年都督輔正卿の時に始めらる、〔觀世音寺年中行事〕に七月七夕會於藥師堂一法事有レ之同盆供米小俵十五五斗入備前佛前之とあり、前に擧たる藥師と同物なるにや、〔永野氏云〕藥師堂は云云傳教大師の作試の藥師と云日光月光十二神將あり、鐘あり無銘なり、慶安二年に(以下同文)

○眷王寺

〔同書〕に十一月大師供衆僧出仕有レ之公物三石六斗天智天皇御祭事、原山・有智山寺僧出仕有レ之大般若十二部眷王寺ニテ御祈禱札守墨島ヨリ諸用運送有レ之とあり、眷王寺は觀世音寺四十九院ノ内とあり、墨島と云はめづらしき地名なり、なほ重て委しく考ふべし、

○平等寺

〔舊記〕に御笠郡廢寺平等寺ハ在二平等寺村一とあり、廢趾の事重て考ふべし、

○十王堂

〔舊記〕に御笠郡廢寺十王堂在二塔原村一とあり、是も廢趾の事かさねて考ふべし、

○光明寺

〔師說〕(此字ハ脫入カ)に光明寺は禪宗濟下承天寺に屬す、天滿宮縮素ノ靈の菩提寺なり、寺產六十石神領ノ內を領す、開山を鐵牛圓心和尚と云俗姓は菅原氏母は辨ノ君と云、〔同說〕に猿樂の藍染川と云說には梅靈ノ侍從とあり法名を如海大姉と云和尚は建長六年九月朔當所靈岩の左邊に誕(ウマ)る剃髮して聖一國師ノ弟子となり嘉歷元年九月廿四日に寂せり文永八年十月十五日菅神承天寺ノ丈室の裡に

寺領
圓心和尚

平等寺村

現じ給ひて經山の傳衣を以て和尚に告て是を安置せしめらる時に和尚承天寺に主たり即同月廿五日當寺を立て菅神の付與し給ひし伽梨を藏めて衣塔を造る其後文永十年菅神夢裡の告に依て山を靈岩神護と名付寺を光明寺と云、寺ノ西の山岸に大岩重疊したる所あり是を靈岩と云、其前に石ノ塔あり傳衣ノ塔と云、〔授衣記〕曰靈岩(俗云崎ノ宮)即尊神第一ノ眷屬御靈大明神之廟所也鐵牛圓心和尚誕生之靈地也と見えたり、寺ノ內に徑山無準和尚の像鐵牛和尚の像あり、寺前ノ小流は即ち藍染川なり昔は岩踏川の派神廣の四ノ側を流れこゝに來たなり此溪水に會せり其時こゝに淵あり鐵牛ノ母辨ノ君身を投られ建たる處と云岩踏川の派埋りてより今は聊カなる流れとなり川ノ中ニ高サ三尺餘の野石面に梵字を彫たる墓と云物あり是如海大姉ノ塔なりゆゑに道ノ側に辨ノ君ノ墓と云語傳にも詳なられず此處彼人なる處を投られし淵の趾なりと云、又宰府ノ町より板寺なるべし、人の在京せる時に梅靈ノ侍從とあ云女房に馴て梅千代と云子を產ノ其後頼澄筑紫に歸る時に彼女房と梅千代とを一條今出川の宅に殘しおき年月經て音信も せざりしかば波女房梅千代を擔へて其夫を尋て太宰府に下りけるを嫡妻の嫉妬に因て父ノ命と偽て京に追歸せけり此女房いたく恨て藍染川に身を投て空く成たる由云り〔菅原氏ノ系圖〕を按ずるに頼澄と云人なし但し頼澄は後深草院ノ御代の年號なり、〔授

寺領
圓心和尚

靈岩傳衣塔

波宋天神

明山堂

藍染川

辨君墓

〔頼澄〕

藤原資頼

(原書本紙ノ書三把ス却入ノ個所不明ナルヲ以テ此處ニ附ス)

〔鎮西要略二卷〕に安貞二年八月廿五日前大都督(ママ)司馬小卿從五位上兼筑後守藤資頼法師覺佛卒世壽六十九歲說ニ安養院殿一下四利資頼朝臣之塔頭安養院而宕者歟藏院(以)覺佛有二四男子一嫡子資能爲都督次男名頼茂出雲氏之祖也三名爲頼氏爲筱田名頼基其子頼貞以爲肥後守氏肥後子孫繁茂也

筑前之二十二(御笠郡二)終

寺封
齊明誓願
營作
造寺加營
食封
玄昉造營
玄昉異聽

筑前之二十三

○御笠郡三

○觀世音寺

〔續紀二卷〕に大寶元年八月甲辰太政官處分云云、觀世音寺尼寺ノ封戶ニ大寶元年ニ計滿ニ五歲ニ並停ニ止之ニ皆准ヘ封施ヘ物、〔同書四卷〕に和銅二年二月戊子詔曰筑紫觀世音寺淡海大津ノ宮ニ後岡本宮御宇天皇奉爲ニ後岡本宮御宇天皇誓願所ヘ基也雖ヘ累ニ年代迄ヘ今未ヘ了、宜下太宰商量充ニ駈使丁五十許人ニ及遂ニ閑月差ニ發人夫ニ專加ニ檢校ニ早令ニ營作ニ、〔元亨釋書二十一卷〕に和銅二年二月詔曰筑紫觀世音寺者淡海大津ノ宮天皇願ニ岡本ノ宮ニ所ヘ創也累世不ヘ竟朕痛耻ヘ爲太宰府加ニ檢校修營ニ、〔同書九卷〕に養老七年二月丁酉勅ニ僧滿誓ニ（俗名從四位上笠朝臣麻呂）於ニ筑紫ニ令ヘ造ニ觀世音寺ニ、〔萬葉集三卷〕に造ニ筑紫觀世音寺ニ別當沙彌滿誓歌ニ島總立足柄山船木伐樹爾伐、歸都安多良船材乎、〔同書十三卷〕に天平十年三月丙申云云限ニ五年ニ施ニ觀世音寺食封一百戶ニ、〔同書十五卷〕に天平十六年十一月乙卯遣ニ玄昉法師ニ造ニ筑紫觀世音寺ニ、〔同書廿二卷〕に天平十七年冬十有一月遣ニ玄昉ニ檢ニ構觀世音寺ニ、〔元亨釋書廿二卷〕に聖武皇帝二十有一年冬十有一月遣ニ玄昉ニ檢ニ構觀世音寺ニ云云、天平十八年六月觀世音寺成昉匠度ヘ之忽空中提ヘ昉不ヘ見ニ其形ニ後昉頭落ニ興福寺ノ唐院ニ初太宰帥督司馬藤原廣嗣叛奚奚昉通ニ花鳥使ニ司馬嗣、白ヘ此興ヘ昉有ヘ郤十二年司馬反大將軍野東人討ヘ之、司馬亡而數年矣其靈及ニ於此ニ也、〔塵添壒囊抄二卷〕に玄昉僧正入唐ノ淄州ノ知周大師ニ逢テ法相宗ヲ習給ひしに唐人ゲンバツと云同音の字に遇ヒテ亡ルと云訓ありと雖じたりしより歸朝の後筑紫觀世音寺を供養せられける時空より雷鳴す下りて玄昉を提げて空中に入りけるが頭を興福寺の唐院に落す是太宰少貳藤原廣嗣が所爲也と云云、〔元亨釋書廿二卷〕に天平廿

寺庄田
墾田
附空海
弘法寺
度牒

一年七月初二太子即ヘ位、勅定ニ諸寺莊田ニ云云、下野藥師寺筑紫觀世音寺各五千畝、〔續紀廿七卷〕に天平勝寶元年閏五月乙巳定ニ諸寺墾田ニ云云筑紫觀世音寺寺別五百町、〔同書廿九卷〕に神護景雲二年九月辛巳先ヘ是勅如聞太宰府收ニ觀世音寺墾田ニ班ニ給百姓ニ事如ヘ有ヘ實深乖ニ道理ニ宜下下ニ所司ニ研ニ其根源ニ即仰ニ太宰ニ搜ニ求舊記ニ至ニ是日ニ奉ヘ勅班ニ給百姓ニ見開田十二町四段捨ニ入寺ニ園地卅六町六段依ヘ舊爲ニ公地ニ、〔行化記〕に府牒云觀音寺三綱入ヘ唐廻來學問空海師、右件僧負ニ笈遠蕃ニ躭ニ嗜大道ニ空往滿歸、優學可ヘ稱、今及ヘ歸暫住ニ彼寺ニ宜至ニ于入ヘ京之日ニ准借例充供養牒件狀如ヘ前故牒、大同二年四月二十九日正六位上行大典大村直繼麻呂・大貳從四位下藤原朝臣藤嗣、（觀世音寺ノ別院四十所ノ內に弘法寺あり此時に住めりし所などにて負せたるか、）〔類聚三代格二今本〕天長五年二月二十八日ノ官符に應ニ諸國ノ國分寺ノ僧廿口之內得ニ度年分五人ニ事、右得ニ太宰府解ニ�uｲ、觀音寺ノ講師傳燈大法師位光豐牒偉、依ニ太政官去弘仁十二年十二月二十六日ノ符ニ度六十已上三人既以ニ老耄之極ニ始入ニ甚深之道ニ勤學修行更無ニ如何ニ至ニ於梵唄散花用音之事ニ令ニ會集ニ者掩ヘ口大咲、加以三綱之職多ニ米鹽ニ修ニ理堂塔ニ料、齋養曾無ニ強堪者ニ破ニ寺食供ニ莫ヘ大ニ於斯ニ望請年二十五以上者五人每ヘ寺聽ヘ度固擇ニ才行ニ糾ニ僞濫ニ死亡之替相續將ヘ度庶幾駐ニ佛日於欲ヘ沒建ニ法幢於將ニ倒者府加ニ覆審ニ所ヘ陳有ヘ實仍請ニ官裁ニ者中納言兼左近衛大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣奉ヘ勅

舍利安置

依レ請自餘諸國亦宜レ准レ此、〔後紀今本十九卷〕に天長七年三月乙巳佛舍利五百粒令下太宰府觀音寺講師光豐安置彼府管內ノ國分寺及諸定額寺上、〔續後紀十四卷〕に承和十一年夏四月壬戌太宰府言、管大隅薩摩壹岐等國島選レ人任レ職大小是同、除レ灾祈レ福、彼此不レ異、方今比國皆有講讀之職（薩ノ下條正月宮居郡而作國島選無職讀之職ノ十七字脫ス）還失鎮護之助、加以國分二寺ノ雜物觸類夥多既無綱維、令誰檢領、望請准諸國之例置講讀師者府司商量所レ陳有レ理望請准管內ノ諸國醫師（博士）之例府司於觀音寺與彼講師共簡（弁ノ下勅旨師者四字脫ス）試部內精進練行智德有聞堪任講筵終始無變者將補任之者依請補任讀師者莫更置但安居齋會之日依延曆廿五年三月格以國分寺僧次第講之、〔文德實錄五卷〕に仁壽三年五月壬寅詔太宰府於觀世音彌勒兩寺幷四王院香椎廟管內國分寺讀（來ノ上ニ來條迎取大令大民庶迎都令十大民庶ノ十七字脫ス）大般若經、〔三代實錄五卷〕に貞觀二年正月二十一日宣詔來三月十四日當設无遮之大會極莊嚴之妙態宜自十一日至廿日禁斷殺生至會日於國分二寺（ノ下供養ノ二字脫ス）各開齋會請集部內僧尼幷爲其料物便用正稅其於太宰府觀音寺修之（十二）令導師具演事由兼令會集僧尼俱稱讃嘆舍那佛號、〔同書十一卷〕に貞觀七年三月四日太宰府解你、觀世音寺講師傳燈大法師位性忠申牒寺家人清貞宗位等三人從五位下笠朝臣麻呂五代之孫也麻呂天平年中爲造寺使麻呂通寺家女赤須生清貞等即隨母爲家人清貞祖父夏麻呂向太政官幷太宰府頻經披許而未

大佛供養於觀音寺

讀般若經

造寺使笠麻呂

法服布施用途供養料

蒙勅裁夏麻呂死去、清貞等愁猶未レ有レ止、寺家覆察、事非虛妄望請准據格旨徙居貫附筑後國竹野郡太政官處分依請、〔延喜主稅式〕に凡諸國自正月八日至十四日請部內諸寺僧於國廳行吉祥悔過法總計七僧布施絁七疋、綿七屯調布十四端、法服絁廿疋、綿十四屯、混合准レ價、平等布施、其布施供養並用正稅但太宰觀世音寺法服布施並用府庫物數同諸國例佛聖供養料稻五百卅七束五把二分以筑前國正稅充レ之、〔同書〕玄蕃寮式に凡太宰觀音寺講讀師者預知管內諸國講讀師所申之政（源氏物語玉蔓ノ卷）に大貳のみたちのうへのしみづのみてらの觀世音にまゐり給ひしいきがまうでなり、（ほひはみかどのみゆきにやはおとれる云云とあるも此寺を云なりみたちの上とあるは大貳なり、）〔元亨釋書廿五卷〕に永承皇帝二十有一年冬十有一月復慶太宰府觀世音寺、〔百練抄四卷〕に康平七年十二月十八日諸卿定申太宰府觀世音寺炎上事、治曆二年十一月廿八日公家供養太宰府觀音寺、〔元亨釋書廿五卷〕に治曆二年十一月詔太宰府慶觀世音寺云云初觀世音寺火不空羂索像不レ壞宰府奏レ之特旨復慶、〔傳說〕に觀世音寺康平七年五月十七日白日に火有て金堂法堂四十二區の僧坊其外諸堂一宇も殘らず燒失せり此時太宰官人正三位藤原師長建立志有て治曆元年八月廿二日柱立有て二年十一月廿一日に成就すといへども古の十分一に及はず、〔觀世音寺資財帳〕に觀世音寺嘉保□年寶藏實錄日記、一見在第一韓櫃玉冠壹蓋前帳云玉拾丸永保三年帳云見在一丸殘無實寬治六年帳云玉無實今檢、銀碗貳口、前帳云二

復慶

康平炎上

治曆供養

復慶

薩原師長治曆建立資財

第一韓櫃

第二韓櫃

第三韓櫃

口有レ蓋各一枚、全者今検見在四足中（ロカ）二口有レ蓋二口無レ蓋 永保三年帳云見在銅鋺（有）二徳口幷蓋非二銀鋺一寛治六年帳云今検同前、牙笏壹枚前帳云注長一尺一寸四分入黒漆笥者寛治六年レ帳云今勘以紙園裏青色紙今検犀角坏一口、前帳云口缺三所各一分者寛治六年帳云今検同レ前今検紫染絹合佛蓋貳帳、前帳云表綾裏絹其縁所々損者悉朽損一帳云注穀也裏皆深紫又所々損者悉損無レ實寛治六年帳云今検同前、第二韓櫃鏡參拾參面九寸圓花形一面七寸花形一面件鏡一面治暦二年八月四日下用中尊御蓋（天）料、六寸四面三面全一面自レ中破損無片破件内花形一面治暦二年八月（四日）下用同前、七寸丸壹面件壹面同料下用了 五寸十三面件内丸貳面同天蓋料下用了四寸丸三面六寸丸□面三寸四面全一面中（三面）穿一尺丸一面前帳云本北政所納今移納者、九寸一面裏螺鈿入二黒漆箱一前帳云數三十七面也四面（爲二海賊一）掠取也見在三十三面者治暦二年八月四日講堂中尊天蓋料下用者今検見在二十八面也注先帳六寸四面内片破一面無レ實寛治六年帳云今検同前、第三レ韓櫃白銅窪鏡拾帖、前帳云八十一口治暦二年八月十九日講堂不空羂索御閼伽陸口料下用殘七十五口者寛治六年レ帳云今検同前、同平鋺壹口、前帳云全寛治六年帳云同前今撿銅箸貳具前帳云全寛治六年帳云同前今検、白銅尻付鋺貳口（在蓋）同酒坏貳口前帳云一口入五合有レ蓋但蓋破一口

第四韓櫃

第五韓櫃

第六韓櫃

第七韓櫃

入二合有蓋寛治六年帳云今検同前今検、同壺貳口前帳云全寛治六年帳云今検同前今検、同丸鋺二口前帳云有蓋各一枚但一枚元葱花形鏡（脱）治六年帳云今検同前今検、同盤參枚前帳云一枚端小破寛治六年帳云、鏤白銅合子壹合今検見在但元納物已管限也、第四韓櫃銅平鋺漆口白銅壺貳口前帳云一口有レ蓋有レ臺一无レ實者而見在壹口治暦二年九月十二日不空羂索御閼伽器脇盤鑄下用者永保三年レ帳云无實寛治六年帳云今検同前今検、銅火爐壹鐵鐙貳懸、虎鞍鐙一懸、小鍾一口、唐頭壹面前帳云不レ具寛治六年帳云□今検、銅銚子貳口前帳云全一口有レ蓋損一口无レ蓋寛治六年帳云今検同前、銅鉞子貳具、永保三年レ帳云無レ實寛治六年帳云今検同前、第五韓櫃入吳樂儛調度、前帳云破損仍不レ注二色目一者治暦二年七月十三日講堂レ中尊御料内下用已了但見在銅陸斤者寛治六年帳云今検同前今検、第六レ韓櫃鐵槌壹雙小同鉢一口前帳云尻四所穿寛治六年帳云今検同前今検、勾鐵貳隻、車鉦貳拾肆、前帳云廿五口也而二十二口全三口破者、寛治六年帳云今検見在廿三口者今検、鐵鑿一隻杖鐵尻壹隻、方磬調度貳拾肆枚前帳云加三枚、今検見在廿七枚者寛治六年帳云今検同前今検、鐵箸壹隻前帳云片平料鍛冶箸寛治六年帳云今検同前今検、同盤貳枚戸調度漸鑓伍隻、第七レ韓櫃、鈴捌拾參口前帳云八十三口治暦二年七月十三日用下貳拾玖口講堂觀音御天蓋料者今検殘見在五十四口者寛治六年帳云今

檢同前、沉香拾肆兩銅印一件兩色前帳云全寛治六年帳云今檢今檢、玉貳仟貳佰捌拾漆丸赤三丸青千三百七十七丸大卅八丸小千二百卅七丸水精六丸大三小三寛治六年帳云今檢五丸（大二丸 小三丸）二丸無實者今檢、蛇玉陌陸丸、誦珠陸貫、前帳云水精三貫一亂絁緒虎珀二貫一亂絁木一貫者寛治六年帳云今檢同前、練金貳拾貳兩、前帳云一裏燒三兩二分二枚之中一枚重十二兩、一枚重五兩二分、同年帳注見在一枚重六兩一分者治歴二年七月十三日講堂觀音御料下用伍兩壹分者寛治六年帳云今檢同（白裏大宮片地兩前帳云六前今檢云今檢同前今檢、繡經帙壹枚、前帳云入黑漆韓櫃寛治六年帳云今檢同前今檢、柳筥貳合、前帳云見在中一小一、今檢、第八韓櫃、幡參拾捌流、前帳云大幡十、小幡十、全、自餘大破不用、寛治六年今檢同前今檢、紫染綱貳條、前帳云見在一條所々絶損无實一條今檢端々絶損也寛治六年帳云今檢同前、琵琶一面、前帳云損物无頭腹絃、永保三年帳無實寛治六年帳云今檢同前、今檢同、第九韓櫃、銅水瓶陸口、前帳云水瓶一口尼瓶五口无蓋今檢在水瓶二口自餘同前、大水瓶貳口、白銅一肆口、前帳云大一口有蓋并蓋但壺腹方一寸穿中一口无蓋二口有蓋寛治六年帳云今檢同前、同白銅壺一口納二合、龍頭一面銅、油坏參面、欠一口前帳云全今檢、同前今檢、銅輪一合、第十韓櫃、琴貳帳、一帳頭斤角并足歇落无軫一一帳無軫二、今檢損色目、同先帳又無絃今檢、箜篌一面前帳注大破無絃今檢同前、今檢、吳床一脚、前帳云

第八韓櫃

第九韓櫃

第十韓櫃

左右端繼用、今檢同前、今檢、權衡貳柄、前帳云一柄全、無緒、今檢同前、今檢、第十一韓櫃、胡粉拾貳兩、前帳云小一兩、今檢長德三年十月一日下用御寺大佛彩色料者寛治六年帳云今檢同前、今檢、朱砂陸斤參分、前帳云小六斤一兩三分一裏、大十四兩一分一裏、小十三兩无實七斤十四兩一分、今檢同用者寛治六年帳云今檢同前、錦衲袈裟壹條、前帳云所々破損、寛治六年帳今檢盡皆朽損、紺衲袈裟一條、前帳云所損同前帳寛治六年帳云同前、白銅鋺貳拾口（今檢）白銅香爐壹口、第十二韓櫃造面參拾貳面、前帳云破損寛治六年帳云今檢同前今檢、衣伍拾漆領、前帳云見在五十七領、十四領全、十五領各三所二寸破損二十八領各六寸損、寛治六年帳云今檢同前今檢、袴參拾壹腰、前帳云見在廿九腰已破損、寛治六年帳云今檢同前、第十三韓櫃、花机覆伍條、前帳云皆損、寛治六年帳云今檢同前今檢、青表裏緋横盖壹條、前帳云全、寛治六年帳云今檢同前今檢、青絹纈貳幅、前帳云所々破損、寛治六年帳云今檢同前、色々絹端參條、前帳云各三尺寛治六年帳云今檢同前今檢、支子染絹二丈五尺、前帳云損寛治六年帳云今檢同前今檢、白練絹一條、前帳云二尺五寸、寛治六年帳云今檢同前今檢、佛蓋壹條、前帳云表紫裏緋所々破損、寛治六年帳云今檢同前今檢、白横蓋壹條、前帳云注單先合寛治六年帳云今檢同前今檢、綿綾交繡蓋一條、以玉裝束也全、今檢、第十四韓櫃纈褥壹條、前帳云注裏黄大破不用寛治六年帳云今檢同前今檢、

第十一韓櫃

第十二韓櫃

第十三韓櫃

第十四韓櫃

第十五韓櫃　第十六韓櫃

白綾材取小褥壹條、前帳云裏黄大破不レ用今檢同前今檢、紫褥一條裏白、前帳云全、寛治六年帳云今檢同前、紫綿褥貳條、前帳云裏緋大破不レ用、寛治六年帳云今檢同前今檢、白絹帷一條、前帳云四幅一所朽根方三寸、寛治六年帳云今檢同前、緋綾褥參條、前帳云五所朽損方三寸、寛治六年帳云今檢同前今檢、紺打敷壹條裏緋、前帳云全寛治六年帳云今檢同前、緋綾褥壹條、前帳云裏紺二所方寸破損寛治六年帳云今檢同前今檢、絲絹單帳壹條、三所穿方一寸、綿褥壹條、前帳云大破段々寛治六年帳云今檢同前、花机紗覆五條、前帳云四所朽損方一寸寛治六年帳云今檢同前今檢、青絹二丈、前帳云破損寛治六年帳云今檢帳云二所朽損寛治六年帳云今檢同前今檢、黄蓋一條、前帳云裏緋不レ用寛治六年帳云今檢同前今檢、黄絹壹丈、佛蓋骨拾枝、緋絹壹丈三尺、前帳云大破、寛治六年帳云、今檢同前今檢、白絹土敗（打カ）貳條、前帳云二所穿方二寸、寛治六年帳云今檢同前今檢、第十五韓櫃（韓ノ字落ダルカ）入灌頂一流、前帳云大破不レ用寛治六年帳云今檢同前、第十六韓櫃前帳云朽損裝束拾餘領段々不レ用不レ能レ注（不用ノ次ニ不見北倉目錄二十合段段々不用ノ一句脱ス）色目（座）寛治六年帳云今檢同前、別納、白檀八角淨土壹張（高九寸六分下徑四寸）大唐佛像、右檢去天暦四年六月十四日云釋迦牟尼佛、右方御手落失、又舞菩薩一體落失也、藥師佛蓋頂欠、外陣レ飛天四體缺、又外地音聲菩薩缺、外地戸打立无輪也、寛治六年帳云、今檢同前今檢、錫杖

中補觀世戒壇師

參柄、同前帳云見在貳柄之内、一柄全、一柄折者、今檢已見在、但一柄无レ枝今檢、師子頭像一面、前帳云无二彩色一者、寛治六年帳云今檢同前今檢、金剛一面、前帳云（前帳云無彩色今檢同前今檢ノ二面脱ス）无二彩色一今檢同前今檢、厨子壹基、前帳云入古弊不レ用幡无戸番今檢、同前今檢、箏一雙、前帳云大破不レ用今檢同前今檢、又別納、鏍鈿鞍骨一口、在半舌鐙一懸、別當覺命施入者、一無レ實大刀伍拵、延喜十七年交替定一柄有レ緒長三尺以金飾、三柄並黒作、一柄長三尺六分、一柄長三尺八寸一柄長□横刀壹柄（黒作）小刀拾肆柄、二柄鞘柄並牙、七柄並木鞘、四柄革鞘、練金拾伍兩參分、梓弓一張、無レ絃、入二紫綾袋一、三尺破損、葛壺胡簶、箭敷不レ知、水銀貳拾壹斤拾參兩、入二二瓶一以前寶藏雜物、見在無レ實、具以勘錄、但至二于无レ實者以二去天慶四年一爲レ賊被二掠取一也、仍勘記如レ件、嘉保年月日　權都維那法師・權都維那法師・都維那從儀師（此四人は下に書り）講師兼別當大法師位・講師傳燈大法師位・上座傳燈大法師位・權上座威儀師大法師位・權上座威儀師大法師位・權上座傳燈大法師位・寺主傳燈大法師位・權寺主威儀師大法師位・權寺主傳燈大法師位・權寺主傳燈大法師位・權寺主威儀師大法師位・權寺主傳燈大法師位・權寺主傳燈大法師位・權寺主〔朝野群載十六卷〕に（巻二四）中東大寺中、太宰府觀世音寺登壇ノ戒師舉狀云云　請被快任二先阿一補任脊四大法師代觀世音寺登壇ノ戒師狀舉進傳灯大法師位光清（年號）右大法師等

謹檢案内、難須登（賀）因任夏陵（祐）次第下向彼寺勤仕御願向道（西）路遼遠山海險岨年老病重不堪行歩、因茲簡定（尚）堪爲其器、大法師光清彼寺戒師可（房）舉達也望請本寺早奏聞公家、被賜官符、仍勤事狀以解康和二年九月十七日（寛治七年）教授傳灯大法師便圓（住）參（秀）、約（永承四年）慶傳灯大法師位宗快、和上傳灯大法師位齊圓、〔外記局日記〕□□〔卷〕に康治元年七月十九日今日左大臣召外記、下給太宰解、可勘例、其狀云去六月廿一日夜觀世音寺堂廻廊燒亡、件寺是都府之大厦天智天皇以後元明天皇已往五代之聖主相續草創之御願也五百餘年之間奉祈國家、不退之砌也但於塔者康平七年五月十一日燒亡云云中尊、丈六金銅阿彌陀如來、像在猛火之中、尊容無變、昔自百濟國奉渡之、〔百練抄七卷〕に康治二年六月二十一日太宰府觀世音寺堂塔燒亡、此寺、天智天皇以後光明皇后以往五代、聖主相續草創、御願也、中尊阿彌陀百濟國之所獻在火中、尊容自若、〔傳說〕に天智天皇觀世音寺御建立の時唐土に命せて赤銅の阿彌陀の像を造らしめ給ふ此像を渡す事迎かりければ別に本尊を造て安置し給ふ其後百濟の入佛像を渡す故に是を脇立となし給ふ百濟より此佛を渡す時像の下にしきたる鐵の床がね志摩郡にとゞむ其床あるに依て御床村と號す赤銅の佛は天正十四年御笠郡岩屋合戰の時薩摩の軍勢其佛像を取て鑄に鑄る是を阿彌陀鑄と號すと云御床の床がねは今も志々岐神社の傍に草堂を造りて是を入レたり長四尺余横三尺六寸厚さ二寸余あり、又〔傳說〕に本尊は如意輪觀音にして坐像なり高さ一丈六尺あり是は天武天皇の勅願に因て安置し給ふ、西の脇は不空羂索觀音にして持統天皇の勅願なり、又阿彌陀佛體是は保安年中に太宰大貳國子の内に岐島觀音あり文武天皇の御時海中より引上し佛なりと云、又十一面觀音長寶安置す、又馬頭觀音一體是は大治年中に太宰大貳桓忠安置、又十一面觀音一體是は保延年に觀音寺の別當阿闍利雄寛安置せり、〔元亨釋書七卷〕に釋辨圓云云、仁治二年辛丑居崇福承天兩寺、盛倡祖道、太宰府有勝藍、名觀世音寺、歳首行驅儺、其日捕寺之四傍路人、頭蒙鬼面、身披彩服、名爲儺鬼、引過殿庭、此夜闔府男女入寺、打是鬼、爲驅儺、國俗自古有之、以故觀世音寺、四畔此日無行人、佗州旅客、往々來此就捉云云、（觀世音寺驅儺の事は弘仁三年に初まり應永の比まで年毎に執行せしと云、）〔宗祇筑紫紀行〕に觀音寺に參りぬ云云 堂塔廻廊皆跡もなくなりて石のみぞ昔のかたみとは見え侍る觀音の御堂は今に廢する事なしさては阿彌陀のおはします堂又戒壇院も形の如くあり、結繰して後ある坊に立よる當寺は南都東大寺の末寺なり彼衆徒此坊のあるじなり古き都の人なれば花たて空燒してえんなるさまに盃の心ばへ何となく心ざしなほざりに見えずくるゝほどに名におふ鐘の音ものゝすてがたく云云、（管家後草に都府櫻繩看瓦色、觀音寺唯明鐘聲といふ御作あり）〔明ノ薩天錫妙選稿〕に

無常ノ說法現神通、千里ノ飛梅一夜ノ松、萬事夢醒雲吐ノ月、觀音寺ノ裏一聲ノ鐘、

〔觀世音寺舊記〕に觀音寺別院四十九所寺號、護福院、光臺寺、西福寺、勝福寺、花藏寺、弘法寺、能滿寺、座禪寺、極樂寺、寶滿寺、妙見寺、學業寺、比留寺、軍勝寺、春王寺、曼哆羅寺、勝軍寺、佛餉寺、安定寺、宗德寺、學頭寺、光圓寺、千邊寺、西林寺、金光寺、東林寺、御願院、吉祥院、安養院、智德院、興安寺、常樂寺、正敎院、胸臆院、愛樂寺、福聚院、端正院、隨喜院、常光寺、滿堂寺、戒樂院、戒壇院、菩提寺云云、〔筑陽記十卷〕に御笠郡觀世音寺村清水山觀世音寺普門院云云 康平七年九月十一日火災堂院悉爲焦土、不空羂

康治火災

御床敷金阿彌陀鑄諸佛像

追儺祭

寺顯廢

鐘ノ聲

別院四十九寺內四十四寺

康平火災

建長再築
寛永之禍

索像不レ壞太宰少貳泰時重奏レ之、治暦二年十一月特旨複二慶之一、建長三年入宋ノ沙門濟寶悲二歎像設已朽損一周募二國人一再耀二金容一、治暦建長之寺記留存二佛胎ノ中一、寛永八年秋烈風暴雨而堂宇佛像頽毀矣不空絹索ノ像也不レ壞衆皆嘆異國主長政朝臣建二立一宇一安二絹索像一且破毀佛體納レ傍歴二五十七年一貞享五年戒壇院ノ律師正洞比丘博多聖福禪寺住僧万水和尚共歎二靈像ノ廢壞一勸二化信心ノ數輩一訴二復慶願於郡吏一宰官達二太守光之朝臣高聽一被レ感二其志一寄二良材若干一招二洛之佛工一修二覆佛像一再二建講堂一六間八間南向也、中尊聖觀音座像長九尺（巻目作）天智天皇ノ御願也、治暦建長之二卷并法華經一部寛永年中自二胎中一出而今在レ外在二胎中一者五百餘年紙墨不二蠹朽一同二新十一面立像一丈別當阿闍梨維寛造立、保延年中也、西ノ壇ノ一、十一面立像長一丈五尺持統天皇ノ御願也、同二馬頭立像長一丈六尺四面八臂大貳經忠建立大治年中也已上號二當寺ノ五體觀音一當國三十三所靈佛巡禮決願ノ札處也、岐島觀音聖觀音立像五尺文武天皇之時自二海中一出現地藏菩薩吉祥天女立像六尺余、毘沙門天王、立像長六尺、蹈二天之邪鬼三一ツ一内一一女面也阿彌陀一宇、額（弘法大師ノ筆彌陀ノ名號也阿彌陀如來ノ像座像長七尺大貳長實願也保安年中也、四天王各長七尺此外釋迦如來立像六尺地藏菩薩像四尺大黑天立像六尺二王各長一丈六尺已上未二修補一在二阿彌陀堂一、塔所跡在二堂東一眞柱之礎六尺四方近年石體之地藏造二立礎石ノ上一鎮

九體觀音

踏佛像

鎮守社

神寶

四十九院
古圖

留主坊
坊跡

觀音堂

守社、太神宮祇園午頭天皇・春日大明神、寶物者額一枚、觀世音寺ノ四大字一行、小野道風ノ筆、古鏡二面一面（稱二小松内府ノ寄進一）徑一尺八寸、一面（徑一尺六寸、伶人舞樂ノ面二ツ奇異之古作也、治暦建長ノ二卷、當寺伽藍ノ畫圖一幅、岩洞觀音畫（金岡若筆）狹ノ紫石硯一面、嘗聞觀世音寺上古者法相宗兼二六宗旨一眞言宗ノ衆徒昌蕃之大伽藍也中古覃二亂戟一逐レ年衰微天正年中國主金吾中納言秀秋沒二收寺領一因レ茲細徒分離寺院廢滅矣など見えたり、（四十九院ノ内五院は其名傳はらず、）又（觀世音寺ノ古圖）に廻廊三門あり廻廊ノ内に金堂五重ノ塔あり（塔は堂の左なり）本堂ノ後に總坊あり（長屋なり）傳教弘法二大師居所の跡と云物總坊の西ノ端にあり、（其外諸堂多し）二王門ノ外に鳥居又總築地あり總築地ノ内に戒壇院あり、（今ノ戒壇のある所、）（傳說）に觀世音寺僧ノ上首三坊あり第一を留主坊と號す（當寺の別當なり、）第二を西ノ坊と云、第三を上座坊と云さるを二坊は斷絶して唯留主坊のみ殘れりしを秀吉公九州征伐の時留主坊車に乘て秀吉公ノ前を通りしかば無禮なりとて多くの寺産を沒收してわづかに田地百町を殘して寺産と定められしを小早川隆景當國ノ主と成て後三百石ノ地を寄附せらる其義子秀秋に至て寺産盡く沒收せらる、（今わずかに五石五升三合の寺産あり）又中世に造れりし觀音堂は（横十四間長十八間）寛永七年に頽破せしを福岡天王寺屋了夢と云者數多の財寶を出し又夜須・御笠二郡ノ人の助力を得て元祿元年に堂を造る此時竹木又營作ノ役夫は領主より給へりと云是今の堂なり、（觀世音寺に草書に書くる額あり則觀世音寺の四字なり小野ノ道風の筆なりと

寺寶

鬼の引臼

云又後小松ノ院のみさめ給ひし唐鏡と云物あり徑六寸六歩、此外に一尺七寸余の鏡一ッあり、又昔の石臼として徑三尺二寸余の臼あり上臼厚八寸下臼厚七寸余あり是は往古に此寺を造る時米を引たる臼なりと云今も庭前にありて俗に鬼の引臼といふ御笠郡觀世音寺村ノ内なり、

○戒壇院

〔元亨釋書廿二卷〕に廢帝ノ寶字五年正月二十一日勅曰東山道下野ノ藥師寺・西海道筑ノ觀世音寺各立ニ戒壇一充ニ東西ノ戒業一也、〔同書廿七卷〕に初天下置ニ戒壇三所一筑之觀世音寺西州ノ民稟焉、〔信義堂空華集〕に昔日本に設ル壇て戒を受る所あり筑前ノ觀世音寺は西人□（和）尚來朝して廢められしより東大寺及下野の藥師寺に戒壇を立て、此戒をうけぬ物は僧籍につらならぬ事になりにき、〔延喜式〕に凡云云西海道於ニ筑紫觀世音寺一受戒即當所官司案記卯書云云凡受戒時省丞錄寮允屬各一人牽ニ史生各一人一與ニ戚從一共向ニ戒壇院一子細勘會官符度緣云云、〔朝野群載十六卷〕に東大寺解申ニ請天恩一事、請被ニ蒙天恩一前例賜ニ官符一太宰府補任來寺觀世音寺明後年以後登壇戒師伏狀、副進律宗三職舉狀一通、右謹檢案內本願聖主建ニ立戒壇一之後諸國慶者補ニ旃於此院一登壇受戒覓ニ紹ニ知永之遺跡一這傳佛法之戒充覓東西堺遠參、有煩因ノ茲東者於ニ下毛野藥師寺一而登ニ壇西者於ニ太宰府觀世音寺一而得度、此等ノ兩寺皆依本寺本師夏臘次且補任戒師紛執行而齊圓雖當巡行依ニ病奉代而件大法師光淸者融五箍七聚之軌則尤爲ニ壇戒師一又足寺家則當望請天恩被ニ賜官符於ニ太宰府補任彼寺一則當將令ニ勤仕一御願仍勤事狀以解、康和二年九月十九日權都維那師嚴渡・都維

中補登壇戒師代

東西戒業西州受度所

那師兼幸・寺主大法師朝秀・上座威儀師大法師慶彌・別當律師法橋水觀、〔宗祇筑紫紀行〕に戒壇院もかたの如くあり云云、〔筑陽記十卷〕に戒壇院創立鑑眞大師律院也、昔東大寺ノ末寺也即四十九院之內而云云、釋迦牟尼佛像安ニ置戒壇堂一など見えたり、さて觀世音寺ノ戒壇院すたれて後聊なる草堂を造て昔ノ本尊釋迦佛を入レたゝしを寛文九年崇福寺ノ僧此邊に諸方ノ人を進めて此寺を修む、又觀世音寺村ノ領主黑田ノ家臣方三郎鎌田氏戒壇堂を造る、其後延寶六年律僧正洞來住り是より後律僧是寺を守る、又延寶八年天王寺屋了夢此寺を造ると云此寺近頃和泉國大鳥郡神鳳寺ノ末院となる、西國ノ僧の戒を受る所なれば公文處にして譜任を書て出す事なり、

造替

律僧正洞了夢

緣起寺封

讀經

○金光明寺

〔續日本紀十四卷〕に天平十三年三月乙巳云云每國僧寺施封五十戶水田十町、尼寺水田十町、僧寺必令レ有ニ二十僧一其寺名爲ニ金光明四天皇護國之寺一云云　兩寺相去宜レ受ニ教戒一、〔同書十七卷〕に天平十九年十一月己卯詔曰云云僧寺ノ水田者除ニ前人數一已外更加ニ田地一（僧寺九十町尼寺四十町便仰ニ所司一恐開墾施普告ニ國郡一知ニ朕意一爲、〔同書廿八卷〕に神護景雲元年三月己未勅畿內七道ノ諸國一七日ノ間各於ニ國分金光明寺一行ニ吉祥天悔過之法一因ニ此功德一天下太平風雨順レ時五穀成熟兆民快樂十方有情同霑ニ此福一、〔同書三十二卷〕に寶龜三年六月甲子設ニ仁王會於宮中及京師大小ノ諸寺幷畿內七道ノ諸國國分金光明寺一、十月丙戌詔曰頃者風雨不レ調頻年飢荒欲レ救ニ此福一唯憑冥助一宜下於ニ天下諸國國分寺一每年正月一七日之間行ニ吉祥悔過一以爲ニ恒例上、〔類聚國史八

遷置四天王像國分寺料寺址

講堂ノ址

大塔ノ址

尼寺領

尼寺ノ址

傍止寺院

十卷〕に大同二年十二月甲寅朔太宰府言於二大野城鼓峯一興二立堂宇一安二置四天王ノ像一令下僧四人如レ法修行上而依二制旨一既從二停止一其像幷法物等並遷二置筑前國金光明寺一畢、〔延喜主税式〕に筑前國國分寺料三万二千二百九十三束など見えたり、（三万二千二百九十三束は現米千六百十石余なり、さて爰に國分寺料とあるは尼寺ノ料も此内に籠れるなり諸國金光明寺安居會ノ事は〔主税式〕に見えたり、）さて金光明寺ノ趾は御笠郡國分寺村ノ南にあり（今は國府村と云）講堂ノ跡と云物南北八間東西十八間有て大なる礎あり、また殘れり又其處より少シ南に大塔ノ趾あり（六間四方）此所にも大なる礎あり、

○尼寺

〔續紀二卷〕に大寶元年八月甲辰太政官處分云云 觀世音寺筑紫尼寺ノ封起二大寶元年一計滿二五歲一並停二止之一皆准レ封施レ物、〔同書十四卷〕に天平十三年三月乙巳云云尼寺水田十町云云 一十尼其寺ノ名爲二法華滅罪之寺一などあり、さて御笠郡國分寺村ノ西二町許に東西八間南北六間にして大なる礎二十ばかり殘れる是則尼寺の跡なりと云、

○四王寺

〔類聚國史百八十卷〕に大同二年十二月甲寅朔太宰府言於二大野城鼓峯一興二立堂宇一安二置四天王像一令下僧四人如レ法修行上而依二制旨一既從二停止一其像幷法物等並遷二置筑前國金光明寺一畢、其堂舍等今猶存焉而遷レ像已來疫病尤甚、伏請奉二□本處一者

讀經ノ四王院

四王院

藏ノ趾四王寺村

許レ之但停二請レ僧修行一、〔今本後紀四卷〕に延暦二十年春正月癸丑停二太宰府大野山寺一行二四天王像及堂舍法物等一並遷二便近寺一、〔同書十卷〕に弘仁二年□二月庚寅於二太宰府鼓峯（紀氏山ヲ云カ）四天王寺一造二釋迦ノ佛像一、〔文德實錄五卷〕に仁壽三年夏五月壬寅詔二太宰府一觀音彌勒兩寺並四王院・香椎廟・管内國分寺一讀二大般若經一、〔三代實錄十二卷〕に貞觀八年二月十四日神祇官奏言肥後國阿蘇大神懷二藏怒氣一由レ是云云 太宰府司於二城山四王院一轉二讀金剛般若三千卷般若心經三万卷一以奉レ謝二神心一消二伏兵疫一、〔檜垣嫗家集〕に四王寺山を物の名にて

老ぬれば年若くして有りぬべしまわうしやまづ人にみゆれば

など見えたり、四王寺山は御笠郡に在て坂本より絶頂まで一里あり絶頂に四王院とて小堂あり、古は大寺にて僧坊も千區有しと云其時の礎往々に殘れり、大野山・大城ノ山・皷峯・四王寺山同山なれどもさす所は聊かはれるもあり、〔八幡愚童訓〕に神功皇后三韓征伐の時云云四天王來たりて石體となりて敵國降伏の願をまし給ひしかば是を四天王山と云とあるはひがごとなり、さて岩屋の古城の北五町許に四王寺ノ藏の跡と云ものあり礎殘れり其所に米のやけたるが石と成てありさて糟屋郡に四王寺村と云もあり是は古に四王寺の領なりし故に處の名とすといへり、

○四堂

〔安樂寺草創日記〕に法華堂、四寺丑寅用云云、喜多院四寺戌亥隅云云、淨土寺 東堂四寺辰巳隅云云、〔北野天神ノ緣起〕又〔荏柄天神ノ緣起〕に筑前國四堂の邊に御墓所を點じて藏め奉らむとしけるに御車忽に路中にとゞまりてはたらかず云云 とあり

沙門能圓

吉祥院次作

最澄登山

此（緣起）は（群書類從）にのせたり　四堂と云は法華堂・壹多院・淨土寺・阿彌陀院此四ッにて安樂寺の邊にありて今もいちじるし、四堂の事は別に引出て云べし、

○極樂寺

（續本朝往生傳）に沙門能圓者太宰府觀世音寺ノ傍極樂寺ノ住僧也、於ニ此寺一千日講ニ法華經一以勸進爲レ業以ニ念佛一爲レ宗千日云滿講筵已卷香奩又掩結願畢後合掌觀念高聲念佛而遷化とあり、又觀世音寺末寺四十九院ノ内極樂寺あり此寺絶て今は傳はらず、

○吉祥院

（群書類從十卷天滿宮託宣記）に永觀二年甲申六月廿九日戊申辰時以ニ爾宜藤原長子一託宣曰云云　吉祥院事誰人堪力得ニ改作一乎氏中可レ有レ定十月十七日悔過于令不怠子孫不絶只依ニ此誠一也、此寺傳彼風年來法華十講會先祖代々思所皆隨喜三寶觀悅味坂安行大功人也彼後胤尤可レ賞之由可レ告ニ大貳一云云　とあり、又觀世音寺子坊四十九院ノ内に吉祥院あり今は此寺も絶て傳はらず、

○竈門山寺

（叡山要記上卷）に（鎮西竈門山本傳）云延曆二十二年十月廿三日於ニ太宰府竈門山寺一爲ニ四船平達一敬作ニ白檀ノ像ノ藥師佛四體一高六尺余、其名號ニ無勝淨上善名講吉

僧心蓮法中寺東居寺修法場

有智山行者方

佛像

楞伽院領山伏總司二十五坊

祥王如來一又講ニ說法華經花嚴光明等一云云、大師歸朝弘仁五年春爲レ遂ニ渡海之願一於ニ筑紫國一造ニ千手菩薩ノ像一體高五尺一とあり、又（傳說）に天武天皇ノ御世、法相宗ノ僧心蓮初て竈門山に寺院を造る是を法中寺と號く心蓮は白鳳十二年六月十日に寂す竈門ノ佛頂山東居寺則其居所なり、又文武天皇ノ御世役ノ小角當山に登て石室に入て法を修す是に依て修驗道ノ者此山を修法ノ場とす豐前國彥山を金胎兩部に比すと云、又延曆廿二年弘法大師竈門山に登て雨を祈ると云、（或說）に弘法大師求聞持ノ法を執行せし處なりとて□城（筑前風土記作鞠城）の岩屋ノ上に求聞持堂あり延曆ノ比に雨を祈りし處なるべしと云り、法中寺今は絶て傳はらず、今竈門山ノ廿五坊と云は有智山寺の行者方にて法中寺の名殘にあらず、（筑陽記十卷）に御笠郡寶滿一云云、延曆二十三年七月最澄祈ニ入唐一登レ山刻ニ藥師如來ノ像七體一發願伐ニ櫻木一彫ニ削之一其木含血因爲ニ醫王化身一秘ニ地中一云云六體者當山ノ中堂・上座郡八坂ノ南林寺・穗波郡土師村種因寺、今は なし 當郡武藏村武藏寺安ニ置之一、弘仁九年最澄再登ノ山造ニ立寶塔一云云、座主天台宗本山派大先達權律師楞伽院領知五十石國中本山派山伏總司也、本山役行者爲レ祖二十五坊岩本坊・寂光坊・仲谷坊・南之坊・鳥居坊已上五坊長床也、修藏坊・大聖坊・東院坊・福壽坊・尾崎坊・新坊・石場坊・井本坊・松林坊・淨善坊・福泉坊・淨行坊・財德坊・伊多坊・龜石坊・奥之坊・經藏坊・福藏坊・大谷坊・西井坊・滅罪常道院、（或說）云天智帝勅ニ法相

宗心蓮上人ノ於ニ當山ノ建ニ立伽藍ノ號ニ有智山寶仲寺ノ衆徒三百餘ノ坊昌蕃之蘭若也、東有ニ高嶺ノ號ニ佛頂山東居寺ノ奥院也、白鳳十二年癸未六月十日心蓮寂レ此中世兵亂遭ニ燹火ノ山中ノ院宇悉爲ニ焦土ノ今遺蹟而已とあり、

○有智山寺

〔聖光上人傳〕に昔江帥率ニ叡岳ノ碩學ノ（東塔喜見坊阿闍梨）向ニ太宰府ノ于レ時有ニ法相法師ノ（有智山ノ住）尋ニ彼文意ノ山僧答云云、〔元亨釋書七卷〕（釋弁圓傳）に仁治三年秋謝國明於ニ傳多ノ東偏ノ創ニ承天寺ノ與レ爾領レ之（爾は弁圓なり）佛鑑聞ニ新寺ノ事ノ書ニ承天寺及諸堂ノ額諸牌等ノ大字ノ寄レ之佛鑑書法妙絶、故有ニ此送ニ、宰府ノ有智山寺者西川之大講肆也、姝ニ爾之禪化ノ欲レ毀ニ承天新寺ノ執事者聞ニ于朝ノ寛元元年勅賜ニ承天・崇福ノ二刹ノ爲ニ官寺ノ而息ニ有智山之濫行ノなど見えたり、さて〔説傳〕に御笠郡内山村有智山寺天台宗にして叡山ノ末寺なり、昔は甚盛にして南谷北谷三處ノ僧坊凡て三百七十坊あり其内三百坊は衆徒方として專經説を學ぶ（寛永の比までは衆徒方善如坊浄泉坊とて二坊殘りしが其後皆ほろびたりといふ）又七十坊は行者方として戒行を勤めて入峯を事とす、（今山上にすむ二十五坊は皆行者方なり、）弘長三年に至て豐後大友宗麟有智山ノ寺院ノ傍前栽に至て悉檢地せんとす座主淨戒愁訴すと云へども許容せず終に寺院僧坊に課役をかけ堂塔ノ破壞を待て其址を田畠とす、（淨戒座主の屋敷跡と云物又其墓所と云もあり、）此時に社僧多くは俗と成て僅に廿五坊のみ殘れりされども是はた課役を遁れむとて永祿年中

有智山濫行

坊

衆徒方

行者方

淨戒屋敷

淨戒墓

西谷松尾ノ峯に登て居住す是を寶滿ノ廿五坊と號して今に傳はれり、（〔筑前神社志〕に云云心蓮上人初て寺院を搆（龍門山寶仲寺と號して法相宗たり是則宮司坊ノ坊舍なり寶仲寺の坊舍廿五坊山上に居す坊號は平石坊・南ノ坊・東院坊・福藏坊・大聖坊・修藏坊・中谷坊・福泉坊・淨行坊・松林坊・淨善坊・井本坊・道場坊・鳥居坊・新坊・尾崎坊・財德坊・伊多坊・龜石坊・奥ノ坊・西井坊・大谷坊・經藏坊・以上廿五坊也成道院は一山ノ無常寺なりとあり、宮司坊を寶仲寺と云とあるは聊心得ず、今に僧坊ノ址殘て庭石などもあり）と云ふの太宰少貳が館ノ址の西ノ方にあり、さて有智山寺ノ僧坊ノ址なる藥師堂もあり、又根本中堂ノ名殘とて聊

寶滿二十五坊號

宮司坊

僧坊址

藥師堂

武藏寺新佛

○武藏寺

〔宇治拾遺物語〕に今へ昔筑紫にたうさかのさへと申ス齋ノ（イツキ）神もます其祠（ホコラ）に修行しける僧の宿て寢たりける夜、夜中ばかりに成らんと思フ程に馬の足音して過ぐと聞ノ程に齋は（イツキ）座（マシマス）かと問フ聲す此宿りたる僧怪しと聞ク程に此祠ノ（ホコラ）中（ウチ）より侍りと答ふなり又あさなしと聞ケば明日武藏寺にや參給ふと問フなればさも侍らず何事の侍るぞと答ふ明日武藏寺に新佛出給ふべしとて梵天帝釋諸天龍神集ノ給ふとは知ノ給はぬかと云なればさる事も承給はらざりけり嬉くも告給へるかないかで參らては侍るべからん必參らんずるといへばさらば明日ノ巳ノ時ばかりの事なり必參給へ待ノ申さむとて過ぬ、此僧是を聞て希有ノ事をも聞つるかな明日は物へ行むと思ひつれども此事見て社（コソ）いづちも行ンめと思ひて明るおそきと武藏寺に參ノ見れどもさるけしきもなし例よりは中々靜に人も見えずあるやう有むと思ひて佛の御前に侍ひ

て已ノ時を待ち居たる程に今暫あらば午ノ時に成んずいかなる事にかと思ヒ居たる程に年七十ばかりなる翁の髪もはげて白きとてもおろ〳〵ある頭に袋ノ烏帽子を引入れて尤ちひさきがいとゞ腰かゞまりたるが杖にすがりてあゆむ後に尼立りちひさき黒き桶に何にかあるらん物いれて引さげたり御堂に參りて男は佛の御前にてぬか二三度ばかりつきてもくれんずの念珠の大きに長き押もみて尼そのもたる桶を翁のかたはらに置て御坊よび奉んとていぬしばしばかりあれば六十ばかりなる僧參りて佛み奉て何せんに呼給ふぞと問へばけふあすとも知らぬ身にまかりなりぬれば此白髪のすこし殘りたるを刺て御弟子に成らんと思ふなりといへば僧、目おしすりていと尊き事かなさらばとく〳〵とて小桶なりつるは湯なりけり其湯にて頭を洗ひて戒授けつれば又佛拜奉てまかり出ぬ其後又異ナル事なしさは此翁の法師になるを隨喜して天衆も集ヒ給ひて新佛の出來させ給ふとはあるにこそありけれ出家隨分の功德とは今に初めたる事にはあらねども增て若く盛ならむ人のよく道心起して隨分にせん物の功德是にていよ〳〵押はかられたり、〔無題詩集〕言溫泉道場志大江隆兼

水城原

云ノ名云ノ利兩忘ノ身、日々行々□往臻、亦翫水城原上月、今憐湯寺洞中春、
呼ノ朋好鳥意同ノ家、驚望新花榮似人、尋ノ地適傳前日跡、

寺地

長久年中外祖於此地賦ニ一絶ニ康和年予亦於ニ此地ニ綴六韻故也

椿花山成就院所在

〔無題詩集下卷〕に詣ニ武藏寺ニ藤原周光

聞說化祠素稱ノ名、攀躋袞ノ志自忘ノ形、幽溪松瘦枯鱗老、行道苔穿舊瓣音、
罷夢嶺嵐來ニ梵宇ニ、侯齊林鳥狎ニ禪庭ニ、已將ニ香火ニ結緣竟、莫遮浮生及ニ暮齡ニ、

武藏村は天拜山の下にあり

椿花山成就院と云、本尊は藥師佛なり、〔傳說〕に昔傳敎大師御笠郡山口村木屋町山より十二枝ある山茶を得て此藥師ノ像を刻めりと云脇立に十二神將又大黑天ノ像あり是も傳敎大師ノ作なりと云、此寺は往古虎丸長者と云者建立の志願を起し事終らずして死ぬ此時武藏國池上より僧來たりて造り終る故に寺ノ名を武藏と云、昔は大寺にて堂塔も多く子院も七坊有しと云、昔の大門のあと塔原村に有て今も大門と云、領主忠之朝臣の時武藏寺に五石ノ產を寄附し給へり、〔筑陽記十卷〕に御笠郡武藏村武藏寺藥師堂本尊椿木也以ニ十二枝ニ庸ニ十二神將ニ傳敎大師ノ作也、往昔爲ニ大伽藍ニ末院有ニ十七宇ニ、中世羅ニ兵火ニ寶地變爲ニ租田ニ堂院亡遺ニ礎石ニ今一佛殿ニ宇僧舍一區也、隣村名ニ塔原ニ其枝村謂ニ大門ニ號ニ慈恩ニ三重ノ塔及大門之跡也、此外近邊ノ田園林野以ニ梵室ノ名ニ多ニ呼ノ之者ニ毘沙門天ノ像行基菩薩ノ作大黑天像、傳敎大師作、各安ニ置佛殿ニ別當椿花山武藏寺成就院天台宗而福岡源光院末寺也、寺領五石忠之朝

虎丸長者名義

大門

寺產

末院

塔原村

慈恩

地蔵會　長者ノ址　長者墓　龍王瀧

臣之時有ニ寄附一、（武蔵寺にて毎年十月十五日に地蔵会供養を行ふと云是は武蔵村・井手村・古賀村・塔原村・萩原村・山口村此五村に虎丸長者が別業七十五所有て其田を作る人地蔵会を行ふ七十五處を三つに分けて廿五ヶ處づゝ集て三年に一順はをつとむ是虎丸が時よりの式なりと云、又虎丸長者は古賀村の内たれと云處に居たりし由にて其あとあり又武蔵寺のかたはらに虎丸長者の墓所とて石塔をたてたるあり、又武蔵寺の傍に龍王ノ瀧と云もあり、又武蔵ノ温泉ノ事は湯ノ原ノ件に委く云べし、）

○崇福寺

観世音像

〔元亨釋書七卷〕に釋辨圓云云仁治二年辛丑居ニ崇福承天兩寺一盛倡ニ祖道一太宰府有ニ勝藍一名ニ觀世音寺一歳首行ニ驅儺一其日捕ニ寺之四傍路人一頭蒙ニ鬼面一身披ニ彩服一名爲ニ儺思一引過ニ殿庭一此夜闔府男女入ニ寺打一是鬼一爲ニ驅儺一鬼甚困極、國俗自レ古有レ之、以レ故觀世音寺ノ四畔、此日無ニ行人一佗州旅客、往々來レ此就レ捉府之横岳有ニ

僧湛慧

無準禪師

湛慧一明ニ顯密一多ニ異迹一適過ニ此境一僕曰今日觀音寺ノ驅儺也師恐遭ニ追捕一乞從ニ別路一慧德之士豈有レ之哉果執レ慧行ニ鬼事一云云仁治三年秋謝國明於ニ博多ノ東偏一創ニ承天寺一與レ爾領レ之佛鑑聞ニ新寺ノ事一書ニ承天寺及諸堂ノ額諸牌等大字一寄レ之佛鑑ノ書法妙絶故有ニ此送一宰府有智山寺者西州之大講肆也嫉ニ爾之禪化一欲レ毀ニ承天新寺一執レ事者聞ニ于朝一、寛元元年勅賜ニ承天崇福ノ二刹一爲ニ官寺一而息ニ有智山之濫寇一、

大應國師　釋鏡圓

〔二十四宗源記〕に筑前横岳ノ開山南浦明謙大應國師入宋嗣徑山虚堂揚岐十一世爲ニ本朝之一派一紫野派妙心寺派但出ニ大應一、〔本朝高僧傳廿四卷〕に釋鏡圓號ニ通翁一一名淨光（炎）不レ詳ニ其姓其許一云云往ニ筑之崇福一參ニ南浦禪師一云云上ニ横岳一前後十八度矣、

移於函崎

〔仙巣稿〕に以ニ紫府ノ崇福禪寺一徙ニ筥陽松間一招ニ請大德禪寺ノ雲英大和尚一開堂演レ法聳ニ動衆聽一〔和漢三才圖會〕に横岳山崇福寺在ニ箱崎松原ノ中一（禪宗）寺領六百石開山

即山和尚寺領

榮西和尚（稱ニ予光國師一）など見えたり、（佛鑑は無準禪師なり南浦は大應國師なり、圓爾は聖一國師なり、）さて〔傳說〕に大應國横岳に三十三年在て京都万壽寺に移る故に其弟子即山和尚に横岳を讓る、往古は此寺盛にして大友宗麟の時までも筑前肥前豐前に二百三十四町六段の田地あり然るに

天正火災

横岳文書

横岳村

天正十四年岩屋合戰の時兵火に掛て堂宇は元より龜山院後二條院花園院の宸翰勅額綸旨及虚堂傳來の經祿墨跡珍器重寶悉く灰燼と成ぬと云、今も方丈法堂佛殿等の礎は殘れり、（横岳は宰府村の枝村なり、）其後慶長年中那珂郡箱崎松原崇福（比脇）寺を移し給へり、委くは那珂郡ノ内に云り、〔筑陽記十卷〕に御笠郡宰府村ノ枝村横岳勝禪寺ノ云云崇福寺ノ舊跡也、傳云云寛元元年詔賜ニ西都法窟之勅額一爲ニ官寺一其後附ニ屬當寺於大應國師一、

西都法窟

雲英再興

天正十四年薩摩勢攻ニ岩屋城一罹ニ寇火一寺院悉爲ニ烏有一、慶長年中長政朝臣受ニ封於當國一之時京師紫野大德寺春屋□國師者大應國師之法孫也因嗟ニ嘆當寺ノ廢亡一法甥雲英和尚下ニ當國一冀ニ再興於國主一國主許ニ諾之一、當地依レ爲ニ邊鄙一十里松間移レ焉、

子院　湛慧墓

横岳の子院と云は雲勝院・盆花庵・長松軒・昆慶庵・心宗庵・勝禪庵・白陽軒・大聖庵・心端庵・大中庵・三反軒・正傳庵・又東軒・正洞庵・耕閑軒・大成軒・正印軒・是なりと云、又横岳にゆく道ノ□に湛慧墓と云物あり是入定の地なればば石塔を立て印とするよしいへり、

○原山醍醐寺

月堂禪師

〔石城遺寶ノ附錄〕に月堂宗規禪師諱宗規字月堂自稱ニ知足子ニ亦曰ニ水月道人ニ云云正安改元師年十五告ニ父母ニ躬親投ニ于府之觀音敎寺昭法師ニ剃染禀戒尋依ニ鄉之原山醍醐寺良範師ニ習ニ學篇聚開遮之微密、〔觀世音寺年中行事〕云九月九日日吉山王御祭禮法事有レ之原山・有智山・衆修出仕有レ之、〔同書〕に十一月大師供衆僧出仕有レ之公物三石六斗天智天皇御祭事原山有智山寺僧出仕有レ之、〔中村氏傳來ノ文書〕に依レ有智山與ニ原山ノ鬪諍事ヒ安樂寺府直ノ事、自ニ來廿日ニ迄ニ同卅日ニ無ニ代印之儀ニ自身相向可レ被ニ勤仕ニ也更々不レ可レ有ニ緩怠之儀ニ依狀如レ件、正安二七月十六日□列中村彌次郎此文書ハ怡土郡大門村中村氏の家にあり、又〔雷山文書〕に奏聞一品親王自去月廿六日臨ニ幸太宰府原山ニ之際筑前國中村彌四郎入道榮永勤仕宿直令付御著到候畢以ニ此旨ニ可レ有ニ御披露奏達ニ也榮永恐惶謹言元弘三年六月廿四日沙彌榮永上、進上御奉行所など見えたり、一品親王ノ事は二十ノ卷初に云へり、さて〔筑前名寄〕に御笠郡原山、爲家卿

一品親王原山宿

眞原山鬪

衆徒出仕

古圖無量院

原山のさゝ屋が床のかりぶしに鳥のね聞ゆあけぬ此夜は

とあり、又〔秋のねざめ〕と云物には原山は櫛津とあり、昔原山の坊中の盛りなりし時の圖今に殘れり原山は御笠郡宰府村石蹈川の北にあり、〔傳說〕に原山ノ麓に無量院と云寺有て四王院の別院たりしが四王院廢れて無量寺も絶たりといふ、又云無量寺は古き寺にて菅公祭し給ひて彫奉る時此寺の僧も其事に預れり此故に原山絶て後も安樂寺の邊に住て廢院の社僧と成て原八坊となのるといふ、〔長野氏云〕原山寺ノ趾、四王寺山ノ東ノ麓にして原村の人家ノ側にあり、

原八坊原山ノ址

○寶塔院

〔叡岳要記〕に西塔造立之事云云　一塔安ニ筑前ニとあり、〔傳說〕に弘仁九年四月傳敎大師有智山寺ノ邊にして寶塔院を建つ、是日本六所ノ寶塔院の其ひとつなりと云、

建立塔領

緣起

○多寶塔

〔安樂寺草創日記〕に寶塔院、圓融院御願、永觀二年甲申建立、寛和二年寄進栗田庄六禪師勾當二人預一人給田各、修正衣服稻七百八十束口別百束土師庄在二月布施四十八束二月十日六人飯栗田庄御闕日會料一石九月十五日承保三寄進永保三年爲ニ勅旨ニ寄ニ進觀興寺石動庄四十町ニ在ニ肥前ニ〔天滿宮託宣記〕に正暦三年十二月四日御託宣ニ我家之末孫輔正朝臣云云爲ニ大貳ニ時爾我寺爾一基乃多寶塔袁造立天千部ノ法華經袁書寫志天安置供養世留其善無量也、〔古今著聞集一卷〕に小野宰相殿ハ天神四世の苗裔なり圓融院の御侍讀として道の名譽ゆゝしくおはしましけり天元四年に太宰ノ大貳に任じて同五年九月に府に著て安樂寺を順禮し給ひけるに堂舍は在りといへども塔婆いまだ見えず建立の願もとよりありけるに造營を始られたり聖慮悅び思召ける故に永觀二年六月廿九日の御託に云大貳朝臣兼式部大輔事に希有爲ニ家面目ニ大貳朝臣內外共末孫又存ニ信心ニ依レ發ニ造塔寫經之大願ニ我深信

小野宰相

東御堂

所在

安樂寺留守職

安樂寺々務大鳥居職并所領

廻レ謀令二當任一暫停二他事一早々遂二此願一致二合力一之人々現世後世大願皆成就生々世々因果令レ熟云云寺家別當別松壽自是を記す都督いよ〳〵信心を發して三年が中に多寶塔一基を建て胎藏戒一五佛を安し法華千部を納奉る是を東一御堂と名付く禪侶を置て不退の勤々をいたさる彼卿宰府の間寺家の佛事神事の儀式寺務のあるべき次第など委く記レ置れて三卷一書と名付て寶藏に納めて今に傳はれり秩滿の後都へ歸給ひて長德二年に參議に任じ寛弘六年十二月に八十五にてうせ給ふ其後神と顯はれて叢祠を唐坦の傍にひらけり万壽三年三月に贈正一位の加階に預り給へりとあり、此多寶塔は今の東法華堂を云なり、

○大鳥居延壽王院

〔延壽王院所藏文書〕に天滿宮安樂寺留主職事依確論被置中途事既出御之間諸事所レ被レ閣也還御之時可被仰心澤樂得別事同前以下牟田事同可レ被二遵行一也於二祭禮一者明日可レ被二遂行一之狀依レ仰執達如レ件正平十八月廿日大鳥居法印殿右中將判、又安樂寺筑後國高瀦村田地二拾町（横瀦左衛門次郎同庶子等跡）同國藤吉松童丸同（庶子等跡）田地二拾町事右爲天下靜謐之祈禱所奉寄進也仍狀如レ件貞治四年八月廿五日安樂寺一寺務大鳥居法印御房源判、（義詮將軍の判なり）、又宰府安樂寺天滿宮大鳥居職并筑後國水田當知行所領等事、任二本家一補任一信顯法印領掌不レ可レ有二相違一也全神役無二懈怠一可レ令二勤仕一之狀如件文安五戊辰年十一月念五日大鳥居殿藤原朝臣爲邦、〔宗祇筑紫紀行〕（此條誤入りタルモノカ）に御社近く塔婆などみゆるより下て神前を拜して宿坊滿盛院に至りぬるほど暮はしぬ今霄は當（社）の緣起などよませ奉るほどに深野筑前守と云人來たり此郡の郡司なり扇を携へて心ざす云云 廿日宿坊にて會あり

とりもあへぬぬさはあらしのもみちかな

翌日又きのふの菊にて一座あり杉弘相會席に來ていとゝ其興あり、又宰府（大鳥居安樂）天滿宮留主職領筑後國中之分如二先規一執務之事令二存知一候恐々謹言天文三年二月九日天滿宮大鳥居殿、義宗（背判）、又太宰府安樂寺天滿宮領之事如前々令寄附候條全可被仰付者也上下之社官留主大鳥居法印可爲下知事勿論候、仍一行如レ件天正十五年十月十六日天滿宮留主大鳥居法印、小早川左衛門佐隆景（背判）、又〔寶永七年天滿宮司務職留主別當大鳥居法眼信仙言上書〕に筑前國御笠郡太宰府安樂寺云云 宗門者顯密禪三宗兼學之地也官位之儀者菅家之長者以二執奏一于レ今昇進仕來侍事云云などあり、此外古文書多くあり、さて〔傳說〕に安樂寺一祭祀一事初は太宰一帥是を司る其後菅原氏一人交代にて別當を勤む後堀河院一御世菅公九世一苗裔菅原一善昇と云し人勅を受て社職と成る後に祝髮して信貞と號（ナ）る其嫡子を信昇と云是より大鳥居小鳥居等一家別れて社務職たり、大鳥居の向ひにあるを大鳥居延壽王院と號す今五

大鳥居文書

大鳥居家名職

院領

百を領ず此寺古は妻帶たりしを近比に至て淸僧と成れり（小鳥居ノ前にあるを小鳥居と云なり、さて大鳥居・小鳥居・御供屋・執行坊・浦之坊此五家は共に菅原氏にて別當職也、大鳥居延壽王院ハ天滿宮ノ南に在て西向なり門ノ內に堂あり、）

○滿盛院

滿盛院文書

〔滿盛院所藏文書〕に御笠郡筑紫村之內侍島拾貳町ノ事爲ニ天滿宮領一滿盛院被ニ相抱一處先年筑紫能登守爲ニ御味方一參上刻爲ニ名字地一上者可ニ領知一候也頻令ニ懇望一押而知行云云雖レ然能登守息又次郎敵方ニ令ニ歸著一條彼地之事、如ニ前々一社家ニ還補畢、者御神役等無ニ懈怠一有ニ其沙汰一不レ可レ有ニ社納相違一狀如レ件、永正九壬申（年閏四）卯月十五日滿盛院杉平興長判、又態以ニ使札一申入候然者當地北岡天滿宮之事近年者宗門□付而退轉仕候此節造營仕度所存ニ御座候於レ然者御門徒之出家衆一人申請可然樣ニ得ニ御意一以ニ其上一宮立之儀可ニ申付一內存ニ御座候、近來乍ニ御大儀一御同宿衆一人於レ被ニ差越一者可レ致ニ祝著一候爲レ其如レ此候猶委段此使可ニ申達一候恐々謹言八月廿五日幡（マヽ）常院御同宿中、有馬左衞門佐吉純書判などあり、（此外古文書多くあり、）さて〔傳說〕に滿盛院・檢校坊・勾當坊此三家は味坂ノ安行の苗裔なりと云此三家は每月上旬中旬下旬と別ちて安樂寺の宿直を勤む、（滿盛院今三十五石を領ず、）天正六年冬秋月種實・筑紫廣門一味して岩屋ノ城下に押よせ所々を放火しける秋月ノ手ノ者御社近邊ノ小屋に火をかけしるが餘烟社頭に及び一本已下一時に亡びたり宮司勾當坊秋月家の暴逆を怒り火中に飛

快眞

入て死けり滿盛院快眞・昌寶坊二番等神を奉じて神領夜須郡栗田村老松社に遷座なし奉る社家社僧皆本社を去て栗田に住する事十餘年なり、

○執行坊

〔延壽王院所藏ノ文書〕に一安樂寺諸堂可レ遂ニ其營一事、一參職並十一人無ニ懈怠一事、一乘車之事、一進宮物可レ補ニ留守職一事、一敷地檢斷役三分一執行坊、右ヶ條慥可レ致ニ存知一之由長者前宰家仰處候也仍執達如レ件永德元年五月廿七日大鳥居法印御房・美濃守成賢奉とあり、執行坊は五別當ノ內にて菅原家の後裔なり、（櫻ノ馬場にありて北向なり今二十三石を領ず、）

坊領

小鳥居少納言

○小鳥居

〔小鳥居家藏ノ文書〕に奉避與小鳥居少納言阿闍梨御房信會所、當宮御領筑後國岩田庄內田地三町（能）田屋敷貳ヶ所事、右田地居屋敷等者宗本相傳所領也而爲衆徒沙汰爲レ被ニ合力一以ニ件田地參町屋敷貳ヶ所一、限永代所奉避與實也然早任ニ此狀一到ニ子々孫々一可レ致ニ進退領掌一（納判）雖ニ後日一更不レ可レ有ニ相違一仍爲ニ後證一避狀如レ件康永貳年六月一日宗本（判）、又去月十五日御狀今月十三日到來慥披露畢、抑留主職事、御敎書申成候無ニ相違一目出度候寺領濫妨殊可有申沙汰候就レ中長者家御領等夜須郡鵜木事相搆（致カ）被無爲沙汰候樣可レ有ニ御秘計一候、別可レ爲ニ御奉公一候一向被ニ憑思一食ニ候也兼又

小鳥居文書名蹟家領

紫革一枚慥被レ進レ之(ヲ)御志之至難レ有候由能々可申旨也恐々謹言、三月十七日(霞上)小鳥居留主法眼御房、左衛門尉清尚奉、などあり、此外古文書多くあり、小鳥居は大鳥居延壽王院ノ別家にして五別當の内なり安樂寺小鳥居の向ひにあり故に小鳥居を家號とせり、今二百石を領ず、

○上座坊

上座坊斎實

〔上座坊所藏文書〕に當社御神領肥前國姫方庄饗料ノ事依二近年伊勢神左衛門尉重氏ノ押領一訴訟之趣任二出帶證文一如レ元可二沙汰付一之由被レ成二奉一書於杉豐後守興長一畢仍執達如レ件大永參年三月廿五日太宰府上座兼公文斎實律師御坊、主殿允判、但馬守判、兵庫介判、〔上座坊所藏文書〕に太宰府天滿宮安樂寺上座坊斎實謹而言上條之事、一當社官駒形座右馬允事、去年大永八正廿九神代四郎左衛門尉興綱不能是非令誅伐家内雜物等悉闕所候之條社家致二迷惑一之由數ヶ度雖レ申一切無二許容一候間爲二愁訴一至二藝州門山ノ御城一去年三月雖レ致二參上一候上(ヒカ)御陣中依二御繁多一于レ今不レ及二言上一堪忍仕候事、一御幸之神事其外秘密之佛神斗等天下國家之御祈禱于レ今雖レ無二闕怠一候上(ヒカ)既於二大鳥居社家人一令二誅一謬一稅以下終二依不被取成之汚穢不淨言語道斷、天滿宮神道無跡樣候、神者依二人之敬一增レ威之由承及候可レ爲二如何一候哉被レ成二御尋一候者條々可二申上一事、一右右馬允ガ子次郎三郎事、親成敗之後秋月分領中牟田村仁遠慮仕令二滯留一候、彼旨趣上座坊致二言上一候者定而可レ被二召出一候哉其時能出存分可二申上一之相存之處是又去年七月八日不レ能二左右誅伐一候、外聞實儀社家ノ迷惑不レ過レ之候、興綱家人赤星主計允被二召出一子細被二尋聞一召二候者可レ忝候、一去大永四年就二三笠郡忿劇一郡内御百姓等對二興綱一德政ノ事懇望候、就レ其大永五六兩年社家中德政令處限、上座坊臨終二無二還補一候、一社同前候上者可二知行一之由雖二申候一依二興綱違亂一進退不レ仕候、其時之使神代源五郎二候適々在二山口一候條被二召出一可レ被レ成二御尋一事、云云文を省く荒廢之體難レ盡二筆紙一候、此等之趣有二御披露一蒙二御裁許之旨一可レ致二安堵一候、恐惶謹言、五月廿五日謹上野田兵部少輔殿杉三河守殿、人々御中、權律師斎實判などあり、さて上座坊・寺主坊・都維那坊是を三綱と云、皆神官なり、小鳥居小路に在て東向なり今四十石を領ず、

德政

三綱所在坊領

○安養院

丈六堂院領尊氏詣院

〔安樂寺草創日記〕に安養院號二丈六堂一、本尊丈六ノ阿彌陀佛、白川院永保三寄進長田庄四十町二丈三味六口承仕一人預一人各給田鳥栖庄、〔鎮西要略三卷〕に建久三年三月六日將軍親詣二安養院一府在宰修二妙惠性靈之追善一且以二筑前國小田郷一須在夜永寄二安養院一爲二性靈之菩提料田一言諷誦文曰敬白請諷誦之事三寶衆僧御布施一裹右志者妙惠禪門幽靈建武第三之仲呂晦日依與義兵相伐尊氏合戰亡畢、因レ茲弟子每レ憶二彼忠思一其志所レ拭二哀涙一催悲歎也就レ中幽靈平生之時有二契約旨一然間迎二初

七日之忌辰ニ所レ鳴ニ三箇之逸韻ニ也如之爲ニ毎日佛事料ニ而寄ニ永代僧食一村ニ畢、然者聖靈酬ニ此追修ニ證ニ九品之果位ニ可レ救ニ六趣之類ニ仍諷誦所唱如レ件建武三年三月六日弟子源朝臣とあり、安養院ノ號は觀世音寺末寺四十九院ノ内にあり又安樂寺ノ堂社現存四十八箇所ノ内にも見えたり、〔長野氏云〕太宰少貳藤原資頼墓は講堂ノ北の山中安養院の址にあり古き石塔婆あり周リに佛像を彫たり文字等は漫滅ノ見えず、此人已前ニ此地に安養院を開基せり依て法名を安養院殿覺佛禪定門と號す少貳家の始祖なり、

藤原資頼墓

○淨妙寺

榎寺建立寺領

〔安樂寺草創日記〕に淨妙寺號ニ榎寺ニ、後一條院寛仁□年四月改造本尊尺迦多寶ニ天、治安三年建立或云万壽二乙丑建立、寄進得飯四十三町二反三丈中三昧六口、〔師説〕に菅公の居給へりしは淨妙寺の地なり不出門と云題の詩はこゝにて作り給へりしならんとあり、さらば看瓦色といふ句は遠望の體なるべし、〔古今著聞集四卷〕に江中納言匡房承德二年都督に任じて下リけるに同康和三年に都督夢相の事ありて安樂寺の祭を初メて八月廿一日翠花を淨妙寺に廻らす（今は廿三日ノ曉に神體をかりに榎木寺の御旅町に遊のほどに音樂を發す、此寺は天神の御事を留シ地なり治安ノ都惟憲卿彼あとを悲みて一伽藍を其處に修覆して法華ニ昧を修す、〔百練抄十二卷〕に承久元年十二月十日安樂寺申、去八月御祭之間於ニ榎木頓宮ニ神輿振動事など見えたり、榎木ノ頓宮は榎木寺ともいひて則淨妙寺ノ事なり、〔梅城錄〕に〔或記〕日菅丞相薨ニ于筑紫榎寺ニ（今ノ安樂寺也とあるはあやまりなり）安樂寺より卅町ばかり未申ノ方に在て咏なる松林の内なり、今ノ堂は三間四面にして□の方向へり、釋迦多寶ノ二佛を安置す、是寺は菅公薨御の地なり故に安樂寺ノ神官權堂氏是を司る、〔土人の語傳〕に菅公此地にさすらへ給へりし時麺商の家に立入らせ給ひけるに其妻いとほしく思へるさまにてもてなし奉る其夫はこりて敬ほざりける故に其妻をば菅公あはれみ給ひ其夫をばよからぬ者に思ほし給ひぬ故に後人その老女老夫を木像に作りて夫のかたをばからめたる形に作りて堂にをさめたりしと云其木像といふもの今はなし、

榎木頓宮社地

老女夫像

○西方寺

〔筑陽記〕に龍天山西方寺淨土宗鎮西派那珂郡住吉村妙圓寺下也、白鳳元年法相宗利生上人經ニ始之ニ繁營ノ巨刹也、中世炎上其後爲ニ廢寺ニ、文祿年中淨土宗行明上人再ニ興之ニ、とあり、西方寺は御笠郡内山村にあり、重て考ふべし、

緣起

所在

○般若寺

〔安樂寺草創日記〕に筑前國一圓神領石門郷内般若寺、〔博多善導寺所藏文書〕に袖判大内殿弘の判なり下平塚四郎伊恒可令早領知筑前國三笠郡般若寺武町五段土師孫次郎跡同郡田中方壹町五段地同人跡事右地ノ事爲岩屋城料所充行者也早守ニ先例ニ可ニ全領知ニ狀如レ件明應六年六月廿七日とあり、〔筑陽記十卷〕に御笠郡片野村穢多村也毘沙門堂、觀世音寺四十九院之内般若寺之舊跡也、後ノ山ニ有ニ七重ノ石塔ニ、といへり、

片野毘沙門堂七重石塔舊址

建立
堂領

○觀音堂

〔安樂寺草創日記〕に觀音堂（千手）天神四十九日爲ニ御佛事一安行建立、檀那少別當信圓蠣久庄寄進、檀供（旦那）預一人とあり、堂のさまなどは重て委しく考ふべし、

建立
寺領

○御基（碁）寺

〔同書〕に御基（碁）寺、延喜十五年乙亥安行始造、同十九年己卯當寺崇尼觀竿寄ニ進小仲庄一とあり、是も重て考ふべし、

建立
堂領
所在
守辰僧

○東法華堂

〔同書〕に東法華堂、本尊毘沙門、村上天皇（醍）天慶元年八月第一ノ別當平忠建立、村上天皇康保元年甲子大貳藤原佐理（忠）卿寄ニ進高北（比カ）庄廿町ニ三昧六口同青木庄後堀（アヤ）河院寛喜二年阿志岐御封とあり、是も重て考ふべし、此堂今も本社の東に在て太鼓を掛て十二の時を告る守辰ノ僧あり、

建立
堂領
慈光院

○中法華堂

〔同書〕に法華堂（四寺丑寅ノ角尺迦如來、一條院ノ御願長德四年戊戌建立、寄ニ進綾野庄四十町ニ勾當三昧六人預一人とあり、是も重て考ふべし、是四堂のひとつなり長ノ隅にあり慈光院と云一條ノ院の御願長德四年建立綾野庄寄進、

筑前之二十三（御笠郡三）終

名義
所在
城山坂
國界變遷
坊中山
城山
北御門
天智行宮
城山道
太宰小路

筑前之二十四

○御笠郡 四

○鞍鞦（シリガイ）盡（ツクシ）ノ坂（サカ）

〔筑後風土記〕に筑後國者與ニ筑前國一合爲ニ一國一昔兩國之間有ニ峻狹坂一往來之人所レ駕鞍鞦（シリガイ）被ニ摩盡（スリツクサ）一土人曰ニ鞍鞦盡之坂一とあり、鞍鞦は志豆具羅と訓ムべし、〔倭名抄十五卷〕鞍馬ノ具件に鞦（唐韻ニ云鞦則前ノ反和名之太久良）鞍鞦也とあり、さて此坂は今御笠郡萩原村より肥前國基肄郡宮浦村に越る處なる城山の坂を云なり此山今は筑前と肥前との堺なれども上古には筑前筑後兩國の堺なりし趣なり、〔肥前ノ人三橋氏云〕城山（キ）にしへ一山の惣名なりしと聞ゆれど此山に二峯東西有て今は東を坊中山とし西を城山（キ）とす其間は峯筋北ノ方に曲（ヨ）て箕ノ腰の如くにつゞけり北ノ方に曲れる處を北ノ御門といふ是天智天皇ノ行宮の趾なりと云其東に近く少し撓（タワ）める處すなはち城山（キヤマ）ノ道なり山頂（ヲ）までは肥前の内なり聊北に下ル處に筑前の堺ありと云り、〔万葉集四卷〕に筑後守石川朝臣大成、從今者城山道者不樂平吾將通常念之物乎とよめりしも此道なり、古は筑後の人も肥前の人も皆此坂を越て太宰府に來たりし由聞つゝへたり今ハ御笠郡二日市ノ驛より直に筑後にも又二日市より直に筑後にも到れば城山を越ル者なし、

○水城

築造

〔天智天皇紀〕に三年於筑紫築大堤貯水名曰水城とあり、水城は美豆紀と訓むべし、さて〔續紀廿六卷〕に天平神護元年三月辛丑太宰少貳從五位下采女朝臣淨庭爲修理水城專知官、〔萬葉集六卷〕に天平二年冬十二月太宰帥大伴卿上京作歌二首

凡有者左毛右毛將爲乎恐跡振痛袖乎忍而有香聞
倭道者雲隱有雖然余振袖乎無禮登母布奈

右太宰帥大伴卿兼任大納言向京上道、此日駐馬于水城願望府家于時送卿府吏之中有遊行女婦其字曰兒島也於是娘子傷此易別嘆彼難會拭涕自吟振袖之歌和歌、大納言大伴卿

日本道乃吉備乃兒島乎過而行者筑紫乃子島所念香聞
丈夫跡念在吾哉水莖之水城之上爾泣將拭

遊行女兒島

〔名寄〕に俊頼

かきたえて水さになりぬ是やさは心づくしのかど出なるらむ

平家水城落

〔良玉集〕に長房

曇なくすむと思ひし水城より闇に惑ひて立歸りぬる

〔平家物語八卷〕に主上腰輿に召れけり國母は建禮門院の御事なり止事なき女房達は袴の裾を高くとり大臣殿已下の月卿雲客は指貫のそばを高く挾み歩跳にて水幾の戸を出て我先にと筥崎の津へこそ落給へ、〔八幡愚童訓〕に蒙古襲來の件水木城に引籠り支て見むと逆支度をぞ構へける云云水木の城と云は前は深田路一ッ後は野原廣く續きて水木多く優なり馬蹄飼場より兵糧の潤屋あり左右の山間に卅余町を通して高く急に岸を切立て城戸には磐石の門を立たり今は礎のみぞ殘りたる南山に近く望めば染川流れたり右の山の腰をば深くほり三里を廻れり昔神功皇后の豐國（神）大人を御かせ給はむとして一夜の中に誘給ひし城なれば神力の所致にて凡夫のしわざとは見えざりけり（神功皇后とあるは誤なり、）〔宗祇筑紫紀行〕に苅萱の關越るまゝに大なる堤あらいはゞ横たはれる山の如し尋ぬれば是天智天皇の築かせ給ひけるとなむ民のうれへいかばかりにかと思ふもかなしなど見えたり、水城は御笠郡水城村にあり東西長さ五百間許あり其間絶たる處六十間許なり東方の堤百五十間、西の堤三百二十三間、堤の高さ五間、根盤廿七間許ありと云堤の内今は田と成て水を貯へす、（元禄の比此邊の田を畑て大木二なほり出せりと云是は堤を築し時の基木にても有むと、）

水幾の戸
水城合戰
水木城
城地の狀
城戸
所在
基木
太宰官人餞於驛家

○蘆城の驛

〔万葉集四卷〕に神龜五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任餞于筑前の國蘆城驛家歌三首